

---

# WAKARE

KOTOBUKI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WAKARE

### 【Zコード】

Z57060

### 【作者名】

KOTOBUKI

### 【あらすじ】

数奇な運命の糸に導かれた人たちの軌跡。

平等に降り注ぐ尊い人生に偶然の出会いはなかつた。

すべての出会いは必然でひとつ・ひとつに大切な意味があつた。

出会いと別れを繰り返し人は成長を続けている。

多種多様の人生・愛だからこそ、それは意義深く尊い。

心は絶え間なく揺らぎ天秤のよつに振れ続ける。

「悲しみに暮れた涙はいつか必ず大きな幸せの泉に変わる」

苦悩しながらも人生を真剣に生きる人たちの人間模様。

## 1 プロローグ

人はさまざま形の愛と出会い、喜び、傷つき、苦しみ失い、涙しても幾度も起き上がり人生の歩みを続ける。

人生は誰のものでもなく自身で作り上げていくオリジナルならば、誰もが希望に満ちた最高の人生を望むであろう。

他力だけで救われ逃れられる人生など決してない

自らの手で人生はもっと楽しく自在に変えてゆけるはず

/この地球に生を受け生かされている命

今日もひたすら生きようとしている命

あれもこれも・どれもこれも

地球上のすべての命は愛おしく大切なかけがえのない尊い命/

## 2 傷心

別れの時、それははじめて形となり姿を見せた。

二人は改札口の人ごみを悲愴な面持ちで無言のまま幾度となく見送っていた。

腕と腕がかすかに触れ合うと仄かに忘れかけていた温もりが甦つてきた。

それでも瞳を合わせようとはしなかった。

別れの最終電車がホームに入ってきた。

バッグを持ち上げると背を向け離れていった。  
サヨナラひとつなく改札の人ごみに姿を消した。

「愛の終わりがこんなにも冷酷だなんて・・・」

別れて日まだ浅い恋人にかける言葉も優しさの一欠けらさえもなく悲しかった。

手紙に書かれていた言葉が重くずつしりと压し掛かった。

／男と女の別れはそんなに甘くないからな／

好きだった大きな背中が小さく見えて胸が張り裂けそうだった。

「雅和、まさかずう・・・」

幼な子のよじこじやくり上げた声は別れを乗せた電車にかき消された。

その声は闇に紛れ空しく響いていた。

雅和が去ったあの日から歳月は歩みを忘れ足踏みをしたままだつた。

過ぎし日々の画像がメリ・ポーランドに乗つて絶え間なく渦巻いていた。

涙がとめどなく溢れ出でていた。

「この悲しみの泉はいつ枯れてくれるのだろう。自分を取り戻せるのだろうか。

出来るならば雅和と過ごし輝いていたあの頃に戻りたかった。

「愛の日々を無理やり追いやるのではなく  
ドップリ思い出や未練に溺れてしまおう・・・」

投げやりや捨て鉢でなく素直にそう思える様になつていた。

それが今の自分にとつて一番の癒しになり再生のきつかけになる  
と信じたかった。

抜け殻と化した佐知は自分を見失い苦しんでいた。

心底溢れる涙と傷心の溜息ばかりの日々が過ぎていった。



### 3 出会い

思えばあの日はそれはそれは暑い夏だった。  
朝からの大量の蝉の声に汗ばむTシャツの脇の下を見ながらうんざりしていた。

町は夏祭りの出店やお囃子・太鼓の音に吸い寄せられた人で溢れ返っていた。

旧友らが年に一度会ったがいした町で再会を喜ぶ夏の一夏だった。

上京した彼氏彼女らが帰つてくるカップル達には待ち焦がれた夏の日。

この日ばかりは相手にしてくれる人を探し出すのは至難の業だった。

ひとつ恋が終つたばかりの佐知に彼と呼べる相手はいなかつた。

お誘いの声がかかり何年かぶりで夏祭りの夜の街へ足を運んでいた。

約束の店に出向くと薄暗い角の一画だけが思議アートのように浮き立つて見えた。

7、8人、いやもつといふだろう

このまま帰つてしまおうと賑わう場に背を向けたその時だった。

「佐知遅いよおー

「つち、じつち、早くおいでよー」

小中高と一緒にした真砂子の透き通る声がした。

合唱部でソロを担い数々の賞に導いた声は健在で辺り一面の人を振り向かせる程だった。

「しまつたあ 見つかってしまった」

見知らぬ大勢の中にさしはされたのは大の苦手、こんな時の自己紹介はなおのこと。

学生時代の赤面症と震え声が失笑をかつた光景が浮かんでは消えた。

「」の思い出は胸の引き出しに封印されたままだった。

「」で又、あの引き出しを開くのは絶対いや  
キャンティをこひがす口先が小刻みに震えていた。

「やつとおだましね

みんなに紹介するから早く来て、早く～」

腕を捕まれ引き摺られていった。

「さつき話した佐知の」「到着です

みなさん宜しくね」

「はじめまして、遅れてすみません」

「佐知、ここに居るのはみんな彼の友人よ」

マネキンのような彼はいつもおかしいのか・つまらないのかよくわからない無意味な含み笑いを見せていた。

氷のような顔だちをした真砂子の彼氏。

この男だけはどうも苦手だった。

幾度会つてもこの男に馴れる事はむずかしい数式を解くようだった。

資産家の御曹司で頭脳明晰・色男、完璧なまでのこの男には手も足も出なかつた。

いつも季節はずれの雪だるまが脳裏をよぎつていた。

佐知にはミステリーの謎解きのようにマークのサスペンス男だった。

その友人たちと聞けば益々帰りたい気持ちが大波となつて打ち寄せた。

気がつけば友人の彼女らも合流し店内は手狭になつていた。

彼の膝に乗る真砂子の姿がやけに妖しく思わず目をそらし耳を熱くしていた。

「そろそろ出ようか」

彼のひと声で一行は次々席を離れていった。

「佐知もまだ大丈夫でしょ、一緒に行こう」

重く閉じた貝の口からは言葉ひとつも出てこなかった。

「さあきまりね、行こう行こう」

囚われの身の様に腕をつかまれて上半身だけが前に倒れこんだ。必死で抵抗している両脚が佐知の心情をそのまま映し出していた。

二軒目は真砂子の彼の兄が経営するお店。

郊外に建つロッジ風の造りは1970年代のマカロニウエスタンを彷彿させた。

木の香りと温もりが緊張をほぐし佐知を楽にしてくれた。

十数名の団体の中で知る人は真砂子と真砂子の彼・二人きりだった。

いつものメンバーなのだから、銘銘がプライベートトークを始めた。

「今日も君たちはホテル?」

「まざいでしょう、彼女まだ高校生だろ」

「よしなさいよ、一人には余計なお世話よ

彼女はこつものジンジャールね、さあ飲んで飲んで」

隣の子はまだ高校生・確かに肌の具合といい話し方が弾けていた  
危険を察知した子羊が如く知らず知らず逃げ場所を探していた。  
そんな挙動不審の佐知に背後から声がかかった。

「ねえ君、ちっとも楽しそうじゃないね

「・・・」

溢れ出るサラサラの生睡を飲み込んで下を向いていた。

「帰りたいなら帰った方がいいよ  
遠慮しないでいいからさ」

心が読まれた・・・この男はいったい誰?

「ありがとう　お言葉に甘えてお先に失礼します」

大勢の盛り上がりにさよならの声は揉み消されていた。

「ありがとうございました」

従業員に見送られひとりドアを開けた。

佐知だけに向けられたスタッフの元気な声が唯一救いだつた。

外に出ると先ほどとは違つて心地よい空気が胸の奥まで沁みていった。

「疲れた」

夜空を見上げ田を閉じていた。

背に気配を感じたその瞬間誰かの腕が佐知を包んでいた。振り向くとわざと言葉を交わした男の姿があつた。

「『めん、ふらふらして今にも倒れそつだつたから』

「「ひちらこそ」」めんなさい

田を閉じて空を見上げていたから

「夜の空つて気持ちいいからね」

「えええ」

「送つて行くよ」

「私は大丈夫ですからお店に戻つてください」

「いいんだ俺も一人だし」

俺も1人・・その言葉に妙な親近感がわいた。

「じゃあ、少しだけ」

ぎこちない歩調は徐々に絶妙で軽快なリズムを奏でていた。

二人は出会つたばかりとは思えぬFavorオーラに覆われていた。

「俺、井川雅和まだ学生

真砂子の彼、龍一知ってるよね

あいつとは中学からの遊び仲間なんだ」

「私は皆井佐知です

病院の受付の仕事をしています」

「君は俺たちとはどこか違うよ

俺達みんな学生だからいつもあんな調子なんだ  
東京でも飲んだくれて憎めないバカやつてるよ」

「私にはみんな違う世界の人達みたいで」

「俺もそのひとりだつた?」

「さつきまでは、でも今は大丈夫です」

「ありがと、ほつとしたよ」

けつしていい男とはいえないが澄んだ瞳に好感を懷いた。

父に似た誠実そうな男だと思った。

昔どこかで会ったような懐かしさは感じたがタイプの男ではなか  
つた。

平凡な毎日を過ごしていた佐知に、ピリ辛の刺激と興味をそそる男との出会いが齎された。

どれくらい歩き続けたのだろう。

男の口からでた言葉に度肝をぬかれ足をとめた。

「今夜、君とのまま一緒にいたい」

込み上げた怒りを必死でこらえる佐知は拳をにぎりていた。

つい今しがた感じた思いは何だつたの  
この男のどこが誠実だつていつの・・・

ガシャンと籠が外れた。

#### 4 出会い？

「馬鹿にしないでください  
私のことやんなふうに見てたの」

「ちがうよ、ちがうんだ  
君と歩いていたら、何故だかわからないけど気持ちが安らいでいた  
君といふと俺は正直な気持ちで素顔のままじられるつていう思  
つた

こんな気持ちはじめてなんだ 本当なんだ

君といふてている事を単なる偶然だなんて思いたくなかった  
だから、このままずっと一緒にいたかった  
ごめん、怒らせたのなら本当にごめん  
でも、もう少し、もう少しでいい  
君といたいんだ、ダメかな」

男の表情に曇りはなく正直な気持ちが伝わっていた。

「もっ、顔を上げて」

「ありがとう

あのバス停の椅子に座つても「少しだけいいかな？」

「えエ、少しだけなら」

おろし立ての靴で擦れた皮膚がジクジク疼きだしていた。  
痛みを隠して歩く佐知には救いの神だった。

男は椅子に腰をかけると両手を天に向けて大きく深呼吸していた。

「気持ちいいなあ  
東京でこんなふうに夜空を見ることないのは何故なんだろうね  
東京のネオンの下でいい加減な自分の姿が嫌というほど照らし出  
されている

このままじやだめだつてわかってる  
それでも酒を煽つて誤魔化そうとする自分がいる  
俺は自分を直視できずそれどころか必死で隠そつと強がつてる  
正直、東京の生活には馴染めないんだ  
背伸びして糀がつてみたつて田舎者の俺は都会じや酸素不足の水  
槽にいる金魚と同じ」

「テレビや雑誌で知る東京は危険と魅力が入り混じる不思議な巨大  
都市だわ  
私には人を飲み込んでしまいそうな別世界に見える  
そこで生活しているあなたはそれだけですごいと思う」

「君は面白い事言つんだね

たしかに東京は楽しい事を探求するには飽く」とのない欲望を満たしてくれる場所かもしれない

でもそれだけじゃ生きていけないからね どこで生きていても煩惱からは逃れられない

苦しみや悲しみと向きあう時、東京の生活はそれが2倍3倍にもなつて襲つてくる

生暖かい夜風に紛れどんよりした空気が吹きあげてきた。

この空気を変えたい佐知は無理やり声のキーを上げていた。

「それは家族と離れて一人で生活しているから・・それだけのこと  
でしょ」

「いやちがう、東京つて処は悲しみや淋しさを増幅させてしまつ  
不思議なエネルギーを発してるんだ」

「夜も昼もない沢山の人で賑わう東京が悲しみを大きくするなんて

氣まずい沈黙の後、男は話しが続けた。

「君は賑やかな場所から一人になつた時の空洞になつた自分の心に  
出会つた事ある?」

「楽しい時間のあとは少しセンチになるけど心までは

「弱ければ弱いほど人は賑やかな場所に自分を置いていつとするとなんだ  
でも一人になる時間は必ずやってくる  
それに耐えられずまた人のいる場所を求めてしまう  
俺はいつもその繰り返しなんだ

「このままいいわけないのはわかってるよ  
自分を変えなきゃ俺の生活は何も変わらないんだってね」

「わかつていても出来ない・・その素直な気持ち好きだな  
自分と葛藤して自己問答していくって大切な事よね  
たまに一人になって静けさに身を投げてしまうのも一つの手かも  
ね」

「俺 今そんな気分だよ

こうして夜空を見上げていや逆に夜空が俺を見下しているのかな  
東京でお前は何をしているんだってね

本当は何を求めて東京にいるんだって問われてる気がする  
合コンしたり女と寝たところでそれは意味のない行為なんだ  
そんな事を繰り返したって何も満たされないのにさ

佐知は思わず手で耳を塞ぎ頭を左右に振った。

「そんなこと聞きたくない  
あなたが何して生きていこうが私には関係ない  
でも欲望のおもむくまま行動する男には嫌悪さえ覚えるわ  
酔つて女を抱くのは本能だなんて卑怯な男は正当化する  
そのとき心はそこにあるの、存在しているの  
何かから逃れるための代用なら許せない私はそんな男は絶対許さ  
ない」

「俺は君の言う許せない男の一人だな  
心なんて考えもしなかったから」

「心が一つになつて恋人達は初めてスタートラインに立てる  
男と女二人だけの物語がそこから始まつていく  
それが愛じやないのかなつて思つてるの  
夢見る夢子さんみたいでおかしい？ そうよね、おかしいわね」

引きつる笑いを堪える男の目は佐知をしつかり捕らえていた。

「女つてこんなに美しい生き物だったのか  
男には雷の電流が体中を走り行く衝撃と驚きだった。

淀んだ空気が澄んで流れると男は生真面目な顔を見せた。

「考<sup>え</sup>てみると俺が心から抱きたい思つたのは今日・今夜・今・君だ」

「また怒らせたいの、本当に男の性がみえて吐きそうになるわ

怒つて見せたが不思議と嫌悪感は覚えなかつた。

「なんでだよ

素直な気持ちを伝えただけ

俺の心の叫びを正直に伝えただけなのに」

「ブウブウーッ

あなたの心の伝え方は不正解、失格です！

とんだ勘違いの大間違ですから～ざんねん・でした

ふたりして爆笑していた。

二人ともおなかを抱えて思いつきり笑つたのは久しぶりだった。

長い散歩は二〇までこの先の道一人にはまだ見えなかつた。

「今日は無理を言つてごめん ありがと」

「こちらこそありがとうございます」

タクシーに乗り込んだ佐知は窓から顔をだし手を差し出した。握手した手が離るとタクシーは走り去つていった。

男の手に一粒のキャンディーが握られていた。  
手が離れる間際にそつと渡された小さな塊はミントのキャンディーだった。

飴玉を口に含むと今さつきまで一緒にいた時間がたまらなく恋しくなつっていた。

「まさか俺、あいつに惚れた・・・のか」

久しぶりの遅い帰宅となつた佐知に両親はきついお灸を据えた。  
母が言つた言葉が頭から離れなかつた。

「あなたも、もう学生じゃないから、  
プラトニックの交際ばかりじゃないでしきう  
でも女は受身よ、自分を見失つような交際は賛成できないわ  
多くの男性と係わると女の体には異常があるので、女と男は違うん  
だからね

本当に愛する人特定な人と自分を大切に出来る交際をしてほしい  
信じてるから大丈夫ね」

看護士だった母は生理になつた頃から女の体について話し聞かせてくれた。

両親は佐知の遅い帰宅を心配し起きて待つていてくれた。  
布団の中では佐知はつぶやいた。

「お父さんお母さん今田は心配がけで」めんなさい

あれから佐知は墓参りや雑用やらに追われていた。

「やういえばあの男<sup>ひと</sup>ひいてこのかしい

真砂子からの電話が入ったのはそれからすぐだった。

「私たち明日、東京に戻るの 又連絡するね  
ああそれと・・あの日佐知を送つていつた男、雅和を覚えてる  
あいつ私のアルバムから佐知の写真を持つていつたんだよ  
そう、あのピンボケの写真  
それでもいいって言つんだから笑っちゃうよね」

受話器をおいた佐知はショックを隠しきれずにいた。

あの人も東京に戻つてしまふのね・・  
囁いた佐知に「なんだかとっても寂しいね」と心の声が返つてき

た。

西口差す部屋で佐知はひとり本を読んでいた。

「カツン・カツン」

ガラス窓を突く音が繰り返し聞こえていた。  
レースのカーテンの隙間から外を見るとそこに男の姿があった。  
意味もなく懐かしさが湧き上がり居てもたつても居られなくなつた。

ダ・ダ・ダーツと地響きをたて階段を下りていた。  
気持ちが焦つて足が縋れスニーカーがうまく履けなかつた。

「おかあさん、コンビニに行つて来るねエ」

自宅が見えなくなつた頃一人は手を繋いで歩いていた。

「真砂子が電話で教えてくれたわ あなたが写真を持つていつたつて」

「あいつ、おしゃべりだなア」

「あの日の私を覚えていてくれて嬉しかった ありがと」

「人といふと素直になれる・ありがと」の言葉が素直に言えた・

互いの熱い手に力が入ると指と指をからめ強く握り合っていた。

「俺、君に会えた夏の日に感謝している  
これからは自分を大切にするよ、でないと君を大切に出来ないよ  
うな気がするんだ  
君を守る強い男になつてみせる」

恥ずかしそうに笑う男の瞳に頬を赤く染めた佐知が映っていた。

「ありがとう、うれしいわ」

男は佐知の体をひき寄せた。

厚い胸元に頬を埋め相手の心臓の音に呼吸を合わせていた。

「のまま一緒にいたい

出会った日、男が言った言葉がいま佐知の心の声になっていた。

何かがいま始まろうとしていた。

二人は今スタートラインに立つたばかり・・

擁きあう二人はスタートラインを踏み出そうとしていた。

## 5 ジェントルマン

佐知は家と仕事場の往復の生活に戻っていた。

同僚らの命コンなる飲み会の誘いは相変わらず断っていた。これは雅和と知り合つ前からずっと同じことだった。

雅和と出合つてから言い寄つてくる男が明らかに増えていた。

「何かへんなフロロモンでも出していろいろのかな」

眩いた自分の言葉におもわず紅潮した。

危ない危ないひき締めなければ隙があるから寄つてくるのに違いない。

このとき佐知は少女から女にかわる田原めの時を迎えようとしていた。

「コツ・コツ・コツ」

聞きなれた靴音がして受付に手を伸ばしたのは自称ジャーナリストの柳木沢という男。

実際はコンサルトの肩書きを持ち名刺には柳木沢マネージメントと記されてあつた。

新聞記者を辞め一念発起して司法書士の資格をとり会社を興したと聞いた。

勤務している病院長と親しい柳木沢は地元ではちょっとした有名

人だった。

病院長を訪ねてみると決まってメモ用紙を手渡してきた。  
毎度お決りの自分の携帯番号と右上がりの癖のある字で書かれた  
メッセージ

君が振り向いてくれるまで僕は諦めないよ

氣色悪い」とメモはいつもゴミ箱に千切り捨てていた。

土曜日の就業時間が終わりロッカー室を出た佐知のお腹がグウ・  
グウ鳴っていた。

「もつー時過ぎてるな・・お腹も鳴るわけだ」

小走りで院内を抜け従業員の専用口を出ると一台の車がドアの前  
に横付けされていた。

「ハジ苦労様、一緒に食事でもどうだね

窓から顔を出したのは柳木沢だった。

この男は妻とは別居中とか離婚したとか数々噂はあるが今はひと  
りホテル住まいをしていた。

女の出入りも多く派手な暮らししぶりに芳しくない噂も流れ聞こえて

きた。

お抱えの運転手のまたかといった顔がバック//マー[ヨ]ヒつていた。

「今日は約束がありますから失礼します」

前かがみで車の横を走り抜けていた

「あんな男に捕まつたら最後どうなるかわかりやしないんだから  
くわばら・くわばら・・・」

あまりの空腹におぼつかない足取でファーストフードに駆け込んでいた。

一階の席で持参の雑誌を読みながら注文の品を待っていた。

テーブルの横で立ち止った男の足先が見えた。

「ひとなとじろで待ち合わせかい

声の主は柳木沢だった。

「いえ・・あの・・」

しじるもじるの言葉など柳木沢にはお見通しだった。

「さあ、美味しい物を食べに行こう」

腕をつかまれ半ば強引に店をあとにした。

お抱え運転手の手には佐知の注文した品がしつかり握られていた。

辿りついた先は柳木沢の常宿のホテルだった。

支配人に手を振りご機嫌な柳木沢と数名の宿泊客と一緒にエレベーターに乗り込んだ。

招かれた部屋には身の回りの物がうず高く雑然と投げ出され放置されていた。

「うえええ、きたない」

思わずついて出そうになつた言葉を噛み殺した。

一人やもめの荒れた惨状だった。

ジョントルマン気取りの柳木沢らしくないと可笑しくなつた。

「クスッ」

吹出した佐知に柳木沢は豪快に笑い返した。

「あつはは、おかしいか  
わあ、ソファードで食事を待つとしよう

最上階の部屋からの眺めは始めてみる壮大な景色だった。

「わああ、すつ」お~い

自分が頂点に立った偉い人のような錯覚を覚えた。  
時折男の強引さを見せる柳木沢が小心者にさえ思えてドキドキ胸  
を躍らせていた。

柳木沢はソファーに深く座りフーッと息を吐きだした。

「長く生きれば生きるほど世の中の厳しさ堪えるものだ

若い時はどんな高い壁も乗り越えてきた  
血を吐くまで喰らいついで頑張った

歳月がすべてを喜びに変えてくれる・・

そう思いただがむしゃらに働いてきたんだよ

でもそれは僕の独り善がりで思い込みに過ぎなかつたと気づかされた

老いて尚つらいとは遙る瀬無いものだな」

陰りを帯びた横顔は病院で見せる印象とは全くの別人に見えた。病院で垣間見る威圧感のある偉ぶったこの男が苦手だった。

田の前の男はヤマトタケルや聖徳太子ではないと気持ちを落ち着かせていた。

「生きてるって証拠ですよ」

「そりか生きてる、だからつらいか  
そり思えば少しは楽になるのか・な

「気持ちを共有し分け合える人は必ずいます 家族とか  
柳木沢さんが弱くなっているのはそういう人がいないから」

「君は僕の痛いところを的確に突いてくるんだな

「申し訳ありません」

「いいんだ気にせんでいい、その通りだからな」

柳木沢といつ男の核心をビリしても探し見たくなつていていた。

「誰よりも奥様や家族が一番の理解者で癒しになつてくれる筈です  
柳木沢さんはそんな家族をお持ちなのに寂しそぎます」

「確かに君の言つとおり寂しそぎるな」

怖を知らずの拍車がかかつた佐知の口を止めるのは不可能だった。

「これまでの生き方が炙り出されているとは思いませんか  
天がその事を知らしめるため柳木沢さんを懲らしめようとしているのなら  
これからどうすべきか、答えは『誰と生まれるのではなく』でしょ  
うか」

柳木沢は威嚇するかのようにソファーに埋もれた腰を正した。

「君は恐いね

澄ました顔でしきりけ物を言ひ人を垣堀に陥れよつとしている

「そんなつもりは・・・  
すみません 本当に申し訳ござりません」

立ち上がり頭を膝まで下げた佐知の消え入る声は震えていた。

「ガラツ・カラ・ガラツ」車輪の音が部屋の前で止まった。

レストランの厨房の匂いがワゴンに乗せられて運ばれてきた。  
綿帳がおりた役者のように張り詰めていた気持ちが解けていった。

田だけでも腹一杯になりそうなランチの数々が並べられていた。

「まあ、食事にしよう  
お腹が空くと人はとげとげしくなる  
話は食事の後で続けるとしよう」

さすがの柳木沢もお腹が空いていたのだろう。  
真っ先に海老・イカ・・魚介類が盛り沢山のペスカトーレに手を  
伸ばした。

佐知もつられてムール貝を口にパクリ。

「おいし〜い」

「そうか それは結構なことだ」

ナプキンを口にあてながら栗鼠の様に頬張る佐知の顔を嬉しそうに眺めていた。

## 6 ジェントルマン？

会話もなくひたすら食べることに集中していた。

珈琲の香りが部屋中を充たすと柳木沢のきつい香水が消され穏やかな気分になった。

「君は僕を嫌つていいよ」

突然の的をついた問いかけに言葉を探していた。

「好いていないのは確かですが嫌つてはいません」

眉尻を下げる安堵した柳木沢の様子が伺えた。

「何が問題なんだろう、僕を好かないのは」

「その香水の匂いも私の好みじゃありませんし」

「じゃ君はどんな香りが好きなんだ」

「好きな人の香りが好きな匂いです」

柳木沢の口元が上弦三日月から下弦三日月の形に変わり不機嫌に見えた。

「それは難しいな、買つてこようにも探しようがない」

「柳木沢さんに好意を持たなければならぬ理由を教えて下さい」

「・・・・」

「答えられないじゃないですか」

尖った佐知の苛立ちをかわすように柳木沢は大きく咳払いをしてみせた。

「いや理由はある」

「何なのですか」

「僕があるといつているんだからそれでいいんだ」

「柳木沢さんにそんな子供じみた言い方は似合いませんよ」

「僕は君に男の本音を曝け出させて見せているんだ」

駄々っ子のような物言いに呆れ返りため息が零れでた。  
病院で見せる毒々しい柳木沢が姿を見せた。

「ひやまづけとでも仰るのですか」

「いいやそういうじゃない  
オブリークトに包んで君を手に入れようなど姑息な真似はしたくない  
だから直率に話しているんだ」

「そのお年になつてもまだ若い女性を食いつにしたいのですか」

「若い女性ではなく君だ」

「だから、なぜ私なのですか」

「君を極上な女にしてあげようと言つてゐるんだ」

「私には大切な人がいます」

「ほう、それで君はその男に充たされているのか」

「はい」

「どんなふうに」

いつまでもやまぬ矢継ぎ早の質問に語尾を荒げむきになつてていた。

「彼との蜜」とまで聞く権利なんて誰にもないはずです  
柳木沢さんを好きになるなんて絶対にあり得ません、絶対に無理  
です」

言葉が急に途切れると空氣音だけがキーンと耳の奥に入りこんで  
きた。

さつきまでとまづつて変わった嘘のような静寂さに鳥肌がたつて  
いた。

居た堪れないこの部屋を一刻も早く抜け出したかった。

帰ろうと荷物を持ち席を立つたその時だつた。  
ソファーに目をやると柳木沢は胸に手をやり苦しい息づかいを見  
せた。

「柳木沢さんどうしました、大丈夫ですか  
フロントに電話しますね、医者を呼んでもらいますからね  
わかりますか柳木沢さん、しつかりしてください」

土氣色の柳木沢を前に佐知は呆然と受話器を握りしめ半べそ顔で  
立ちすくんでいた。

「大丈夫・・・だ 上着のポケットに薬が」

柳木沢の指差す背広のポケットの薬を震える手で取り出した。

「これですか、一粒でいいですか」

返事も出来なくなつた口に薬を押し込み口移しで少しづつ何度も  
水を含ませた。

柳木沢はゴックン喉仏を大きく動かし水を飲み込んだ。

へたへたと床に座り込んだ佐知の体はまるで無重力にプカプカ浮  
いているようだった。

柳木沢の顔がいつもの肌色に戻ると容態は安定して見えた。

「申し訳なかつた

君がいてくれてよかつたよ、ありがとう

今日は朝からどうしたことが無性に人恋しくてね  
強引に君を連れて来たのはこのせいだつたのかもしれないな

手を握られはつと我に返つた。

「よかつた、安心しました」

「君の唇はいいね、実にいい」

「あれは医療行為です

他の人に変な事は言わないで下さいね 約束ですよ

「冗談、冗談だよ 君は本当にお堅いね」

柳木沢はいつも好かない男に戻つていた。  
今日ばかりは好かない男の復活を心から喜んでいた。

やつと帰れると深く吸い込んだ息を静かに吐き出した。

「これで失礼します 今日はご馳走様でした  
おいしい昼食をありがとうございました」

丁重にお礼を述べ頭を上げたときだった。

柳木沢の大きな胸に佐知は抱き寄せられていた。

「今日はありがとうございました 僕からのお礼だ」

見上げた唇に柳木沢の唇が綿菓子のようにソフトタッチして横切  
つていった。

柳木沢は素早い動作で身を離すと何事もなかつたようにドアを開  
け手を差しだした。

「またいつでも御馳走しますよ 君は命の恩人だからね  
もう君を困らせることは慎もう 今日はすまなかつた」

握手をして部屋を出た帰り道、初めて覚えた感情に動搖していた。  
柳木沢との長く感じた短いひとときを思い出していた。

「完敗だ・・私は好かない柳木沢さんの手のひらで転がされていた  
柳木沢さんは大人・大人の男」

## 7 心は正直

真砂子からの携帯が鳴っていた。  
雅和の帰省を伝えるメールだった。

／雅和、9日帰る電話してね／

雅和の携帯番号を「」の口はじめて知った。

舞い上がりつて番号を何度も押し間違えていた。  
見知らぬ人に頭を下げ続ける体は丸く小さくなっていた。

「もしもし」

「だれ」

「皆井佐知です」

「おお、久しぶり

真砂子からの伝言聞いてくれたんだね」

聞き覚えのある声にやつと胸を撫で下ろした。

嬉しさを隠せない声はビブラーートのきいたソプラノになっていた。

「急に帰るつて聞いて驚いたわ

「ちょっとした野暮用で親に呼ばれたんだ」

「もうだつたの 又会えるのね、嬉しい」

「俺も早く君と会いたい」

10月9日部屋のカレンダーに赤い花丸がついた。

当日、身支度にいつも倍も時間をとられた佐知はギリギリセーフで仕事場に駆け込んでいた。

ロッカー室でめずらしく鏡を覗き口紅をさす佐知の姿を同僚たちは見逃さなかつた。

「さうちん、もしかして彼氏できた?」

「たつぱり楽しんできてねえ」

「もう一晩してからかわないで下せこよ～  
今日もお疲れ様でした」

顔を赤く染め佐知は仲間を労い仕事場を後にした。

帆布のショルダーバッグを下げた雅和が改札口で待っていた。佐知は逸る気持ちを押さえようと冷静さを演じた。

「おかえりなさい 待つた?『めんなさいね』

「朝日が昇るまで待つ覚悟だつたから平氣さ」

差し出した手を強く握り返す雅和もまた動搖を隠すかのようだった。  
一人は手をつなぎ照れながら歩き出していた。

「疲れたでしょ ビニカお店に入りましょ」

「今日は俺の家に直行」

「そんな突然、お土産も用意していないし」

「誰もいないから心配しなくていいよ」

「・・・・」

佐知は硬直して動けなかつた。

「大丈夫、君を襲つたりしないから俺を信じて」

雅和に手を引かれ古めかしいが趣のある建物がある公園前でバスを待つた。

バスに揺られること15分・・雅和がブザーを押す仕草をしてみせた。

「次、降りるから」

指折り数えたバス停、降りたバス停は六つ目だつた。歩き出すと目の前に緩やかな長い坂道があらわれた。

「もうすぐだから頑張つて」

背中を押されフーフー言いながら坂を上りきつた。

真新しい住宅が並ぶその一角にひと際目立つタイル張りの門構えがあつた。

莊厳な洋館の家・それが雅和の家だつた。

雅和はチノパンに手を入れゴソゴソと鍵を探していた。

「あつたあ・・・  
俺、自分で鍵あけて家に入ることあんまりないから  
待たせてごめん さあ入つて」

促されるまま玄関左側の部屋に入った。

そこにはリビング趣味のよい15畳ほどの広がりのある空間があつた。

オレンジ色かかった黄色のソファーに座ると窓際に並んだ写真が田に飛び込んできた。

幼少期から現在までの雅和が額の中で飾らぬ素直な笑顔をみせ微笑んでいた。

着替えた雅和が部屋に入ってきた。

「恥かしいな 母さんの趣味だから仕方ないんだ」

額の中で笑っている屈託のない雅和を見た佐知はその後ろに隠れている母の愛を垣間見た気がした。

「ウーロン茶でいいよね、これしかなくて」

クリスタルカップに注がれた琥珀色のウーロン茶を佐知は喉を揺らし美味しそうに飲んでいた。

艶めかしく光る佐知の首筋から目を逸らし雅和も豪快に喉を鳴らしカラカラの喉を潤していた。

「いつまでいられるの」

「11日には戻らないと」

「やうなの」

「俺は数時間でも君といられるそれだけで嬉しいんだ。  
用件を早く片付けて君との時間を作るから待つてて」

「ありがとう」

「俺、君を大切にしたいから自分を変えようと努力してる  
君のために変わつてみせるからずっと俺を見ててくれるよね」

「ええ」

佐知は悪戯っぽく小指を立ててみせた。

雅和はソファーに座る佐知の腕をとり立ち上ると佐知の小指に自分の指を絡めた。

二人は指きりをしたまま見つめあつた。

雅和の呼吸が間近かに聞こえていた。

唇が塞がれ力強い抱擁に体中の力が抜けていくのがわかつた。

蕩けていく体の感覚を確かめるように一人は幾度も幾度も唇を重ねていた。

「俺、我慢できないよ」

「我慢できないのは、体、心？」

「俺は君だからほしいんだ 君がほしいんだ」

「このまま気持ちに流されてあなたに抱かれるのはいや  
心から抱かれたいと思えるまで大切にしたい・・ごめんなさい」

「あやまる事ないよ

君を大切にしたいから待つよ、俺ずっと待つよ」

そして一人はまた唇を重ね合わせた。

雅和が乗せてくれたバスの中で夕暮れの流れ行く景色をボンヤリ見つめ揺られていた。

本当は抱かれてもいいと思った  
洋服を着た私は裸同然だった  
あの時の私・・すべてを許していた

初めて知った抑えきれない感情と体の変化に戸惑う佐知だった。

数時間の出来事に佐知の胸は痛み出していた。

手の甲に流れ落ちた涙を乾いた唇に押し当て目を閉じていた。

雅和が東京に帰ると戸惑う感情と体は何もなかつたかのように戻つていた。

あれから柳木沢は病院には顔を見せなくなつっていた。  
聞くところによれば仕事と身の回りの身辺整理やらで多忙なのだ  
といづ。

「体は大丈夫かしら」

好かない柳木沢を心配していた。

「今日は土曜日、会いに行つてみよう

好物のシフォンケーキをふたつ今日は柳木沢のために買つた。

少し高台に建つレンガ造りの華奢なホテルに柳木沢は宿泊していた。

ホテルは生前の祖母に出会えたような懐かしさを感じさせた。

フロントは端から端まで団体の列で溢れ返っていた。

後尾で順番を待つていると肩ごしに手を感じた。

振り返ると白髪交じりの初老の男が一礼して笑顔を見せた。

佐知は首を傾げてキヨトンとしてその男を見つめ返した。

「いつも後姿ばかりですからわからないでしょうね」

思い出そうと手を開じた時だった。

薄い記憶の中に帽子を被った男の姿が見えた。

「あ、柳木沢さんの運転手さん、ですよね」

男は妙に畏まった顔を少し崩し微笑んだ

「柳木沢様は今日は御戻りになりませんよ」

「あのー・・・口にしがけた言葉を飲み込んでいた。

「あのー、宜しかつたらどうぞ」

土産のケーキを胸の前に差し出した。

「これは受け取れません 柳木沢様へのお品でしょ」

「いいえ、受け取つてください  
車に乗せていただいたお礼ですからどうぞ、それどうぞ」

佐知の押しの強さには、この男も勝てなかつた。

「では、頂戴いたします」

肩を落とす佐知のもとに男が神妙な面持ちで戻ってきた。

「あのー・・・

お聞きしたいことがあるのですが宜しいでしょうか」

緊張しているのか手にしたケーキの箱が揺れていた。

「大変失礼かと思いますが・・・  
柳木沢様との間に何かあつたのでしたらお聞かせいただけません  
か」

質問の意味を把握できず言葉に詰まっていた。

「いいえ、何も思い当たる事はありませんよ  
柳木沢さんがどうかしたのですか」

逆に問われた男は口ごもりながらも柳木沢の近況を伝えた。

「柳木沢様はお変わりになりました

人一倍氣むずかしく氣性の激しいお方が私に声を荒げることもなく  
それどころか申し訳ないなんて頭下げられるのですよ

長年仕えていますが驚きましてね  
どうかなさいましたかとお尋ねしたのですが返事は返ってきません  
んでした

あれからあなたのお話ばかりをされましてね  
いえ、なに・・たいした話じやないので心配なさらないでください  
い

柳木沢に何が起きているのだろう。

「いつ 戻りますか」

「すみません」

口止めされているであろう男は足早に来た道を戻つていった。

人は余程の事があつたとしてもそう簡単には変われないと思つて  
いる  
柳木沢ほどの男ならば直のことだらう

その柳木沢が変わつたと云うのならやはり何かあつたに違ひない

佐知はますます会いたい気持ちが募つていった。

仕事が終わると一目散にホテルへ足を運んでいた。

「もう一〇日目か、柳木沢は今日も帰つてこない・・

ソファーは疲れた体を癒してくれた。

「ホテルの椅子ってゆりかごみたい

心地よい睡魔が襲いつとまどろんでいた。  
どのくらじこづいていたのだろう。

首筋に硬い感触がして誰かの腕枕があつた。  
見上げると待ち人・柳木沢の姿がそこにあつた。

「おお、目が覚めたか  
どうした、こんなところでお休みとは」

「柳木沢さんどこに・・今までどこに行つていたのですか」

柳木沢はソファーアを移動して佐知と距離をとつた。

「思うように行かない それが世の常だな  
こんなところじや話も出来ないだろつ もあ部屋にこいつ

「いいえ、今日は帰ります お顔を見て安心しましたから」

「外はもう暗い 車を用意させるから乗つて帰りなさい」

佐知は向きを変え柳木沢の元に引き返していた。

「柳木沢さん土曜日、また伺つてもいいですか」

柳木沢は大きく頷いた。

「嗚呼、スケジュー<sup>ル</sup>に書き留めておいた  
君との再会を忘れないようにしつかりとな」

ガラス<sup>ビ</sup>しに柳木沢の運転手の姿が見えた。  
ホテルを出る佐知の姿を見つけると助手席のドアを開いて立つて  
いた。

「すみません」

運転手はシートベルトを締めながら後部座席に顔を向けた。

「いつもややはケーキをありがとございました  
妻とふたりで美味しく頂きました」

「お礼を言わなくていいのは私の方ですよ  
いつもお仕事を増やしてしまって、『めんなさい』

「とんでもない、実はうれしいんですよ  
あなたは柳木沢様の奥様と似てらっしゃる  
坊ちゃんでなくお嬢様がいたらきっとあなたのよつな方だつたで  
しょうね」

「わたしが、ですか」

私が柳木沢さんの奥さんと似てゐるなんて・・  
柳木沢さんは私に奥さんを重ね見ていたのだろうか

柳木沢のかすかな匂いがした。

それは佐知の苦手な香水の香りだった。

「あれは大人の香り・大人の男の匂い  
柳木沢さんは初めて出会つた大人の男」

## 8 心は正直？

佐知は柳木沢と交流を続けていた。

柳木沢はスケジュールをやり繰りして時間をとってくれた。しかし、未だ柳木沢という男の本質は見えてこなかった。

ただあの日以来、佐知に女を求めることはなくなっていた。

遣る瀬無い心情をしばし口にしたがいつも佐知に一蹴されていた。柳木沢にはそれも又癒しで活力の源になっていた。

「君といひで会つのは今日が最後だ 僕はこのホテルを出る」

「住まいを見つけたのですか」

「いいや、戻るんだ」

「戻るって、御家族のもとに」

「ああそうだ」

「よかつた 良かつたですね」

椅子から立ち上がり柳木沢に駆け寄っていた。

「こんなに喜んでもらえるとは・・・  
君のこんなハシャギようは初めてだな」

言い終えると柳木沢は満面の笑みの佐知に背を向けた。

「だつて柳木沢さんはもう一人じゃないんですよ  
家族と一緒に寂しくなるでしょ、それが嬉しいんです」

無邪気な言葉に振り向きざまの柳木沢が苦言した。

「人は誰かといえば寂しくはないだろう  
しかし誰かといってもひとりぼっちなら、どうだろ?」

雅和と出会つた夏の日が甦つた。  
大人数の中に居たあの時の私は一人ぼっちだった。

「君は家族といて楽しいか?」

「楽しいとか考えたことありません

一緒にいるのが当たり前で寂しいなんて思う」と一度もありません  
ん」

「君はそれだけで、もう十分幸せものだ  
そんな家庭がある君がつらやましい限りだ」

「柳木沢さん大丈夫ですか

家族と一緒に生活が始まるというのに喜んでいない・・・

「やはり君にもそう見えるか

心は正直なものだから誤魔化せんな」

「・・・・・」

一風変わった二人の交流だつたがこれがホテルで交わす最後の会話となつた。

二人の関係を読み解くのは人の心を計り知るのと同じで哲学のようでもあつた。

この関係が鍵となる予想外の出来事が一步一歩緩やかな足取りで近づいていた。

病院の庭の木々の葉はすっかり落ちて季節は移行していた。

寒空の下で道具を巻きつけた庭師達が白い息を吐き霧囲こをしていた。

もう木々は冬支度・廻る季節は冬・寒くて暗に冬がもうやうやくまで来ていた。

「せり、まいぢやんから電話よ」

部屋から出ると冷たい空気が全身を覆つた。

「わむう～

佐知はつま先立ちで階段を下りていった。

「佐知、久しぶり 冬休み帰るからようしき

最近の雅和付き合いで悪くつてさ、全然遊んでいないんだ  
遠距離の恋わざらいで寝込んでるんだりうつて皆で笑つてゐ

られた。  
店内から漏れ聞える脳天をつく奇声に受話器をずらしていった。  
一方通行の電話は毎度の事でこの日も佐知は口を開くことなく切

受話器を瞪然と見つめていた。

「これが真砂子流の長く付き合える秘訣なのかもね」

いつもの身勝手な振る舞いにむつとしながらも笑いがおきた。

雅和から帰省の知らせが入ったのはその5日後だった。

「冬休みになればまた会える」

そう言い聞かせ宥め・励ましこの日を待っていた。

「雅和が帰つてくる

会いたかつた雅和が帰つてくる」

この夜、佐知は丸めた毛布を体に密着させ眠りについた。

佐知は洋服ダンスからありつたけの服を出していた。  
何時間、鏡と睨めっこしていったのだろう。

何度も何度も階下から母の声が聞こえていた。

次第にその声が大きくなり母はどうどう角を出した。

「いいかげんに早くお風呂に入つてしまいなさい  
何度いわせるの 片付かないから早く入りなさい」

パジャマを抱えしぶしぶお風呂場にいった。

脱衣所の洗濯機の前には鬼の形相をした母が立っていた。

「この雰囲気はまずいぞー」

母のご機嫌ななめを何とかせねばと頭を捻った。

「振りかぶり佐知投手の投げた服は

洗濯機の前に立つた貞子バッターの背中に～

驚き振り返つた母に佐知は投手を真似てタオルを宙に投げて見せた。

上手にタオルを掴み取つた母に大きな声をかけた。

「貞子母さん、ナイスキャッチ」

佐知は側にあつた洗濯がごを被り片手を高く挙げていた。  
かごの隙間から体を揺すり微かに笑う母の顔が見えた。

「子供みたいな真似して、可笑しいわねえ」

母の顔から眉間の皺が消えいつもの菩薩顔に戻っていた。

「ゆっくり入りなさい」

「うん」

予想以上の展開に「お笑いの素質有りかも～」といつもつした。

湯船に浸かりながら雅和を思い出していた。  
お風呂と同じあつたかい雅和の胸。

指でお湯に字を書いた。

あし　た　あ　え　る  
は　や　く　あ　い　た　い　よ

誰にも見えないその文字は佐知の逸る思いだった。

「皆井さん、皆井さん」

ボーッとしていた頭上に声が飛んできた。

「あ、っ　はい」

「いいかげんにして、もう何度かしつら  
診察券がたまっていますよ　山のよつこね  
今日の皆井さんおかしいですよ　具合でも悪いのかしつら」

「ハイ あ、いいえ 大丈夫です」

「大丈夫ならしつかりしましょうよ」

受付のハイミス部長にお玉を喰らつた。

「雅和ボケだ・これはまずい」と気持ちを切り替え反省していた。  
しかし時計ばかりが気になり仕事に身が入らなかつた。

仕事後の更衣室は唯一ほつとする同僚達との憩いの場だった。  
しかし今日ばかりはお喋りの輪を逃げるように入り込んでいた。

「おつかれさまでした」

駅まで猛ダッシュして走り急いでいた。

時計の針は6時を過ぎて5時30分着の電車はとうに着いていた。

人ごみをかき分け頭を左右に傾けながら探していた。

岩のような荷物に座り腕組みする雅和を見つけゼイゼイ息を切らし駆けていた。

「遅れて」めんなさい

「仕事なんだからしょうがないよ

息を整え改めて一人は向き合っていた。

「雅和、お帰りなさい」

「ただいま、わち

「疲れたでしょ

「ああ、でも君の顔みたらもうひと頑張り出来そうだ

「ナニをひと頑張りするつもりなの」

「もお、すぐ人の揚げ足取るんだから」

高笑いし二人はじゃれながら北風の町を歩き出した。

「ねえ、お願ひがあるの」

「なに」

「今日からお前で呼び合いましょう」

「あ、そうだね 佐知・・・でいいかな」

「ええ、私は雅和、マーちゃん  
なんて呼んだらいいのかしら」

「マーちゃんだけは勘弁してくれ

親に呼ばれてるみたいで落ち着かないよ」

「マーちゃんって呼ばれてるんだ  
私もマーちゃんにしてよつかな」

「それだけは頼むから止めてくれ

「わかった それじゃ雅和・・・これでいい?」

「ああ・・やでと、これがりびー」にこべ

「疲れているみたいだから、とりあえずこの辺のお店に入りましょ  
う」

一人は信号待ちで偶然みつけたお店に入った。

「いらっしゃいまーせー」

独特のイントネーションに迎えられ店内に入った。

凍えた体を撫で捲くる店内の暖かい気流に包まれると自然と顔が  
綻んだ。

寒さで固くなつた筋肉が解れて一人はほっこりした気持ちになつ  
た。

雅和は膨らんだ荷物を置くとグッタリ座り込んだ。

「ずいぶん荷物が多いのね  
海外からの長期旅行者みたい」

「今回は特別なんだ」

「しばらへいられるのね」

「うふ、家でいろいろあって少し長い滞在になるかもしれない」

この件には触れたくなさそうですが、「話題を変えた。

「それより、なにか計画立てよつぜ」

「そうね、もうすぐクリスマスだからクリスマスパーティーなんて  
どう」

「いいね、クリスマスパーティーか」

「男の人と二人だけのクリスマスなんてはじめてよ」

「俺は久しぶりだなあ」

マズッタとばかり雅和は上目遣いで佐知の顔を窺がつた。

「そうよね、初めてじゃないわよね」

「そうじゃなくてつさ前にも言つただろ

心なんて考えなかつたつて・・

俺にはたいそな意味のないクリスマスだつたつて事だよ

「じゃあ、私と回じ?」

「考えようつこよつとはそうだな

「なんだかルンルンしてきた~」

「もう俺たちは子供じやないんだぜ

サンタがプレゼント持つてくる訳じやなし

「サンタは雅和、プレゼントは雅和

雅和が雅和もつてやつて来る~ リンリンリン・リンリンリン~  
つてね」

「まだまだ子供だな、佐知は」

他愛のない会話をして一人の一日は閉じられた。

「ただいま～」

マフラーをはずしながら佐知が茶の間を開けた。

「おかえり、残業」苦勞様

「佐知、外は寒かったらう

母さん早く」飯の支度をして上げなさい」

笑顔の家族が遅くなつた佐知を迎えてくれた。

母の支度してくれた湯気のたつた夕食。

あつたかい湯気が顔を撫でたとき後ろめたい気持ちでいっぱいになつた。

残業といって過ごした雅和との時間を思い出し少し膨らんだお腹を押さえながら

母の料理をきれいに平らげていた。

茶の間に戻り父の隣のこたつに足を入れた。

炬燵の中の家族の足と足とが触れ合つてくすぐつたかった。

「あつたかいねえ、やつぱり家がこひばんだね」

「佐知は調子がいいんだから」

茶の間の入り口でみかんを抱えた母が含み笑いで立っていた。  
昨夜のお風呂の件で母に投げつけた言葉を思い出してシミタと思つた。

「うるせーなあ わ母せようむれ過めだよ、もつじんな家いやだ  
つて言つたよ」

逃げ出したくなつて父の背に隠れるよつて体を丸くしていった

「何か良い事でもあつたのかしら、わひひゃん  
母の心の声を無視していくもなり田もくれない番組を父と見続け  
ていた。

会話なんてなくとも全然平氣。

いひして一緒にいるだけで温かくなれるわが家はやつぱりいいな  
あ～

柳木沢の言つた言葉が甦つた「それだけで君は十分幸せもの・・

自分の部屋に戻るとベッドに体を投げ出した。

雅和の匂いがどこかに残つていそうな気がして脱いだセーターを  
顔の上に乗せてみた。

一人の匂いが溶け合ひミステリアスな香りを醸し出していた。

その香りは未知の匂いのようだつた

今宵そのセーターを抱き佐知は心地よい眠りについた。

## 9 契り

クリスマス商戦も佳境に入り町中がクリスマス色に染まっていた。

佐知は×印で埋め尽くされたカレンダーの前に立っていた。  
23日の数字に思い切りバツテンをつけた。

すぐ隣の24日の数字には二重の花丸が見えた。

「明日だ、とうとう花丸の日が・・やつたあ～」

待ちわびた一人きりのクリスマスパーティー。  
カレンダーの前で両手を挙げジャンプしていた。

一方の雅和も格別なクリスマスにしたいとプランを練っていた。

24日の朝は人生で一番の早起きの日となつた。

「まだ3時半・・」「まだ4時・・」「まだ5時・・」  
「ああアア・・」

何度も目が覚めたまらずベッドを飛び出していた。

壁にかけた勝負服が飛び起きた反動でヒラヒラ踊つてみせた。

繁華街の町はいつも以上の輝きをまして賑わっていた。

光のイルミネーションが季節を変え明るく優しい気持ちにさせた。

往き交う人、ひと、ひと・・

佐知の目はカップルばかりに注がれていた。

「雅和に早く会いたい」

待ち合わせのホテルの前で雅和を待っていた。

突然サンタクロースが遣つてきて

おどけた仕草で袋からメッセージを出した。

「わたし・・に?」

サンタは封を切るジェスチャーをして見せた。

「中を見てほしいの?」

両手で丸を作つて額ぐサンタはコミカルなステップを踏みながら去つていった。

このサンタが真砂子の彼・龍一とは誰もが予測できないサプライズだった。

凍えて強張った指先を温めながらメッセージカードを開けた。

「1102号室にて君を待つ 待ち人雅和より」

カードを握り締め雅和の待つ部屋へ駆け出していた。

エレベーターを出ると案内ボードの矢印 を頼りに1102室に進んでいった。

部屋の1102を確認すると高なる心臓の音に息が苦しくなった。鼻からいっぱいの空気を吸い静かに吐き出していた。

勇気を出して部屋をノックすると雅和が顔を見せた。

手を引かれ部屋に入つて行くとそこには飾りのない青々したツリーガつた。

「佐知と俺のクリスマスツリー・君に送るクリスマスプレゼント  
今年はライトだけだけど毎年少しずつツリーをいっぱいにしよう  
素敵なプレゼントをありがとう

「さあ、ライトをつけよう

ツリーにオレンジの光たちが輝き二人の物語が始まった。クリスマスディナーを堪能した一人は部屋でツリーを見ていた。

二人のクリスマスの扉が開こうとしていた。

雅和は佐知が手にしたワイングラスをテーブルに静かに置いた。両手をつかまれ椅子から腰が浮いたとたん雅和の腕に包まれていた。

「さち、さち」 「まさ・かず」

佐知は雅和にだけ許した心を信じ硬直した体の力を解いた。雅和は自分の体を強く佐知に密着させた。

「さち、会いたかったよ さち、さち・・・

雅和は佐知の名を繰り返し何度も呼び続けた。

佐知もまた雅和の背に指を立て何度も頷きながら応えていた。

二人は会えなかつた心の空間を埋める様に心と体を重ねた。

佐知の体は熱く潤い続けていた。

雅和も何度も起き上がつてはリングに立ち続ける凛々しい姿を見せた。

私・・男の人を求めている  
雅和をほしがっている・・・

雅和の肌に指を這わせる佐知がいた。  
困った照れ笑いをみせた雅和は一層佐知を抱き続けた。

このまま地の果てまで落ちてしまつてもいい・・・  
芯まで受け入れる佐知の肌はブロッサムピンクに染まっていた。  
二人の体にすべてを溶かしてしまうほど熱い物が波となつて押し寄せていた。

「心が入るところがいいんだって俺、初めてわかったよ  
君が愛おしくて涙が出そうだった」

「私も涙があふれたわ  
愛する人に抱かれるってこういうことなのね」

ふたり静かな眠りについた。

夏の一夜の出会いが濃密な一夜と化し深い契りを結んでいた。

クリスマス以来幾度もテー<sup>ト</sup>トを楽しんでいたがある日を境にピタリ途絶えていた。

つまんない・・佐知は会えない日々に口を尖らせ爪を弾く毎日を送っていた。

あの日、雅和の携帯には何度もメールが入っていた。  
そして雅和は佐知をひとり残し帰つていった。

「ごめん、悪いけど今田はこれで帰るよ

今度たつぱり埋め合わせするから許してほんとごめん」

雅和の微笑む目から笑みは消えていた。

何か途轍もないことが起きたんだ・・・

あの日を思い出すと電話をする気にはなれなかつた。

今日もまた手にした携帯を置いていた。

「ハアー・フウー」氣分を紛らそと吐く息が余計部屋の空気を重くしていた。

佐知はひとり冬の町へ出た。久しぶりの夕刻の町だつた。

顔を突き刺す氷のような風は元気をなくした心と体には堪えた。

気がつくとクリスマスを過ぎたホテルに足が向かつていた。

喫茶ラウンジに入り手を擦りながら読みかけの本が入ったバッグに手を伸ばした。

そのときだつた。

「あつははは」

覚えのある豪快な笑い声に思わず辺りを見渡した。

「あ、柳木沢さん」

数人の男たちと談笑している柳木沢がそこにいた。

柳木沢さん少し痩せたみたい  
仕事の打ち合わせかしら

柳木沢が元気を齎したのか青白かった顔にみるみる赤みが差した。

後ろ髪引かれる柳木沢から視線を外し読みかけの本に目を移した。  
作品の登場人物に感情移入しながら本に没頭していた。

同じ空氣を共有していた柳木沢の事など完全に忘れていた。

「皆井くん、皆井君じゃないのか

「一ヒーカップを手に立つている柳木沢に瞬きもせず釘付けになつた。

柳木沢のカップを指で弾くチーン・・その音で我に返つた。

「柳木沢さん」

柳木沢が挙げた右手を出口に振つて見せた。  
出口で待つていた同行の男達は柳木沢を残し帰つていった。

「少し、いいかな」

「はい、一人ですかどうぞ

柳木沢さんは、このホテルによくいらっしゃるのですか

「ああ、僕にとつてここは口へありのホテルだからね」

「そうですか　お体は大丈夫ですか、少しお疲れになりました?」

「君は勘も鋭いらしきね　君には隠し事は通用せんようだな

「何か隠しているのですか」

「あついいや、何もない君の勘ぐりすぎだ」

「ならないのです

でもあれからどんな生活をなさっているのかと心配で」

「僕を心配していた？君が・・・それは嬉しいね」

「わたし真面目にお話しているのですよ  
柳木沢さん、あの時嬉しい顔を一度もなさらなかつた  
だから、『家族どうしていのだろう』と」

「君は何でも知りたがるんだな

忠告しておく、人の事に立ち入り過ぎるのは止める」とだ

柳木沢は一人ぼっちになつた  
間違いなくまた一人になつたと直感した

「柳木沢さんにお会いするにはどうすればいいのでしょうか」

「君が又、僕と会ってくれるというのか？  
しかし僕は、君に幾度も携帯の番号を伝えていた筈だがな」

「申し訳ありません

捨ててしましました 本当にすみません」

「じゃあ、もう捨てないとだな」

柳木沢は番号の書かれたメモ用紙を佐知の手に握らせた。30分程の短い会話だったが柳木沢はぽつかり空いた心の溝を埋めてくれた。

家に戻ると腑抜けのようにベッドに腰をかけていた。

お尻の固い感触に手を伸ばす出掛けに探していた携帯が出てきた。

着信履歴に残った雅和の名前に小躍りしていた。

柳木沢に湧き上がった嬉しさは消え携帯番号をえりうつでもよくなつていた。

「もしもし、雅和」

「佐知、この前は」「めん」

「あやまらないで 会える?」

「う、うん、明日はぜひうへ」

「会いたい ものす」「会いたい」

恋焦がれた雅和を待っていた。

約束の時間まで2杯のコーヒーは余裕で飲めそうだった。

息切つて雅和がテーブルに着いたのは間が持てなくなつた頃だつた。

佐知の側に跪いて顔の前で両手を合わせ頭を下げた。

「このは、本当に悪かった」

「ううん、いいの気にしないで  
ねえ雅和、私をしつかり繋ぎとめておいて」

「佐知どうしたんだ、急に」

「会えなくなつてからずつと雅和のことばかり考えてた  
このまま会えないのかなつて思つたら寂しくて悲しく泣けてきたわ  
雅和が恋しくて、恋しくて堪らなかつた、一人ぼっちはいやもう  
一人にしないで」

「『めん、佐知』めんよ」

頭を深く下げるうな垂れた雅和の姿が痛々しかつた。

「『めん』めんなさい わたし雅和を困らせてるよな」

感情の高波に飲まれ溺れているもうひとりの私が雅和を困らせていた。

自分を見失うような付き合いは賛成できないと言った母の言葉が過ぎついていた。

新たに生まれ出た女が見え隠れし顔を出していた。

「携帯鳴ってるわ 遠慮しないでいいのよ」

幾度も携帯が鳴つて佐知は会話に集中できなかつた。

「あっがとう じゃ、ちょっと『めん』

口元を緩ませ携帯を持つと急いで席を立つて行つた。

今日もきっと私を置いて帰つていいくあの時と同じ思ひはこやは残されたつらさが痛みとなつて襲つていた。

伝票を持つと戻つて来る雅和のもとへ走り駆け寄つた。

「今日はこれで帰りましょう

雅和、なんだか大変そうだから」

「ありがとう、佐知

落ち着くまで暫く会えないと思うけど大丈夫」

「うん大丈夫」

「落ち着いたら、その時がきたら全部話すから待つてて」

「雅和ありがとう、会えてうれしかったわ  
無理して会いに来てくれたんでしょ  
わかつてたの・・・なのに我が家まといつてごめんね」

雅和はうるうる涙の佐知が愛おしかった。

首筋を両手で包むとおでこに優しくキスして帰つていった。

一人何かを背負つ雅和の後姿を佐知はいつまでも見送っていた。

## 10 契り？

雅和からの連絡は途絶えて月日だけが流れていった。

佐知と柳木沢は携帯で互いの近況等を伝え合つようになっていた。

約束の日、キーを手にエレベーターから出でくる柳木沢を見ていた。

このホテルに泊まっているのかしら、家庭に戻った柳木沢が何故化粧室の鏡の前でコンパクトを閉じ頭をかしげた。

「お待たせしてすみません」

「いや、ぼくも着たばかりだ」

「柳木沢さん、常宿をこのホテルに変えました」

柳木沢は飲みかけたコーヒーカップを震える手で置いた。

「あ、ん・・いや

君はどうしてそんなに勘が働くのかねえ」

「キーを手にした柳木沢さんを偶然お見かけしたので」

「えりか・・・」

「どうして、お一人でここに」

「家庭は仕事のようにはまくいかないものだね」

佐知の「コーヒーが運ばれてくるとミルクを並々注ぎ入れてくれた。

「昔から僕は仕事人間でね  
仕事オンリーの仕事馬鹿で何よりも仕事を優先させてきた  
当然、家族は置き去りにしてしまったよ

両親が病気の時も妻が倒れた時も僕は酒を呑んでいた  
勿論、仕事がらみだ

それが原因なのだろうか一緒に住めるようになったといつに  
顔を合わせれば僕を責めつづける昔のままの家族がそこにいた  
耐えられなかつた、いや耐えたんだよ十一分すぎるほど」

「おつらいですね

柳木沢さんが自分の父だったら「家族の気持ち分らないでも、でも責める気持ちなんて絶対ないと思います。きっと無意識に出てしまった言葉なんですよ」

「その無意識というのが問題なんだよ  
許すと言しながら結局は許していないその証だろ?」

「これは家族再生への一步なんですよ  
積年の封印されてきた想いが一緒になつたからじか吐き出せてい  
るのですから」

「確かに彼女にはつらい想いをさせってきたよ  
しかし、それ以上のものを与えてきた  
何十年も昔の事を言われ続けるのは堪つたもんじやない」

「つらい想いをそれをきちんと奥様や「家族に償えたのですか  
昔の事なんて簡単に片付けようとするから」

「謝罪はじゅうぶんに済んでいると思つていた  
だから一緒になつた、家に戻つたんだ  
だというのに住み始めた途端、口を開けばこいつだった・ああだつ  
たと・・」

「女は誰かに話を聞いて欲しいんです

聞いてもううだけでいいんですよ

奥様の話を愚痴でも何でも耳を傾けて聞いてあげてください  
すべてを吐き出せたら奥様はきっとすつきりなさる筈です」

「家庭は君の言ひ「女らぎや癒しの場所どころか僕を苛立たせる場所だ  
その上、妻の「機嫌をとれ」と君は言つ  
この僕に指図し命令つもりなのか？君は見あげた女だな」

柳木沢は憮然と露骨に嫌な顔をして見せた。

「怒らせたのなら許してください

でも柳木沢さんの今の物言いは許せません  
その見下したような言い方が関係を悪くしているのではないですか  
一度くらい柳木沢さんがご家族に合わせてもいいと思います  
本当の「家族の気持ちがきつと見える筈です」

このとき一枚のメモがテーブルに届けられた。

「電話が入ったようだ ちょっと失礼するよ

カップの珈琲は手付かずのまますかり冷めていた。

「申し訳ない

仕事が入ったので失礼するが君は此処に残りなさい

「いいえ、私も一緒に失礼します」

「頼んだコーヒーが来るからそれを飲んで帰りなさい」

近寄りがたい空氣を醸し柳木沢はコートを羽織り仕事場に向かっていった。

「・・柳木沢さんを怒らせてしまった

一言多かった口を手で覆い自己嫌惡の津波にドップリ浸かっていた。

昔の柳木沢・さつきまで一緒だった柳木沢  
やはりどちらも好かない男だった

テーブルにケーキとレモンティーが運ばれてきた。

佐知の大好きなシフォンケーキだつた。

心遣いのケーキを口いっぱいに含むと自然と顔が綻んでいた。

連絡が途絶えた雅和は其のころ父と母の関係に心を痛めていた。

「いつたい何が気に入らないんだ

君に一生責められる様なトンでもない事を僕がしたのか  
頭を下げて一生謝れとでも言いたいのか」

「あなたを責めるなんてそんなつもりは決してありません  
昔の話になるといつも不機嫌な顔をして神経を尖らせ声を荒げる」

「考えても見る 今更昔の話など何になるんだ  
どうしろと言つんだ 言つてみろ  
言いたい事があるのならばつけ加えてみろ」

「悲しみも苦しみも一人耐えてきました  
その想いをあなたにわかつて欲しかったの  
そしてあなたにも共有して貰いたかった  
幸せも涙も分け合える夫婦になりたいと願つていました」

「僕は血を吐く思いで仕事をして君たちを養つてきた  
そのお蔭で君たちの今日があるんだ  
十分な物を与え続けられたのも僕の仕事のお蔭だろう  
なのに何をそれ以上僕に期待すると言つんだ」

「私は贅沢を望んでいるんじゃないの 誤解しないで下さい  
あなたを必要とする時あなたはいつも傍に居てはくれませんでした

長い年月を通してあなたが私と居てくれたのは数える程でしたよね  
あなたの心がいまだよくわからないあなたが見えなくて悲しく  
なる

「何をバカなことを云つてゐるんだ 君はおかしいんじゃないのか  
長いこと僕を見てきた君が何を今更見えない等とほざくんだらう  
な」

「なら、あなたは私を見てくれたのですか  
あなたに私が見えていたのですか  
ならば教えて下さい あなたに見える私を仰つてください」

「つるさい黙れ、もう黙つてくれないか  
朝からグダグダと氣分が悪くなる  
養われている女はおとなしく従つものだ  
ぼくが右といったら右、左といったら左だ  
それが妻の役目というものだろ?」

「あなたは何一つ変わっていないのですね」

「つるせこ、黙るんだ  
君はもう口を開くんじゃない」

「また私から逃げるのですか

私と向き合ひて下さる優しさもないのですか  
私はあなたに愛されてはいないのですね」

「どうしてあなたは私から田を離げようとするのですか

ビシャッ・・

男女の争つような声に起しきれた雅和は田を擦りながら階段を下りた。

ドアの前に入るタイミングを幾度も逃していたが母の涙声に眠気が一辺に飛んでいった。

「殴つて、それであなたは気が済むのですか  
でも私は・・又・・あなたという人が見えなくなつた」

雅和は勢いにまかせ乱暴にリビングのドアを開けた。  
仁王立ちの父と睨み合いがんを飛ばしていた。

「母さんに手をあげたのか  
親父に母さんの何がわかるんだ  
何も分からない奴が偉そうなこと云つてんじゃねえ

家庭も守れない男に家族の何が分かるつていうんだ  
お前なんか、おまえなんか戻つてこなきやよかつたんだ」

トーストの香ばしい匂いがたち込めたリビングに雅和の怒号が飛んだ。

今にも飛び掛つてしまひうな勢いの雅和に母は身を挺して前に立ち塞がつた。

「マーちゃんもつ止め、もつよしおしょ！」

父は自分で挽いた「コーヒー豆を感情を剥き出しに床に呑みつけた。  
そしてそれつきり一度と家には戻らなかつた。

## 11 愛はかげる

節分寒波も過ぎて少しずつ寒さも緩み始めていた。  
朝晩はまだまだ寒さが厳しかったが日中の日差しに春の到来を感じていた。

佐知は仕事に没頭し雅和の連絡を待ち続けていた。  
その日は山のように積まれたカルテの整理に追われていた。

「すみません」

「はい、少々お待ちになつてくださいね」

「雅和を上げるとそこに雅和の姿があつた。

「雅和がいたの、いつ戻ってきたの」

「佐知の顔が見たくて駅から真っ直ぐここへきたんだ」

「今日は残業なの、遅くなるけどいい?」

「無理しなくていいよ

顔を見れただけでいいんだから  
佐知の時間のある時、ゆっくり会おう

「ええ、ごめんね」

「じゃあ、また連絡する」

肩を落とし帰つていく雅和の後姿は静止したモノクロ写真のよう  
だった。

それきり音沙汰のなかつた雅和から突然の電話がはいつた。

「すべてが決着したから会おつ  
詳しい事はその時に話すよ」

雅和のか細い声が喉に突き刺さつた小骨のように引っかかっていた。

お気に入りの水色のスプリングコートで約束の場所へと急いでいた。

「さち～」

道を挟んだ歩道に大きく手を振る雅和がいた

だれかに似ている

確かにこんな風に歩いてくる人どこかで見たような・・・

雅和は行きかう車を避けながら佐知のいる歩道に駆けてきた。

「この前は仕事の邪魔して悪かつたね」

「いいの、会いたかったからうれしかつたわ」

「おれも会いたかった」

目と目を交わすだけで気持ちは通じ合えた。  
もう一人に会話など必要なかつた。

ホテルの一室で灼熱の肌を重ね合わせた。  
久しぶりの触れあいに充たされた二人だつた。

「ねえ雅和、会えなかつたわけを話して  
何があつたのか聞かせてくれる」

「ああそうだね

実は俺の両親ずっと別居しててや  
去年の終わり頃、突然母さんが親父に帰ってきて貰おうと連絡出  
したんだ

俺は反対というか気乗りしなかつた・・・  
上手くいかないことは分っていたからね

でも母さんがあんまりしつこく言うから俺、仕方なく親父に伝え  
たよ  
いつもなら固辞する親父がどうこういふ心境の変化なんかすんなりOKしたんだ

「それで一件落着、上手くいったのね」

「いいや、出て行つた」

「出ていったって誰が」

「おれが親父を追い出したんだ  
あいつ出ていったんだ」

「あいつなんて言い方おかしいわ お父さんどうしよ」

「いいんだよ、あいつで

あいつは母さんを殴つたんだ  
口で勝てず、分が悪くなるとすぐ手を出す  
あいつはいつもやうなんだ

「ひどいわ 女に手をあげるなんて最低ね」

「やう思ひだらけ」

「どうして愛する人をぶつたり出来るのかしら」

「あいつは母さんの事なんかどうでもいいんだよ  
母さんの田の色 好きな色 好きな曲 ほくろ 癡  
何十年も夫婦なのにあいつは母さんの事なに一つ知らないんだ  
悲しくなるだらう・母さんはそれが悲しいんだ  
親父の言つ愛じゃない愛がほしいんだ  
母さんはその愛をずっと待ってるんだ」

母親を支え守ってきた雅和だからこそ怒りと憎しみをぶつけ許せ  
ないのだと胸が痛んだ。

「大学もあと少しで卒業だし母さんには俺がついてる  
だからあいつはいらっしゃらない もついらっしゃないんだ」

「お父さんと家族でもう一度話せないの  
もう一度うまく出来ないの」

「もう終わったんだよ  
気に入らないと手を出すような男と話し合つ価値なんてない  
親父の言う権力やお金、それが何だつて言つんだ  
人として駄目な奴はただのクズ人間だ  
親父は人間失格なんだ」

「もうやめましょ

お父さんをそんな風に言つたの」

「『めん親父の話になると俺いつもいつもなんだ  
母さんにも佐知と同じこと言われたよ』

「」両親、本当にこのままでいいの」

「母さんはあんな親父でも夫婦でいたいんだよ  
俺が母さんを助けるから別れてしまえって言つても絶対首を縊にはしない

母さんの親父に対する気持ちは俺とは違つて分かつたんだ  
親父をまだ愛しているんだってね  
あんな親父でも今も気持ちは変わっていない

愛しているんだ

ひどい目に何度もあつてるのに何で未だ愛せるのか俺には分から  
ないよ

人つて夫婦つて複雑すぎるよ

「そうね、大人の世界はまだ私達には分からぬわね  
まして夫婦の事は一人以外には到底理解できないのかもしそれない  
雅和、もうそつとしてあげましょう  
いずれ結果は必ず出るわ  
始まりの後には終わりがあるようにな  
でもどんな終わりでもそれを決めるのは雅和じゃないわ  
そうでしょ」

「佐知のいうとおりかもな  
母さんの人生は母さんのものだ  
母さんは俺の母さんだけど人生は俺のものじやない  
俺もう・・・何も言わないよ」

無言になつた雅和を見つめ佇む佐知の目は潤んでいた。

翌日吹つ切れたような茶目つけを見せ雅和は電車を待っていた。

「佐知、いろいろサンキュー又、会おつか」

「うん、楽しかったわ またね」

佐知はこの時まで柳木沢をすっかり忘れていた。雅和が去ると胸にまたぽつかり空洞が出来た。

引き出しの奥底から柳木沢のメモを引っ張り出していた。吸い寄せられるように好かない柳木沢の携帯番号を押した。

「もしもし、皆井です」

「オオ久しぶりだな 元気にしていたか」

「はい お忙しいと思いますがお時間は取れますか」

「ああ、君のための時間ならたっぷり取れるぞ」

紙の刷れるような音がして少し間があった。

「土曜日、君はいつも土曜日指定だったな  
次の土曜なら・・それでいいね  
ホテルの部屋に着なさい、待ってるから」

「ありがとうございます それでは土曜日伺います」

土曜の午後、ホテルに向かう佐知の姿があった。

手にしているのは以前、柳木沢のために買い求め渡せなかつたシフォンケーキ。

佐知は眩しいガラス張りの高層のホテルを見上げた。  
そこは雅和とクリスマスを過ごしたホテルだつた。

そして今、柳木沢の常宿となつてゐるホテルを前に不思議な縁を感じていた。

フロントが告げた部屋番号はあまりに奇妙なえにしで鳥肌がたつた。

1102号室

雅和と過ごした同じ部屋の前での時とは違つ心拍の高鳴りに襲われていた。

ドアの向こうには魔物が住んでいるような気がした。

控えめにノックしたドアが開いた。

顔を見せた柳木沢の扱けていた頬は少し膨らみ体調も良さげだつた。

「お顔の色っこですね 安心しました」

「君だけだな、僕のこと心配してくれるのか」

「又そんなこと・・・こなませんよ

一番心配してこのねのは」家族ですから」

「いいや、もう僕に家族はいないんだ」

「え、どうこいつ意味でおっしゃってこぬのですか

「共に生活し気持ちを共有していく過程で形をなしていく  
それを家族といつのならば僕にその家族は存在しない」

「おっしゃつてる意味が」

「家族を捨てた、いや棄てられたんだよ家族にね  
いまは君だけが僕をわかつてくれる唯一の存在なんだ  
だから・・君と会うのがたまらなく嬉しいんだろう」

「柳木沢さんはそれで本当にそれでいいのですか」

「僕は一人でしか生きらない男なんだ  
向き合ってくれるのは仕事上の人間だけだ  
まア上辺だけだがね

自分の事は僕自身がよくわかつて  
いる  
僕は決して裸の王様だとは思つてい  
ない」

「わかつていらつしゃるのなら、なぜ」

「自分を否定する事は築いてきたもの全部が偽りだつた事になる  
そう思つただけで喪失感に身体が震えてくる」

「なぜ、『自分を否定なさるうとするのですか  
自分でなく柳木沢さんの醜惡を否定なさればいいじゃないですか  
柳木沢さんはもつと楽に生きられてもいいと思います』

「君は僕に心身脱落の教えを説いているのか」

「いえそんなつもりは・・・

私は周りからおばあちゃん臭い変わった人ねつてよく言われます  
両親は働いていましたから祖父母が親以上の愛情で育てくれま  
した

私の口から出る言葉は今はいない祖父母の教え、そう思つていま  
す」

「君は多くの善人に守られ大切に育てられてきたようだな」

佐知はその後も幾度も柳木沢と会つた。

柳木沢と佐知の会話はいつも禅問答のようだった。

二人は前世でもこんな会話をしたような血の通つた親近感を感じはじめていた。

二人の在るときの会話はこのよつたものだった。

<柳木沢>

僕の人生、先はもう長くはない  
このまま自分という人間が完成されぬまま  
朽ちていくのかと思うと堪らないね

<佐知>

人は死ぬまで未完でいい思います  
完成品はそこで終わりでしょ  
でも未完ならば何度も好きなように変えて行けますよ

そしてまた在るときは

<柳木沢>

君の言つように楽に生きて行けたらどんなにいいだろ? な  
しかしそれがなかなかむずかしいんだ

<佐知>

人生は自分が決める・心が決める  
そんな言葉と出合つた一時期わたし真剣に自分と向きあつたんです  
そしたらどうでもいいことに囚われていた自分に気づいて少しだ  
けど楽になれました

そしてまた

<柳木沢>

家族といつもの扱いにくいものだな  
僕の言うことなんかだれも聞こうとはしない  
聞いてはくれないよ

<佐知>

昔、わがままだった私に祖母が言いました  
相手に何かを望むのならあなたも相手の望みをちゃんと聞かなくて  
はだめだって

柳木沢は佐知との度重なる親睦をきっかけに自分の過ちを受け入れるようになつていた。

「君は、年下の師匠だな

君は僕に多くの知らない事、興味のなかつた事を気づかせ  
そして何より感動をくれた君は年下の大切な友人だ ありがとう  
皆井くん」

## 12 愛はかける？

桜の開花予想もきこえジャケットを小脇に町行く人が増えていた。

この日、柳木沢は自宅に戻っていた。

妻と話をするため、いや頭を下げにきていた。

どんな結末になろうと自分の心に決着をつけようとしていた。  
自分の過ちに頭を下げ詫びる覚悟だった。

「美紗子、すまなかつた 申し訳ない」

深く頭を垂れ言葉を続けた。

「やつと僕は過ちに気づき自身を責め後悔もした  
今日はそれを君に伝えたってきた  
そして僕の正直な心を君にわかつて欲しいと思つた」

美紗子は感慨深いものが込み上げていた。

「私に頭を下げる下さるなんてもうそれだけで胸が一杯、もう十分  
です」

「美紗子今日は許しを請つためだけにきたんじゃない

僕はどんなことがあらうと君にしたすべての限りを償わなければ

と思っている

でなければ僕は悔いを残し人生の幕を閉じることになる

だがそれは僕が望むことではない

だから美紗子、償わせてほしいんだ

お願ひだもう一度僕にチャンスをくれないか」

美紗子の硬直した肩が解けていった。

「あなた、本当にお変わりになつたのね」

「嗚呼・・これまでの醜惡のすべてを受け入れた時見えないものが  
見えてきたんだよ

君の人生を軽んじ縛りつけ蔑ろにしてきた

そして自分の事ばかりを押し付け君の声に耳を貸すこともなく夫  
として失格だった」

「もう何もおっしゃらないで下さい

私はあなたの妻です これからもずっと変わらず

いつかきっと必ずわかつてくれる信じ待ちました

私たちはこの世で選ばれ出会い深い契りを交わし夫婦になつた。  
そうでしょう

私達は神に導かれ夫婦になれたのですもの死ぬまで夫婦ですよね

「本当にすまなかつた

僕は一人で人生を突っ走つてきた

君という大切なパートナーを置き去りにして走り続けていた」

「あなたは差し伸べた私の手を繋ぎ忘れ一人で走り出した

私たち夫婦なのに可笑しいわね

気がつけば一人とも一人ぼっちだつたなんて哀しそりますね」

「ああ、そのようだ

君も僕も・・ひとり・・だつたね」

それつきり、二人は言葉にならなかつた。

口を真一文字にした柳木沢の目からキラリ光るものが零れていた。

雅和が父と母の夫婦関係の修復を知ったのは桜が満開に花咲く頃  
だった。

単位も無事修得した雅和は故郷行きの電車に揺られていた。

佐知はこれといって変わりばえしない日々を淡々と送っていた。  
ご無沙汰だつた柳木沢から久しぶりのメールが入つてきた。

／ホテル住まいに終止符を打ち妻と一人再出発を始めた  
君のおかげだ ありがとう

家の電話番号を知らせてくれ

またお会いしよう 次回は自慢の妻も同伴で

何者かにとりつかれたように配慮もお構い無しで電話をかけていた。

「もしもし…

あのう、柳木沢さんはいらっしゃいますでしょうか」

「失礼ですがどちら様でしょう？」

「あつ申し訳ございません

私、皆井佐知といつものです」

「あら皆井さんって、主人が話してくれた可愛い年下の皆井さんかしら」

「あ、はい」

「お待ちになつてすぐに呼んできますから」

柳木沢の妻の柔かい声が耳から離れなかつた。

たつた一言、三姉のやつとりから円満な夫婦関係が読んで取れた。

「あなた、可愛いガールフレンドから電話ですよ」

居間の子機を握り照れ笑いの柳木沢は足早に部屋を出ていった。

電話の向うの柳木沢はいつも以上に饒舌だった。

佐知は柳木沢と家族の新たな旅立ちにエールを送っていた。携帯を切ると緊張が安堵に変わり全身の力が抜けていった。

100m走を全力で駆け抜けた後のように大の字で天井を仰いでいた。

「母さん、親父に女から電話だつて」

「やあね、そんなんじゃないわよ

お父様が通つている病院にお勤めしてゐるお嬢さんですよ」

「物好きな女もいるんだな」

「失礼よそんな言い方、彼女はお父様の恩人なんですからね  
此處でうまく生活が出来てるのは彼女のおかげなんですって  
彼女との出会いで俺は変わった、そう云つて笑っていたわ」

「へえ、それでどんな人　名前は聞いた？」

「ええ、確か、みないさんて言つたかしり」

「母ちゃん、もう一度聞ひし」

「確か・・みない　わちさん」

「・・・・・」

「機嫌な柳木沢が戻ってきた。

「雅和、もう部屋に行くのか」

「う・うん　ああ・・」

雅和は自分の部屋で見つめた自分の拳を力いっぱい壁にぶつけた。  
何度も何度もぶつけた壁が赤く染まっていた。

痛かつた涙が出るほど痛かつた  
雅和の心の痛みだつた

嘘だろ？嘘に決まってるよな なにかの間違いだよ  
絶対・・・間違いに決まってる

### 13 愛はかけるつ?

久しぶりの「テートだ」というのにわざから雅和の顔ばかり窺がっていた。

いつと違う雅和の般若のような表情に寒氣と震えが止まらなかつた。

何を話してもあ・うんしか言わない雅和にとうとう痺れを切らしていた。

「今日はご機嫌が悪いのかな  
また日を改めて別の日にしましょうか」

言葉を遮り佐知を店から連れ出した。  
無言のまま腕をつかまれながら歩いていた。

辿り着いたのはクリスマスを過ごしたホテルだった。

1102号室の椅子に寡黙な一人は向き合って座つていた。

ただならぬ空氣の部屋にやはりここには魔物が住んでいると武者震いした。

口火を切ったのは雅和だった。

「君なのか、さちといふ名の女は  
親父の密会相手の女は君なのか」

「急に何を言い出すの

雅和のお父さんとは面識もないのよ」

「じゃあ、柳木沢という男とは面識があるだろ？」

「私が知ってる柳木沢さんと雅和が知っている人が同じなら

「君の知っている柳木沢は俺の親父だ」

「・・・だつて雅和の苗字は井川でしょ」

「ああ、親父は母さんの家に入った婿なんだ  
親父は外では旧姓の柳木沢で通している

これで分かつたろ

柳木沢は俺の親父で君が密会していた男なんだ」

「まつて、密会だなんて

「私と柳木沢さんは雅和が思つているようなお付き合いじゃないわ、  
信じて」

「君と親父はホテルで会つてたんだぞ  
何でもない相手とホテルで会うなんてどう考へても普通じゃないよ

「誰だつておかしいと思つよ」

「何と言われても私は雅和を裏切るような事はしていない  
それだけは信じて

柳木沢さんは精神の繋がり・・同志と云つのか・・・  
上手く伝えられなくてごめんなさい  
でも雅和の思つてこいるような事は絶対ないわ、それだけは信じて

「精神の繋がりを持つてこられたらもうつきついよ  
精神の繋がりというのならそれは簡単には切れないって事だから  
ね」

「何を言つてこいるの、全く理解出来ないわ  
雅和は・・お父さんに嫉妬しているんだわ」

「そんなんじやない

俺の知らないところで君は親父と会つた  
それが・・そんな君が許せないんだ  
俺が東京に戻つた後も君は親父と会つてこいたそれも頻繁に・・  
親父の手帳を偶然目に見て知つてしまつたんだ  
皆井佐知、スケジュール表の土曜日は君の名前で埋まつていた  
信じられなくって体が震えた」

「ごめんなさい誤ります、でもこれだけは聞いて、

柳木沢さんはあなたのお父さんは病院長の知り合いで病院の患者

さんの一人だった

まさか雅和のお父さんだなんて本当に知らなかつたのよ」

「知つていたら君は親父と付き合ひを止めていたとでも言つてしまつたか」

「雅和は誤解しているのよ

私の中の雅和と柳木沢さんは違うの  
出会つた頃、柳木沢さんは苦しんでいた  
家庭の事や自分の人生を顧みて悩んでいたの  
そんな柳木沢さんを・・寂しそうな柳木沢さんを放つて置けなか  
つた

会つてお話するそれだけでお元気になられる柳木沢さんの姿が嬉  
しかつた

本当にそれだけ・・それだけなの信じて」

「この部屋で俺は佐知と初めてのクリスマスを過ぐした  
同じこの部屋に親父が滞在しそこに君は躊躇もせず足を運んでいた  
それを俺にどう理解しろって言つんだ」

「ホテルで会つたのは本当に軽率だったわ、『ごめんなさい』

「君は知らないよね、この部屋の番号が僕の誕生日だつて事

11月02日で1102号室

俺は迷わずこの部屋を予約したんだ

君とのクリスマスを忘れずにいたかったから  
なのに君は同じこの部屋で親父とも会っていた  
この事実をそうだったのかなんて受け止められるわけないだろう  
君は俺がそんなお人よしだと思ったのか

「ごめんなさい、本当にごめんなさい  
疚しい事は何一つないのに誤るのは不本意だけど  
雅和の気持ちがわかるから痛いほど伝わったから謝ります  
私の軽薄な行動で大切なクリスマスを台無しにしてしまった  
何も知らず気付かないでごめんなさい、本当にごめんなさい」

雅和の気持ちが佐知のそれよりも数倍も濃くて深いと知った。  
あふれる涙を止められなかつた。

「泣いてごまかすのは女の特権だつて言うからな  
俺はその手で何度も痛い目にあつてきたんだ」

もう限界だつた・・・

佐知が冷静さを保ち続けたのはここまでだつた。

「もうやめて、信じて貰おうなんでもう思わないからもういい  
もう何も言わないで、私を許せないって事がよく分かつたから  
これ以上憎しみをぶつけないで、雅和を嫌いになりたくない  
ずっと・・・好きなままでいたいの」

「いい加減にしてくれ

さつきから自分勝手なことばかり・・・

俺はこれでも堪えているんだ 泣きたいのは俺の方なんだ」

肩掛けバッグを掴むとドアを蹴り部屋を飛び出していった。ドアが閉まる音だけが無常に響きわたつた。

佐知は身を起こし雅和の座っていた椅子に手を翳していた。仄かに残つた雅和の温もりにまた涙が溢れ落ちた。

大好きな匂いが怒りの残り香となり部屋中を漂い佐知をいつそう責め立てた。

愛しい香りは切ない香りに匂いを変えた。

いつまでも漂う残り香が悲しみを深くしていた。

雅和の携帯は繋がらなくなつていた。

「お掛けになつた携帯電話は現在つかわれて・・・」

アナウンスだけが無常に流れ続けた。

「もうだめ、今は何も云わりそうにない」

生彩をなくし放心の日々を送る佐知はこの日々躊躇もせず雅和の名前を削除した。

就床した耳<sup>元</sup>でかすかな携帯の音がしていた。  
ずっと鳴ることを忘れていた携帯の音だった。

跳ね起きて掘んだ携帯に真砂子の名前が見えた。

「こんなときに間が悪すぎるよ・・・」

拒否する旨を宥めながらボタンを押した。

「佐知、寝てた」

テンションの高い透き通る声は今の佐知には不釣合だった。

「どうしたの、うそな遅く」

「ああ、ちよつと気になることがある」

「なあ」

「さあ、雅和と喧嘩でもした」

「どうして・・・雅和が何か言ってた

「ううん、別に何も

最近、佐知の話題になると知らないの一点張りで  
それに急に遊び出すなんて変でしょ  
それが前よりも断然ヤバイツテ感じ」

「そう・・でも大丈夫、何もないから」

「じゃいいけど何かあつたら相談に乗るから言つてよね」

「心配してくれてありがとう、おやすみ真砂子」

雅和は心のないまま女を抱く生活に戻っていた。  
佐知が嫌う許せない男の一人になっていた。

「頑張つて変わつてみせる・佐知のためにかわつてみせる」

雅和の心を私だけのものと信じ疑いもしなかつたのは幻想だった。  
男と女の関係に絶大なる保証など何一つないことを知り落胆して  
いた。

未だ覚めやらぬ体の火照りだけを残し去つて行つた雅和を憎くさえ思ひ始めていた。

すべては自分のせいと責める時もう一人がそれを制止していた。

「佐知は悪いことをしたの・それは本当に悪いことな」

雅和が許せないのはホテルの同じ部屋で父・柳木沢と会っていた事。

それが雅和を傷つけた原因だつたとすればその罪は受けよう。

しかし柳木沢と出会つたことがそんなに責められる罪に値するのだろうか。

神の悪戯としか思えない偶然の出来事に翻弄されていた。

毎夜ベッドの上で堂々巡りを繰り返し眠れぬ夜が続いていた。

連日の残業と心労がたたつたのか

佐知は何年かぶりの高熱をだし床についていた。

高熱はすぐに引いたが微熱が残り簡単に病状は好転してくれなかつた。

「知恵熱にしてはどうが立ちすぎてるけどなあ

家族の笑いの種になつていた。

佐知は長引く熱で長い欠勤となり不甲斐なさを痛感していた。

何も考えず病状に身を任たのが功を奏したのか愁色はすっかり消え失せていた。

体と心がすつきりすると頭も冴え渡り雷雨の後の晴天のように爽快な気分に戻つていた。

仕事に復帰し体調も万全になると幼少の頃のよろに自宅の本を片端から読みあさっていた。

幼少の頃の一番の友達は本だった。

嫌なことがあっても本を読むとその時だけはすべてを忘れ許せていた。

成長した今もその記憶を体が覚えていた。

何ヶ月ぶりかで手にした祖父の古書の一説に目が留まつた。

／急ぐなれ、ただその乱れたる呼吸を整えよ  
天の時におのずから動くを解するの機あるべし／

今は余計なことは考えず目の前のことだけにしつかり取りくもう  
そして動くべき時自然と動ける様にその時を待とう  
その時はきっと来るはず

亡き祖父に背中を押されたような気がして嬉しくなつた。

あれから柳木沢からの連絡はずつと途絶えたままだつた。  
「もう、会えない」泣く泣く気持ちを断ち切つていた。

雅和を失い心が萎えた時、いつも浮かぶは柳木沢の姿だつた。  
どんなに会いたくとも今はそれも叶わぬ願いであった。

あれから人の残業まで一気に引き受け自分を無にして働いていた。

柳木沢は静岡に事務所を構えたとかで病院に顔を見せることが一度となかった。

仕事から戻るとひたすら空腹を満たし家族のそばでいつものように休息を取った。

疲れ果てた体は眠りを求め佐知を自然にベッドに導いてくれた。

そんな日常を淡々と繰り返し、動くを解するの機会を待っていた。

## 14 愛はかける？

雅和はネオン街のスナックで仲間の輪から一人外れ座っていた。

「雅和はやく、早く」ひちに来いよ

「なにを言つても無駄よ、今は放つておくのが一番なの」

仲間を連れ出した張本人が一人片隅で酒を煽り毎度見知らぬ女と姿を消す。

そんな雅和に、とうとう真砂子の堪忍袋が切れた。

雅和の隣にはファッショントマトから抜け出したような飛び切りの女が立っていた。

「雅和ちょっと待つて、その人、雅和の何な  
知り合いだつたら皆に紹介してよ  
ねエ彼女、この男とここではじめて会つたのならやめたほうがい  
いよ  
いつもこんなこと繰り返している最低男だからさ  
悪いけど、今日は一人で帰つてくれない」

女は髪をかき上げながら真砂子と雅和をひと睨みして出て行つた。  
雅和は苦虫を潰した顔を見せ無言で真砂子を睨みつけた。

「・・・・・」

「言いたい事あるなら言いなさいよ

何があつたかは聞かないけどさ、最近の雅和おかしいよ」

「うわわわ、お前は女の癖に生意氣なんだ

何にでも出しあげってきて、ほんと、うわこんだよ」

雅和の両手が真砂子の肩に重く押し掛けた。

真砂子はそのまま押されて壁に挟まれ動けなくなっていた。

「離して、痛いじゃないのよ」

雅和の手は緩めるどころか力が入り真砂子を苦しめてきた。

「謝れ、一度と俺に偉そつな口叩くな」

怖くなつた真砂子は甲高い悲鳴にも似た声を上げていた。

「やめてえ、女に暴力をふるつもりなの

早くその手を離してよ、離しなさいってばあー

仲間達はただならぬ真砂子の声に血相を変え飛んできた。  
必死で抑えていた龍一の拳が雅和の頬を殴り飛ばした。

「雅和、帰れ、今日はもう家に帰つてくれ  
一人になつてよく考えるんだな、今のお前には孤独が必要だ  
暫らく俺達の前に顔を出さないでくれ  
何を苦しんでいるかわからぬいけど答えが見つかつたら会おうぜ  
俺たち待つてるからな、雅和」

あれから一週間、龍一たち仲間と会えない雅和はひとり悶々と過  
ごしていた。

そんな時、柳木沢が突然に雅和のマンショնに顔を見せた。  
一室で父と子が顔を突き合わせ会話がないのは実に息が詰まるも  
のだった。

柳木沢は雅和を上京のたびにお世話になる割烹すし屋に連れ出した。

割腹のいい客慣れした笑顔の女将に通されて一人は個室に入った。  
「少し痩せたようだが食事はとつているのか

「ああ、大丈夫 ちゃんと食べてるから

「母さんが心配してるぞ

電話がブツツリ途絶えて繋がらないって

病気や事故にあつてたらとそればかりを気にしてな

それで様子を見てきてくれと尻を叩かれて来たんだよ

母さんの命令だから今口は我慢して付き合ってくれ、頼むよ雅和

雅和は迷惑そうな顔をしながらも素直にコクンと頷いていた。

「考えてみると僕もお前の年頃はいろんな事があったな」

「コップにビールを注ぐ柳木沢の日は穏やかで嬉しそうだった。

「まあ、どんなことが起きても自分を救うのは自分でしかない  
しかし時に、その答えを導き手助けしてくれる苦労人が必要な時  
もある」

「苦労人、なにそれ」

「苦労人のことか？」

「手助けをしてくれる人を総称して私が名づけたんだ  
悲しみ・苦しみ・痛みを体感し尊い涙をたくさん流した人  
そんな人こそが真から人を支え救ってくれるんだよ」

「今時、そんなしょうな人間が居るとは思えないよ  
もし居たとしても探し出すには骨が折れそうだな」

「いや、いる  
神は救いを見出す出会いを必ず与えて下さる  
雅和、少し長くなるが話を聞いてくれるか」

チンパンカンパンな話に雅和の顔は渋柿を喰らつたようになつて  
いた。

「僕は家を出てから病院に通うよくなつた  
安定剤を飲みながら仕事は何とかこなしていた  
人間というものは弱いものだいや、本来人間は強いものらしいがあの頃の僕は弱さを隠すために意味もない虚勢を張り続けてきた  
弱さゆえ、むやみに吠えては人を威圧して生きてきたんだ

病気になつたのはそのつけが廻つたせいだろう  
自分の軌跡に自身安危になつて眠れなくなつていた

そんな時・・一人の女性と出会つた

その女性は僕よりもずっと年若い娘でそう、お前と同じ年代だった  
僕はすぐに好感を持つたが彼女は好いてはくれなかつた  
いや完全に嫌われていたな まあ、無理もなかろう  
自分勝手で家庭を顧みない出鱈目な生活をしていたのだからな  
しかし彼女はそんな僕を一人にはしておけないと気遣つてくれた

彼女が繰り返し口にして言つた言葉がある

／家族こそが一番の癒しで家庭こそが安らぎの場／

熱く語る彼女を理想的な家庭に育てられた幸せな娘と疑いもしなかつた

後に彼女の生い立ちを知り僕は愕然としたよ

彼女は両親を早くに亡くし孤児院で育てられ今の家族に引き取られた

どんなにか辛い思いをしてきたことだろう

誰より沢山の涙を流し小さい体で堪えてきたんだろうな  
だから彼女は大人の心情をすばやく読んでとり気遣うすべを持っていたんだと納得したよ

「その人がおやじの苦労人なのか」

「ああそりゃ、彼女のおかげで自分と人生を取り戻せたんだ」

「親父の言う苦労人って、皆井佐知つて名前じゃないのか」

「どうしてお前が彼女の名前を」

「彼女は・・彼女は俺の恋人だった、もう別れたけど」

「別れた、なぜ・・彼女ほどの女性が又現れるとは思えないが

「ああ、俺もそう思つよ」

「なら、なぜ」

お前のせいだ、お前の・・・  
喉から出そうになつた言葉を飲み込んでいた。

「俺の話はもういいだろ

今日は親父の話を聞いてるんだからさ

「雅和お前も所詮、僕と同じだな」

「一緒にするなよ

「お前は彼女をしつかり見たことがあるのか  
理解しようと努力したのか、その結果の別れならもう何も言つま  
い」

「俺は親父とは違つ、違つんだ」

「ああ、その通りだ  
お前は母さんの一番の理解者で僕に代わり母さんを守ってくれた  
雅和、お前はそういう男だ 僕とは違う  
怒らせて悪かつたな、許してくれ」

雅和は頭を下げた父の手にお猪口を握らせ酒をついだ。  
柳木沢は注がれた酒をゴクリと喉を鳴らし飲み乾した。

男一人が一人の女に思いを巡らす夜となつた。

## 15 一人は大切な男（ひと）

雅和との出会いから一年が経とうとしていた。

夏祭りが近づくとせっかく膨らみかけた心が又萎みそうになつた。父の話は祭り一色になり茶の間への足が遠のいていた。

雅和と柳木沢の間で自分の存在が炙り出された事など知らず部屋に籠り本を読む日々だった。

就職の内定をもらつた雅和は父母のいる静岡に向つていた。  
父・柳木沢の助手ならぬ社会勉強のつもりだった。

二人の間には歩み寄りも生まれ傍目には仲のよい父子に見えた。

その日は朝からやけに蒸す異常な暑さだった。

雅和は事務所兼自宅のソファーアにもたれ渴たるそつにしていた。

「ドスン」

一階の事務所付近からの鈍い音が二階に昇つてきた。  
何事かと気だるい身体を起こし階下に降りていった。

倒れている父を見つけた雅和は思わず狂乱の声を上げていた。

「親父、どうしたんだ

大丈夫か返事しろよ、おやじ返事してくれよ

誰か早くきてくれ、誰も居ないのか  
母さん、母さん早く救急車呼んでくれ」

口から血を流した柳木沢は蠍人形のように横たわっていた。  
反応のない蒼白な父の傍らで手を握り救急車を待つた。

雅和は病院の椅子に座り緊急手術になつた父を待ち続けていた。

看護婦に促され手術室の前の椅子に移動するとまもなくして手術室のランプが消えた。

出てきた柳木沢の体には幾重に管が繋がれて予断ならぬ病状を察することができた。

執刀医が厳しい顔で現れた。

「後ほど私の処に来てください」

母子は前を見据えどんな結果も受け入れようとしていた。

つす鼠色に変色したシユーズを履いた看護婦がやつてきた。

「患者さんが戻るにはまだ時間がかかりますがこのままお待ちになりますか」

「はい、そうさせてください」

「戻られても今日はお話は出来ませんよ」

「それでも、一田顔を見て帰りたいのです」

「わかりました。ではもう暫らくお待ちになつて下さい」

時計の長針が2度回転しても柳木沢は戻らなかつた。  
雅和は医師との会話を思い出していた。

「出血は止めましたので」安心げださい  
ただ付近に幾つかの腫瘍がみられました  
これは、だいぶ以前からのものと思われます  
「主人はどこの病院に通わっていたのではないですか」

「はい、安定剤をもらつて飲んでいたと聞いた事があります」

「ではその時に病氣の事も分かつておられたのかもしけませんね」

「それは、どうこう」とぞしょつか

「主人は延命は不要だと仰いました」

「おやじは命の宣告をされていた?」

「きっとそうでしょう

出なければ病院にも行かずあんな体でいられる筈がありません」

ベッドの横の丸椅子に座り雅和は思いに耽っていた。

病院通いをしていた親父はすでに余命を告げられていた  
だから親父は母からの復縁をあんなにすんなりと承諾したのか  
一人でこんなに大きな荷物を背負い、誰にも言わず苦しんでいた  
のか

家庭に戻り家族と過ごしていくも尚ひとり孤独に耐えていたのか  
手を合わせ天を仰ぎ見る母の頬に涙の糸がくつきり浮かんでいた。  
母の側に歩み寄りその手を包むように強く握り締めた。

母子は戻つて来た柳木沢に顔を寄せ生命の呼吸を確認していた。  
胸元の上下する脹らみに安堵し病院を後にした。

自宅に戻った母は血で染まっていた事務所の床を拭いていた。  
気がつけば1時間以上拭き続けていた。

小刻みに揺れている後ろ姿から涙している様子が伝わってきた。  
放心状態の母の腕を掴み上げしつかり抱きかかえた。

「マーちゃん」

「母さん、もうきれいになつてるよ」

「ここにあつた血をふき取つたら  
生きていた証・・命までを消してしまつたよつなかがして  
あの人命に限りがあるなんて・・・  
私を置いてまた行つてしまつなくてひやがるわ

「もういい 何も言わないでいいよ母さん  
親父は生きている ずっとこれからも大丈夫だ」

「ハハハハ・・・

母は堪えていた涙を止めよつともせず父の名を呼び泣き続けた。

母さんは誰よりも親父を愛していたんだな・・・  
母を抱きしめる雅和も溢れ出る涙を隠そつとしなかつた。

雅和は勝手のわからぬ事務所に毎日顔を出していった。  
古くからのスタッフに細やかな気遣いを見せ労つていた。

母に看護の疲れが見て取れると自分から付き添いを申し出た。

「母さん、行ってくるよ お昼また電話するからね

「ありがとうございます、ちやん、お父様をお願いしますね」

病室の父の体調は相変わらずでつらそうだった。

「親父、つらくないか

「ああ、大丈夫……だ」

「ならない 何かあつたら言つてくれよ」

「なあ雅和……

皆井くんの事だがやはり僕は言わずにいられないんだ  
彼女との事をもう一度、考えてくれないか  
もう一度、彼女と向き合いかつてやれないか

母さんとつまみいかなかつたのは理解してあげられなかつたからだ  
でもやり直せる、僕と母さんのように愛は戻る  
お前と彼女ならきっとやり直せる、愛を取り戻せる筈だ」

「俺と佐知は別れたんだ  
もう終わったことなんだ  
親父は今、人の心配してる時じゃないだろ  
早く元気になって母さんを安心させてくれよ」

「ああそうだな  
でも僕は、いや父さんの命はもう長くはない  
母さんの事はお前がいるから大丈夫だ、頼んだぞ  
雅和、お前が父さんの子でよかつたよ  
僕の息子に生まれてくれて・・・本当にありがと」

「何、弱気な」と言つてんだ そんなことじゃ病気に勝てないんだぞ  
母さんの代わりなんていないんだ 親父でなけりやだめなんだ  
母さんの気持ちは親父が一番分かってるだろ?」

「嗚呼、よく分かっている  
でも雅和、父さんは病氣に負けた 勝てなかつた」

柳木沢は堰を切ったように男泣きしその嗚咽はいつまでも止まなかつた。

初めて見せた父の人間らしい姿に驚愕し震えた。

大粒の涙を腕で拭うと雅和は歯噛みをして病室を飛び出していった。

「親子なのに何一つましな言葉もかけてやれなかつた・・・」

自分が情けなくて悔しかつた。

屋上のコンクリートに膝を抱えしゃがみ頭をうな垂れていた。

佐知に会いたい雅和は素直にそう思つた。

「あ・ちい・・」

救いを求め佐知の名を呼び続けていた。

祭りの賑わいも消え町には静寂が返ってきた。

秋分を過ぎると寝苦しさからも開放され久々の心地よい眠りを感じていた。

佐知は職場の仲間に誘われ久しぶりのカラオケで盛り上がり始めた。

余韻覚めやらぬまま帰宅すると綺麗に置かれた洗濯物の上に手紙が置いてあつた。

名前だけ印字された白い封書は誰かの手で自宅のポストに投函されたのだろう。

おそるおそるペーパーナイフで封をきつた。

手紙を開くと柳木沢が差出人であることがすぐにわかつた。

右上がりの文字、この特徴は間違いない柳木沢の筆跡だった。

/皆井くん

これが感謝をこめて君に送る

僕からの最初で最後の手紙になるだろう

君が現れて僕は人生を取り戻せた

一度死んで生まれ変わったそんな心境だった

妻との再出発の日々は長く連れ添つた夫婦に匹敵するほど愛に満ち幸せなものだった

君のお陰でもう何も思い残すことなく人生の幕を降ろせそうだ

ただ君と雅和が恋仲だった事そして別れた事を聞かされた時は驚いたよ

しかしそれも人生・・自分の結末さえ予測出来ないのが人生だからお互いを必要とするならばきっと会える、僕と妻のように

君には誰よりも幸せになつてほしい、いやならなくてはいけない  
君の人生はまだまだ長く果てしなく続く  
だが人生は否応無しに過ぎ去りしていくものだ  
だから自分の人生を大切に愛してあげなさい

これからも苦しみ・悲しみあらゆる困難が天から降り落ちてくる  
だろう

しかしその後、倍になつて必ず幸せが降り注ぐ事を忘れてはいけないよ

僕は天から君を見守り続けるとしよう

君がこの手紙を手にするときすでに僕は天に召されているのだからね

僕は人生に負けたんじゃない、病に勝てなかつたそれだけ・何れにせよ負けは負けだな

皆井くん、さよならは言わない・またいつかどこかで 柳木沢/

手紙を顔に押し当て涙を隠し声を押し殺し泣いた。

豪快に笑う柳木沢我儘で傲慢なそれでいて脆い柳木沢がもうない。  
い。

もう一度会いたいと願っていた柳木沢がこの世から姿を消した。

「もう一度と会えない

本当に会えなくなってしまった」

食い縛つても食い縛つても声が流れ出た。

「ハハハハ

堪える涙が鼻の奥底に入り込んでズキーンと痛みだした。  
魂までも泣き叫び、佐知を悲しみの泉に突き落としていた。

人は大切な物の大きさを知るとき慈しみの澄んだ涙が全身から溢れ出る事を知った。

柳木沢のそれは祖父母の時と似て同じだった。

たつた一通の手紙だけを残し逝った突然の別れ。

「見守ってくれるというのならば生きて生き続けて応援して欲しか  
つた

柳木沢さんのバカア・・・」

最後の最後まで好かない男のまま柳木沢はこの世に別れを告げ旅立つていった。

## 16 一人は大切な男（ひと）？

柳木沢が突然姿を消しこの世からも旅立つてから数ヶ月が過ぎた。押入れに体を突っ込んで秋冬物の衣装ケースを引っ張り出していた。厚手のトレーナーが手放せなくなつた頃また一通の手紙が投函された。

「さちい、また手紙が入つてたぞ」

いつもの父とは思えない滑舌のいい声が聞こえた。父は階下でピロ口のよつにおどけた仕草で封書をヒラヒラさせていた。

丁度通りかかった母が佐知を見上げ茶化してみせた。

「あらら、またまたラブレターかしら」

「母さん、ストーカーかも知れんぞ  
佐知、中を見ておかしいと思つたら父さんに見せるんだぞ」

「お父さんは佐知の事になるとほんと、大袈裟なんだから」

母は父が握り締めた手紙を5段目の階段に置いた。  
何か言い足りなそうな父は母に腕を引かれ茶の間に入つていった。

部屋はしまいかけの夏服が散乱し足の踏み場もなかつた。  
散らばつた洋服を搔き分けベッドに腰を下ろした。

名前だけの白い封書を翳していた。

おそれおそれ名前だけの白い封書、手紙を開けた。

/佐知へ

佐知、君は怒つてゐるだらうな、きっと怒つてるよね  
俺は親父の最後を伝えようと君に手紙を書いている

親父の手紙は届いてゐるだらうか 事務所の金庫から出てきた手紙なんだ

親父が愛した母さん、俺、仕事関係者そして君へ親父からの最後の言葉

読んでもらえたかな

病床の親父は俺の知る親父とは別人だつた  
人前でも涙する弱い男になつていた

何もしてやれなかつた不甲斐無さに俺は今も苦しんでゐる

親父の事を理解していたのは君だつて事が分かつたよ

君の話をするとき親父は唯一絶望から開放され穏やかな顔を見せた

皆井君との思い出は僕のお守りだ

そういうて力を振り絞つて笑顔を作つてみせた

君の名を口にするその時だけは病氣と戦い生きてようと明るく頑張つていた

「父さんはどんな苦しみの中においても負けないよ 命死さるまで生き続ける

神に授かつた命は一秒たりとも粗末には出来ないからな  
この地球に生を受け生かされている命だ 今日もひたすら生きようとしている命だ

地球上のすべての命はどれもこれもみんな愛おしく大切なかけがえのない尊い命なんだ」

これが父が残した最後の言葉だった それつきり会話はできなくなつた

俺は君が言うように親父に嫉妬していた 親父じゃなく一人の男に嫉妬していたんだ

今は親父を憎む理由なんて何一つなくなつた

君は親父を支え勇気づけてくれた ありがとう、本当にありがとう  
救いを求めていた親父に悲しいけれど家族は気づいてやれなかつた  
俺と母さんに代わつて君が親父を救つてくれた

本当にありがとうございました

君が許してくれるのなら連絡して欲しいずっと待つてる

井川雅和 /

雅和からの待ちわびた声・便りだった。

「ふーっ」息を吐きうつ伏せに横たわった。

なぜだか柳木沢の事ばかりが鮮明に思い出された。  
雅和の存在した記憶が薄れしていくことが悲しかった。

嫉妬した一人の男は父に姿を変え雅和のもとから去つていった。  
懐かしい柳木沢は一人の男になつて佐知のもとに舞戻つてきた。

## 17 一人は大切な男（ひと）？

手紙を受け取って一週間たっても動けなかった。

会いたいと切に思う気持ちが自然に湧き出るのを待っていた。

「このときを待っていたのにどうしたんだろう  
私たちとも喜んでいない」

自分の気持ちを確かめるべく雅和に会おうと決めた。

恋焦がれ会いたくて会っていたあの頃とは嘘のように冷静だった。

待ち合わせた場所は柳木沢の最後の常宿だったホテルの喫茶ラウンジだった。  
雅和との思い出の場所なのに柳沢の事ばかりが浮かんできた。

一人はお見合いのように黙り込んだまま座っていた。

「迷惑だったかな 倘許してもらえないよね、ごめん」

「その話は止めましょう お父様ご愁傷様でした」

「佐知には良くしてもらつて父に代わり礼を言つよ 本当にありが  
とう」

「私の方こそ柳木沢さんに元気をもらって頑張れたのよ  
柳木沢さんとお会いすると雅和といいうような気持ちになれた  
いま思ひと雅和と柳木沢さんはそつくりだわ」

「俺と親父が・・俺そんなにひどい男かな」

「そうじやないわ、歩き方や仕草がやつぱり親子だなって  
だから柳木沢さんと会つのが嬉しかったのね」

「親父と俺は佐知という一人の女に出会い惹かれた・・思いは違つ  
たけれど」

「運命のいたずらね  
私が柳木沢さんと出会つていなければ喧嘩別れをしないですんだ  
のかしら」

「君が親父と出会つてくれたことを今は心から感謝している」

「ありがとう、やつ言つてもうえると嬉しいわ」

「俺は君のことわかつてやれなかつた わかるうとせず君から逃げた

感情が先走りしてつらい事から田を背けてしまう最低男だ  
俺は自分勝手で卑怯な男なんだ」

「人は誰だって嫌なことから逃げたくなるわ  
一度逃げると同じ事から逃げ続けるその繰り返しになってしまふ  
祖父からいつも言われたわ  
しつかり向き合って解決しないとその原因の根っこからは開放されないって」

「親父の限りある命を知り俺は親父という男を素直に受け入れられた  
今まで親父にした悪態を詫びた、言葉にならず心で詫び続けた  
小さくなつていいく親父を見るのがしんどくなると屋上に出て君の  
名を叫んだよ  
会いたい気持ちが直球になつて俺の胸に飛び込んできた  
俺は気づいた 君を思つたび全身に力が漲ることを  
親父の気持ちがわかつたこれなんだって」

「同じつて？」

「あ、いやなんでもない 佐知、また会つてくれるよね」

「・・・」

「今返事が出来ないなら君からの電話を待つよ

いま伝えなければ・・佐知は胸に宿えている感情をぶつけようと  
していた。

「私はあなたの父・柳木沢さんと会っていた  
あなたは邪推して私を責めた  
話を聞こうとせず信じようともせず怒りだけをぶつけ去った

そして昔の生活に戻り私の許せない男の一人になった  
私にはそれがどうしてもひつかかって

だから素直に雅和からの連絡を喜べなかつた  
正直自分の気持ちの整理がつかないの  
ずっとこの日を待つていたにおかしいわね  
会いたいと願つていたのが嘘みたいで自分でもどうしていいのか  
わからないの」

二人の前に高い壁が立ち塞がつていた。  
これ以上話は無理だと佐知はひとり席を立つた。

「ごめんなさい、今日はこれで失礼します」

外は墨絵のように夕暮れていた。

灰色の濃淡に染まつた景色を一人眺め佇んでいた。

雅和は来る日も来る日も思いを募らせ身を焦がしていた。

「『』の手にもう一度、佐知を抱きしめたい」

俺は弱い男だ・・親父と一緒になんだ

「お前も僕と同じだ」父の言葉がグサリ胸に突き刺さっていた。

雅和は仲間と龍一の部屋に集まっていた。

「龍一、俺、自分が嫌いになりそうだよ」

「自分を好きだなんて言つてる奴あんまり聞いたことないけどな」

「俺は愛する人を傷つけてしまったんだ

自分の事しか考えられない俺は相手を傷つけた  
傷つけていたことに気づかず、愛する人を苦しめていた

氣落ちする雅和に真砂子が口を挟んだ。

「雅和がそれに気づいたって事はすごい成長だよ  
その気持ちを伝えなくちゃダメ きっと云わるから」

「わかつてもらえるかな」

「うん、大丈夫

人は自分の非が解れば心から謝罪が出来るつて言つじゃない  
だから今の雅和にはそれが出来る 絶対出来るよ」

「真砂子ありがとう

たまには嬉しいこと言つてくれるんだな」

「真砂子のいうことはなんでも大筋間違つていないよ  
俺が選りすぐつて真砂子を選んだ理由がわかるだろ?」

龍一は自慢げに言い放った。

真砂子は龍一の腕の中、慢心の笑みを作っていた。

「お前らはいつも仲がいいよな 僕、羨ましいよ」

「俺と真砂子は隠し事をしないで信じあつてる  
たまにトンでもない大喧嘩もするけど他人同士がわりあうにはそ  
れも必要なんだ」

「喧嘩もしないで長く付き合つてる恋人いると思つ

いたならそれは偽りの恋人同士ね

真剣に思つていろいろい顔ばかりでいられないよ  
相手を思うからこそ言いたくない事も言うし

それでお互い傷つくことだつてある 当然喧嘩にもなる  
でもお互いが成長できない交際なんて意味がないでしょ」

「なあ雅和、どうでもいいなら人は口をつぐむよ  
そのほうがめんどくさくないし楽だからな  
でもそんな付き合いならしない方がいい、そう思わないか  
耳の痛いことを言い合えるから俺達は仲間でいられるんだ  
お前は誰かがいつも守ってくれると思つていい  
だから甘えてすぐ逃げようとする  
雅和逃げないで真正面からぶつかってこいや

「佐知きつと待つてるよ

本気でぶつかつてくる雅和をきつと待つてる」

「雅和、砕け散つて來い」

仲間に背中を押された雅和はメールを打つた。

佐知の携帯には煩いほどのメールが再三入つていた。

/佐知、君に会いたい どんなに遅くなつても構わない  
俺は君を待ち続ける ずっと待つていてるよ 雅和 /

読み返しては溜息ばかりをついていた。

魔物が住むあの部屋に足を踏み入れるのは正直気乗りしなかつた。

「どうしてあの部屋が待ち合わせの場所なの

佐知は鉛に繋がれた足をひきずる思いでホテルに辿り着いていた。

あれから30分もロビーの椅子に座り込んでだままだった。

1102号室に向かう足は止まっていた。

「「」のまま帰ろうかな」気持ちが揺れだした佐知の前に雅和が立つていた。

「やつぱつ、「」に居たんだね」

逃げ場を失い観念したように歩き出した。

何気に目にした雅和の背中はいつも以上に大きく見えた。

背中を押され部屋に入ると飛び込んできたのは見覚えのあるツリー。

懐かしくも心痛むツリーがそこにあった。

一年前の雅和と過ごしたクリスマスが甦つた。

「「」のツリーの前で俺は佐知を守り続けると誓つた

今もその気持ちに偽りはない変わってはいない

「…………」

「佐知、君は俺を裏切つてはいなかつた  
俺の勝手な思い込みで君を責め、そのうえ俺は君を裏切つた  
後悔している、本当にすまないと思つてはいる許してくれ」

「…………」

「親父がこの部屋に泊まつたのも偶然なんかじやなかつた  
この部屋は親父にとって、俺と同じ大切な思い出の場所だつたん  
だ」

「大切な思い出の場所？」

「この部屋番号は俺と母さん一人の誕生日でもあるんだ  
1102号室・・昔この部屋で親父は俺と母さんを祝い宿泊して  
いた

親父と母さんは俺が幼少の時に別居したから俺、記憶にないんだ  
でも此処は親父が母さんと俺と家族3人で泊まつた思い出の部屋  
なんだ」

「そつだつたの それで曰く有りのホテルつて仰っていたのね」

「「」の部屋で親父が何を思いひとり過ごしていたのか  
そればかり気になつてそれで此処に来たんだ」

「柳木沢さんは雅和を、家族を愛していたわ  
その愛は雅和が言つたように家族とは少し違つていたのかもしれ  
ない

人に甘えることを良しとしない柳木沢さんは寂しい人だった  
いつ何時も鎧をまとい外そうとせず自分の本心を誰にも見せまい  
とした

自分の心さえ読めない柳木沢さんは人を愛するすべを知らなかつた  
それでも柳木沢さんは自分の愛し方で家族を愛し旅立つていつたわ  
それを雅和にもわかつてほしいの」

「俺には知らない親父を君は知つてゐるんだな」

「・・・・・」

そのとき佐知の何かが呼び覚ました。

「人の気持ちはわかるうとしなければ何も見えないわ

その人を思つ気持ちが強ければ表情ひとつ仕草ひとつで異変に気づく  
その言葉一つ一つが本物か偽者かさえ分つてしまつものよ  
でも雅和に俺のこと分かるって聞かれたら言葉に詰まる自分がいて

「昔の俺のことはわかつてた？」

「え?、勿論、何でもわかつたわ

その瞬間、体は力ずくで抱かれ唇を塞がれていた

「離して、その手を離して」

「いや、だめだ

この手を放したら君は一度と俺の前に姿を見せなくなる  
そのまま俺から去つていくのがわかるんだ」

「そんなことないわ　だから離して約束するからお願ひ

手が離れ佐知の体は床に崩れおちていた。

「悪かった、佐知」めん

背を向けた佐知の後姿を雅和は荒い息づかいで抱きしめてきた。その吐息は優しくそして時に強く刺すように首筋を舐めていった。

愛しさが沸々と湧き上がる佐知の体はみるみる熱くなっていた。

「雅和、十分伝わったわ

もう一度この場所から始めましょう」

「佐知、いいのか、この俺で本当に・・  
許してくれるんだね ありがとう佐知」

今またクリスマスの再来が訪れようとしていた。

抱かれながら未だ柳木沢の姿を追い求めている佐知がいた。

そんな気持ちを追い払うように一層体を捩り雅和を求め続けた。

「佐知、愛している もう離さないよ

「離さないで、しっかり抱きしめて離さないで

狂おしい雅和に応えてはいたが心にかかった靄は晴れなかつた。

偽りのない雅和の気持ちは痛いほど伝わっていた。

なのに私は・・

心に翻弄され戸惑いながらも欲情の扉を開け夜の闇に身を焦がしていった。

佐知は自らの身を呪縛の渦に投じて苦しんでいた。

雅和を求め愛し合っているさなかも柳木沢が姿を見せた。

次第に色濃く姿を現す柳木沢を追い払ってしまったかった。

二人の男に佐知の心は乱れ振り子のように揺れ動いていた。

## 18 別れの足音

佐知は雅和を異常なほど求め続け困惑させていた。

「何かあつたのか 佐知、最近変だぞ」

「変でもいい・・雅和とこのまま地獄に落ちてもいい  
雅和が欲しいの、いつも・いつもほしーの」

重なりあう体粗い息遣いと雅和の動きに合わせた呻き声がいつま  
でも続いていた。

「もう限界だよ

「いや、嫌よ もうときつく抱いて

「佐知、俺をしつかりみるんだ

俺はお前だけだ お前がいるから頑張れるんだ  
体だけじゃなく心が通つていれば強い絆でいられる  
佐知とはずっとそんな仲でいたいんだ

「雅和は体は入らないって言つの ほかで満たされるから心だけで  
いいの」

「そうじやない心と体は一つなんだ それを教えてくれたのは君じゃないか

だから離れていても触れられなくて俺は君だけを見ていられるんだ」

「そうよね、私の方がどうかしているのね

昔のあなたがしたように体の温もりだけを求めているんだもの自分が自分でなくなつて壊れていくようで怖いわあのまま別れいたらこんなに苦しむ事なかつたのかしら」

「なぜ・・今こりでそんな事を云うんだ」

「わからない、わからないわ

だけど雅和を思う時私の体は獸と化し疼き始めるのどうしようもなく欲しがる体を自分で充たした夜も会つたわこんな自分が本当に・・ほんとうに嫌で嫌でたまらないの」

「佐知、君の心に嘘はないのか

俺を必要としているのなくそう思いたいだけなんじゃないのかなんだか悲しくなるよ

俺は腕の中で解けていく佐知が本当に愛おしいんだ

同時に傍で見つめているだけでいいと欲望を抑える自分がいる愛しているから大切にしたい俺はそんな感情を初めて知ったんだ」

「私も雅和がそばに居てくれるだけでそれだけで充たされたわ  
でも会えない時間にやましさがなかつたかと聞かれたらすぐに答  
えられない自分がいる」

「会えなければ代償となる男に抱かれるのか

昔の俺が女を抱くように君もそんな男に抱かれるつて事なのか」

「・・・・・」

「答えろよ、なぜ答えない はつきり否定じろよ」

「誰でもいいなんて思つていないわ、心がなければ」

「心を許した男が出来たつてことか」

「そうじゃない、そうなるのが怖いの いつもいつも包まれていな  
いと不安なの  
雅和が傍にいないと私はひとり蹲つて何も見えない世界でもがき  
苦しんでいる

あなたを思つと狂おしくなるなんてやつぱり私は変、おかしいん  
だわ」

「俺といふと佐知は佐知でいられなくなるのか

俺は出会った時の佐知が好きなんだ・好きだつたんだ

俺の愛した佐知はどこに行つたんだ、しっかりしてくれよ」

「今私は愛せない？

愛してくれないって言うのならそれでもいいわ

こんな思いがずっと続くのならもう会わないほうがいい」

「佐知はそんな簡単に俺との関係を片付けられるのか  
やつと又、やり直そうとしたばかりじゃないか  
信じられないよ君が・・俺は・君を愛した俺はピエロだったのか  
君のため自分を変えようとしていた俺は何だつたんだ  
黙つていないで何か言ってくれよ」

佐知はそつとベッドから離れ背を向けた。

しなやかな指でワントピースのファスナーを静かに引き上げた。

佐知の後ろ手だけを見つめる雅和の口から溜め息が漏れた。  
悲しみにも似たその溜め息はファスナーの音と重なり消されてい  
た。

「ダンマリのまま」の部屋を出て「行くのか

本当にそれでいいのか佐知　俺と同じ、逃げるつもりなのか

「『めんなさい』

「『めん、それだけか

俺がどんな思いで会えない日々を過ごしたか 知つて君は・それでも君は逃げるのか  
やつと君をこの手にしたといつにに君を擁いた喜びを棄てないと言うのか」

両手の握り拳をベッドに叩き付け怒りを顕にしていた。

「『めんなさい 今日の私どうかしてる、本当に『めんなさい』

肩で息する雅和から田を逸らしドアに手をかけた。

唇を強く噛みしめ飛び出した魔物が住むホテルを仰ぎみ呟いた。

「あの部屋には魔物がいる 私を嘲笑う魔物が住んでいた」

佐知の中に住み続ける柳木沢をきっぱり追い払おうとしていた。  
そんなとき雅和から手紙が届いた。

／佐知へ

今夜もお前を思いながらこの身を充たしている  
こんな遠る瀬無い気持ち佐知には分らないだろうな  
俺の愛は今の佐知に届きそうもないから

人ごみに紛れて女を抱いて佐知を忘れてしまおうと何度も思つたよ  
でもやつぱり出来ない、裏切りたくないんだ  
一度と佐知を失いたくないんだ

佐知と出会つて強くなつたつて言われるよ  
でも俺はお前を求めどうしようもない寂しさに襲われている  
佐知が言つていた気持ちと一緒に  
決しておかしいことじやない、愛しているつてことなんだ  
俺達が出会い語り合つたあの日に戻ろう、一人である日の日に帰ろう  
雅和より／

嘘のない気持ちが嬉しかつた。

「わかつてゐる雅和に嘘はないつてだから雅和を愛し心を許した  
でも、もう少し時間がほしい やつと自分を取り戻せそうなの  
雅和が愛してくれた自分に向きあえたばかりだから私を信じても  
う少し待つていて」

雅和を真剣に思つ偽りのない声無き届かぬ想いを送つていた。

それからも愛が詰まつた手紙が山ほど届いていた。  
それでも心は雅和だけのものと胸を張つて言えるまで返事は書け  
なかつた。

この行動が自分の足を引っ張る事にならうとは思いもしなかつた。

真剣な愛が伝わっていたがため慎重にならざる得ない心情など雅和は知る由もなかつた

／佐知様

この手紙が最後の手紙です  
別れを告げる決別の手紙です

俺は君からの返事を待ち続け手紙を書き続けた  
きつと伝わると信じ疑いもしなかつた

返事が来る事に賭けていたが残念ながら返事はNOだつたようだね

俺は就職を断り親父の仕事に携わつてこゝと決めた

近日中に静岡に発つよ そこで新しい人生を始めるつもりだ

楽しかつたよ、ありがとう

最後くらい笑つて別れられたらいけど男と女の別れはそんなに  
甘くないからな

君に感謝こそすれ恨んだり憎んだりしていなから心配しなくて  
いい

佐知のおかげで成長できたと感謝してる

井川雅和／

「うそ、嘘よ 別れ、決別ってなんのこと  
会いたい気持ちを追い払つて自分と向き合つていた  
雅和が愛してくれたあの頃の私を取り戻そうと頑張つていた  
笑つて会える日を抱きしめてくれる日を楽しみにしていた

ずっとこれからも同じ道を一人で歩けると思つていたのに

止まらぬ想いが渦巻いていた。

悪戯好きの神様が舞い降りてきてほぐし始めた纏れた糸をまたき  
つく絡めて行つた。

## 19 別れの足音？

真砂子の携帯は話中で繋がらなかつた。それでも電話を掛けつづけていた。

学生時代の年代物の目覚まし時計はすでに一時間の経過を告げていた。

佐知は働き蟻のように部屋を徘徊していた。

麻痺した指先を撫でながらせつ諦めようと意氣消沈していた矢先だつた。

「真砂子、佐知だけど雅和が静岡に発つ日聞いてる」

「私は聞いてないけど龍一なら知っているかもね」

「ねえ、わかつたら教えて」

「どうして、直接雅和に聞けば早いじゃない」

「だめ、雅和から別れの手紙が来たの」

「そんなはずないよ 嘘でしょ

私達の前で佐知の信用を取り戻したいって真剣だつたんだよ  
気持ちぶつけて来いつてみんなにはっぱかけられて喜んでいたの  
に

「私がいけなかつたの

雅和から沢山の手紙を貰つていたのに返事一つ返さなかつた  
雅和の気持ちは十分伝わつていたし涙が出るくらい嬉しかつた

だからこゝあやふやな気持ちじゃだめだつて思ったの

雅和が愛した昔の自分を取り戻そうとしていたわ  
会いたい思いを殺して死ぬほどつらかつた

真砂子本当よ、雅和のためにわたし頑張つてたのよ

「気持ちは分るけど雅和には刻だつたんじやないのかな  
気持ちが伝わつていたならそれを伝えなかつたのは佐知の誤算だね  
思いは伝えなきや、相手にはわからないんだよ  
待ち続けた雅和がかわいそうだよ

どうして自分の気持ちに逆らつような事をしたの  
雅和を思つていたなら心のまま正直に返答すべきだつたんじやない  
素直なまゝの気持ちを言えよかつたんじやない  
もう少し自分と向き合つて雅和に喜んでもらえる答えを出したい  
から待つてとか

別れてから自分の気持ちはこつだつた、それが雅和のためだつた  
なんて通用しない

酷だけど苦しんで決着をつけた雅和にはもつ何も伝わらないよ

罵つて泣きわめいて醜い姿を見せても話すべきだったね  
それで二人の関係が終わつたとしても今よりはずつとましだつた筈  
気持ちを伝えないまま別れを宣告された佐知は負けだんだ  
キヤツチボールがどちらか欠けたらそこで終わると同じ  
佐知は受けたボールを置いて背を向けたんだからさ  
雅和を・・・自分を責めちゃだめだからね「

真砂子からの手厳しい忠告だった。

私は甘えていた 雅和なら私の気持ちをわかつてくれる  
こんなに思つてくれる雅和ならきっと待つていてくれると甘えて  
いた

真砂子の言ひようにすべてを無くしてから喚き吠えるのはただの  
負け犬

雅和の気持ちが嬉しかつたのならすぐに返事をすべきだった

祖父母が口をすっぱくして教えてくれた人としての義を忘れていた。

雅和の気持ちを弄んだのかと責められたとしても反論は出来ない  
ここでどんな弁解をしても雅和を苦しめるだけ  
雅和の新たな出航にもう波かぜは立てたくない

意欲に満ちた雅和のままスタートをきつて欲しい

このまま別れを呑もう・・・  
つらく悲しかろうとそれが雅和への餞、雅和に贈る最後の愛

最後の愛それがW A・K A・R E・・それはあまりにも悲しすぎた。

しかしそんな現実を気丈にも受け入れようとする佐知だった。

これまでの感謝をつたえるために手紙を書いていた。

潰れそうな胸の痛みで文字は震え歪んでいた。  
歪な文字なんか体裁なんかどうでもよかつた。

伝わらなかつた正直な気持ちと愛をペン先に込め懸命に綴る姿が  
痛々しかつた。

仕事が終わると一目散で駆け出しバスに乗つていた。  
落ち着かない様子で過ぎ行くバス停の数を指を折つて確かめていた。

6つ目のバス停で降りた。

懐かしい坂が見えてくると手紙を握りしめ走り出していた。

「えつ・・・どうじい」

大きな門に売却の看板と大きな昇りが立てかけられていた。  
その場に座り込んだ佐知は腰を上げようとしなかった。

電話の向こうの真砂子は何度も頭を下げ雅和の出発の事を聞いていた。

かけ続ける電話は傷のついたレコード盤に針を置くようなものだつた。

「聞いてない・知らない」

悲しいかなそればかりの繰り返し。

真砂子は知っているはず お願い力を貸して昔のように助けてもはや胸に手を組み祈るしかすべはなかつた。

「日曜の最終電車だから 佐知、聞いてる」

龍一に固く止められていた雅和の出発時刻を真砂子は知らせてくれた。

雅和が行ってしまう 日曜が最後もつ一度と会えない

最終電車の数本前から駅で雅和の姿を探していた。

雅和がやつてきたのは最終にはまだ早い時間だった。

佐知を見つけるとばつが悪そうに方向を変えようと足先を変えた。

「雅和、待つて」

走り寄り両手で手紙を差し出した佐知の声は震えていた。

「これ読んで、これが最後の我がままだからお願ひ」

「・・・・・」

雅和は口を開かなかつたが佐知の側を離れようとはしなかつた。  
それは佐知への愛の名残りにも思えた。

二人は口を閉ざしたまま肩を並べ数本の電車を只管やり過ごして  
いた。

せつない最終電車のアナウンスが流れ聞こえていた。  
聞きたくない・・思わず耳を覆い首を左右に振った。

「ゴオオオー」

唸るような音を立てて最終電車が入ってきた。

空洞になつた胸の奥にジンジン響き溢れでそうな涙をぐつと押し  
堪えた。

雅和の旅立ちに涙は見せられない 見せちゃいけない・・・  
涙を堪えるのが精いっぱいで笑顔にはなれそうもなかつた。

目の前の雅和に抱きつき泣いて許しを請うて愛を取り戻したかつた。

だめだめ、もう遅い 遅すぎたのよ もう終わつたこと・・

一人が育てた愛は脆く崩れ落ち消えようとしていた。

波打ち際に作られた砂の城のような愛の結末が悲しかつた。

泣いちゃだめ我慢して・・いま此處で泣いてはだめ  
思い出が甦り号泣しそうな自分を叱咤していた。

「雅和ありがとう 今まで本当にありがとうございました  
忘れない、雅和のことずっと忘れないから」

「・・・・・」

雅和はうな垂れ無言で人ごみに消えていった。

未練を引き摺る佐知はその場を立ち去れずにいた。

走り去る電車の音を聞きながら顔をクシャクシャにしていた。

最終の出た構内は人も疎らになつていた。

そんな時に鳴った着信はオーケストラのよつに鳴り渡った。

「佐知」めん、龍一にばれちゃって大変だつたんだ  
それで雅和、最終には乗らないで前での行くつて  
だからもう雅和は・・佐知ごめんね

「ううん、今さよならできた  
真砂子のおかげよ、ありがとう  
雅和は最後まで何も言ってくれなかつたけど  
でも会えてよかつた 本当に・・本当に・・・」

「佐知、泣いてるの、さち、さち」

涙をすすりあげ言葉にならず電話を切つた。

## 20 別れの足音？

春・別れと旅立ちの交差する春まだ浅い日。  
雅和は佐知に別れを告げ新しい出発をきつた。

別れを告げられた佐知はいまだ足踏みのまま出発できずにいた。  
桜が咲き花びらが散つても歩みを止めたままだつた。  
仕事と家庭の往復でさえ億劫になつていた。

「誰にも会いたくない」

雅和の思い出に癒されていたいと部屋に閉じ籠つていた。  
来る日も来る日も雅和に涙する繰り返しだった。

力なく柳木沢の手紙を読み返していた。

／幸せにならなくてはならない  
これからも悲しみ苦しみが降り落ちてくるだろう  
その後には幸せが必ず降り注ぐ事を忘れてはいけない  
僕は天から見守り続けよう／

七色の宝箱に仕舞い込まれていた手紙を抱きしめていた。

「柳木沢さん力を貸して　どうか私を導き助けて」

好かない柳木沢に縋るように祈りつづけていた。

そんな時、無沙汰の真砂子から電話がかかってきた。

雅和が新たな事務所を設立したことを知った。

「雅和が司法書士の資格取つたんだって、すごいよね  
お父さんの仕事を骨を埋める覚悟で頑張ってるよ」

目が眩む一筋の光明が全身を覆い体の中まで入りこんできた。  
暗黒に閉ざされていた心は逃げ場を探そうと必死でもがき始めた。

雅和は自分の道を迷いもなく突き進んでいた。

「雅和は以前にも益して輝きを放ち希望に満ちた人生を歩んでいる  
体中がポカポカして酒宴の最中如く開放された心地良さに酔つて  
いた。

頬を伝う涙はこれまでとは違う温かな涙に変わっていた。  
雅和の人生を心から祝福し涙していた。

重い足かせの鎖が切れる音がして数日たつある日  
佐知はひとり数ヶ月ぶりのショッピングを楽しんでいた。

お気に入りのショッピングに入り顔なじみのスタッフを探していた。  
店内はガラリとイメージが変わりジュニア世代の客も増えていた。  
ロング丈Tシャツ、オフホワイトのパンツを抱えていた。

スタッフのゆうぢゃんが佐知を見つけ駆け寄ってきた。

「随分、音沙汰無しで心配してたのよ」

「『めんなさいね、いろいろ忙しくて』

「佐知さんにと思って取り置きしてた服があるの 着てみない?」

「ゆうぢゃんが選んでくれる服は評判いいから着てみようかな  
でも今日は試着だけでもいい?」

「ぜんぜん平気よ、着てみて絶対氣に入るから」

お薦めのワンドピース1着も手にして支払いを済ませた。

日も暮れ始めた喧騒の町に疲れた顔を見せ帰<sup>[モ]</sup>する佐知の姿があ  
つた。

父に頼まれた湿布薬を買うために立ち寄ったドラッグストア。

佐知はレッドの口紅を手の平に乗せ見つめていた。  
カチツ・カチツ・・刻々と時の音だけが流れていった。

さつきまでの氣だるい脱力感がまるまる体から抜け行くのがわか  
った。

赤い色の持つ力に魅せられた佐知はその場を去りがたくなつてい  
た。

「ズツ・ズ・ズツー」・「ヨイシヨ」

自宅に戻ると埃をかぶつた全身大の鏡を引っ張り出していた。

ゆうちゃんお勧めのワンピースに着替え鏡の前に立つた。

青白い顔にお気に入りのオレンジ色のルージュをひいてみた。

これだけで気分は段違いに変化し輝いていた頃の面影が垣間見ら  
れた。

佐知の眠っていた精魂が芽吹いた瞬間だった。

休日の澄み切った午後だつた。

銀杏並木は秋色に染まつた葉っぱの絨毯で敷き詰められていた。  
色づいた黄色やオレンジ色の葉っぱを搔き分け歩いていた

ベンチに座り日差しを遮る頭上の大木を見あげため息をついた。  
未だ未練を引きずつていて自分の心に向き合つていた。

／今年もまたクリスマスがやつてくる

忘れられない愛の日々が甦るクリスマスがもうすぐやつてくる

つらい・哀しい・虚しい・切ない・やるせない

失つた愛の悲しみの限りを・痛みを嫌というほど十分味わつた

この苦しみから解放されて早く自分の道を歩かなければ  
このままじやいけないって・・わかってる

毎日を精一杯生きなきや、生きてあげなきや、だめ  
今日・今・この瞬間は一度と戻らない大切な時間  
また明日がくることを当たり前に思つちや、だめ

柳木沢さんは「命」を大切に逝ききつた  
雅和も人生をしつかり見据え  
夢の実現のため自分の足で道を刻んでる

希望があるから人は明日に向かって生きていく  
今日という日の繋がりの明日に夢を託し生きてゆける  
私はいつまで無意味な日々を送るのだろう  
自分の道をいつになつたら歩き出せるのだろう

その夜、佐知は夢を見た。

会いたくても会えなかつた柳木沢の夢を見ていた。

「柳木沢さん会いにきてくれたのね」

／皆井くん、どうした

いつまでそうして自分を甘やかし続けるつもりなんだ

君らしくないじやないか

殻に閉じこもり自らの人生を台無しにしている

他力だけで救われ逃れられる人生などありはしないんだよ

人生は自分が決める あれは嘘だったのか

君の人生はこれからも長く果てしなく続く出会い・別れ、そのどれもがまさしく人生だすべてを受け入れそれを糧にして新たに進むんだ一步踏み出せば必ずまた次の一步につながる

勇気を出して一步を さあ、踏み出すんだ  
僕が見ている・まあ歩くんだ・前に進むんだ／

幸せな気持ちのいい目覚めだった。

佐知は鏡に映る自分に驚いていた。  
グレーの曇りがなくなりピーチオレンジの晴れやかな顔に見えた。  
雅和と出会い胸躍らせたあの日と同じ・輝いていた頃と同じだった。  
鏡の向こうに思わず綺麗と呟いていた。

茶の間に顔を見せると家族も佐知の変貌に気づき声をかけた。

「おはよう

あら、今日の佐知はずいぶん顔つやがよくなきれいね」

「佐知の笑顔は天下一品だな  
久しぶりに見る父さんの好きな、いい笑顔だ」

「もう、父さんも母さんも上手なんだから

もうすぐボーナスも入ることだしねえ」「

「ははっ、ばれたか」

「やだなあ、もお～」

久しぶりの笑い声が茶の間に訪れ心が軽やかに晴れていった。其のとき懐かしい柳木沢の声が聞こえた。

「そんな家庭がある君が羨ましい それだけで君は十分幸せ者だ」

佐知は雅和と出会つた頃のよつた輝きを再び放っていた。  
気持ちのいい朝だつた。カーテンの隙間から天の川のよつた朝日  
が差し込んでいた。

その柔らかな光の川が不思議な力となつて体中に入ってきた。

始まりには終わりがある 終わりの後には始まりがある

雅和との絆がきた私は終わりの後の始まりを生きなければなら  
ない

自分の足で新たな始まりを歩んでいかなければならぬ

雅和はその始まりをとうに歩いている  
知らない誰かを隣に歩き始めているだるつ

今日この日、私は新たな一步を踏み出す

これまでの雅和との足跡は綺麗むすぱり消し去れり

新たな出会いがあるのならば許されるものならば私はもう一度…  
眞の絆を育てたい

「新たな出会いがあるのならば許されるものならば私はもう一度…」

天空の柳木沢に叶わぬ最後の我儘と感謝の気持ちを贈つていた。

秋深まる澄みきつた大空を見上げ大きく息を吸い込んでいた。  
思い出が胸奥の過去のアルバムにきれいに押し込まれていった。

涙の泉はやつと溢れ出るのを止めてくれた。

乾いた頬にはいくつもの涙の筋がくつきりと浮かび上がつていた。  
悲しみの涙はもう終わり、今日でおしまいにしようと  
喜びの涙を沢山流せるよう自分の道をしつかり歩んでいこう

柳木沢が遺した手紙の一節を思い返していた。

／幸せになつてほしい　いや、ならなくてはいけないよ  
自分の人生を大切に愛してあげなさい／

コンパクトを開けレッドのルージュを引いた。

11月2日・・の日

始まりの一歩・人生の新たな一歩が始まろうとしていた

コンパクトを閉じた佐知の顔は体解した人のように凛と見えた。自らの力で大人の階段をひとつ又ひとつ・・確実に駆け昇ろうとしていた。

雅和との心搖さぶる切なくも忘れがたい恋愛模様  
その張り裂けそうな痛みと涙の一つ一つが佐知を大人へと導いてくれた。

## 21 縁（えにし）

そして月日は流れ・・・  
信じられない思わぬ展開が佐知と雅和の下に降りかかるつとして  
いた。

まさしく柳沢木が云つた天の導きのよひ。

きつかけは古びた手提げ金庫だった。

事務所には柳木沢が長年使っていた机が今も大切に置かれていた。  
その机の奥底からファイルに覆われ埋もれていた金庫が出てきた。  
金庫の中には数冊の文庫本ほどの手帳が入っていた。

どこかセピア色に染まつた手帳は柳木沢の日記だった。

若かりし頃の忘れられない思い出がぎつしり詰まつていた。

どのページにも由里子という1人の女性の名が記されてあつた。

由里子とは大学の講義で顔を会わす機会も多かつた。  
柳木沢は自宅住まいのお気楽な学生だった。

一方の由里子はアパート暮らしで苦学生といった言葉がぴったりの健気な女子学生だった。

不自由なく育つた柳木沢には地味で楚々とした由里子の存在は新鮮だった。

着飾ることもない由里子だったが化粧つけのないその顔立ちはよく見ると際立つて美しかった。

由里子に想いを寄せる男子学生が五萬といて学部一の人気だった。

柳木沢には人の気持ちなどお構い無しの強引さがあった。  
由里子を手中にしナイフの様な視線を一挙受けていた。

柳木沢は男冥利とばかりしてやつたりと悦に入っていた。  
純情無垢な由里子に逆らうだけの度量はなかつた。  
とは言えうまく納まつたのだから由里子もまんざらでもなかつた  
のだろう。

由里子は学費と生活費を稼ぐために夜遅くまで掛持ちで家庭教師のアルバイトをしていた。

一時も離れずにいたい柳木沢が由里子を独り占め出来るのは同じ講義の時だけだった。

由里子に柳木沢だけのため費やす時間など皆無に近かつた。  
周りの恋人同士のように二人でゆっくり語らう時間が欲しいと肩を落とす柳木沢だった。

6月某日

/由里子は多忙で体は大丈夫なのか心配でたまらない  
そういうえば今日の由里子顔色もよくなかつたな  
連日のバイトで疲れているんだろう

比べて僕はこんな怠惰で呑氣な生活でいいのか  
いいわけないよな、情けない

何をすべきかを考え行動に移さねばと思つてはいるが  
いま動けないのは弱い自分と戦つてはいる真つ只中だから  
いやこれも所詮口実だな/

日記に綴られた父の胸の内は雅和の大学時代を彷彿させるもので  
もあった。

「あの親父にも悩める青春時代があつたんだ」  
感概深く時間も忘れ見入つていた。

柳木沢はほどなくして書店のバイトを見つけていた。  
稼いだお金は由里子のために使おうと決めて張り切つていた。

8月某日

/怒った顔をはじめて見せ涙ぐんだ由里子

感情の起伏をみせない穏かな由里子の豹変に言葉を失い動搖した

柳木沢君は私を哀れんでいるの

私はあなたと対等なお付き合いをしていたつもりよ

あなたのお金をもろ手を挙げて受け取るとでも思ったの

良かれとした事が顔を歪め怒らせる結果となつた

女つて者は硝子細工のように纖細で難しい物なのか  
僕は一体どうすれば由里子に喜んで貰えたのだろう  
考えても考えてもその答えは見いだせない・見つかりそうもない/

「おやじも女の扱いには苦労したんだな」

雅和は父の動搖した姿を垣間見て苦笑していた。

日記には卒業後の由里子との関係まで詳細に書かれていた。塾の講師となつた由里子は父・柳木沢との愛を育んでいた。

卒業から一年が過ぎようとしていた頃、由里子の父が突然の心臓発作で他界。

帰郷した由里子はそのまま帰つてこなかつた。

友人達が手分けして家財を処分し私物を郷里に送つていた。気がつけばアパートは蛻の殻だつた。

「久しぶりに家に帰つてくるね」

「ゆりちゃんなんずっと働き詰めだったからな  
のんびり家族に甘えて体を休めて来いよ」

「ありがとうございます・じゃ柳木沢くん、行つてきます」

柳木沢には何ら変わつた素振りも見せず郷里に帰つた由里子。いつもと何一つ変わらない由里子の笑顔を思いだしていた。

柳木沢に問いただされ友人達は皆一同に口を閉ざしていた。

あまりの殺氣立つた柳木沢の懇願に気の毒そうに重い口を開き話しを始めた。

「柳木沢くんには知らせないでと口止めされて黙つてたけど

由里子本人でなく友人から聞かされた父親の死。

さまざまな家庭の事情に拳をつくり立ちすくんでいた。

初めて知った実態に悔しくて情けなくて体が震えた。

崩れ落ちるような目眩を感じずにはいられない柳木沢だった。

友人一同は顔を伏せその場を逃げるよう去つていった。

由里子には高校生の妹と中学に通う弟がいた。

大黒柱を亡くした堺家は母と由里子一人が働いても切り詰めて生

活するのがやつと

そんな貧窮した経済状況になつていた。

悲しみの最中も諸々の返済に頭を悩ます母の姿があつた。

不安気な妹と弟を置き去りには出来なかつた。

通帳を握りしめアパートの解約手続きと支払いを済ませた。  
僅かな蓄えのすべてを現金に換えた。

家に戻つた由里子はなげなしの現金を袋」と母に渡した。  
母は手を合わせ受け取つた袋を祭壇に置いた。

その横顔には涙が流れていた。

葬儀の時も涙を見せなかつた母が初めて流す涙だつた。

「お父さん、あなたは悲しみの涙は嫌いでしたね

めそめそ泣くんじゃないつて怒つているんでしょ  
私の涙、これは悲しみの涙じゃありませんよ  
由里子の気持ちがうれしくて・・・うれし泣きです  
あなたがいつも言ってた由里子は俺の自慢の子  
その通り、由里子は私達の自慢の子ですよ む父をさ

由里子は母の背にそっと手を置いた。

傍らの妹と弟も安堵の笑顔をはじめて見せた。

母と子は微笑む遺影の父を優しく見続けていた。

由里子はそれきり柳木沢の元に戻らなかつた。

心を痛めていた柳木沢だつたが何も出来ずにいた。  
由里子に言われた言葉がいまもトラウマになつていた。

「あなたのお金をもう手を挙げて受け取るとでも思ったの  
哀れんでいるの、私はあなたと対等のつもりよ」

学生時代の一の舞になるのだけは避けたいと思つていた。

10月某日

／夫婦なら僕の稼ぎを由里子は躊躇なく受け取つただろう  
結婚すれば由里子一家を助け守つてやれる 僕が守つてやれる  
伝えた所で手厳しい言葉を浴びせられるのはわかっている

「柳木沢くん、だからあなたは甘いって言われるのよ

由里子に幾度も言われた言葉は間違つていらないだけにキツかつたな  
キャンバスで由里子と過ごした日々を思いナーバスになっている  
由里子を想い眠れなかつた夜・・今夜もあの時と同じ眠れそうに  
ないよ、

地元の新聞社に就職したての柳木沢に由里子一家を養えるだけの  
力はなかつた。

由里子と夫婦など夢の話・妄想でしかなかつた。

二人は手紙と電話を利用して辛うじて絆を繋いでいた。

「互いに頑張ろう 僕で力になれる」とは何でもする  
遠慮しないで甘えてくれよ 由里子の力になりたいんだ」

「あらがとう、柳木沢くん」

どんな時であろうと甘えない女・それが由里子。

由里子を支え力になりたいと思う時怒った顔で涙ぐむ由里子が姿  
を見せた。

饒舌な口は重くなり気持ちを伝えられない柳木沢だった。

由里子は妹弟の学費、家のローン、生きるがためだけに黙々働き  
続けていた。

一向に光の見えない現状にクタクタの体を摩る毎日だった。

「柳木沢君の声が聞きたい その声に癒されたい」

悲鳴を上げた由里子の体はそれさえもさせてはくれなかつた。愛の言葉に酔いしれる心の余裕もなく次第に電話は遠のいていつた。

柳木沢は希望が叶い報道部に配置されていた。

これまでのいい加減さをこれでもかと痛いほど知らされていた。

仕事の重責に精神的にも追い込まれる日々だつた。

男社会の寒風は想像を遥かに超え日に日に日は窪み落ちていた。

「負けてたまるものか」

柳木沢は寝る間も惜しみ休日返上で精を出し働き続けた。

由里子に思いを馳せていた男とは打つて変り別人になつていた。

気遣う余裕を無くした二人の関係に微妙な亀裂が生じ始めていた。無常にも気がつけばいつかしら一人は疎遠になつていった。

季節は移り就職活動の内定がちらほら聞こえ始めた頃だつた。

柳木沢は罵倒される事も減り仕事を任されるようになつっていた。耳を疑うような噂が入ってきたのはそんな時だつた。

夕暮れの居酒屋に大学時代の旧友と酒を酌み交わす柳木沢がいた。

「ゆりちゃん、結婚したって聞いたんだけど本当か?」

「仙台に帰つてから臨時の先生になつたつて聞いたけど」

「そういえば、先生で思い出した、相手も同じ教職の男らしいよ」

「そういうえは柳木沢、ゆりちゃんとはあれからも付き合つていたよな」

「俺達はお前ら一人は結婚するばかり思つてた」

「人の恋路はどうでもいいじゃないか なあ、柳木沢」

「・・・」

勝手な憶測で盛り上がる友人らを横目に浴びるほど飲んでも酔えない柳木沢だった。

取材の途中で柳木沢が向つた先は懐かしい大学の校舎。今も大学院に残つてゐる由里子の友人の一人怜子を訪ねていた。どうしても由里子の真相を知りたかった。

「面会入つて柳木沢君だったの？久しぶりね」

「忙しいのに手を止めさせて悪いね  
実はその、あの・いや・・・」

「どうしたの柳木沢君、変よ  
もしかして由里子のことでの此處に来たんじゃない？」

「あ、うん」

「柳木沢君、もう由里子の事は心配要らないわ  
今、彼女はものすゞく幸せだから」

「どうか、それならよかつたよ  
もし連絡あつたら僕も祝福していくって伝えてくれ

「OK、分った ちゃんと伝えておくから心配しないで

「時間とつて悪かったな、じゃまたな」

会社に戻る柳木沢の足取りは重かった。  
公園のブランコに座りながらどんよりした雨雲を見上げていた。



## 22 縁(えにし) ?

6月某日

/由里子が・・由里子が結婚していた  
すまない、守ってやれなかつた

僕は自分のことで精一杯で君を気遣つてやれなかつた  
何時だつて君は一人で苦しみを抱え込んでいた  
僕には何一つ打ちあけず話してもくれなかつた  
結局、心を許すほど愛してはいなかつたつてことだね

由里子はわかつていたんだ

僕の本質を見透かしていたんだ

口だけのお調子者で行動が伴わない男  
これが由里子の目に映つっていた僕の姿

僕が守つてやる、大口叩いてこの有様だ  
泣くに泣けないこの結末だ

他の男に奪われたこの無念を忘れはしない  
由里子を忘れるなんて出来ない

君の幻を胸に焼き付け僕は生きて行く  
一生忘れず生きていく・愛する女は一人  
この地球上に由里子・君一人でいい /

父・柳木沢の思いはかつての恋人佐知への想いと重なつていた。

「親父は由里子という女性を心底愛し生涯忘れなかつた。」

だから母さん、いやどんな女性が現れても愛せなかつたんだ」

父が嘘をつき偽つてまで母と向き合えるほど器用な男でない事を知つていた。

「母さんの直向でまつすぐな愛は重たすぎた。だから逃げた。  
後ろめたくて・つらくて・たまらず家を飛び出した」

大人げない無責任男と言えばそれまでだが不器用な父の男道を垣間見た気がした。

雅和は父の男心をわからうと賢明だった。

由里子の結婚の痛手は数年の年月とともに薄れていた。  
そんな柳木沢に人生の転期が訪れた。

上の兄一人はすでに妻子があり家庭を持つていた。  
長男夫婦と同じ屋根に住む柳木沢に父親は業を煮やしていた。

「三男坊のお前は次男と同じだ  
遅かれ早かれいずれ家を出なきゃならん  
自分の家を構え独り立ちしてはどうだ」

両親が勧める結婚話には耳に蝟が出来る程うんざりしていた。  
これまで両手で数え切れぬ程のお見合いをしてきた。

しかし結婚する気など毛頭なく寸分の期待さえ持てなかつた。

受けた見合いの話は親の顔を立て煩い口を黙らせるための手段に過ぎなかつた。

見合い後はお決まりの断りの電話を入れる繰り返しだった。

顔を合わせる事もなく話の段階で断つた見合い話があつた。

それは三男の柳木沢に食い付いてきた旧家からの申し入れだつた。

是が田にでも婿にとの再三の申し入れに一度は承諾したもの。婿の言葉を聞くだけで体中がむずむず反応し発疹していた。鯖ずしを口にして猛烈なアレルギーを起こした時と同じだつた。

「これじゃ、無理だな」

体中を搔き鳶りながら柳木沢は初めて両親に頭を下げていた。  
何の因果か、又その見合い話が舞い込んできた。

「はつきり蹴りをつけないとまずいな 又ぶり返されても困るし」

見合いの場も決まり順調に事は進んでいた。

身内は今回はどんな口実で断ろうか  
断りの電話を誰がするのかで頭を抱えていた。

こんな見合いなら受けない方がいいように思つただが。  
一人身の柳木沢にいらぬ誤解を持たれぬ為の体裁に過ぎなかつた。

柳木沢は由里子以外の女に心が揺らぐことはなかった。今回も無駄だと誰もが諦めていた見合い話だった。

「年貢の納め時かな……結婚するかあ～」

帰宅した柳木沢の口から出た言葉に家族誰もが慌てふためいた。腰を抜かした母の横で父は口にしたお茶を噴出した。

「ブツ・ブワツア～」

しつかり者の兄嫁千代子も拭いていたお皿を落し叩き割った。

「ガツ・チャーン」

断りの電話を入れる役目を任されていたのは千代子だった。すみませんと頭を下げにんまり居間の柳木沢を盗み見ていた。

これが父・柳木沢と母・美紗子の出会い。

見合い写真とは違つて目の前で見る美紗子はどこか由里子に似た面影を漂わしていた。

すんなり承諾した見合いに大層な意味はなく美紗子が由里子にどこか似ていた

悲しいかな、只それだけの理由に過ぎなかつた。

一方の美紗子は写真の柳木沢をいたく気に入つていた。会うことなく断られた後も諦めきれずにいた。

両親はひどく落胆の色を見せる美紗子が不憫だった。そんな娘のため再度の見合いを申し入れたのだった。

蝶よ花よと育てた一人娘の縁談はこうして相整つた。両親と親類縁者は喜びの宴を開き盛り上がっていた。祝杯の中、美佐子は柳木沢との愛ある家庭を夢見ていた。

そんな美紗子と心あらずの柳木沢の結婚は上手くいく筈もなかつた。

一人は雅和を授かるとほどなくして別居となつた。

ある日、柳木沢のもとに一通の手紙が届いた。

#### /卒業生同窓会の件案内

拝啓、盛夏の候、皆様いかがお過ごしでしょうか？  
下記のとおり同窓会を開催することになりました。  
当時の近藤学長のご出席も予定されています。  
懐かしい顔を合わせ楽しいひとときを過ごしましょう。  
万障お繰り合わせの上、ぜひご参集ください。

なお、ご出欠を同封のはがきでご返事ください。敬具／

由里子は迷わず出席を決め懐かしい青春の1コマに帰るべく電車に揺られていた。

車窓の景色に懐かしい思い出がフラッシュバックしていた。柳木沢もこの日をどれ程待っていたことか。

それぞれ家庭を持つた二人に再会の時が訪れた。

この再会には一人だけが共有しつる誰にもいえない秘密が隠されていた。

7月某日

/由里子との待ちわびた再会  
僕は沸きあがる思い、迸る激情を止められなかつた  
決して憎しみ嫌いで別れた二人でないのだから無理もない

由里子との再会はそんな僕の気持ちを一瞬にして消し去つた

僕は困惑している

自分を正当化せずにいられないほど動搖している  
いつどんな風に帰宅したのかさえ覚えていない  
君のあの言葉は一生口外せず墓場に持つてゆくよ／＼

喜ばしい由里子との再会どころか懐かしい同窓会の詳細すらもな  
かつた。

何故、綴られることなく終わっているのか  
父に予想だにしなかった事態が起きた事だけは察しがついた。

日記帳はここでペンが途絶えそれから先は白紙になつたままだつ  
た。

「親父に、一人に何があつたんだ？」

パラパラ白紙のページを捲つていた。

すると父が存命中に書き足したと見られるまだ真新しい筆跡のページがあった。

「由里子は言った 確かに僕の子供と言った  
結婚を望まず一人で子供を生み育てようとしたのか」

飛び込んできた文面に目を見開き驚きの声をあげた。

「嘘だろ? 親父の子ってことは俺の兄弟  
腹違いの兄弟が存在するってことか・・・」

雅和はバクバクし鼓動に手をやり続きを読んでいた。

「由里子は言った 僕の子供と  
結婚を望まず一人で子供を生み育てようとしたのか

友人達の呼ぶ声に憑き物が取れたかのように君はピタリと口を噤んだ  
たつた数分の会話・・追い縋り真相を聞こうとする僕に君は言った

「もう一度と会う事もないと思う だから柳沢君今のは全部忘れ  
て」

背を向け賑わう会場に戻つていく君に心は張り裂けそ�だった

由里子、僕は間もなく君のいる天に召されようとしている  
もし天で君と会えたら真相を問いたい 真実を聞かせて欲しい

由里子、僕は自分に迫りくる死を怖がってはいない  
いま僕は安らかに死を受け入れようと其の時を待っている  
僕の人生はこの時の為、君と又一緒に出来るこの日のためだけに  
あつた

そう思いながら僕は自分の死と向き合っている  
由里子、君に会えるまた愛しい君に会えるんだ／

雅和は父の真相を確かめずにはいられなくなっていた。

## 23 縁(えにし)？

てつちゃんは事務所スタッフの一人で父と学生時代を共に過ごした親友だ。

父が司法書士をとったのはてつちゃんに後押しされてのことだったらしい。

父同様に由里子をゆりちゃんと呼んで親しかつたのがてつちゃんだった。

雅和はこの手塚のおつちゃんに由里子の調査を頼んでいた。

「てつちゃん、なにか分った？」

「ああ、雅和も知つての通りゆりちゃんは柳木沢の学生時代の恋人だ  
三重県出身で大学卒業後も三重には帰らず柳木沢と愛を育んでいたよ

思えばあの時、一人の愛は最高潮に達していた

そのまま付き合っていたら一人は結婚していただろうな

父親が亡くなった知らせを聞いたゆりちゃんは実家に帰つたんだ  
小学校の教師になつてそこで知り合つた先生とゆりちゃんは結婚した

その後ゆりちゃんに子供が出来たことを風の便りで聞かされた

あの時の柳木沢は肩を落としてそれはもう見ていられなかつたよ

友人達に幸せそうな親子写真が貼られた年賀状が来たそうだ

でもその幸せは続かなかつた・・ゆりちゃんは子供を残し突然旅立つた  
神も仏もないって、いつ言ひつ時に使つんだろうつな

「由里子さんなんで・・急に亡くなつたんだ」

「旦那さんと一緒に帰宅途中の交通事故だつた  
信号無視の車に衝突されたんだ  
一人とも即死だつたそうだ」

「それで、子供はどうなつたの」

「当時の年齢は定かでないが女の子が一人残された  
ゆりちゃんの母親はとうに亡くなつていた  
御主人の方にも引き取り手はなくその女の子は施設に入れられた  
現在は養子先で幸せに暮らしているよ」

「てつちゃん、その子の名前は調べてくれた?」

「ああ名前は・・わち ゆりちゃんは堺由里子だから堺さち  
いや、結婚して石坂になつたんだから石坂さちだな」

「でも養子に出されたつてことは姓は変わつてゐるよね

今は石坂じゃない筈だよ

「そりそり、今は皆井姓だから皆井さちだ」

雅和が愛した女性皆井佐知、その人の名前だった。

まさか彼女が親父の子供・・・雅和は目の前が真っ白になつた。

「てつちゃん、親父はすべてを知っていたのかな？」

「柳木沢は別れたゆりちゃんのことは話したがらなかつたんだ  
だから俺にもわからない  
までよ、そう言えば、只一度きりだつたが聞いてきたことがあつ  
たな

お前のようにゆりちゃんの子供の事をしきりに『気に』していたよ

「親父は別れてから由里子さんは一度も会わなかつたの」

「いや、柳木沢が京都出張の時に一度だけ会つた  
お前の親父がゆりちゃんを呼び出したんだ  
別れた二人は由里ちゃんの住む三重で再会した  
この時の事は余ほど嬉しかつたんだろうな  
柳木沢自らが話してくれたよ」

「・・再会したのか」

「二人は別れたといつても愛し合つた男と女だ

男女の関係は一つ間違えば理性を失わせる

人生の歯車さえ狂わせてしまつ事だって有り得るからな

雅和、お前は覚えてないだろうな

昔、柳木沢が美紗子さんを泣かせたときに言つた言葉

パパはママを好きじゃないの  
どうしてパパはやせしくないの

涙をいっぱい溜めたお前は小さい体で柳木沢に問つていたよ

柳木沢が家を出る原因の一つはゆりちゃんの非命だった  
そしてお前の言葉が柳木沢の背を押した

手塚、僕は由里子を亡くしてから夜毎咽び泣き悲しみに暮れてい  
僕は何も知らぬ美紗子と雅和の笑顔に答えてやれそうにない  
苦しい、苦しくてたまらないよ 僕は結婚すべきではなかつたんだ  
柳木沢はそう言って家を出た、悩んだ末の別居だった

「てつちゃん、色々足労かけて悪かったね  
今月の給料に色つけておくよ」

「そんな事はしなくていい 今はどこも大変な時勢なんだ

雅和は早く一人前になる事だ 仕事で柳木沢を父を超えるんだ  
現実は厳しいが、みんなで頑張つていこうな

「てつちゃん、ありがとう  
これからもう一指導、宜しくお願ひします」

「これからもビシビシいくからな、覚悟しつけ」

てつちゃんが帰宅した後も事務所にひとり残つていた。

「親父、おやじは死んで尚ビシして俺を苦しめるんだ  
今になつてなぜ又佐知を思い出させる  
なぜ・・俺を地獄に突き落とす」

雅和は壁に掛けられた父・柳木沢の写真を睨みつけていた。

## 24 縁(えんじ)？

雅和は仕事を終えると恋人・美香のマンションに向っていた。キークースを取り出すといつものように合鍵で部屋に入った。

今日も珈琲の香りが外まで漂っていた。

珈琲の香りは美香のお帰りなさいだった。

雅和が訪ねてくる日は決まってキリマンジャロを用意した。強い酸味とキレのある苦味そして濃厚なコクのキリマンジャロ。中でも特にケニア産のキリマンジャロがお気に入りの雅和だった。

美香はまだジャマイカ産のブルーマウンテン。  
ブルーマウンテンの卓越した香りと調和のとれた味わいが好きだ  
った。

互いに好みは違うが珈琲には独自のこだわりを持つていた。

美香と雅和の出会いは珈琲ショップ。  
厳選されたコーヒー豆を自家焙煎し量り売りしてくれるお店だつ  
た。

幾度もの偶然が重なり珈琲談議に花が咲き親しくなった。

「マー君、なにかあった」

「美香さんはすべてお見通しなんだな」

「さうよ、私は魔法使いなの  
だからマー君のことは何でもわかるのよ」

4つ年上の美香は頼りになる存在、新・恋人だった。

何かある」と顔を歪め眉根に曇りを見せやつて来る雅和。  
今日も一物を抱えやつて来たことなどお見通しだった。

雅和はアンティーク調の卓袱台の前に腰を下ろし美香のいるキッチンに体を捻じった。

「美香さん、もし、もしもの話だけど聞いてくれる  
もし自分に腹違いの兄弟がいるとしたら驚くよね」

「……」

美香はサイホンに神経を研ぎ澄ませていた。  
微妙な加減でのの字を書くように細くゆっくりとお湯を注ぎ入れ  
ていた。

「美香さん、聞いてる」

「あつ、『じめん、』『めんね、聞こえてるよ～  
それでいたの？その兄弟が』

「いるかもってそれだけのこと まだ確かめた訳じゃないから」

ペアカップを手にした美香は雅和と向き合った。

「根拠も確証もない話じゃどうにもならないわ  
兄妹がいたとして・・それが事実なら受け入れるしかないでしょ」

「冷静だな、美香さんは」

「きつと妻の子だからシビアで冷めているのよ  
性格、歪んでいるのかしさ」

「『じめん また思い出させてしまつたみたいだね』

「平氣よ、私は子供じやないんだからもう昔の』とは吹っ切れてる  
『一ヒー飲みましょ～、冷めてしまつわ』

世間のあざ笑う視線をかわし卑屈にならず生きてきた男勝りの美

香がそこにいた。

珈琲を美味しそうに口に含む美香は幸せだった。

姉のような頼れる存在でもある美香。  
美香がすべてをそき落とし女の素を見せる姿はたまらなく愛おしかった。

輝かんばかりの妖艶さを漂わし雅和を魅了した。

「涙してきたこの人を俺は幸せにしたい・一人で幸せになりたい」

静かな寝息を立てている美香の顔を見つめ雅和は又ギュッと抱きしめていた。

今夜は美香の柔肌に癒されていたかった。

「うーん、いたあーい  
まだ起きてるの・・もつ寝ましょ」

「うーん、起こしてうーん、おやすみ」

美香の寝顔に頬を寄せ眠りについた。

「おはよー、昨日あれから眠むれた?」

「あつ昨日はうめこね、起こしてやつて」

「いいの、誰だって悩み事を持っていると寝付かれないものよ  
生きていれば一筋縄ではいかないことだつて起こるけど解決法は  
簡単よ

白黒つけたらすつきりするわ、真実を確かめればいいのよ

「美香さんは今日も朝から絶好調だな～」

「降りかかる問題や苦しみには意味があると思うの  
人生に無意味なことは一つも起こらないと確信している  
苦のトンネルを抜けば必ず楽になる  
思いがけない幸せの駅に辿り着けるかも知れない  
自分の足と頭を使って疑問を解き明かしてみたらどう?  
事実は小説より奇なりつていうでしょ  
想像もしなかつた事がわかつたりするかも知れないわ」

「俺、真実を知りたいんだ」

「それじゃ、確かめるしかないわね」

「そうだな・・やつてみるか」

「これで決まりね でも熱くなると歯止めが利かなくなるから心配  
だわ

仕事にはぐれぐれも支障をきたさないようにしてね

「ああ今日も一生懸命生きますよ～」

美香はモーニングカップを持ち上げ乾杯してみせた。  
雅和は美香の後押しもあり父の過去を探るべく動きだした。

その頃佐知は幼少を過ぎた孤児院が取り壊されることを両親から聞かされた。

「一度、顔を出して」よつかな」

佐知の言葉に両親は大賛成していた。

「佐知、行つてきなさい  
あそこは佐知の人生で忘れてはいけない大切な場所だ  
もう一つの故郷でもあるのだからね」

父の言葉に頷く母は目頭に溜まった涙を隠すように抑えていた。  
思えば夫婦で電車に揺られ幾度も足を運んだ孤児院だった。

屈託のないとびきりの笑顔を見せ狭い園内を一人元気に走り回つ  
ていた佐知。

そんな姿を人目で気に入ったのは母・貞子だった。

子供のいない夫婦と義父母との静寂な生活を照らす灯り・希望そ  
れが佐知だった。

貞子は引き取りに行つた情景を思い出し胸を詰まらせていた。  
虚ろなまなざしの顔から笑顔は消え失せていた。  
今にも泣き出しそうな顔から不安な心情が読んで取れた。

「園長先生、私またどこかに行かなくちゃいけないの」

幼くして一人ぼっちになつた佐知

どんなにか孤独に耐えてきたであらう不憫さが湧き上がつていた。

貞子は実の親が願つた幸せをこの手で叶えたいと心から思つた。

「何があらうとも私が命をかけて絶対幸せにしてみせます」

何度も天上界の佐知の両親に誓つていた。

あの日の思いは薄れることなく今も変わらなかつた。

「佐知は私たちに会つて幸せだつたのかしら」

貞子は心に問いかながら佐知との歳月を噛み締めていた。

翌朝、母は孤児院に持たせるクッキーを大量に焼いていた。  
家中に香ばしいバターと甘いバニラエッセンスの匂いが漂つてい  
た。

まるでケーキ屋さんの厨房のようだつた。

両親に見送られ幼少の記憶をさかのぼる様に孤児院に向つた。

偶然にも記憶のない実父母の眠る同じ地へと。

そんなことは露知らず大きな土産袋を提げた佐知の心は早いでいた。

佐知は隣接する他県のある町に降りたつていた。  
おぼろげに残る記憶は見事なまでに追いやられていた。

田園が残る景色に建つ近代的な駅舎は全く異質なものに感じられ

た。

父がくれた手書きの地図を相棒に歩き出した。  
昔の懐かしい光景はどこにもなかつた。

地図を見せて乗り込んだバスに揺られること30分乗客は佐知ひとりだけだった。

目的地のひとつ手前のバス停に差掛かるうとしていた時だった。  
脂ぎった顔を光らせた運転手の大きな声が聞こえた。

「お婆さん、歩いて行くな此処で降りた方が近いよ」

佐知は素直に従いバスを降りた。

「『親切ありがとう』ございました」

ひたすら歩く道のりは遙か遠く近いよと言つた運転手の親切が恨めしかつた。

延々と続く砂利道に膝小僧が笑い出し足を止めていた。  
沿道の木陰に座り膝頭をさすりながら昔を思いだした。

大好きだった両親が突然姿を消し一人ぼっちになつた私  
訳もわからず役所のお姉さんに手を引かれたあの日の記憶  
涙ぐみ何度も足を止めたこの道

見知らぬ町を見知らぬ人に連れられて歩く私が姿を見せた。  
駄々を捏ね私は泣き叫んで父と母を捜し求めた。

付き添つお姉さんは優しく宥めすかしてくれた。

足を止め泣きじゃくると私を膝に乗せてくれた。

その度ドロップやお煎餅を取り出し食べさせてくれた。

食べ終えると機嫌が良くなる事をお姉さんは口も承知していた。  
仕事とはいえ親と離れ離れになつた子供の世話は大変だつたろう。

休憩を取つては水筒の水で喉を潤し又歩くその繰り返し。

気遣つてくれるお姉さんに笑顔一つ言葉一つも返さなかつた。

母にも似た手の温もりと優しさは逆に悲しみを一層膨らませた。

「優しいこのお姉さんもいなくなる　ずっと傍には居てはくれない  
人」

佐知は心を許すまいと頑なまでに拒絕した。

しかしそれは悲しみを最小限に止めるためだつたのかもしれない。  
悲しみを最小限に抑える手段を生まれながらに持つっていたのだろう。

肉親の居ない一人ぼっち、血の繋がりのない孤独。

孤児院の生活に普通の子供と同様の家族愛を求めるのは酷だつた。  
それを求めれば苦しみ悲しみを齎すだけだつた。

喜ばしい思い出ばかりではないが此処で出会つた人達は絶大な力  
を持つていた。

心の負を喜びに変えてくれたと言つても過言ではなかつた。

園長先生、ちい先生、食堂のお母ちゃん先生、懐かしい顔がくつ

きり浮かんだ。

絶大な力に圧されたように疲れも何処に飛んでいた。

砂利道を過ぎると前方に白い屋根が目に飛び込んできた。

「あつた 思い出のままの建物があつた  
此処だけはあの時のまま何一つ変わつて居ない」

佐知は懐かしさに呼吸が荒くなつて泣きそうになつっていた。  
涙で曇る瞳に人影らしき姿がぼんやり浮かびあがつた。

「さつちゃん サツちゃん」

涙の滴が落ちた。顔を上げた先には懸命に手を振るちい先生の姿  
があつた。

ちい先生の周りは次から次と懐かしい顔で溢れ始めた。

先生方の頭には白いものが混じり長い月日が偲ばれた。

淋しくなると部屋を抜け出しては忍び込んでいた園長室に通された。  
まさしく懐かしい古里だつた。

一番に会いたかつた園長先生を佐知は神妙な面持ちで待つていた。

「お待たせしてごめんなさいね  
さつちゃんが来てくれるなんて夢のようだわ  
みんな楽しみにしていたのよ」

笑顔の園長先生だけは当時のまま変わつていなかつた。  
昔にタイムスリップしたようだつた。

佐知は昔の泣き虫わっちゃんになつてゐた。  
見せない涙・弱さを園長先生だけに見せる甘えん棒わっちゃんに  
戻つていた。

「園長・・先生」

「わっちゃん、どうしたの」

「園長先生、『ごめんなさい』  
昔を思い出しても又懐かしい顔に会えてうれしくて  
約束破つて、泣いて『ごめんなさい』」

「悲しみのつらい涙はもう流さない・・  
此処を出る時の約束をまだ覚えていたのね  
いいのよ泣いても、うれし涙なら今日は存分に流しなさい  
園長先生は朝から楽しみにあなたを待つていた  
成長したわっちゃんに会えてとっても嬉しいわ」

「園長先生、ありがとうございます  
あつ、これ母が朝作つて持たさせてくれたクッキーなんです」

「まあ、ありがとうございます  
眞子母さんのお心遣い有難く戴きますね  
」両親にはまめに写真とお手紙を戴いていたのよ  
だからさつちやんの成長が手に取る様に分つて嬉しかった  
さつちやんの成長を皆で喜んでいた事がまるで昨日のよう

「両親が手紙を、そうだったんですか」

「わっしゃん、ちょっと待つでね」

園長先生は笑顔を残し部屋を出て行った。

お土産のクッキーと紅茶を持って入つて来たのはちい先生だった。

「御持たせですけど、さあ、どうぞ

さつちゃん何だかすっかり大人になつて、もうさつちやんでなく  
佐知さんつて呼ばなくちゃいけないわね

「ちい先生、私、此処ではこつまでもさつちやんでいたいです  
だから昔のままさつちやんと呼んで欲しいんです  
昔のよつて呼ばれていたんで呼んでください」

「ちいちゃん」

ちい先生は腰を下ろして佐知を抱きしめてくれた。

この温もりは紛れもなくちい先生・先生の腕、こんなに細かつた  
んだ

華奢な体で大きな愛を注いでくれたちい先生に溢れる感謝でい  
っぱいになつた。

「ちい先生、お世話になりました。本当にありがとうございました  
ちい先生に育てていただいたことを私は決して忘れません

此処は大切な場所、私の故郷です

そしてお世話して下さった先生方、ちい先生は大切な人

此処が閉鎖され無くなつてしまふのはとても寂しいです  
でも、記憶は心に残る想いはいつまでも消えませんよね

形ない物に価値を見いだせるようになつたら一人前と先生は教え  
てくれました

よその子と同じ事をしたいとか同じ物が欲しいと駄々をこねると  
先生は言いました

皆と同じそれはそんなに重要なことなのか、本当に必要なのか  
必要ならば納得のいくような説明をするべきだいつも真剣に向き  
合つてくれました

突き止め考へてみると本当に必要なものはほんのわずかでした  
ほとんどの物は自分の優越感に過ぎないのだと分りました

物で心は満たされない哀しみは埋められないんだと知りました  
此処に戻ってきて田に見えない形のない物の大切さを改めて認識  
しました

人の心・愛・慈しみどれも形のないものです  
そしてそれらは偽りのない本物でなければ伝わらない決して響かない  
嘘のない想いを持つて人と接しなければ「見える」とも受け取ることも出来ない  
私はここで過いせた日々を感謝しごとに教えたこれからも忘れません」

「せつちゃんは、本当に立派に成長したのね  
先生うれしくて・・・『めんなさい』

嗚咽にも似た声をハンカチで覆いちい先生は肩を震わせ部屋を飛び出していった。

## 26 出生・佐知？

緊張が解けた佐知はクッキーに手を伸ばし口に入れた。

母の手作り菓子の中でもこのクッキーは3本指に入る絶品だった。

「おいしい、やっぱり、お母さんのクッキーは世界一だ」

空になつたカップと菓子皿を几帳面にテーブルの端に寄せていた。

ドアが開き箱を手にした園長先生が戻ってきた。

千代紙がモザイク状に貼られた箱がテーブルに置かれた。

「これは本当のお母さんが大切に持つていた遺品なのが成長したあなたにつか渡して欲しいと貞子さんから預かっていたの」

「本当のお母さんの・・・中を見てもいいですか？」

「勿論よ、ゆっくり御覧なさい

園長先生はホールで片付けをしてますからね」

「はい」

箱を目の高さに持ち上げてまじまじ見ていた。

落ち着いた色調と和紙特有の手触りは気持ちを和ませた。

色の褪せた群青色のリボンを外しそそと箱を開けた。写真とメッセージカードが箱から溢れんばかりだった。

「赤ちゃんの写真、これが私」

一枚・又一枚、これといった感情も湧かずただ眺めていた。箱の底が近づくと一冊の小さなアルバムがでてきた。

写真の一つ一つに「メントがびっしり書かれてあった。

「これが・・・お母さんの字」

丸みを帯びた流れのような筆使いに温かみを感じた。

顔の半分を占める大口を開けて笑う赤ちゃんの写真には「天使の笑み・愛しい我が子」題名がつけられていた。

「さつちゃん、あなたは幸運を運ぶ天使・大事な宝物です  
私達のもとに生まれてくれてありがとう

あなたはお父さんとお母さんの大切な宝・神がお与え下さった天使です

嘘のない誠実な人に育つてほしいと願っています  
あなたのお父さんのようにね

お母さんとお父さんは大恋愛で結婚したの  
私たちの愛の結晶がわっちやん、あなたです

お父さんとお母さんは毎日幸せです  
幸せの涙を流す喜びを教えてくれたのはあなたです  
わっちやん、これから家族でいっぱい幸せになりますよ／＼

「私は愛されていた 母は私の誕生をこんなに喜んでくれた」

佐知の鼓動は激しく波打つていた。

アルバムの最後に微笑む男女の写真が貼られていた。

「これが私の・・本当の両親」

哀しい事に懐かしい何一つの感情も覚えなかつた。

「心に何かが確かに何か押し寄せているのに」

高く積まれた写真を戻そつと空箱を持ち上げた時だつた。

スウツ・スウ・・紙のするる音が聞こえた。

目を凝らし箱を覗くと端が不自然に膨らんでいた。  
ジャンプ台のように傾けてみると膨らみが動きを見せた。

確かめると底は二重になつていた。

固い台紙を剥し捲ると一通の封筒が現れた。

しつかり糊付けされ厳重にテープまで貼られていた。

封を開けた現れた便箋は色鉛筆で水色に塗られ七色の虹が架けられてあつた。

/柳木沢和人様

柳木沢君を忘れ消し去るためここに想いのすべてを封印しますあなたと会えなくなつて私はずっと後悔の日々を送っていました未練を引きずり何度も会いに行こうとしましたでも出来ませんでした

何のため気持ちを押し殺してきたのか今更ながら悔やまれます少しだけでも気持ちを伝えていれば甘えていればと・・・

若かつた私は嫉妬していたかもせん  
恵まれたすぎた境遇のあなたがまぶしかつた

いつだつて曇りのない満面の笑みを浮かべ陽気なあなたが

そんなんあなたに私の苦労など分りはしないとずっと思っていた柳木沢君の隣に笑顔になれないもう一人の卑屈な私がいましただから弱音を吐いたり見せることができなかつた

一度と会えないと諦めていたあなたの再会は夢のようでした柳木沢君から電話を貰うなんて思つても居ませんでした

あの日の私はあなたを困らせ、どうかしていました

閉じ込めていた想いは止められませんでした

理性を失うとはこういう事なのでしょうね  
本当にあの時の私はおかしくなっていました  
いいえ、私はそれを望んでいたのかもしれません

子供を身籠つた事を知りそれを確信したのです

私は子供を一人で生み育てていこうと決心していました  
宿つた小さな命が愛おしくてたまらなかつたのです  
まるであなたが宿つているようにさえ思えました  
柳木沢君と一緒に過ごした幸せが帰ってきたのです

でも、この世に生まれた我が子は間もなく天に召されました  
神は私とあなたの子供の成長をお許しになりました  
神が下した決定は残酷でした

しかし愛する人の分身・命を育む時間を与えて下さいました  
身重の10ヶ月に及ぶ幸せな時間は神からの贈り物でした  
幸せな時間が悲しみの私を生きる喜びへと導いてもくれたのです  
わざかな命を逝ききつた我が子は父と一緒に眠っています

子供の名前はあなたから一字頂いて付けました  
「和由」和人の和でかず、由里子の由でよし

失つたものは大きすぎました

私はこれまで以上に力強く生きて行きます

一度と大切な愛を手放さぬよう正直に生きてゆきます

黙つてあなたの子供を産んだ事をお許しください  
もうこの世に居ない和由は心底愛し合つた柳木沢くんと私の愛の  
賜物でした

由里子／

「柳木沢、実母が愛した男の名  
かつて愛した人の父親と同じ苗字だなんて」

書き記された柳木沢という男の影がいつまでも頭から離れなかつた。

同時に兄がいた事を知り驚きを隠せなかつた。

「私に兄が・・和由といふ兄さんがいた」

## 27 出生・佐知？

トン・ト・トン

園長先生がドアの隙間から顔を覗かせた。  
手紙を慌てて箱に押し込む佐知の顔は蒼白で血の氣が失せて見えた。

「さつちゃん、大丈夫」

「園長先生、両親は私の誕生をとても喜んでいました  
私は愛されてこの世に誕生した事を知りました  
本当の両親の心に出会えて嬉しい、嬉しかった

でも、悲しいけれど私の心には響いてきませんでした  
もつと途轍もない感情に押しつぶされるのかなと思つてたのに  
驚くほど冷静な自分がいて・・狐につままれたみたいで」

「さつちゃんにとって両親は今のお父さんとお母さんですもの  
そう簡単に本当の『両親の心を受け入れられないでしょうね

でもさつちゃんは愛されて誕生した事を知つたわ  
愛されていた事がわかつて嬉しかったと言つた

園長先生はそれが一番だと思う、今はそれでいいんじゃないかな  
少しづつ理解できる、必ず心に響く日が来るから」

「いつか今遠くに感じじる両親を身近に感じじられるのじょつか

「さつちゃん、結果を急がないで  
人生の歩みの中でいつか体に自然と入ってくる、それを信じまし  
ょう」

「はい」

「さあ、遅くなつたけど毎食の支度がしてあるのよ  
みんな待つてゐから食堂に行きましょ」

10帖程の食堂で園長先生と並んで長テーブルに座つた。  
子供達の姿はなく大人だけの静寂な食堂はどこかうらがなしかつ  
た。

賑やかな声が飛び交い笑い声に溢れていた昔の食堂が懐かしかつ  
た。  
食事担当のお母ちゃん先生が見つからず辺りを探していた。

「お母ちゃん先生は、もうお辞めになつたのですか

「・・・」

先生らの顔が曇り沈黙が流れる瞬間に空気が変わった。

「齊藤先生は・・去年お亡くなりになつたのよ」

園長先生の言葉に佐知は肩を落とした。

「どうか、お体が悪かつたのですか」

「ええ、持病の腎臓が悪化してね

入院したと聞いてからあつといつ間の事だったの  
まさかこんなに早く旅立つとは思つてもいなかつた  
お見舞いもお別れも出来なかつたのよ

「・・・」

「わちやん、顔を上げて『らんなさい』

お母ちゃん先生は此処でみんなを見守つてくれたのよ

ちい先生の指す指先を追つた。

「あー、お母ちゃん先生」

頬ずりしてくれた肉まんほっぷのお母ちゃん先生が微笑んでいた。額の中のふくらした頬のお母ちゃん先生は佐知との再会を喜んでいるようだつた。

「お母ちゃん先生今までありがとうございました  
安らかにお眠りください お疲れ様でした」

手を合わせ続ける佐知の姿に一同も頭下げ黙祷していた。

大きな鉄なべが運ばれてくると食堂はしょわわの香ばしこ匂いに包まれた。

「ここのお母ちゃん先生の芋っこ煮?」

ちー先生がなべの蓋を開けると丘ご湯気が勢いよく立ち昇つた。

「ちーちゃんが大好きだった芋煮よ  
お母ちゃん先生と同じ味にはならないけれど、懐かしいでしょ」

山形生まれのお母ちゃん先生は郷土料理を沢山作ってくれた。

中でも一番だったのがこの芋煮。

夏の熱風が涼しい秋風に変わると、山形は芋煮会で盛り上がりと聞いた。

初秋の川原は芋煮の鍋を囲む家族や仲間で賑わうのよと懐かしそうに話してくれた。

「川原で食べる芋煮はね、味が落ちるくらい美味しいんだよ」

「それもたべてみたいなあ」

「じゃあ、今日また煮てよ」

「おゆひさん先生、作ってくれるの？」

「やつちやんの『料理』を答へてしまつ

たの代わりお手伝いしてもらひたいからだんだいなあ

「やつたあー やつ、おゆひさん先生のお手伝いする

ねゆひさん先生の側で一緒に作った芋煮を思い出した。

里芋・じそ・牛肉・ねぎ・いも、冷蔵庫にあったきのこ

平茸も・

出来上がったしょいみ味の芋煮の味は今も忘れられなかつた。

「芋っこ煮」とメニュー板に書いていたお母ちゃん先生を思い出した。

何気に食堂のメニュー板に田を移してみた。

「本日の献立 芋っこ煮」

あつた・昔のまま芋っこ煮と書いてあつた。

佐知は嬉しかった。

姿は見えなくともお母ちゃん先生の愛情に触れたような気がした。胸が張り裂けんばかりに嬉しかった。

この思いが何故、両親に湧き起こらなかつたのだろう・・・  
血を分けた父母よりもお母ちゃん先生への思いのほうが勝つてい  
た。

芋っこ煮で甦つたお母ちゃん先生の愛情・肉親に沸かなかつた感情  
合ひ重なる複雑な思いが甘くて苦い涙となつて零れ落ちた。

「懐かしくて美味しくて涙が出ちゃつ 泪が止まらなくなつちやつ  
た」

心の深層を押し隠そつと飛び切りの笑顔ではしゃいで見せた。

暗くなるまで先生方と別れを惜しみ佐知は思い出の孤児院を後に  
した。

「ただいま」

「お帰り佐知、疲れただろうお疲れさん」

「うん、疲れたあ～今田はもうこのまま部屋で休むね」

両親は詳細を根掘り葉掘り聞こうとはしなかった。

佐知は部屋に入るなり疲れ果てた体をベットに投げ出していた。食欲もわからず今日は早めの就寝と決めこんでいたのだが目が冴えて眠れずドアを開けた。

廊下にはおむすびと梨・紙パックのウーロン茶が置いてあった。階段を下りていくと両親の声が微かに漏れ聞こえてきた。

「母さん帰ってきた時の佐知はどこかおかしかったな、何かあったのかも」

「又はじまつた、父さんは心配性ですね  
あなたの思つている以上に佐知は大人ですよ 今日は疲れているだけです

あなたの地図を頼りに一人で出かけたんですからね  
張り詰めていた気持ちがほぐれて疲れが出たんですよ  
一晩ぐっすり眠れば大丈夫、明日になれば元気な笑顔が見れます

よ、お父さん

「ならここのだが、母さんと部屋の様子を見に行つてみたらどうだ」

「今日はそつとしてあげましよう

佐知が自分から話してくれるのを待ちましょうよ

父ちゃんが言つように何かあったに違いないけれど・ね、お父さん

立ち聞きしていた佐知は足音を忍ばせて部屋に引き返した。  
おむすびを口に運びながら今日の出来事を口々送りのよつにバッ  
クさせていた。

実母が愛した柳木沢という男の存在が強烈に残っていた。  
その柳木沢という男が見ず知らずの他人とは思えなかつた。  
魂がその男<sup>ひと</sup>に会いたいと泣き叫んでいるかのようだつた。

今は亡き柳木沢への慕情が溢れ出し眠れぬ一夜となつていた。

恋人の美香は食品メーカーの営業職に就いていた。

新人研修のあと同期の男性陣のほとんどが東京本社に残った。

私が支店に追いやられたのは女だから・・

今も美香の心に尾を引き残る忘れられない出来事だった。

部長から全員に本社の営業研修参加への打診があった。案の定、誰一人手を上げようとなかった。

「私に行かせてください」

美香が一人手を上げた。

「さすが営業の女神様だな

あとの2名は私のほうで決めるからそれでいいね」

いつか本社に戻つて仕事をしたい

本社に行けるなら研修でもなんだつて受け入れる

同期の仕事ぶりも見聞きしたい

誰もが行きたがらない研修だったが美香は期待に胸を膨らませていた

トップの成績を維持する紅一点の美香を崇める社員も少なくなか

つた。

男と渡り合つ強さと女ゆえんの柔軟をあつての為せる業であった。  
強さは生い立ち・環境の賜物と不幸も強運にかえてしまつ力を持っていた。

先輩の嫉み・嫌がらせは美香を仕事に駆り立てる一因に過ぎなかつた。

どんな時も丁重に驕らず淡々と仕事をこなす美香。

そんな姿に目の仇とする先輩一派の不穏な空氣は薄れていった。  
個人能力を競う世界に嫉み・そねみはつきものだった。  
学生時代の陰湿・執拗な虐め同様に会社の出来事は言つに及ばぬものだつた。

「苦々しい歯がゆい経験があつたからこそ私はいま人生を謳歌して  
いる」

過去に感謝することはあっても恨み言ひひとつ口にすることはなかつた。

崇高な精神を持ちどこか浮世離れしたオーラを放つ美香。  
営業の女神と崇める軟弱な若手社員の気持ちが分らないでもなかつた。

今回の東京出向は一週間の日程が組まれた営業研修だった。  
静岡支店からは3名の研修参加。  
他2名が誰かは蓋を開けるまで分らなかつた。

先輩と同行した東京出張の息が詰まる細る思いを必死に追い払つ

ていた。

貼り出された研修社員名を顔を隠した指の隙間から見ていた。

若手ホープの原田・美香の親衛隊の一人で腰巾着のような伊藤後輩の二人の名前を見つけほつと胸を撫で下ろしていた。

本社に向う美香は研修初日から首を上げそうになつた。先輩との出張の移動は車だつたが今回初めての電車移動に戸惑つていた。

朝の通勤電車は想像を遙かに超えるものだった。追い討ちをかける様に初日からトンでもない出来事に遭遇した。

「痛い！だれ、誰なの やめて下さい  
私の尻をつかんだのは誰！」

お尻を鷲掴みされた美香は思わず怒りの声をあげた。

素知らぬ乗客とは対照的に同僚一人は目を白黒して首を横に振り続けた。

この通勤に慣れるのは到底無理と眉間に蹙らせていた。

平凡とこの日常を送っている都会の人つてすごいなあ  
尊敬の念で乗客の顔を見渡していた。

緩やかに流れる地方都市で頑張ってきた自分が半人前に思えた。  
ため息を溢しながら電車に揺られる美香の精彩は失せていた。

研修も残すところ一日となつた。

昼食の幕の内弁当が配られ緊張の糸がほぐれた瞬間だつた。

バタツ・・

床に崩れた美香に男性一同が手を差し伸べようと駆け寄つてきた。

「美香さん、美香さん、み・か・せ・ん」

薄れゆく記憶、名を呼ぶ声も遠のいて聞こえなくなつていつた。

美香の姿を見た男性達はたじろぎ後ずさりを始めた。

スカートがめぐり上がり艶かしい太ももがあらわに出現していた。

半開きの口と白皿をむきだした顔はそれは無残で例えようもない有様だつた。

伊藤はとつさに自分の上着で体を覆い両手を広げて立ちしていた。

「大丈夫ですから席についてください  
皆さんはお昼にしてください 戻してください」

大声で野次馬達の好奇な目を必死に追い払う原田だつた。

美香の意識が戻ったのは病院に運ばれた翌日だった。

美香の傍には本社営業部長の山村が神妙な面持ちで座っていた。

「う・う・う・佐知は小さな呻きを発して目覚ました。

「木内君、わかるか」

「ええ、ここは病院?」

「よかつた、これで一安心だ

君は研修の途中で倒れ一昼夜眠り続けていたんだ  
念のために検査入院の手続きをとつたからゆっくり体を休めなさい  
命に係わる事ではなさそうだが上からの指示だからしそうがない  
な」

「ありがとうございます

研修途中なのに申し訳ございません」

「いいや、気にしなくていい

君は優秀なトップセールスマンだ  
研修は予定どおりに皆と一緒に終了だ

「ありがとうございます」

「今回の件で君が女性だって事を証明できたな  
良かつたんじゃないのか  
女の君がトップに登りつめたといつても男社会の現実は厳しいものだ

体を壊してまで男と張り合おうなんて思わないことだな  
また倒れられでもしたら大ごとだからね

静岡の支店長には連絡済みだから心配しないでいい  
支店長言ってたぞ これからは少し手加減してやらないとなつてね  
女は回りに可愛がられ気遣つて貰うぐらいが丁度いいんだ  
会社は君に男と同じ器量を課してはいなはずだ あんまり無茶  
するな」

「山村といつ男は女を見下している。  
男には勝てないのがわかつただるつと勝ち誇つている。  
怒りが込み上げていた。

私こんな男を役職に就ける会社のために頑張つてきたの  
仕事漬けの日々が虚しく思え固く閉じた唇を噛みしめていた。

何かを察したかのように山村は腰を上げた。

「じゃ、僕は会社に戻つて君の報告をしなければ  
悪いが、これで失礼するよ  
何か必要なものがあれば届けさせやるよ」

「ありがとウイゼーさま」

山村は枕元にそつと手力を置いて帰つていった。

ぎゅっと握り締めていた汗ばんだ拳をそつと開いてみた。手のひらには爪あとが刻まれそれは赤黒く鮮明に浮かび上がつた。怒りの感情が下降線を辿ると爪あとの痣もいつしか消えていた。

真新しい制服姿の看護婦が袋を持って病室にやつてきたのは日暮れどきだった。

「木内さん、寝てらしたので・・すみません  
同僚だとおっしゃる方が置いていかれたもので  
私はつかり忘れて本当にすみません」

「ありがとう 気にしないで」

出でてきたのは原田からの図書カードと伊藤からの親指をくわえた  
お猿の縫ぐるみ

そしてお見舞いのメッセージカードだった。

「うううとき人柄つて正直にでるのね

ありがとう原田君、伊藤ちゃん

「モンキー伊藤、ちよつとこここ」「モンキー又お前か、何やつてん  
だ」

仕事は今一だが愛嬌のある憎めない伊藤を思い出し自然と笑みが零れた。

伊藤に似たお猿の頭を撫でながら一人の心遣いに胸を熱くしていった。

一方、旧恋人の佐知もまた院長に同行し上京していた。

学会を終えると院長は弟が院長を務める病院へとタクシーを飛ばしていた。

佐知は付き添いとしていつも同行を余儀なくされた。

「一人で大丈夫だ 付き添いは要らん」

院長の言葉に院長婦人は頑として譲らなかつた。

息子一人を持つ院長婦人は佐知をお気に召したようで旦にかけ可愛がつっていた。

「佐知さん、お父さんを宜しくね」

院長婦人の言葉に戸惑つていた。

どうしていつも院長でなくお父さんを宜しくなんだろ？

ホテルに着くと毎度ながら院長婦人からの伝言が届いていた。首を長くして電話を待つてゐる婦人の姿が浮かんだ。

院長が出張先のホテルで倒れ大騒ぎになつてから婦人は神経質になつていた。

焼きもち焼き？なのかな

婦人の院長に執着する異常なまでの言動は時に殺氣を放ち怖くさえ思えた。

婦人は院長の体調に問題がないとわかれ上機嫌で電話を切った。妻に頭の上がらぬ院長から想像していた夫婦像とは別の貞淑な婦人の顔があった。

「佐知さん、お疲れ様でした

明日はお父さんも敏伸さんの執刀に立ち会つとか言ってたけど」

「はい、そう聞いています」

「明日の朝、お父さんにトマトジュースを差し上げて頂戴ね  
オペの日はトマトジュースしか摂らないの  
宜しくお願ひしますね」

「はい分かりました お休みなさい」

明日は弟の敏伸が執刀するカテーテル治療に加わることになつて  
いた。

院長の弟はいち早くカテーテル治療を導入した脳神経外科医だつ  
た。

患者は80代の男性

首の片側の血管が非常に細く殆どと言つてもいいほど血が通つて  
いない。

放置すれば脳梗塞がいつ起きてもおかしくない病症だった。

治療は足の付け根から管状の治療器具を入れ首の血管を拡げるものだった。

高齢者にはリスクも高いため家族の意思も考慮した上で手術だつた。

「先生、父にはもっと長生きして欲しいと思っています

いつまでも元気でいて欲しい、これが家族みんなの願いなんです」

息子の言葉に黙り込んでいた患者が朴訥と口を開いた。

「先生、私はね、もう十分生きたじゃないかと言い聞かせました  
だからもうこのまま天命に従おうと思つたんです  
でも家族から弱気にならず長生きしてくれと涙されましてね  
人はこの歳になつても、いやいくつになろうとも生に執着するも  
のです

死にたくはないんですよ　だから先生宜しくお願ひします

「いやらしくお願いします

横田さんそして「家族に別うよう全力を乞へさせて頂きます

いつもして脳梗塞カテーテル手術は施されることになつた。

手術を見届けた院長が手術室から出てきた。

疲れが色濃く見て取れる院長は空元気の笑顔を見せた。

「早く戻ろ、三日も病院を空けると患者のことが心配でたまらん

明日は通常通り朝から患者を診るつもりだ  
皆井君、すまないが今日中帰れる様に頼むよ

「はい、わかりました

では私から奥様にもお伝えしておきます」

「そうしてくれるとありがたい」

院長は患者を第一に考える温かみのある赤ひげ先生そのものだった。

携帯電話を握り締め院外に出ようと急いでいた。  
扉が開いたエレベーターに乗り込もうとした瞬間だつた。  
ドンと鈍い音と共に尻餅をついた女性が目に飛び込んできた。

降りようとしていた入院患者を佐知は突き飛ばしていた。

「申し訳ございません

大丈夫ですか、お怪我はありませんか」

「これくらい全然平氣、大丈夫」

「ごめんなさい、本当にすみません  
私の不注意で本当にごめんなさい」

「大丈夫、大丈夫！だからそんなに謝らないで」

「本当に、どうも何ともないですか」

「ええ、ほら・ねつ」

歯切れの良い口調と素早い身のこなしで起き上がった女性に安堵していた。

「急いでいたとはこゝれ本当に申し訳ござりません」

「やだなあ、また謝る、もう気にしないで  
急いでこらなはら早く乗っていかないと、わあ早く」

「ええ、ありがとうござります それでは失礼します」

その場を離れ歩き出した女性の背中越しに大きな声をかけた。

「本当にすみませんでした」

女性患者は笑みを浮かべ肩越しに手を振り去つていった。

この女性患者が雅和の恋人美香でその美香に頭を下げたのが佐知  
だつた

新旧恋人の突然の出会いは一人にとつては単なるハプニングに過ぎなかつた。

しかしこの出会いは否が応でも再会せざるえない運命の糸で結ば  
れた瞬間だつた。

美香が倒れたことをメールで知つた雅和は病院へと急いでいた。  
てつちゃんから半ば強引に許可をもらつての上京だつた。

「美香さん」

「嘘でしょ・・どうしたの」

「美香さんが心配で会いに来たよ  
仕事にかまけっぱなしじゃ会いたくても会えないからね」

「びっくりした」

「驚かせてごめん、体はどう、大丈夫なのか」

「ええ、ほりもひ、ピンパンしてゐ  
でも・・勝手知らない場所の入院は心細くてたまらなかつた」

「やあぱつ俺来てよかつたよ

美香さんの悲しそうな顔が毎晩夢に出ていた心配してたんだ」

「私の事が分るよつになつたんだある」

「また馬鹿にしてたんだ」

「トソンでもない、馬鹿になんかするもんですか  
来ててくれたものすいじへ感謝しているわ」

「美香さんの退院に合わせて一緒に帰省つて来たんだ」

「うれしこね～・・仕事は平氣なの」

「てつちゃんから仕事をもらってきたんだ

今からアポの会社に行って来る 夜また顔を出すよ

「ちょっと待って マー君の田じり下がりぱなしよ  
仕事モードに切り替えてがんばって」

「しっかり仕事してくれるよ」

頬をたたき男意氣を見せ仕事に向つていつた雅和が頼もしく嬉しかった。

午後の検温に来たナースに退院の日程を尋ねていた。

「まだ退院は無理でしょつか」

「木内さんの入院は5日間となっていますね  
先生に聞いておきますが」「希望はありますか?」

「あやつて頃は・・聞いていただけますか

「わかりました 先生に確認してお知らせしますね」

「宜しくお願ひします」

こ一時間もしないうちに美香の希望通り退院の許可は下りた。  
しかし条件付だった。

念のため必ず地元の病院で脳の精密検査を受ける」と

倒れて運ばれても忘れ美香は聞き流していた。

後に人生を大きく揺るがすことになろうとはこのときは思いもしないもしかつた。

雅和はそつなく仕事をこなし新たな仕事も取り付けていた。

私情で上京した東京で手柄なく帰ることだけは避けたかった。

てつちゃんの喜ぶ顔が浮かんで胸を撫で下ろしていた。

退院の朝、美香は昨晩詰め込んだ荷物を「ゴソゴソあさつていた」とうとうバッグを逆さに荷物をベッドに並べ始めた。

「何か探しもの?」

「あああ、どうじよひ」

「そんなに大切なものの?」

「『めんね、ほんとに』『ごめん』

「何が『めんなんだか、わからないよ』

「マー君から貰つたペンダントを失くしてしまったみたい  
大事なお守りだから持つててきたのに見当たらないのよ」

「探しものってペンダントのこと・・か

俺の安月給で買つたあのペンダントなら気にしないでいいよ  
今度はちゃんとしたものを見つけてあげるからや」

「あのペンダントは大切な気に入りだつたのに」

「なくなつた物はしようがないだろ  
退院祝いに新しいの買つよだからもうあきらめなよ」

「そうね、あきらめるしかないわね  
あつそれよりお見舞いに来てくれたお礼をしなくちゃね  
帰つたらマー君へのスペシャルサービスしちゃおつかな」

「・・・・・」

「やだなあ何恥かしがつてるの まだまだ子供なんだ〜」

「いじわるな美香さんなんか放つて俺一人で帰るうつかな」

「だめ・置いていかないで迎えに来てくれたんですね」

「だったらまづは荷物をバッグに戻してからだね  
さあ早く支度して一緒に帰ろう」

二人は手をとり帰路に着いた。  
外で夕食を済ませた二人は美香のマンションに落ち着いていた。  
ベッドに入つた雅和は美香の体を気遣つていた。

「…どうしたの、いつもと違つ  
今日は…私がほしくないの」

「今日はいいんだ 美香さんは病みあがりなんだから  
こうして美香さんの側で眠れるだけで…それだけでいい」

「そんなのいや

病院の生活は寂しくてマー君の温もりがとても恋しかった  
こうして二人の時間が戻つたのよ、一人になれたの  
だから…お願い」

その言葉が引きがねになつて雅和の熱い思いが満ち溢れてきた。

「俺、本当に美香さんを心配してた

無事に帰つてくれて俺、うれしいよ

「その気持ちをそのまま私にぶつけて」

二人は激しく重なり合っていた。

動物精気がムクムクと顔をだし情念の炎となつて燃え盛つた。

二人は悶え振るえ狂おしいまでの感情に見舞われていた。

色香漂う美香のやけに白いうなじが艶めかしかつた。

雅和の上に乗る美香の首筋にキラッと光る汗の滴はトパースの原石のようだつた。

背中の窪みさえ彫刻の女像のようでもぶしかつた。

しなやかな上半身を小刻みに振動させる美香は美しかつた。

美香の大人の色香に身も心も溶けていた。

この夜一人はいつまでも体を離そつとしなかつた。

朝日が昇る窓べに朝を告げる鳥たちのさえずりに聞こえていた。  
久しぶりに一人で迎えた朝は爽快な日覚めだつた。

仕事帰りの佐知はジャケットを受け取るついでクリーニング店に立ち寄っていた。

価格競争で生き残りを賭けるクリーニング店が軒を連ねる商店街。そんな中で職人技の手作業にこだわり頑張っているこのお店。確かに値段は格段に高く佐知には正直痛い出費。

それでも長年お世話になつたこのお店を変える事は出来なかつた。

「さつちゃん、これポケットに入つていたよ」

仕上がりのジャケットと一緒に白い封を手渡された。

袋を覗くと銀色のペンダントが見えた。

「あっ・あの時のペンダント」

上京した時に病院のエレベーターで拾つたペンダントだった。慌しく急かされるように院長と帰路に着いて忘れていた。

「そうだ・あの時、胸ポケットに押し込んだペンダントだ」

自宅に戻つた佐知は部屋でペンダントを見つめていた。コラコラ揺れるペンダントを翳しながらあることに気がついた。

これはロケットペンドント

この中に写真が入ついたら手がかりがわかるかも

ペンドントに爪を立て中を開けてみた。

思いもかけぬ展開に血が失せてゆくようだった。

丸く切り取られた人物写真があつた。

それはそれは小さな写真で判別不能かと思われた。

しかし佐知にはすぐにわかつた。

「なぜ・・・」こに雅和の写真が

頭が真っ白になつて佐知はペンドントを床に落した。

慌てて拾い上げたペンドントから写真が飛び出していた。  
その写真を大事そうに持ち上げたそのときまた衝撃が走った。

雅和の後ろに女性の写真が重なり合つて貼られてあつた。

「この女性は確か病院で会つたあの人  
エレベーターでぶつかつたあの人だわ」

写真を戻し口ケットを閉じる指先の震えが止まらなかつた。  
愛おしい遠い日々を思いながら現実に向き合つていた。

「雅和には新しい恋人がいる  
やはり誰かを隣に歩き出していた  
その恋人が病院で出会つたあの人なら・・  
とても感じのいいあの女性なら一人はお似合いのカップル」

涙の泉はとうに枯れ果て涙が零れ落ちることはなかつた。

恋する乙女のよつに胸躍らせ雅和との思い出を懐かしんでいた。  
息苦しさにも似た荒い息遣いを見せ雅和を偲んでいた。

「会いたい 雅和に会いたい  
未練など断ち切り忘れたはずなのに」

雅和への想いが洪水のよつに溢れ出していた。

「Jのペンドントは再会を齎す神様からの贈り物  
勝手な解釈で閉じ込めた思いを開け放そうとしていた。

／真砂子、お久しぶり

教えて欲しいことがあるの

雅和の会社の名前、真砂子なら覚えてるよね  
時間のある時で構わないのでメールください 佐知／

メールは送ったものの、なしのつぶてだった。

毎度の待てども来ない返答に諦めの色を濃くしていた。

そんな真砂子からのメールが届いたのは10日目だった。

／はい 佐知、元気してる  
会社名は井川パートナーズだよ／

真砂子らしい詮索なしのメールが嬉しかった。

104で雅和の電話番号を手中にしていた。

しかし一向に進展はなく佐知は長い葛藤の日々を送っていた。

「今更、何してんだろう」「私」

「何を言つてゐるの  
雅和とまた話せるのよ  
このチャンスを逃すつもじ」

「雅和にはもう恋人がいるのよ  
今更・・電話なんてやつぱり出来ない」

「ペンドントを持ち主に返す本来の目的はどいつなつたの  
そのために雅和の電話番号」を調べたんでしょう」

表裏一体の心の声を聞きながら電話番号を見つめ続けた。

「落し物を持ち主に返すため そう・ただそれだ」

佐知は冷静さを取り戻していた。

「過去には戻れない  
過去の思い出に続きなどありはしない  
壊れた愛を繕うなんて決して出来ないんだ

それでも私は雅和との繋がりをこのきつかけを逃したくない  
せめて声だけでいい・雅和の声が聞きたい」

激昂にも似た抑えられない感情に流されるまま電話番号を押した。

「私 皆井と申します

井川雅和さんはいらっしゃいますか」

「たつた今事務所を出られたんですが  
あつ、ちょっと待つてください」

パタパタ走る音、カラカラ窓を開ける音が聞こえた。

「雅和さん お電話が入つてます  
かけ直してもらいましょうか」

「戻るからいよ、待つてもらつて」

微かに聞こえたソフトでそれでいて野太い低音が心に響いた。

「今戻つてきますからそのままお待ちください」

待ち受けのメロディーが流れた。

雅和が好きだった曲・・聞き入るうとした時  
早押し曲あてクイズのようにメロディーはピタッと止んだ。  
思い出に漫る」とさえ許さず拒絕するかのようだった。

「もしもし、お待たせしました」

「・・あの・・お仕事中、突然の電話で申し訳ありません  
皆井です 皆井佐知です」

「さち・・君か、ほんと突然だね」

「ええ・

実は落し物のペンダントの中にあるあなたの「写真が入つてたの  
それで落とし主の手がかりがわかれればと思って」

「ペンドントって、銀色の?」

「ええ、銀色のロケットペンドントです」

「それなら間違いなく美香さんなのだ」

「美香さん?一緒に入っていた写真の人ですか」

「ああ・・・」

「その人と私、東京の病院で会っているんです

「君が美香さんと」

「私の不注意でその人、美香さんを突き飛ばしてしまって」

「彼女は柔な女じゃないから平気って笑つてただろう」

「ええ笑いながらそんなに謝らないでつて逆に私を気遣つてくれました  
彼女・・なにかいつてましたか」

「いいや、彼女からは何も聞いてないよ  
でも大抵のことはわかるんだ、彼女のことはね  
やつぱり笑つてたが、彼女らしいや」

美香といつ女性の話になつた途端、雅和は弾んだ声を見せた。

雅和は彼女を愛している

彼女は雅和の大切な人なんだ

「大抵のことはわかるんだ」 そう言いきつた雅和の言葉が心に刺さつた。

雅和のことは何だつてわかつてた  
雅和を愛していたあの時は私だつて

「ペンドントの送付先を教えてもらえますか  
雅和の会社でいいのかしり」

「ああ悪いね、 そうしてもらえると助かるよ  
必死に探していたペンドントだから彼女きっと喜ぶよ  
じゃ、 住所を言つから控えてくれるかな  
住所は静岡県静岡市――――」

「IJの住所に送りますね

ペンドントは雅和から彼女に渡してください」

「君の手を煩わせる」とになつて申し訳ない  
宜しく頼む じゃ、 電話をくるよ  
「みみがき

雅和の声が遠のいて電話が切られようとしたそのとき

「まつて、 電話をきらないで」

佐知は慌てて雅和のサヨナラの言葉を封じていた。

「まつて、 最後にひとつだけ答えて欲しいの

雅和は私の手紙・・最後の手紙を読んでくれたのか  
それだけを聞かせて

「あの日、電車の中で読んで捨てた」

「そう、読んでくれたのね、ありがとう  
じゃ、美香さんのペンダント近日中に送ります  
彼女にあの時はごめんなさいって伝えておいて下さい  
彼女・・美香さんってとても感じのいい人ね  
素敵な彼女で雅和とお似合いだわ」

「・・ありがとうございました  
ペンドント着払いでいいから宜しく頼みます」

「わかりました 失礼します」

期待とは裏腹に空しさだけが残る後味の悪い結末だった。

愛が消滅した今、かつて愛した雅和はただの男  
雅和にとって佐知も又ただの女・・

仕事に向う車中、雅和のハンドルを握り締める手がやけに汗ばんでいた。

「手紙読んでくれた」佐知の言葉があたまから離れなかつた。

俺は嘘をついた

手紙を捨てた、なぜそんな言わなくてもいい嘘を  
まだ手紙は処分出来ずにいるのに

雅和は約束していた美香のマンションではなく急遽自宅に戻つた。  
自室のクロゼットに眠つたままの帆布のバッグを取り出していた。

ホテルでプラットホームで・・

この帆布のバッグは別れの見届け人だつた。

雅和は一度と手にすることなくクロゼットに押し込んでいた。  
中から取り出したのは佐知からの手紙だつた。

再び読もうか読むまいか迷いながら封を開け手紙を開いていた。

### 3.1 新旧恋人？

雅和は佐知の手紙を読み起こしていた。

雅和へ

出会った夏の日を覚えますか

あの夜、あなたと見上げた星空はとてもきれいだった  
夢のような出会いに胸を時めかせていた私

あの日恋の女神が降りてきて私はあなたに恋をした

雅和には消してしまいたい過去になってしまったのかな  
でも私は忘れない

あの楽しかった夏の日と一人を照らしてくれた星空そしてあなたを  
雅和の真剣な思いは痛いほど伝わっていた  
なのに私は答えなかつた

何も言わなくともこの愛は伝わっている

雅和ならわかってくれると思いあがつっていたのね

あなたは偽りのない大きな愛でいつも包んでくれた  
その愛のあまりの重さに私は震えていた  
その愛に押しつぶされそうな自分が恐かつた

「俺は出会った頃の佐知が好きだつたんだ  
出会つた頃の佐知が好きだつた」

あなたが言つた言葉よ覚えてる？

好きだつた・・その過去形が悲しかつた  
突き放されたようでとても悲しかつた  
心を切り裂かれるように痛かつた

愛する雅和から言われた愛の過去形はつらすぎた

あなたの愛は嘘のない真実の愛だつた

私は愛されていた自分に戻りたいと必死だつた

あなただけを見つめそして自分と向き合い苦しみ続けていた

同じ道をこれからも一緒に、ずっと一人で歩んでいく

そう信じて疑わない私に突然届いた手紙

その別れの手紙は深い闇の奥底に私を突き落とした

終わつたからではもう何も伝わらないよ

真砂子に言われた言葉はその通りでした

でも・・それでも私は伝えたいの  
雅和に伝えずにいらないの

雅和の愛は私から離れ消えた

愛が終わつた今だから声を大にしてあなたに伝えたい

私の愛に偽りはなかつたと

今となつては遅いけれど私も負けないくらい雅和を愛した・愛して  
いたわ

それだけは信じて忘れないでいて

ふたり歩いた道のりを振り返るとき気がつけばあなたへの感謝の  
気持ちばかり

憎しみや恨み言のひとつくらいあつてもいいのに楽しい日々、大  
切に愛された記憶ばかり

私は本当に愛されていたと涙が零れました

生まれて初めて私は心振るわせる大粒の涙を流しています  
これは人を愛する慈しみの涙・あなたがくれた愛への感謝の涙

雅和、幸せな時間ありがとう

あなたと過ごした日々を私は忘れない

今も残る雅和の残像にきつぱりお別れします

涙で言えなかつたさよならをいま笑顔でここに記します

雅和、さよなら

俺は駅で佐知から手紙を受け取つた

今更こんなものと破り捨ててしまおうと思つた

そして無言で背を向け佐知の前から去つた

電車の中で俺は封を切つた

未練なんだろうな

愛しぬいた女からの最後の手紙を俺は読んだ

捨てることなど出来なかつたこの手紙は今も俺の手の届くところ  
に眠つたまま残つている

読んだ・それだけでよかつたものを口から出した言葉は読んで捨て  
ただつた

俺は確かに動搖した

佐知・その名前にその懐かしい響きに動搖した  
それを隠そと俺はあんな嘘をついたのか

雅和はぶり返し燻る感情を無理やり押さえ込もうとしていた。

佐知の実母は親父の恋人だった

その恋人は子供を、親父の子を生んでいた

佐知がその子供なら俺とあいつは義兄妹になる

俺はその真相をまだ確かめていない

もう一度佐知と会って話をするべきか

しかしあいつが何も知らず幸せでいるのなら

聞かせる話ではないだろう

こんなに苦しいのはなぜなんだ なぜこんなに切ない

過去を穿り回し佐知と繋がりを持つのは止めた方がいいのかもし

れない  
俺には美香さんという大切な女性がいる

やつぱりまだどこかで俺は・・・

いやそんなことはない・絶対ない

俺は親父の過去を、真相を知りたいだけなんだ

お前は何を動搖している

あいつを振り返るのはやめろ・もうやめるんだ

天の導きによって繫がった二人は今また形を変えた愛へと導かれようとしていた。

雅和の心は一人の女の狭間で揺れ動いていた。

ドアの外で母の声がした。

「洗濯物持つてきたの、入るわよ」

雅和は慌てて仕事用のカバンに手紙を押し込んだ。

「夕食は要らないって言つたから何も用意していないよ  
冷凍しておいたビーフシチューと  
フランスパンがあつたからガーリックトーストにして、  
ロメインレタスも残つてたわね  
それをシーザーサラダに・・ それでいい?  
すぐ支度できるからさあ、一緒に下に行きましょ」

「悪いね、母さん」

母に促され雅和はそのままリビングに向つた。

佐知の存在を明かすことになる手紙を無造作にカバンに入れた雅和。

元通り帆布のバッグに戻し眠らせて置けばよかつた手紙。

眠りから覚めた手紙はこれから雅和に何を語りかけてくるのだろう。

新たな波風が雅和に風向きを変えて吹いてきた。

程なくして佐知からの書留が会社に届いた。

雅和はペンドントを取り出すと封を逆さにしていた。

ペンドント以外のものは何もなかつた。

雅和は一抹の寂しさを感じた。

何を期待してたんだ・・・

俺つて奴はどうしようもない男だ

都合よく明日は美香との約束日だつた。

その日は机に置いたペンドントの袋を見ながら高揚していた。

心を見透かされるのを恐れてつちゃんの姿を何度も目で追い伺つていた。

手塚には幼少から知る雅和の心うすなど読めていたが仕事に支障がない範囲と目をつぶつていた。

美香の部屋に入るなり雅和は大きな声で呼んでいた。

「美香さん、美香さん」

「そんな大きな声ださなくつたつて聞こえてるわ」

額を流れる汗が光つていた。

「そんなに汗かいてどうしたの」

「エレベーター待つてられない階段を走ってきたんだ」

「待つて、タオル持つてくれるから」

「いいよ このくらいの汗、大丈夫」

「そんなに慌てなければならぬ事が起きたのもしかして兄弟のことがわかつた・とか」

「そうじゃないんだ、それよりこれ見て」

手にしたのは昨日丹精こめ磨いたペンダントだった。

「このペンダント失くしたペンダントと同じね探して買っててくれたの？」

雅和は口ケツトペンドントを開け写真を取り出して見せた。張り合わせられた雅和と美香の顔写真を翳した。

「これ私のペンダント、探していたペンダント  
どうしてマー君がこれを、どこにあつたの」

「・・・・・」

「どうしたの急に黙り込んで ねえ、どこにあったの」

「俺の知り合いが拾つて届けてくれたんだ  
写真が入つてたから連絡くれて」

「そんな偶然があるなんて不思議ね  
私・・どこで落としたのかしら」

「病院・美香さんが入院してたあの病院」

「やっぱり病院だったのね  
エレベーターで女人の人とぶつかって・・  
そのときまでは首にしていたような気がするんだけど」

「エレベーターで彼女と出会ったのか」

「今、彼女って、これを拾つた知り合いつて女人の人なの」

「・・・・・」

「それを拾つてくれたのは、学生時代の友人なんだ  
突然の電話で何かと思つたらペンドント・・驚いたよ」

「拾つた人が友人なんて奇妙なめぐり合わせね」

「あア・・美香さんが彼女と出会うなんて、  
ほんと不思議な縁としかいえないな」

「ああ思い出したわ

育ちのよせそな愛らし子・そんな感じでしょ、彼女」

「ううーん そうかな、よくわからないよ

「私とはタイプが違うから印象に残つたのね  
わたし彼女のこと嫌いじゃないわ」

すでに何かを察したようにも聞こえる美香の言葉だった。

「そついえ、彼女も同じようなことを言つてたな  
美香さんは感じのいい素敵な人だつて

お似合いのカップルだって言われたよ

「彼女と私、案外気があつたりしてね」

「やめてくれよ、

「人にタッグを組まれたら・・・まあ有得ないことだな  
もうこの話は終わりだ

美香さん今から出かけようよ、何か食べに行こ」

「久しぶりに中華料理が食べたいな

「ペンドントが戻つて懐もあつたかいし

フカヒレでも上海蟹でも何でもござれやう

「今日はずいぶん太つ腹なのね

それではお言葉に甘えていつぱいご馳走になつて  
今夜もハッスルしちゃいますか」

「そうしてまた俺の反応を楽しむつもりだらつけど  
もうその手にはもう乗らないんだ」

「ほお、ずいぶん成長しましたねえ」

「もういい加減、子ども扱いはやめてくれよ  
マー君・マー君と呼ぶのも・・やめてほしいんだ  
今日から雅和って名前を読んでくれ  
美香さんに甘えて守られるのは卒業したいんだ  
マー君なんて・・母さんじやないんだからさ  
頼りないだらうけど一人の男として俺をしてくれ、頼む」

「・・わかつたわ 今日は何だか別人みたいね

「俺は何も変わらない ただ・・・

将来を見据え自分と真剣に向き合おうとしているのかな

「何だかしんみりしちゃったわね

今夜は高級中華料理で退院のお祝いしてもらおうかな  
たつぱり馳走になっちゃいますけど大丈夫かしら?」

「ああ任せとけ

金に糸田をつナザーネンヒー馳走してやるよ

「今日は一段と男っぷりがいいわね

「惚れ直した?」

「もう十分惚れていますけど・・はい、惚れ直しました」

笑いが止まらない美香はペンダントを首につけようとしていた。  
ペンダントヘッドをそっと持ち上げて笑顔を見せた。

それは雅和の背を押し元気にしてくれるいつもの笑顔だった。

雅和が心をこめて磨いたペンダントが美香の首に戻った。  
決して高価な品ではないが宝石にも負けない光を放っていた。

田も眩むような笑みを浮かべる美香もまたペンダントと共に輝いていた。

### 32 新旧恋人？

マンションに泊まつた雅和は仕事に向う支度をしていた。  
美香はハンカチにアイロンをかけていた。

「先週忘れていたハンカチにアイロンかけましたからね  
忘れないで持つていいで」

「サンキュー

あつ美香さん、又忘れそだからバッグに入れてくれる」

「わかった 仕事のカバンでいいのね」

雅和は洗面台の鏡の前でドライヤーをかけていた。

カバンを開けた美香は淡い桜色した封筒を見つけた。  
仕事用のカバンに似つかない封筒に釘付けになっていた。

洗面所の雅和を気にかけながら封をそつと手にとつて見た。  
差出人が知りたいと裏返してみると名前があった。

皆井佐知・・女性の名前

封筒から微かに香水の香りがした。

フルーティーな香りとほのかな石鹼の匂いがしていた。

「この香水は雅和から佐知への贈り物だつた。  
愛らしいの意味がついたこの香水を雅和は迷わず選んだ。  
出会つた佐知の印象ぴったりの香水だつた。」

美香の顔は青ざめていた。

仕事関係の人が香水をかけたりするかしら  
なんでもない人が自分の匂いをつけたりはしない

この香水の匂いはプチサンボン  
きつと若い女の子、雅和と同年代の子だわ  
皆井佐知つて雅和の何なのかしら

「美香さん」

雅和に名前を呼ばれた美香はビクッと体を硬直させた。

「はーい どうしたの」

「歯磨きが無くなりそくなんだ」

「新しいの買つてあるから右上の扉を開けて出してくれる」

「了解」

いつもと変わらぬ会話だつたが心はここに在らずだった。  
皆井佐知、その名前に心は波打つていた。

事務所に着いた雅和はカバンを開けて置ざめた。  
アイロンをかけられたハンカチが封筒と並んで入っていた。

「美香さんに気づかれるだろうか  
そんな素振、美香さんからは見受けられなかつた  
いやまた、美香さんは大人の女だ  
手紙を見たとしても彼女なら何も言わないだらう  
知らない振りをしてくれた?」

雅和は仕事どころでなくなつていた。

「雅和さん東商さんからお電話です  
雅和さん、雅和さん」

事務の泉さんが何度も雅和を呼んでいた。

「雅和、朝からボーッとしてるんじゃない

手塚のおっちゃん、てつちゃんの怒声がとんだ。  
雅和の電話が終わるのを見計らい手塚がやつてきた。

「雅和、今日のお前は仕事なんて上の空って感じだな  
上に立つものがそんなんじゃ示しがつかない  
仕事に集中できないなら仕事場から消えろ  
おまえがいると事務所の空気が悪くなる  
俺達は取引先に喜んでもらおつと強いてはお前のため頑張ってる  
んだ  
俺の言いたいことわかるよな」

「てつちゃん、すまない  
気を入れ直すからこのまま仕事をさせてくれ」

「よしわかつた  
気持ちを変えてがんばろうつな」

手塚は親父のような存在になっていた。

皆が帰った事務所で雅和は美香に話すタイミングを探していた。  
美香はいくら恋人であろうと前触れもなく来訪されることを嫌つ  
た。

「親しき仲にも礼儀あり

そういう一線はどんな関係にも必要なのよ

突然訪ねた雅和を突き放しドアを開けてはくれなかつた。それ以来、約束以外に美香を訪ねることはなくなっていた。

今日はどんなに煙たがらようとドアを開けさせる決意だつた。

ピンポーン・ピンポーン 何の応答もなかつた。

・・・モニターで俺だとわかつてゐるはずだ  
合鍵を取り出しオートロックのドアを解除してマンション内に入つた。

美香の部屋の前で雅和は立ちすくんだ。

合鍵で強引に部屋に入るにはやはり戸惑いがあつた。

ドン、ドン・・・拳を上げドアを叩いた。

「美香さんおれ、雅和だよ 開けてくれないか  
いるんだろ、俺は帰されることを承知でここに来た  
話がある 美香さんに話さなければならないことがあるんだ」

扉の向ひつの必死な呼びかけに美香は息を殺していた。  
返答のない静寂に雅和はあきらめ足先を変えようとした。

ガチャ、ガシャ・・・ドア

開く音に雅和は一目散に走りよつた。

「美香さん、」めん

黙り込んだ美香が白いナイトガウンを羽織り立っていた。

「入つて・・・」

美香は雅和を部屋に入れた。

雅和はお決まりの場所に座り神妙な面持ちで美香を見つめていた。珈琲を入れようと立ち上がるつと美香を制した。

「何もしないでいいよ」こに座つて  
今日は話をしに来ただけ・・・聞いて欲しいんだ」

「話つて今日じゃないといけないの  
明日は約束の日なのに明日じゃ・・・ダメってこと」

「」とは早く話しておかないとだめなんだ

「わかったわ」

「ありがとう美香さん

実はペンダントを届けてくれた友人のことなんだけど

・・・その人、皆井佐知つていうんだ

その名前に美香は一瞬たじろぎを見せた。

顔色を変えた美香の姿に雅和は確信した。

やっぱり美香さんは手紙を・・・佐知の名前を見たのか

「私が病院であつた人それが皆井佐知さんなのね」

「・・・・・」

「それで、その人がどうかしたの」

「友人なんて嘘をついてごめん

彼女は・・・皆井佐知は俺の恋人だつた  
余計な心配かけたくないくて俺は嘘をついた」

「そうだつたの

それを言うために此処に来てくれたの」

「ああ・・・」

「正直に話してくれてありがとう

・・・前に言つたけど私、彼女のこと好きよ  
雅和と一緒に、嫌いになんかなれないわ」

「何だか棘のある言い方に聞こえるのは気のせいかな」

「私だつて女よ・・・

どこかにそんな気持ちがあるかもしれないわね  
でも彼女とは終わつたんでしょ」

「ああ、もう遠ご昔の話じ

「だつたら私に氣を使つ」とないんじやない

色恋は当人の気持ちの問題だから

彼女のことも私には関係のないことよ、そつでしょ

「俺のこだわり過ぎかな」

「過去なんて振り向いてないで前だけをしつかり見て  
でないと夢の実現は遠いものになつてしまつわよ」

「なんだかすつきりしたよ  
これでぐつすり眠れそうだ」

「ずっと悩んでいたの、それも眠れないほど  
それは私を思つて？それとも佐知さんのこと？」

「・・・・・」

「人との繋がりや一度結んだ縁つて終わつたからそれでお終いじゃないと思うの  
どこかでまた巡り会いつようこつて田には見えない何かで繋がつて  
いるような気がする

それつきりになるのは気持ちが一方通行だからよ

大切な縁で結ばれたのならまた出会えるんじやないかしら  
雅和と佐知さん一人はそうじやないのかなつて思つてる

雅和は佐知さんを恨んでる？そうじやないでしょ  
佐知さんとの愛は幸せな思い出ばかりだつたんじやない

一人がまた出合えたなんてすごいと思わない

終わつた愛は忘れてもいいけど新たな出会いを握りつぶさないで  
変なこだわりは捨てて佐知さんとの縁をつなげて欲しいの  
偶然の出会いなんかこの世にはないのよだから大切にして

「美香さんは自分が何を言つてゐるか、わかつてゐるのか  
佐知と付き合えつて言つてるのと同じだろ」

「そうじゃないわ

彼女は雅和にとつて必要な人だつてこと  
彼女にも雅和は必要な人だから出会えたのよ  
何か意味があるつてことを私は言いたいの」

「わからないよ、俺にわかるよつに話してくれ

「今日はもう遅いわ、明日にしましょ  
今日は嬉しかった ありがとう雅和

「・・・・・」

「そんな顔してないで・・・

早く帰らないと・・ねつ、もつ遅いわ

今日はばぐつすり眠るんだじょ、おやすみなさい

「おやすみ、美香さん」

暗闇に身を置き壁ひとつない空を見上げ雅和は溜め息を吐いた。

其のころ佐知はペンダントの持ち主、美香を忘れられずにいた。女の嫉妬どころか旧友のような親しみと懐かしみを感じていた。

美香さんは私と同じ匂いがする、ビニカ似ている

笑顔に隠された自分と同じ影を見て取っていた。

互いを引き寄せようとする見えない力に動かされ始めていた。

美香は体の変調に気づいていた。

生理がこない・・不順ではあつたけれど今回はいつもとは違う

母と同じ父親の記載のない子供を身<sup>に</sup>もつた美香は病院に行くのを躊躇つっていた。

「私は母とは違う 雅和は妊娠を喜んでくれる  
籍だつてきちんと入れてくれるわ・・」

雅和の子を産んでいいのだろうかと美香は悩んでいた。

### 33 父の幻影

お腹に手を当て美香は亡き母の一生を思い返していた。  
同時に記憶のない父に会いたい気持ちに揺れ動かされていた。

美香の父・佐々木悟朗は食糧庁のトップを務めた人。

昔の食糧庁は農林水産省の外局で国民の主要食糧の管理・  
飲食料品の生産・流通・消費の調整などを行っていた。

美香が食品業界に飛び込んだのは父恋しさあつてのことだった。

「この業界なら父を知らぬものはいないだろう  
どんな人で、どんな仕事をしていたのか  
父の全体像が見えるかもしれない」

妻ある人を愛した母は自分の立場を百も承知していた。  
その人の子供を生むということは人道的にもルール違反だった。

「愛人の私が子供を生もうとするのは罪深いこと  
ならば自己責任でこの子を産もう  
相手の家族に決して悟られぬよう一人で迷惑かけずに産む」

そんな母の固い意志に父は負けた。  
認知だけでもという父の言葉も聞き入れようとしなかった。

「この子は私の子供です この子に父親はないのです

「君の気持ちはわかる  
しかし僕の子供でもあるこの子に父として何かしてあげたい  
そう思つのは人として当たり前のことじゃないのか  
逃げ続けなければならぬよつた幕引きはしたくない」

愛する子供に触れることも成長すらも見れない父の気持ちは痛い  
ほどわかつていた。

本妻との間に子供がない父の気持ちは十分伝わっていた。

美香がもの心が付く頃、母は父との関わりを一切絶つた。  
間もなくして母娘が一生見ることもないよつた大金が振り込まれ  
た。

子供の力になりたいという父に唯一その方法があるとしたらお金  
以外何もないと母は割り切つていた。

「このお金は愛の清算ではなく美香の幸せを願う誠意のお金  
繫がりと絆を切つてしまいたくないが為の精一杯の気持ち  
あの人はそういう人、最後の最後までそういう人」

その夜、母は私を腕に抱き一晩中囁び泣いたと聞いた。

父は悲しい孤独の人だった。

本妻との間に子供は出来ず夫婦だけの生活。

本妻さんは結婚後も自由奔放な生活で父は夕食はおろか明かりの消えた家に帰ることもしばしばだった。

「昨日もお出かけだつたようだね

前もつて知らせてくれたら外で食事を済ませたのに

僕は料理が出来ない、それは君もわかつてゐるだろ？

「だつて、悟郎さん食事を家でとる事ほとんどないじゃない  
作つても食べてもらえないことが多くて私いつも一人だつた  
そんな私に夕食は作らないでいいって言つたのは悟郎さんよ

「確かにそう言つた

でも昨日は僕が早く帰ることを君に伝えたはずだ  
何か用意して出かけてくれても良かつたんじゃないか

「そうね、『めんなさい』

そうだわ、お手伝いさん頼みましょう

部屋はいくらでもあるわ、住み込みのお手伝いこましまし

「みんな

「そういうのとじやないだろ 君の話はいつも飛躍すぎる  
それに他人が家にいるなんて僕は『ごめんだね』

「だつたら私がいない時ぐらいいは自分で食べて頂戴ね

あつ、そつそつ今日私、ヨーガの日な  
夕食は外ですませて来てね、お願ひします」

「女性が毎晩遅くまで出歩くのは感心しないな」

「悟朗さんの言い方、お父様みたいでおかしいわ  
私シャワーを浴びてくるから鍵を忘れないで出かけてよ  
じや、気をつけてこつてらしてね」

父は夫婦で食卓を囲むことはほとんどなかつたといつ。  
会合パーティーの多い父は家庭の味に餓えていた。

筑前煮・肉じゃが・きんぴら・アジの干物・がんもの甘辛煮  
故郷のおふくろの味を思い出し唾を飲み込んでいた。

が口課だった。

三杯目珈琲を飲み干して店を出るといつもあたりは震んでいた。  
自分をさらに自虐的にさせるそんな夕刻は忍びなかつた。

そんな時入ったスーパー・マーケットで父は母と出会つた。  
生活観溢れるその場所が後の父と母の運命を変えた。

「すみません、ひじき追加させていただきます」

大きなトレーを抱えて現れたのは母だった。

地方出身の母は東京の大学を出て都市銀行に勤めていた。

印刷会社を営む実家は事業不振で余儀なく廃業した。

不幸の連鎖は続き兄までもを不治の病で喪った。

母は昼夜働き両親のために10万円を送り続けていた。

お金持で品ある紳士がうるうろ徘徊している姿は滑稽だったわ  
母はいつも懐かしそうに目を細め語ってくれた。

惣菜を並べ終えた母は場違いにも見える父の存在に興味を抱いた。  
幾度も商品を見渡しては溜め息をつく父に母が声をかけた。

「何かお探しですか 私でよければお手伝いしますよ」

「ここにある惣菜がどれもこれも美味しそうでね  
どれにしようか迷っているんですよ」

「ありがとうございます ゆっくり選んで行ってださい」

礼をしてその場から離れようとしたとき

「あつ君、ちよつといいかな」

「はい、なんでしょうか」

「IJKの中でお選めの品はどれかな」

「IJKの惣菜は全部お選めですよ  
売れすぎてこうして何度も補充してるんです  
お客様のお好みで安心してお買い求めください」

「それじゃ、IJKの列を全部いただいてこう」

「お密せん、大家族なんですね」

「僕ひとりで食べるんだが、やはり多いか」

「お一人ならもつたいないですよ  
あまつて捨てるようなら買わないで下さい  
捨てるなんて作った人に失礼ですから」

「そうだな、君の言うとおりだ」

「私もひとりなんです  
お嫌じやなければ一緒に食べませんか  
そんな沢山必要ないわ

これと・それとあつこれ美味しいんですよ  
私もう帰れるんです、バイト終了なんです  
だからこれを買つたら外で待つててくださいね

買い物袋を後ろ手にした父が恥ずかしそうに人待ち顔で立つてい  
た。

「お待たせしました

私の家ここから近いんです サア、どうぞ」

「待つてくれ、僕は君のこと何も知らないし僕は妻帯者だし、  
君にしたつて僕は今日はじめてあつた人だ  
そんな人を簡単に家に招くのは止めた方がいい」

「人を招待するの貴方が初めてですよ  
私これでも結構おくてなんですから」

「初対面の見ず知らずの人の家で食事を頂くとこうのは」

「いいじやないですか、そんなこと  
一人で食べる食事は美味しくないですよ  
どんなにおいしいものを目の前に出されても一人じや寂しい  
質素なものでもだれかと一緒になら美味しいわ  
貴方となら美味しく食べられる、だから誘つたの」

「なんとなくだが・・・わかる

そうだな、僕も君となら楽しく食事が出来そうだ」

「なら、行きましょう」

紅潮させたあの人の困り顔を今も覚えてるわ

そう言つて頬を桜色に染めた母の顔を美香は思い出した。

「はじめてお使いさせられた子供みたいだつたわ、あの人  
あの人とどこか影を持つあの人と話がしたかつた  
あの人わたしは一目ぼれしたの」

はにかんだ母の笑みを思いかえす美香だった。

### 34 父の幻影？

アパートには卓袱台、木箱の上の古びたテレビ  
唯一の彩りは小花模様のクリーム色のカーテンだけだった。

独身女性にしては慎ましそうな暮らしづくりだつたが家庭の温かさ  
が此處にはあつた。

「お待ちどうさま

お惣菜と私が作った味噌汁、漬物これで全部

「ほんはいっぱいあるから遠慮しないでね も、食べましょう」

肉じゃが・さばの竜田揚げ・蓮のきんぴら・

豆腐と油揚げの味噌汁、キャベツとキューリの漬物

湯気のたつた温かい食事に父は何度も顔を崩したといつ。

「おいしいなあ、この味噌汁、美味しいね  
こんなに美味しい味噌汁は久しぶりだ」

「感激してくれるの嬉しいけど味噌汁、家で飲まないの」

「外で味噌汁を飲む」とはあっても家で飲むことはないな

「あなたの奥さんあまり料理をしない人みたいな  
お金持ちはお付き合いも多くて忙しいって聞くから  
奥さんも料理なんて作る時間がないのね」

「僕は仕事でいつも帰りが遅いんだよ  
夕食は大概外で済ましてしまつからね」

「それでも朝は自宅で食べるんでしょ  
なのに味噌汁飲まないなんて変ね」

「朝は珈琲だけ 基本、僕は朝は食べないんだ」

「貴方の奥さん、楽でいいわね 「うらやましいなあ  
私は未だ独身で朝から晩まで掛け持ちで働いている  
神様は平等つていうけど疑つてしまいたくなるわ」

「そんなに働くには何か理由があるんだろうな」

「事情があつて実家に仕送りしてゐるんです  
私、両親と兄には良くしてもらつたから  
兄は大学を中退して働きました  
俺は出来が良くないし勉強がきらいだ  
でもお前は俺と違う、努力家で一生懸命だ  
そういう者が大学に残つて学ぶべきなんだつて

大学だけは何があつても卒業しようと誓ってくれました

「妹思いのいい兄さんだ　君の大切な支えだね」

「ええ・・・」

楽しい出合いのタベはあつという間だった。

この日を境に母は平穏な日々に終わりを告げた。  
道ならぬ恋に落ちた父と母は秘密の園を手に入れていた。

妻には仕事に熱中するためのマンションを借りたとだけ伝えていた。

自分のことで忙しい妻は案の定、何の反応も見せなかつたが  
電話を引くことだけを強硬に指示してきた。

逢う回数が増した父と母の仲はいつそう深まっていた。

「スーパーのバイトは辞めた方がいいな

「さうね、私も通うにはちょっと遠いし、  
遅い帰り道は恐いから辞めようと思つていたの」

「今日からこの僕が君の雇い主になろう

銀行が終わつてからの時間は僕のために使つてくれないか?」

「出来ればそうしたい・・・でもいいの  
本当なら嬉しいわ」

「なら、成立だな」

父はバイトに値する額の援助を約束した。

妻帯者を愛するが為の不倫世間一般に言つ愛人となつた母。

「この人がいてくれるなら独身で人生を終えてもいい  
人に何を言われようと蔑まれようと私は愛を手放したくない  
」の愛を貫き生きてゆきたい」

愛されても愛を感じたことなど一度もなかつた母にとつて  
命を捧げる覚悟のこの愛こそが至高の愛になつていた。

そんな時、母の愛に影をさす一本の電話が入つた。  
郷里の友人からの悲しい知らせだつた。

「早苗ちゃん、驚かないで聞いて  
早苗ちゃんの両親亡くなつたんだよ」

「・・・」

「聞い」といふよな、早苗ちゃん早く帰つてきし

「じうじへ、一人ともあんなに元氣だったのに」

「……」

「何か知つてゐるのなら教えて」

「おじさんがあばれんを道連れにして」

「お父さんが、お母さんを」

「遺書はなかつたから何もわからぬいらしきの  
専称寺の勝隨和尚が前日に早苗ちゃんのお父さんと会つてゐる  
おじさんの様子がおかしかつたらしくの  
それで翌朝家を訪ねて行つて見つけたそつなの」

「……」

「専称寺におじさんとあばれん、安置されてゐる  
勝隨和尚がずっと付き添つてくれてるの

早苗ちゃん、早く帰ってきて  
駅に着いたら電話して、車で迎えに行くから

涙もなく体を震わせる母は父に電話をかけた。

「朝から」めんなさい 今、大丈夫ですか」

「どうした、何かあつたんだね」

「両親が亡くなりました 自殺でした」

「・・・」

「今から両親の元に帰ります」

「そうか、つらいだるい

帰つたらそのとき話を聞いて」

「はい」

「氣を落とさず氣をつけて行って来なさい

僕がついていることを忘れるな、愛してる」

悲しみ行きの電車に乗る凍てく心は父の言葉で溶かされていた。天涯孤独になつた母に残つたものは道ならぬ愛だった。

郷里で勝隨和尚と一人きりで両親を荼毘に付した。

印刷会社の廃業以来、親類縁者との付き合いは途絶えていた。資金繰りの相談で訪ねた先々で受けた親族の仕打ちに祖父は怒りを顕にした。

「親類縁者とは今後いつさいの繋がりを絶つ  
俺の葬式には誰も呼ぶんじゃないぞ  
来ても追い返すんだ」

祖父は自未得度先度他という言葉そのままの人だった。

銀行の貸し渋りに頭を抱えた親戚が泣きついてくると黙つてお金  
を差し出したという。

「あなたは人が良すぎですよ

人のお世話をほどほどにして下さい」

「俺は自分の出来ることを精一杯やっている、ただそれだけだ  
それが人のためになつてているのなら喜ばしい限りじゃないか」

祖父は状況を俊敏に判断し頼まれたことは親身になり成し遂げる  
頼れる人だった。

祖父は親族もまた同じように助けてくれると疑わなかつた。  
しかし事が自分に降りかかった時手の平を返すように門前払いの  
扱いを受けた。

「私達の借金を誰かに助けてもらおうなんて間違つてますよ  
一人で頑張つて少しずつでも返していくましょ」

「ここの家・ここの家だけは何としてでも残したかつたな」

「あなたは頑張つてくれたじゃないですか  
もうあきらめましょ」

「借金だつて生きてこらへんわけ完済させるのは到底無理だ  
何もかも無くしたあげく早苗に借金が及ぶことを考へると」

「私達の保険があるじゃないですか  
早苗受け取りの私達の死亡保険で何とかなりますよ  
そんなことでめげるような子じゃありませんよあの子は」

「借金の用途はたつても俺達が死んだら一人ぼっちだ  
あいつ一人取り残されるんだぞ」

「だからどんなにつらくともあなたも私も死ねない  
生きなければいけないの  
早苗が結婚して孫の顔を見るまでは元氣でいてあげなければ  
天国の誠一も守ってくれていますよ  
頑張りましょう、あなた」

「誠一か　せめて誠一が生きていてくれたらなあ」

「過ぎたことを言つのは止めて下さい  
誠一はもう戻つてこないんですから」

「母親の情は父親より濃いというが・・お前はつよいんだな」

「あの時、私は一生分の涙を流しました  
今どんなに誠一を偲んでも涙の一滴も零れてこない  
私の涙はあの時に使い果たしてしまったの  
腹を痛めた子供を亡くした女の気持ち、あなたにはわからないわ」

「・・・」

「いつまでも涙することが誠一の供養になりますか  
そんな私達の姿を早苗だつて喜びはしませんよ  
一から出直しましょう」

「10の歳でお前と二人再出発か

「年齢なんて関係ないですよ  
いくつになつても出発は出来るんです  
あなたこれからも宜しくお願ひしますね」

「・・・」

家業を継ぐと言つてくれた息子を病で亡くし代々続いた印刷会社  
をつぶし

頼みの綱の親族にも背をむけられた祖父が哀れだった。

家を手放したころから祖父に異変が起きた。

祖父は浴びる様に酒を呑むようになった。

仕事も休みがちになり負担は祖母の肩に重く圧し掛かっていた。  
喧嘩ひとつなかつた祖父母の夫婦間に極寒の嵐が吹き荒れた。

「いい加減、過去に執着するのはやめて  
嫌でもまだまだ生きて行かなればならないんです  
借金を返し終えなければ死ねないんです  
つらいのはあなただけですか、私だって同じなんですよ

お酒に逃げるのをもう止めてください

「うるさい、女のお前に俺の気持ちがわかつてたまるか  
俺の気持ちなんか誰にもわかりやしない」

祖母と母の収入では追いつかない借金生活。  
返済は滞り催促状が散らばった部屋で祖父は酔いつぶれていた。

家庭内別居同然の祖父母にもはや会話は無く祖父の拠り所はなく  
なっていた。

そんな祖父が選んだ人生の幕引きが無理心中だった。

お金は多い少ないに係わらず人を狂わせる  
お金は人格さえも変えてしまう恐いもの  
お金は使うもの・しかし祖父は使えないお金・借金に翻弄され豹  
変した

祖母を手にかけ自らの命までも絶つた

それはあまりにも悲しい結末だった。

### 35 父の幻影？

遺骨を待つて専称寺に戻った母は変わり果てた両親の遺骨のあまりの軽さに涙したといつ。

「早苗ちゃん、むいりでお茶にしよう」

勝隨和尚が座布団を差し出して言った。

「お父さんの享さんも・・・ここに座った

お茶を飲み話をして帰ったお父さんの後ろ姿が最後になつた」

「Jのとき人生の方向変換を余儀なくされる母の運命は巡りはじめた。

祖父の苦悩は借金と人間関係そして母の不倫死者の最後の言葉が明かされようとしていた。

「私達夫婦は早苗の仕送りで何とか生き延びてこられました  
早苗には足を向けて眠れないと感謝しているんです  
私は子供の脛をかじつて生きてる情けない親なんですよ」

「享さん、成人した子供を一人の人として見てあげたらどうだ  
親子のしがらみや垣根はとってもいいんじゃないかな  
早苗ちゃんは享さんあなたが親だから助けているわけじゃない  
あなたがた夫婦を人として尊敬し感謝しているからだ

あの子は心のおもむくまま当たり前のことをしているだけだ  
そんな所が専さん、あなたと良く似ている」

「そりなんじょつかねえ  
お恥ずかしい話ですが、実は娘は不倫をしてるんですよ  
妻ある男性と・・まさか我が子が・・本当に驚きました  
心臓が止まるんじやないかと思つほど驚きました」

そんな娘に育てたつもりはなかつた祖父は悲愴の色で胸のうちを語つていた。

不倫を知るきつかけとなつたのは鞄だつた。

祖父母は母の誕生日にバッグを送ろうとしていた。

実家に戻つた母が手にした傷だらけのバッグ

それを見た祖母が計画した誕生日のプレゼントだつた。

お洒落の一つもしないで仕送りなどなければ新しい鞄も買えただ  
らう

祖母は母が不憫でならなかつた。

少しずつ貯めたお金を持つて祖父母はデパートに出かけていた。

「あなた、これを持つて早苗に会つてきて下さい  
この中に旅費が入つてます、早苗もきっと喜びますよ」

ひと月分の食費に相当する大きな出費だつた。

「いいのか」

「ええ、お願ひします」

上京した祖父は何度か訪れたアパートの前で帰りを待っていた。足もとのタバコの吸殻が山にならうとしていた。

「やつと帰ってきたか」

声に田を移し慌てて物陰に身を隠した。  
娘のとなりには連れの男性がいた。

「やだ悟朗さんの袋からねぎが飛び出してるわ

「やだばつ、大きな袋にしてもらひよかつたな

会わずに今日は帰らう・・・

あいつにでもやつと彼氏が出来たのか  
いひひひと・か よかつたな・早苗  
」のプレゼントは近くのコンビニで送つてやねり

アパートを去らうといついた祖父は一人の女性と田が合つた。

トレントホールの襟を立てつばの帽子を深く被つたその女性に見  
覚えがあった。

「あつ、このアパートを行つたり来たりしていた女性だ」

その人はアパート前にある公衆電話で話しかけていた。

「あつ悟朗さん、祥子です 今日もお帰り遅いのかしら  
えつ私、私は今日は予定がないの  
そうよ、だからお家にいるのよ 家から電話してるので  
わかったわ・・先に休んでます」

口を一文字に結んだその女性はアパートを見上げていた。  
とつさに駄け寄り声をかけた。

「すみません 隨分長い時間このアパートで誰かを待つていたよう  
ですね  
なのに会わずに帰つてしまふのですか 何か事情がおありのよう  
ですが」

「・・・・・」

「突然の不躾で申し訳ありません  
私にはあなたがさつき帰つてきた男女を待つっていた  
そんなふうに見えたものですから」

「私は・・あの一人を・・つけて来たわけじゃないわ  
どなたか存じませんけどあなた本当に失礼だわ」

血の気が失せた女性は体を捻じるようにして過ぎて行つた。

「こんな馬鹿げた真似はしたくなかったがこれで証明できた  
一緒に帰ってきた男は家庭を持つ身だ  
よりによつて妻ある男性と・・なぜだ  
まさか仕送りのため、お金のためなのか  
いや断じて早苗はそんな娘ではない」

祖父には母を手塙をかけて大切に育てたという自負があった。

「俺も母さんも精一杯の愛情を注いできたといふのに  
なぜなんだ　お前はなぜ他人の幸せを壊すような愛に走つた  
他人どころか自分の幸せすら潰しかねない愛に・・・  
先の見えない愛なのに、お前の目には何が見えるんだ  
その先に幸せを求めているのなら早苗、早く目を覚ますんだ  
誰かを不幸にして手に入れた愛は人を幸せにはしてくれない  
その人が流した涙の分だけお前の幸せは減つていくんだぞ  
早苗、俺のせいなのか　すべて俺の・・・」

死の原因は間違いなく借金だが母の不倫もその一因だつた。  
母の不倫は誰よりも人を重んじ慈愛に満ちた祖父を苦しめていた。

「美香のおじいちゃんを死に追いやったのはお母さんなの」

あの時の悲しみを背負つたような丸まつた母の背を思い出していた。

母から聞かされた勝隨和尚の話しを今も覚えていた。

「大切なものを奪い去られ悲しみに暮れようとするすべてを受け入れなさい

大切なものを人から奪うことなど誰にも出来ないんだよ

過去は死と同じだ 人は現在をいまを生きている  
これからも命ある限り生き続けなければならない

君の行動は父親の目からすれば愚かに見えたかもしれない  
しかし君は自分の意思で直感で正しいとその道を選んだ  
その結果がどうだつたかは言わずしてわかるね

私が言いたいのは一つだけだ

自分のマインドを常にきれいにしてこれからを生き続けなさい  
それが御両親にとって一番の供養になるのだから」

母は自分の愚かさに気づき懺悔の涙にくれたと話してくれた。

「あの時、わかつたの

真実の目が涙で洗われ曇つて見えなかつたものが見えたのよ

不倫の関係をきつぱり精算しよう それが一番の供養

母は自分にそう強く言い聞かたという。

東京に戻る母を友人の珠美さんが駅まで送ってくれた。

「専称寺に寄つてから帰るつて言つてたでしょ、  
だから此処で早苗ちゃんを待つてたの  
駅まで送つていくから乗つて」

「お店は？大丈夫なの雄哉君に叱られない」

「雄哉がね、見送つて来いつて  
だから、あ乗つて」

「ありがと」

駅に着くと次の列車の時刻までの時間はたつぱりあつた。

「早苗ちゃん、サンドイッチ作ってきたんだ  
まだ時間あるよね、ここで一緒に食べよう、はい食べて」

「うう・・・」

「早苗ちゃん大丈夫」

「うん、ごめんね 少し気分がすぐれなくて」

「きっと疲れがでたんだね 無理しないでお茶だけでも飲んで」

「ありがとう 最近ずっとこの辺りがムカムカしてるので  
味噌汁の蓋を開けただけでウツてね」

「それって私が妊娠した時のつわりみたいね」

「つわりってこんな感じなの」

「そうよ 胃に違和感を感じて吐きそうになったりするの  
そのくせ無性に何かが食べたくなってね

私はラーメンだつだわ

朝から晩までラーメンばかり食べてたな  
気がつけば私はそのラーメン屋の常連になつてた  
毎度「つて声かけられて  
いつものだよねつて座つただけでラーメンが出てきたわ

「珠美のつわりの話、笑えるね～」

「笑顔が戻つてよかつたあ

早苗ちゃんは心労だとと思うけど無理しちゃだめだよ

一度病院で見てもらつたほうがいいよ」

「いろんな事が有り過ぎたからバランスを崩しているのかもね

「困つた時はお互い様だから遠慮は無しだよ  
何かあつたらいつでも電話して、約束よ」

「うん、珠美ありがとづ」

珠美さんは母のクラスメートだった。

お互いに群れて行動するのを嫌う一匹狼的存在だった。

体育のダンスの授業をさかいに仲良くなつたらし!。

二人一組の創作ダンスの課題で次々とペアが決まつていった。  
そんな中で最後に残つたのが母と珠美さんだった。

それからの一人は一匹狼ビックリ一卵性双生児のように親しくなつた。

珠美さんは高校時代からのBFと結婚しその両親と酒屋を切り盛りしていた。

若女将として酒屋の店番、住み込み従業員、家族の賄い・・

何役もこなす負けん気の強い頑張りやさんだつた。

人扱いも上手で愛嬌のある珠美さんは酒屋の看板娘だつた。

「雄哉の両親にも誰からも可愛がられ  
何もかも手中にした珠美が羨ましかつた」

母は嫉妬心を抑えられなかつたと正直に話してくれた。

後に珠美さんは子宮全摘手術をつけたことを母に打ち明けた。

「私はもう子供が産めない体なの  
弟か妹を作つてあげられないのが・・一番つらい  
私・・ずっと一人っ子で寂しかつたから」

母には生涯忘れられない珠美さんの言葉があつた。

「いつも優しく支えてくれる人のために自分が幸せであること  
それこそが皆への恩返し感謝に繋がると思つて  
自分が幸せなら周りの人みんなもきっと幸せ、同じきもち  
そう信じたい」

母の脳裏に理想とする結婚・家庭が鮮明に映し出されてゐた。  
しかし現実は理想とはかけ離れた遠いものだつた。

「これがつわりで妊娠したのなら4週め 妊娠2ヶ月」

妊娠・おなかの子供・・ 母は覚悟を決めていた。

「肉親を亡くした私に残されたものは、このお腹の子供」

いつか一緒になれる日まで一人で頑張るつ  
父との約束は母にとって効力のない誓約書になっていた。

### 36 父の幻影？

「これからはこのお腹の子と一緒に生きて行きたいが父が心を痛めたこの不倫にナジめをつけよう」

そんな決意の一方で未練の女心がムクムクと頭をもたげた。それを追いかけるかのように勝隨和尚の言葉が聞こえた。

自分のマインドを常にきれいにして生き続けなさい。それが両親への一番の供養になる

「お父さん、悟朗さんは終わりにする  
でも子供だけは産んでもいいでしょ  
この子の命を消したくない  
今のお父さんにならわかるよね  
私、生まれ変わって頑張る・頑張って見せるから」

車窓の流れ行く青雲を見上げ母は誓っていた。

帰宅すると留守番電話の履歴が点滅していた。

「お帰り、大変だったね 僕は急な出張で日本を発つ  
悲しみの君を抱きしめてあげられなくてすまない  
君のために買った土産を持って真っ先に会いに行くから待つてくれ

未練を残す母の思いは複雑だった。

肉親を亡くした悲しみは一夜で癒されるはずもなく  
孤独感に襲われ母はかける相手のいない電話に幾度も手を伸ばして  
いた。

夜更けに誰かに電話をかけることなど一度もなかつた母。  
父との楽しいひと時を過ごした後、母はいつも一人だつた。  
魔法が解けてゆくように母はいつも一人の世界に引き戻された。

父を独り占め出来るのは一人で過ごす時間だけだった。

「自宅に帰つたらあの人は奥さんのもの  
今頃、奥さんと何をしているのだろう  
夫婦なら一緒にいるのは当たりなのに」

すべて承知の上で愛した筈なのに不安で眠れぬ夜が幾度も襲つて  
きたといつ。

父が独身なら母はこんなに悩むことはなかつただろう。  
愛する人と朝まで眠りにつきたい日もあつたという母の女心気持  
ちが痛かつた。

女の幸せを求めるよりも母の抱く願いのすべては叶わぬ夢だつた。  
母がぽつり言つた言葉が胸に響いた。

「不倫とはそういうもの・・・充たされない愛ゆえ燃えさかるのよ  
でもその愛は幸せをくれない・・誰ひとりも幸せになれないの」

父には守らなければならぬ家庭があり奥さんがいた。

愛人の母は父を煩わせ重荷になることを嫌つた。  
愛の欲望のいかなる感情も制してきた。

我慢してきた愛に気づいた母は珠美さんに電話をかけた。

「珠美、いま大丈夫」

「みんな寝ちゃって一人でテレビ見てたんだ  
早苗ちゃん少しは落ち着いた」

「うん、あれから病院に行つてきたの  
鬱じやないけどそれに近い症状つて言られて驚いたわ  
それで体の調子がおかしかったのね」

「おじさんとおばさん・・・突然だつたからね  
体つらいんだつたら家においでよ こっちに帰つたら?」

「ありがとう

でも今は動けない・・動く気力が出ないの」

「本当に一人で大丈夫なの」

「体はどこも悪くないって医者のお墨付きだから大丈夫  
ただ・・・悲しみがどんどん増してると

お母さんにしてあげたかつた事についてあったの  
いろんな所に連れて行って美味しい物いっぱい食べてもらいたか  
つた

お父さんとだって・・もつといろんな話をしたかつた  
いっぱい話をしても父さんの話しひを聞いてあげればよかつた  
そしたら、両親の不仲に気づき何とか出来たかもしれない  
父の死を思いとどまらせられたかもつて後悔ばかり  
こんな別れは・・・つら・つらすがるよね

「思いつめちやだめだよ  
自分を責めるのは体によくないんだから」

「わかつてゐるだけじ出来なかつた事ばかり浮かんでくるの  
珠美の言ひように自分を責めるのはよくないつてわかつてゐ  
過去は死と同じ・・・これは勝隨和尚の言葉なの  
どんなに責めようと出来なかつた事を悔やんでも過去はもつ戻せ  
ない

だつたら、これから私のに何が出来るかを考えよつて思つたの  
あらからずつと独りで考えてた」

「・・・」

「聞けてる」

「うるさい

「珠美、これから私が話す」とよく聞いてね

「うん

「お父さんが死を選んだのは私が原因  
私のせいでもあったの」

「早苗ちゃんの？」

「私・・・不倫をしていたの  
それを知つて、それでお父さんは死を選んだ  
借金で相当まいったのにさらに私の不倫  
死の引きがけを引かせたのはきっと私」

「・・・」

「驚いたでしょ

「うん、少し

「誰かに話してそれで罪が許されるとは思っていない  
だけど黙っているのがつらくて誰かに話してしまったかった  
たつた一人、珠美にだけは隠さず話そうと思つた」

「罪がどんなものなのか私には分からぬけど  
話して楽になれるんだつたら何でも聞くよ

心の病は溜め込まないで吐き出したら良くなるから聞いてあげる」

「私・・いま父に対する一つの感情に戸惑つてゐるの  
一つは私が不倫をしたという父に対する罪悪感  
そして母に手にかけ私をひとり残し逝つた父への怒り  
この存在する感情をどう受け入れていつたらいいのか分からぬ」

「救つてやれるような言葉が見つからない　ごめん  
でも現実を受け入れない限り苦しみはなくならないと思うんだ  
疑念の心があつたら又そこから新たな苦しみや悲しみが生まれる  
もう過ぎたことを考えるのはやめにしない？終わりにしよう  
冷たい言い方だけれどそれが楽に生きられる方法だと思うから」

「両親の死を受け入れられずいっぱい泣いて悩んで苦しんだ  
人生つて儂いんだなつてしまひ思つた  
家族との平穏な日々の積み重ねが幸せに繋がつていた  
そして・・その幸せが永遠でないことを知つた  
今、孤独が一番つらい　でも私負けない　頑張るからね」

「孤独の世界に逃げちゃだめだからね  
内にこもつたらもつとつらくなるだけだから  
つらい時は他人の力を借りていいんだからね  
おじさんおばさんがいなくても早苗ちゃんには帰る古里がある  
私がいることを忘れないで  
雄哉だつて雄哉の両親も皆んな心配してる」

「珠美ありがとつ うれしくて泣きわづ

「泣いてもいいよ  
いっぱい涙を流したらまた元気になれる  
気がすむまで泣いたらゆづくり眠つてね  
一人じゃないよ、私がついているずっと一緒にだよ」

母は大切な人が残っていたことを知つた。

不倫の愛に溺れていたことが絵空事に思えたという。

手に届くところにあつた大切なを見つけた母は変容した。

「君には僕がいる」父の言葉はすでに空を舞う薄っぺらい紙切れだ  
つた。

珠美さんの言葉が居座り続けた母の深い嘆きを解き放した。

繰り返し母が言つた言葉を思い出した。

「虚偽のない人の愛に触れると人は元気と勇気がみなぎるのよ  
美香、出会った人との縁は大切にしなさいね」

心に曇り持つ不実の愛に母は別れを告げよつしていた。

「いま成田に着いた  
いまからそつちにむかう」

別れを切り出さなくてはならない母は喜べなかつた。

父は母の心変わりを見抜けなかつた。

「私・・・妊娠しているの」

「・・・本当なのか」

「ええ、あなたの赤ちゃんよ」

「・・・」

「困惑してゐ?」

「あついや、そうじやない

子供が出来ないのは自分のせいだと思つていた

だから面食らつていい

子供か僕の遺伝子を残せるのか

夢のようで飛び上がりたいほどだよ

嬉しくてたまらない、本当に嬉しいよ  
早苗、ありがとう 元気な子供を産んでほしい  
こんな言葉しか言えなくてすまない」

「ありがとつ 気持ちを聞けてよかつた  
これで・・さつぱりお別れできる」

「別れる 子供が出来たのになぜ」

「ごめんなさい、もう決めたの

子供は私が一人で育ててゆきます」

「子供・命を育てて行くのは君が思つてる以上に一大事なんだぞ  
君一人が簡単に決められることじやないだろ?」  
お腹の子は君と僕の子供なんだ  
一人で君はどうやって育ててゆくつもりなんだ」

「わからない今は何も・・でもこれだけはまつきつ言える

私たちの関係を終わつた

だから悟朗さんは家庭に帰つて奥さんのところに戻つてください」

「む」うで何があつたんだ  
何があつた？何か言われたのか

「色んなこと沢山ありすぎて思い出したくないわ  
聞かないでお願い、私に思い出せないで  
私もう、何も思い出したくないの」

「早苗、落ち着こう

今君の思考は上手く巡っていない  
両親の死に混乱して少しおかしくなってるんだよ」

「おかしくなつていい?そりゃないわ  
おかしかったのは今までの私で今の私じゃない」

「なにを言つてるんだ」

「私は許されない愛に走つた

その愛に私は自分どころか周りのことも見えなくなつていった  
でも大切なものを亡くして色々な事を考えさせられたわ

父のこと・母のこと私を支えてくれていた人達のこと  
そして気づいたの

人を苦しめ裏切るような生き方をしているのならそれは間違つた

道だつて

だから別れる選択をした

「教えてくれ、君に見えたものを」

### 37 父の幻影？

「私がわかつたことそれは・・・  
あなたの大切な人は私じゃないってこと  
大切にしなければならないのは築いてきた家庭  
そしてその家庭であなたを待つ奥さんだったのよ」

「しかし・・・情況が変われば大切なものだって変わる」

「奥さんを妻にしようと決めたのはあなた自身でしょ  
奥さんの人生まる」と引受けた責任は重いわ

男の人って大変だなって思つてる

女にだけ産みの苦しさがあるのは不公平だとは思わないわ

世間の荒波を搔い潜る男の一生涯の涙は産みの苦しみに匹敵する  
と思つてる

男の人生つてそれくらい重いからこそ道をそれたり寄り道したくな  
るんだわ

誰にだつて過ちの一つ二つはあるわ  
道をそれたら正す・寄り道したら遅くなつても帰ればいいのよ

軌道修正して又歩きだせば過ちは正されるでしょ

そしたら誰かを不幸にすることもないし人生を踏み間違えずにす  
むわ

それぞれの納まる場所に戻らなきや「だめなのよ」

「・・・・・」

「私のこと本当に愛していた  
神に誓つて何の曇りもなく愛していたと言へる?」

「・・・・・」

「お母さんと過ごした幼少の頃の話をあなたは話してくれた  
私が若かりし母と似ていなつて嬉しそうに語ってくれた

一緒にこの母を思い出し懐かしい故郷を思って出させてくれる

俗世のこやな事も忘れられる、だから早苗とこるのが楽しい  
そういうてくれた言葉を私は何気に聞き流してきた  
それだけしか愛をされていると思い込んで喜んでいたわ

だけどそれって愛なの、あなたが私を愛する愛つて何

「愛には色々な形があるのだから何の不思議もないだろ  
早苗を思つ気持ちに嘘はない  
愛している それだけではダメなのか  
僕になにが足りなくて・君は何を求めているんだ」

「私は悟朗さんに何かを重ね見たことなど一度もない

あなたしか見えなかつた

あなたが欲しくて求め、あなただけを愛してきた

あつた時から思いはずつと同じ変わらなかつた

出会つた日、私は初対面のあなたを家に誘つていた

前にも言つたけど男の人を招くなんて初めてだつたのよ

自分でも驚きだつたわ

出会つた瞬間から私は愛していた

でも・・あなたは違つたんだわ

僕は妻帯者だ・あの時の言葉の意味がわかつたの  
あなたには私とこんな関係になる感情などなかつたのよ

強引な誘いに断りきれず一途な思いに負けて付き合つてくれた  
あなたにとつてはただそれだけの事だつた、間違つてる?  
黙つてないで何でもいいから言葉を頂戴」

「君が僕を怒らせて別れ話に持ち込もうとしているみたいに思えてな  
らない

今の君を説得出来るだけの自信も言葉もない

でも聞いてくれ

僕は浮ついた気持ちで付き合つたことなどない

妻ある男の責任は取る覚悟で君と関係を持ち将来を考え関係を続  
けてきた

簡単ではないがいつか一緒になることを誓つたじゃないか  
忘れたわけじゃないだろう」「う

「私だって何もかも承知のうえだつたわ  
奥さんのある人を愛したんだから何も望まないで  
あなたを愛しうくつて覚悟を決めていた

だけど何も望まないなんて出来っこないのよ

愛したら愛した分だけ欲しくなる あれも・これもって  
妻の座まで欲しくなって奥さんが恨めしくなつていた  
感情がエスカレートして憎しみに変わつていた  
家庭ある人を愛してその奥さんを恨むなんて罰あたりだわ  
私があなたの奥さんに抱いてもいい感情があるとしたら  
それは謝罪とお詫び以外に何もない  
そんな当たり前のことも忘れるほど私は嫌な女になつていた  
そんな醜い自分が恐くなつたわ 自分が大嫌いになつた  
自分を愛せないなら人を愛することも無理なの  
誰かを大切には思えないし幸せにも出来ない  
これ以上醜い心を持ち続けたら鬼・私は人じやないわ」

「君に罪があるのなら僕も同罪だ

一緒に償つて生きてゆく、その選択さえもないのか」

「裏切り続けた私達が一緒になりたいからといって

奥さんから奪つていいいものなんか何もない

奪いとつた家庭と愛を手にしてそれが幸せと言えるのかしかし

人を裏切つて悲しませ苦しめるのはもういや

父は私の不倫に苦悩して死んでいったわ

また人を死に追いやるようなことはもうしたくない

あなたの奥さんが同じ事をしたらと思うと体が震える恐いの  
あなたとこうしていることも正直つらい

「お父さんの死が不倫のせいだとしたら僕にも責任がある  
君だけが苦しむことはない 僕も一緒にその苦しみを受ける」

「もう止めて、して欲しいことは一つだけ  
奥さんの所に戻つて何もなかつたように夫婦を続けることよ  
こにに置き忘れたあなたのお母さんと故郷の思い出を連れ帰つて  
今日は帰つて・・ お願い」

「最後に聞かせて欲しい

もう僕とはこれつきりにしたいんだな  
君の気持ちは本当に変わらないんだね

「ええ変わらないわ

「わかった。君の気持ちを優先するよ」

「ありがとうございます

引越し先が見つかるまで、ここにいてもいいですか  
急いで見つけて出て行きますからお願ひします」

「引越しの件は待ってくれないか  
せめて子供が生まれて落ち着くまで此処で暮らして欲しい  
君が働けるようになるまで僕が君の面倒を見たい見させてくれ  
僕の子供をこの手に抱きたいんだ  
一緒に育てられないのなら我が子と過ごす時間がほしい  
君の要求を僕はのんだ 今度は君が僕の気持ちを汲んでくれ  
頼むこの通りだ」

子供の誕生を待ち焦がれる父の気持ちは痛いほどわかつていた。  
しかし何か一つを許してしまうと決意が鈍るような気がして躊躇  
つたといつ。

「わかりました でも男女の関係は今日で終わりにします  
悟朗さんが子供の父親でいられるのは私達がここで暮す期間だけ  
にして下さい

奥さんにはこれまでのようにして下さい  
女は男の浮気には敏感だからもう気づいているかもしれない  
でも子供の事だけは絶対に奥さんに知られてはダメ

証拠を突きつけられても何があつても・しらを切つてください  
子供の出来ない奥さんには愛人より子供の存在の方がつらいはず  
だもの」

「誰も泣かずに上手くいく方法なんかないのかもしれないな」

「私達は泣いてもそれは自業自得  
でも奥さんを泣かせてはいけないわ  
せめてもの償いで奥さんを守つてあげなければ・・  
嘘をつぐことになつてもこの嘘なら神は許してくれるわ」

母の決意はゆるぎなかつた。

父はそんな母の申し入れを受入れざるなかつた。

愛を精算させた二人は本妻を守ることで辛うじて繋がつていた。

父は仕事でどんなに帰りが遅くなろうと美香の顔を見にきた。  
ある日、美香の発した言葉に母は慌てた。

「パツパ・・ぱ・ぱー」

母はすでに新居を見つけていた。

「悟郎さん、美香と明日二日を出て行きます  
今まで本当にありがとうございました」

「やうか 今日でおわりか  
といとつ美香ともお別れか」

2歳の誕生日が目前に迫った6月のある日父との関りを絶つた。父はいつまでも美香を抱きしめ泣き咽んでいたという

その後、母は小さな幼児向けの英語教室を開き生計を立てた。

美香の側にはいつも母がいた。  
寂しい思いした記憶はひとつもなかつた。

しかし無邪気な生徒も時に大人顔負けの質問を浴びせた。

「美香ちゃんにはパパがないって本当  
お父さん死んじゃったの 先生、離婚したの」

明らかに大人の会話を聞いての質問だった。

「先生にそんなこと言つちやだめでしょ すみません」

「氣にしないで下さい

この年齢の子供は何でも知りたがって疑問をストレートに投げかけてくるものです  
こんな時、皆さん大人は逃げないで向き合つてください

今から先生が美香のお父さんのお話をしますから聞いてね  
先生はね、結婚の約束してた美香のお父さんとさよならしたの  
だから美香にはお父さんがいないのよ

その時先生のお腹には赤ちゃんがいたの、それが美香

ねえ皆、命は大切なものよね  
小さな虫さんにも大きな木や葉っぱにも命がある  
先生は命あるものすべてを殺したり粗末に出来ない

皆もそりでしょ、だから先生は美香を産んだの  
美香にはお父さんがいなけれどこれからもよろしくね

人生に隠さなければならぬ過去などない  
私達母娘に暗い過去はない  
なぜなら過去は死そのものだから  
美香と私は今を生きている  
未来だけを見つめひたすら生きていく  
胸を張つて生きてその姿を子供に見せ続けることが親の私の責任

そう言い切つて抱き締めてくれた母の優しい笑顔を思い出した。

子供に問われたことなど口を濁し繕えばよかつたのかもしけれない  
けど

それは自分の歩いてきた人生を否定するのと同じなの

あの時正直に話せてよかつた すつきりしたあの爽快感今も覚えているわ

話し終えた母の自信に満ち凛と輝く姿が忘れられなかつた。

子供を身ごもつた今たつた一人の肉親・父の存在は恋しいものだつた。

「母には過去でも私と父は・・繋がつてゐる

母の愛した父は今も健在なのだろうか

父に会いたい・父の腕に抱かれた昔のように抱きしめてもらいたい  
父の温もり・・愛に触れてみたい」

童心にかえつた美香は涙顔を両手で覆い肩を大きく揺らしていた。

### 38 たぐり寄せれば

雅和と佐知の関係は美香をも巻き込んで展開していた。

「親父の忘れられない人それが佐知の実母  
そして一人の間には子供まで・・  
よほどの因果があるんだろうな別れた佐知と俺は」

別れた佐知さんとの新たな出会いには意味がある  
美香が言つた言葉を思い出していた。

雅和は佐知との縁を断ち切るか引き寄せてみるべきか悩んでいた。

美香さんに話してみるか

雅和の最後の抛りどころはいつも美香だった。

連絡をしようとしていた矢先の訪問に美香は驚いていた。

「雅和の突然の訪問は何かあるから恐いわ  
また・・なにがあるの?」

「今日は親父と佐知のことを聞いてもらいたくて來た」

眼光鋭く光る目に美香は一瞬たじろぐほどだった。  
いつもなら突つ帰すところがあの夜のように部屋に入れた。

「そんな目で見つめないで恐いわ」

「あつごめん

俺、そんな怖い目してた」

「ええしてたわ

ちょっと待つて珈琲入れてくるから」

立ち昇る珈琲の香りは雅和の乱れた鼓動を鎮めてくれた。珍しいことに珈琲に口も付けず雅和は話を始めた。

「美香さんに聞いて欲しいのは親父の過去なんだ  
親父には由里子さんという恋人がいた  
その恋人は親父の子供を産んだ

「ここから先が重要だからよく聞いて…」

親父の恋人は佐知の母親だつたんだ

佐知は両親を幼い頃に事故で亡くし施設に入り現在は養子先で暮らしている

彼女が親父の子だという証拠は何もないけど親父の子なら俺達は義兄妹だ

「親父と佐知の母親が愛し合い子供がいたことは間違いない事実なんだ

今となつては眞実を語る人はみんなあの世・別世界だからどうしよつもないけどね」

「佐知さんは自分の出生をどじままで知つてゐるのかしり」

「親父から聞いた限りでは養女のことば彼女もわかつてゐる

親父と佐知は親交があつたんだ

俺の親父とも知らないで佐知は親父と会つてゐた

俺はそんなこと全く知らなかつた

それを知つた俺は・・一人に嫉妬した

それが原因でひと悶着あつて佐知と別れた

思えば俺と佐知のまわりには色んな因縁が渦巻いていたんだ」

「佐知さんが雅和のお父さんの子供なら一人の愛は禁断の愛ね  
とっても複雑で切ない悲恋物語の小説が書けそうだわ」

「俺は真剣に話をしているんだから茶化さないでくれよ」

「そうね、ごめんなさい

今回だけはクイズみたいにはい・わかりましたつて訳にはいかないわね

真実の答えは簡単にできるものかしら

真実は深くて鉱山を掘り当てるようなものだわ

沢山のアンテナを張らないと答えはでないとと思うの

佐知さんがアンテナの一つだとしたら会つべきじゃない

「一度会つて話すべきかもな」

「そうね、それがいいわ  
やつぱり佐知さんとの縁には意味があつたでしょ  
会つて話したら答えみつかるかもしねないわ」

「佐知の実母と親父との関係をどう切り出すかが問題だな  
実母の過去を知らされた佐知は驚くだらう  
俺と同じようにきっと悩み苦しむ  
そして俺は余計なことをしたと後悔するんだろうな  
幸せならこのままそつとしておく方がいいと思つたり  
佐知の気持ちを考えると俺は決心がぐらつくんだ」

「子供には親を知る権利があるわ

佐知さんだつて実の両親のこと知りたいと思つていいのはずよ  
養父母に遠慮があつて聞けないかもしれないわ  
でも知りたくないはずがないわ  
たとえ親が悪人であつても知りたいと思うのが血を分けた肉親の  
情でしょ

佐知さんが何も知らないのなら知るべきだわ  
それで苦しんだとしてもその後の人生は意義深くなると思つわ

「美香さん、やけに熱くなつてない?」

佐知さんの気持ちはきっと私と同じ、私にはわかる  
美香は父親を思い出し自分の思いも一緒に吐き出していた。

「雅和はお父さんの過去を自分の手でこじ開けたのよ  
過去と割り切つてそのまま封印できたものを雅和が穿り返した  
だつたら途中で放り投げるのは卑怯だわ  
このままいいの、それで心は晴れるの  
最後まで見届けてまた静かに眠らせてあげましょうよ」

「…………」

「会つてこの話をするもしないも疎の時に決めればいいの  
まずは会うことから始めないとね  
繋がつた佐知さんの糸をたぐり寄せればきっとそこから何かが始  
まるわ」

「俺、来月友人の結婚式で向こうに行くんだ  
ほら前に話した龍一と真砂子、あの二人が結婚するんだ  
きっと佐知も真砂子の友人で列席するはずだからその時」

「佐知さんに会つたらペンドントのお礼を言ってね  
大切なペンドントを届けてくれて喜んでいたって

雅和の耳に美香の声は届いていなかつた。

「どんな言葉をかければいいんだろ

元気つていうのも・・なんか違うしな」

雅和は佐知との再会に思いを馳せていた。

そんな雅和を見つめる美香の目は悲しみ色に染まつっていた。

わたしは佐知さんの影に脅えている・・

突然湧き上がつた不安に美香の心は千々に搔き乱れていた。

気持ちを沈めようとペアカップを持ち美香はキッチンに姿を消した。

雅和の問題が落ち着くまで妊娠を切り出すのは無理だと思つた。

佐知さんとの再会を強引に薦めたのは私なのに・・

美香は落ち着かない様子で郷里に向かつた雅和の帰りを待つていた。

た。

そのころ雅和は龍一と真砂子の結婚式会場にいた。

式場にはサラ・ブライトマンの美しい歌声が流れていった。

招待客を優雅にお迎えする細やかな演出が見事になされていた。芸能人の結婚式と見間違つよつた雰囲気と規模に圧倒されていた。

龍一の家は代々、莫大な山林や土地を所有する資産家だ。

不動産、レストラン、リゾート施設を開拓する伊納グループのト

## ツプが龍一の父。

伊納グループと付き合いのある富裕層の迎賓客が続々と会場入りしていた。

入り口で気後れしている雅和に友人の声がかかつた。

「お~い井川、こつち早く来いよ」

懐かしい面々に雅和は安堵し会場に入つていった。

一足先に会場入りをしていた佐知は高校の友人達とテーブルにつき談笑していた。

時々周りを見渡しながら誰かを探していた。

「どこにいるのかしら　このどこかにきっとここるはず」

誰かが雅和を呼ぶ声もこの広さでは虫の声に過ぎず佐知の耳には届かなかつた。

拍手に包まれ幸せいっぽいの新郎新婦が入場した。

想像を超える真砂子の花嫁姿に佐知は胸を熱くしていた。

龍一と真砂子の長い春を知る佐知の喜びはひとしおだつた。

真砂子はスポットを浴びる女優ながらにまぶしく輝いていた。龍一の端整な顔がいつに増して引き締まって見えた。

層層たる来賓者を前に余裕さえ見せ堂々たる立ち姿はまさしく伊納グループ総統の御曹司。

真砂子の実家はつなぎ・ふぐ料理を各地に展開している老舗割烹店。

龍一の父と真砂子の父は大学の先輩と後輩の仲。

二人に障害は何ひとつなく両家に祝福された理想的な結婚だった。伊納グループの跡取り龍一と真砂子は本當にお似合いだった。好きな人と結婚し幸せを独り占めしている真砂子が羨ましく思えた。

「真砂子はこのまま幸せのまま一生を終えるんだろうな  
ううん、そんなわけない  
人生はそんな安易でなまっちょろいものじゃないわ  
真砂子だってちゃんとわかってる 人生そんな甘いもんじゃない  
つて」

御伽噺に出てくるお姫様のような真砂子を見ていると不幸とは無縁に思えてならなかつた。

### 39 たぐり寄せれば？

お色直しに席を立つた真砂子の控え室に佐知の姿があった。控え室は無駄に広く奥の応接室では親族らが覗いでいた。

かつらを外した真砂子は歌舞伎の石橋の赤獅子のように頭を振つた。

「苦しかつた」死にそう・  
佐知、この帯を緩めてくれない」

「私には無理よ

それにかつらを持つていった人が言ってたでしょ  
衣装の人があるまでそのまで待つてくださいねって

「ふううー仕方ない、待つしかないか

佐知はホテルのパンフレットで真砂子の体を扇いでいた。

「佐知、雅和と話はできた？」

「ううん、話どころか何処にいるのかも分らないわ」

「そりゃ、あそこじゃ探せないかもね  
でも大丈夫 二次会で話すチャンスはいくらでもあるわ」

「私、二次会は遠慮しようかと思つてゐるの」

「だめ・だめだからね  
つめたいなあ佐知は・・親友の結婚式なのよ」

「・・・・・」

「雅和のことは抜きにして私のために顔を出して、お願ひ」

「うん、わかつた」

ドレスに着替えた真砂子を見届け佐知は部屋を出た。

パウダールームの出口の段差で佐知は足を挫いていた。

7・5センチのヒールで躓いた足首のダメージは思いのほか大き  
かつた。

引きずるように数歩進んだ足に激痛が走った。

「いたつ、これじゃ二次会は無理かも」

あまりの痛さにその場で靴を脱いで捻つた足首を擦っていた。  
ピンヒールの靴を片手に壁にもたれるようにして痛みを堪えていた。

会場を抜け出した雅和はてっちゃんからのメールに目を通していた。

／クレームの件はクリアした　日帰りは不要・ゆっくりして来い／  
雅和が会場に戻ろうとした時ブルシャンブルーのドレスの女性に  
息を呑んだ。

その人の名を雅和は思わず叫んでいた。

「佐知　佐知だろう」

雅和の姿を見た佐知は驚きと動搖を隠せなかつた。

早く返事しなさいよ　なんでもいいから返答して  
そうしたいけど出来ない　声が出ないの  
そんな顔しないで早く笑って　笑顔を見せるの早く  
出来ない　それも出来ない・・

そんな佐知のそばに雅和が駆け寄ってきた。

「こんなところで靴なんか手にしてどうしたんだ」

「そこ」で躊躇して

「大丈夫か 相変わらずだな  
今も変わらずそそつかしいんだな」

覚えていてくれた 私の性格をまだ忘れずに  
こみ上げた嬉しさを隠し佐知は床に置いた靴に足を入れた。

「うつ・いたあ

「…  
「痛むのか？そんなヒールの靴じや歩けないだろ  
無理するな ほら俺の肩に捕まって」

「遠慮するなよ 歩けないんだろ  
此処にずっといるつもりか  
早く戻らないとお色直しの真砂子がきづりついで」

「じゃ・・・お願いします」

そんな二人の様子を真砂子は目にしていた。

「あの二人いまもお似合いね」

雅和に体を支えられ席に戻った佐知の胸は高鳴っていた。

バラードの曲と一緒に会場のライトが少しずつおちていった。  
驚くような効果音がしてセンサーで各テーブルのキャンドルに火  
が灯つていった。

一番の盛り上がりを見せるキャンドルサービスの演出に大きな拍  
手が湧き上がった。

YOU RAISE ME UP の曲が心に染みた。

豪華な際立つ炎の美しさを見つめながら佐知は思い出した。

雅和と過ごした夜のクリスマスツリーのライトと重なっていた。

会場に明かりが戻ると佐知は雅和の姿を追つた。

賑やかな盛上がりを見せるテーブル席に雅和の姿が見えた。

一度と見られないと思っていた大好きな笑顔があった。

グラスを持ち上げ乾杯する雅和の顔は久しぶりに見る笑顔だった。

「ここに来れてよかつた

二次会は残念だけどもうこれで十分だわ」

エンドレスラヴが流れ聞こえた・

披露宴も佳境に入り落ち着いた大人の雰囲気の中での花束贈呈。

そのとき佐知は背中に人影を感じ振り返るとそこにいたのは雅和だつた。

中腰の雅和は佐知にメモを握らせ無言で立ち去つた。

出口で見送りを受ける披露宴の酔い覚めやらぬ客人は長い列をなしていた。

さすがにこの人の多さでは外に出るのも一苦労だった。

雅和は仲間らとまだテーブルで話し込んでいた。

二次会の断りは電話で伝えようと佐知は真砂子と短い言葉を交わし別れた。

佐知は渡されたメモが気になつて仕方なかつた。

メモをバッグから取り出し化粧室に飛び込んでいた。家に帰つてから読もうと思つていたメモを開いていた。

「何が書かれてるのだろう」

期待と不安にメモを持つ手が震えていた。

佐知は閉じた瞼を静かに開き懐かしい豪胆な文字を目で追つていた。

／足は大丈夫か・その足じゃきっと二次会は無理だらうな  
俺は日帰りでこっちに来たから二次会には出ないで帰るよ  
もし佐知がこのまま家に帰るつもりなら会つて少し話さないか?

式場に来る途中、懐かしいアーケード街をまわってきたんだ

昔よく待ち合わせした喫茶店がまだ残ってたよ

『SIGN POST』佐知も覚えてるだろ？ あの店で会おう／＼

佐知はホテル近くの靴屋に入った。

ロウヒールの靴に履き替えた佐知は足の痛みも忘れ喫茶店へ急いでいた。

田を凝らさなければ見落としそうな小さなお店

『SIGN POST』は昔のままの佇まいを見せていた。

「いらっしゃいませ

あら随分の『無沙汰だったわね 元気になさつてた』

「私のこと覚えているのですか」

「いつも微笑ましく眺めていたのよ  
自分の若かりし甘酸っぱい思い出が甦ってキューンとしたわ  
あつこめんなさい

「こんなところで立けた話も変ね いかがいたい？」

メニューに手をかけた佐知にママが尋ねた。

「今日せおひとつ?」

「リード人と会う約束をしているんです」

「わづ、だったら注文はその人が来てからでいいわよ」

「すみません」

佐知はメモを何度も読み返していた。

「どうぞ これでも飲んで時間をつぶして」

「ありがとうございます」

昆布茶を置いたママは昔と変わらぬ笑顔を見せカウンターに戻つていった。

黒髪のショートボブも其のままにエキゾチックな南国の匂いを今も漂わせていた。

常連と思わしき男性らとの会話が聞こえてきた。

「あの頃の日本経済は右肩上がりだったよ」

「まじめに働いていれば給料は上がりそこなひ昇給も出来た」

「あの頃はインフレで物価も上がつて母はやり繰りに苦労してたわ  
たしか10円か20円のキャラメルが10円も高くなつて  
私も驚いた記憶があるもの」

「一番はなんといつてもオイルショックの時だ」

「あの時は狂乱物価の言葉が飛び交つていたな」

「今は物価は下がつても給料も一緒に下がつてゐる  
終身雇用制度も崩壊している今のほうが  
俺達の頃より厳しいのかもな」

話の内容からするとママは母と同世代のように思えた。  
しかしママは明らかに母より10歳は若く見えた。

「いらっしゃいませ お久しぶりですね  
彼女なら向こうでお待ちになつてますよ」

ママの指差す佐知を見ながら雅和は照れ笑いを見せた。

「だいぶ待つたんだろう  
なかなか抜け出せなくて・・・」めん

「みんな久しぶりの話は尽きないわ  
ママがね、私たちのこと覚えていたのよ  
この昆布茶もママからの差し入れなの」

「そういえば「お久しぶり」って声かけられた  
お店の人はいろんな人を相手にするわけだからそれを考えるとす  
ごいね

「ご無沙汰だつた俺と佐知を忘れないでいてくれたなんて  
あのママがいる限りこの店は永遠だな」

「ねえ何か頼みましょう

雅和が来てからと思つて注文してないの」

「あつごめん　じゃ俺は」

「ストロング珈琲でしょ」

「覚えてたのか　佐知はレモンティーとホットケーキだつたね」

「ええ随分昔の事なのにお互いの注文をまだ覚えてる おかしいわ  
ね」

銀のトレーを持ったママがホットケーキを差し出して言った。

「何年かぶりに来てくれた二人に感謝をこめて  
今日は特別にイチゴをそして珈琲は飲み放題よ  
ゆっくりしていってね」

「ママはいつも生クリームの上に果物をのせてくれた  
キウイ・メロン・びわ・パイン・巨峰・その時々の果物がのつて  
いたわ  
メニューの写真には果物がなかつたからサービスなんだって嬉しく  
かつた」

「喜んでもらえることは私にとって一番の『ご褒美よ  
珈琲のお代わりは遠慮しない』で声をかけて頂戴ね」

「ありがとうございます」

呼吸を合わせたかのように一人して頭を下げていた。  
それはごく自然で一人にはもう垣根はなかった。

「実は俺、龍一の結婚式のあと佐知に会おうと思つていたんだ  
聞いてもらいたいことがあつてそれでここに来てもらつた  
驚かせることになるかもしぬけど聞いて欲しい」

「・・・・・」

「まず親父のことから  
まわりくどい話は嫌いだからはつきり言つ  
佐知が知つてる柳木沢・俺の親父は君の実母と恋人同士だつた  
そして、」

「まつて私の・・実母の恋人が柳木沢さん?  
雅和のお父さんって本当なの」

佐知は雅和の言葉を遮断し声をあげた。

実母の手紙に書かれていた『柳木沢和人』は雅和の父・柳木沢だ  
つた。

「俺の親父が君のお母さんの恋人だ  
そして君のお母さんは妊娠して」

「分つてる、母は子供を産んだ」

「君は何もかも知っているのか　だつたら俺に教えてくれ  
親父と君の実母・由里子さんの事を全部話してくれないか」

佐知は手紙の柳木沢が他人に思えなかつた訳がやつと分つた。

母が愛した柳木沢和人その人は佐知が出会つた柳木沢と一本の線  
で繋がつた。

柳木沢さんは私に母の面影を見たのかもしれない  
だから君と会うのが嬉しいと言つた  
体を流れる母の血が私と柳木沢さんを引き会わせてくれた  
雅和との出会いも、こうしてまた雅和と会えたのもすべて運命  
佐知は母が語れなかつた真実を炙り出すかのような出会いの数々  
を思い出していた。

## 40 たぐり寄せれば？

俯いたままの佐知の横顔を雅和は静かに見つめていた。

佐知の頬に一粒の光るもののがはつきり見えた。

やはり佐知に話すべきではなかつたと雅和は後悔していた。  
一人は言葉を失い長い沈黙のまま向かい合つていた。

「俺は余計なことしたようだ・・すまない」

「いいの 私が実母の事を知つたのは最近な

施設が取り壊される事を聞いて施設に行つた疎の時」

「そこで子供の存在も知つたのか」

「ええそうよ

母が残した遺品の中に手紙があつたの  
手紙は箱の底を二重にして隠してあつた  
誰にも知られたくない手紙だったのね

私はその手紙の宛名をみて驚いたわ  
母と私は同じ苗字の人と出会つていたんだもの

こんな偶然があるんだつて不思議に思つてた・・今日まで

いま雅和のお父さんと母が恋人だった・それを聞いてわかつたわ

わたし手紙の柳木沢という人に親近感を持ち他人と思えなかつた  
その人の影が雅和のお父さんと重なつて見えていた

柳木沢和人様と書いてあつたその人が雅和のお父さんだとわかつて嬉しいの

母が愛した人が雅和のお父さんなら私が惹かれたのも不思議じゃ  
ないわ

だから柳木沢さんは母に似た私と会つてくれた

「聞きにくい話だけど氣を悪くしないで聞いて欲しい  
子供が出来た君のお母さんは親父との関係をどうじょうと思つて  
いたのかな

君は親父の子供なのか?教えてくれ」

「私は死んだ両親の子供よ」

「だつたら教えてくれ

親父と君の母親の間に出来た子供のこと」

「母の手紙に書いてあつたわ

雅和のお父さんが出張の時、母は電話で呼び出され再会した

柳木沢さんへの溢れる思いが綴つてあつたわ

あの時二人は関係を持つた そして母に子供が出来た

母は一人で育てる覚悟だつたから柳木沢さんには何も告げなかつ

たの

子供は男の子だった 和人の和、由里子の由で『和由』

「和由、親父の一宇が入ってるんだな 僕と同じだ」

「和由兄さんは母の実家の墓に祭られているの」

「・・・・・」

「母とあなたのお父さんの子供はすでに亡くなってる  
わずかな命でこの世を去つた和由という人はもう存在しないの  
でも和由兄さんは雅和と私を繋ぐ大切な人だと思ってる」

「・・・・・」

「雅和がもし母を憎んでいるのなら母を許して

私は女だから母の気持ちがわかるの・・ごめんなさい」

「許すとか許さないとかそういう事じやないよ

俺は親父の子供が佐知なのか・それが知りたかった

正直俺は親父の子が佐知でないとわかつてほつとしてるんだ」

「私も兄妹でなくてよかつた

もし兄妹なら思い出がめちゃめちゃになつていたわ」

「俺一人っ子だから腹違いでも和由兄さんと会つてみたかったな」

「だめ・そんなこと絶対ダメよ

和由兄さんは悪いけど兄さんが存在してたら母は父と結婚しなかつたわ

私は生まれなかつたし・・雅和にも会えなかつたのよ  
それでも雅和は死んだ兄さんと会いたいと思つの」

「そんな真顔で聞かれても・・

俺は思つたことを口にしただけだからわ」

「今更そんなこと聞く私の方がどうかしてるわね」

「佐知、俺は君と会つてよかつたと思ってる

君にこの話をすべきか気が重くてずっと悩んでいた

そんな時美香さんが言つたんだ

佐知には親を知る権利がある・それで苦しむことになつても

佐知の人生は意義深いものになるつて背中を押してくれた

「美香さんがそんなことを・・

実母のことを知つたとき確かに私は落ち込んだ

真実を知つて苦しんだわ  
でもこれが美香さんの言ひ歩みに繋がるならしつかり受け止める  
つもり」

「苦しみや悲しみが人生に付きまとつのはなぜなんだひつ」

「何かを気づかせる為じゃないかしら そんな気がする  
苦しみから解き放されようとすればいやでもその苦しみと向き合  
うことになる  
それは結局、自分を知ることに繋がる・・」

「人は巡つて結び結ばれて生きてるんだな  
人生つて生きていれば不思議な出会いが一杯あつて面白いもんだ  
な」

「あつ電車の時間は大丈夫」

「もうだな、そろそろ出ようか」

ママがドアの外まで見送つてくれた。

「お店の名前は道標・道しるべ・の意味なのよ  
岐路に立つたときや困つた時はここを思い出してね  
私の生きているうちにまた顔を見せに来て頂戴、約束よ」

柔らかな手の温もりと心遣いに佐知は胸を熱くしていた。  
一人の愛を見続けてきたママは一人に手を振り続けていた。

「あの二人の絆は本物・・

「一人の愛はそんじょそこらの愛とは違つ  
試練の愛を二人はこれから歩んでいくことになる」

ママには佐知と雅和の未来が見えていた。

「私、今日はバスで帰ります だから二回で」

「そうか、じゃ・・」

また会おうと言いかけた雅和は言葉を詰まらせた。  
また会う? 真相が解けたいま何のためまた会う必要がある

「久しぶりの再会で雅和と話せて夢みたいだつたわ  
もう会えないと思つていたから嬉しかつた」

「佐知、今日は本当にありがとう」

「 ジョジョジョ ジャオ元氣で」

「 ああじゃ・・・」

じゃ・・に続くまた会おうの言葉をまた飲み込んでいた。

背を向け歩き出した二人の思いは同じだった。

佐知はあえて時間のかかるバスで帰宅することを選んだ。  
雅和と一緒に時間が延びればそれだけ別れもつらくなると思った。

ペンドントの件以来くすぶり続ける雅和への未練を消すことは出来なかつた。

「 雅和のそばにずっといたかつた 離れたくなかつた

一晩だけでも寄り添つていたかつた

そんなことありえないわ・・・わかっているだから苦しいの

知らず知らず涙が流れ落ちていた。

拭いても拭いても止まらぬ涙が頬を伝つていた。

「 もう涙は涸れたはずなのに」

新たな涙の泉が佐知の体に溢れ出していた。

#### 41 たぐり寄せれば？

駅に向う雅和は足を止めていた。

「俺、やっぱりこのままじゃ帰れない・・・」

来た道を走り出していた。

停留所でバスを待つ佐知は目頭に溜まつた零を押さえていた。  
人もまばらな車中は余計悲しみを誘つた。

前の客のあまりの酒臭さに耐え切れず佐知は席を立つた。  
座席を移動しようと体の向きを変えたときだつた。  
後部窓にバスを追いかける黒い人影らしきものが見えた。

全力で走る苦しげな顔が対向車のライトで一瞬映し出された。

「まさかず・・・」

佐知は運転手に必死で頭を下げていた。

「止めてください

今すぐ降りしてください お願いします」

「お客様、それは無理だよ 次まで我慢してください」

そつけない運転手に佐知は身を乗り出して詰め寄った。

「どうしても降りたいんです  
気持ちわるいんです 苦しいんです」

涙で腫らした目は熱っぽさを漂わし寂しげな顔は病人の様だった。

「大丈夫ですか 顔色わるいし苦しそうだね」

信号がつまること赤に変わると運転手はドアを開けてくれた。

「お大事に・・足元に気をつけて降りてくださいよ」

ドアが閉まり走り出すバスに佐知は深く頭をさげた。

すぐさま黄昏の道を雅和を求め走り出していた。  
互いを求める二人はひたすら走り続けていた。

消え行くバスに雅和の心は萎えたがあきらめたくなかった。  
速度が落ちたのかバスは再び姿を見せた。

急に視界に入ったバスが気になつた。

「俺に気づいて佐知はバスを降りたんだ きっとそうに違いない」

雅和は最後の力をふり絞り走り続けた。

「雅和はもうひき返したのかも知れない」

暗がりの道を走る佐知の心は揺れた。

「なら、どんなに走つても雅和には会えない」

それでも痛む足を堪えて走り続けていた。

募る思いが佐知の足を動かし止めようとはしなかった。

互いの目に姿が見えた。どちらからともなく叫んでいた。

「 さちー 」「まさかず」

佐知は駆けてきた雅和に昔のように抱きついていた。

「 ハア・ハア・・・・」

走り続けた二人の荒い息遣いだけがしばらく続いていた。  
体を離し見上げた佐知を雅和は見つめた。

「俺・・このままじゃ帰れないよ

佐知に言い忘れた言葉を伝えたくて追いかけてきたんだ」

「・・・・・」

「俺、佐知とこうしてまた会えた縁を大切にしたいんだ  
だから・・また会おう

ペンドントで復活した雅和への思いがみるみる溢れ出していた。

「雅和・・ありがとう　また会いましょうね

「ああ、また会おうな

見つめ合つ一人の手は絡まり歩き出していた。

もう一人に言葉は必要なかつた。あの頃と同じだつた。  
一人の背後には危ない匂いが立ち込めていた。

二人はホテルの一室にいた。

「駅に向つ道すがら君のことばかり考えていた  
俺の気持ちは昔に戻つていた」

「バスを待つ私も雅和のこと..  
もつと一緒にいたい・離れたくないって」

一人は体をベッドに投じていた。

絡めあつた手を解こうとせず一人は天井を仰ぎ見ていた。  
体に伝わる温もりに互いがそれぞれに昔の思いを馳せていた。

自分を見失うほど雅和を愛した日々が懐かしかつた。  
電車を待つ腕と腕が触れるたび泣き出しそうになつた別れの日。  
プラットホームで人目もはばからずしゃくりあげて泣いた私  
泣いて縋つてでも愛を取り戻したかった…しかし時すでに遅し  
目も合わさず無言の雅和はすでに佐知への愛を葬つていた。  
優しさの一欠けらもなく去つて行つたその背中は小さかつた。

今ベッドに雅和と横たわつてることが夢のようだつた。  
しかし一人は狂おしく求め合つた以前のような激情に駆られなか  
つた。

こうして寄り添つていられれば、私は何もいらない  
何かを望んだり欲張つたりしたら何もかも消えてしまいそう  
私はこれ以上何も望まない 望んじゃいけない

燃え盛る佐知の体はまっすぐな心に鎮められ鎮火していた。

きつく絡めあつた一人の手は汗ばんでいた。

一瞬離れそうになつた手を雅和はギュッと掴みなおした。

この手はもう離さない

あの時、俺がこの手を離さなければ・・俺と佐知は

手を伸ばさなくとも触れ合える距離にいる佐知。

雅和は今すぐにでも抱きしめたかった。

この腕の中で溶けてゆく佐知を見たいと思う雅和だった。愛おしさは今も同じなのに昔とは何かが違うと感じていた。

がむしゃらでもさぼるような愛は姿を消していた。  
触れ伝わる肌の温もりが安らぎと幸せを運んでいた。

体を重ね合うこともなく時だけが刻々と流れていった。  
悟り澄ましたような二人はただ静かに寄り添つていた。

「雅和、変なこと聞いてもいい」

「変なこと・・」

「軽蔑しないで聞いてね

私この部屋で雅和と二人になつて昔と同じ気持ちになつた  
雅和に抱きしめて欲しい・雅和がほしいって・・

昔のように抱いてつて叫びたくなった

でもそんな衝動がもう一つの気持ちに宥められていたの  
ずっと願っていた夢のような再会、近くにいられる幸せ  
それだけでもう十分だと思えた

昔、雅和に抱かれた時と同じ・私はもう充たされていた  
気がつけば火照った体はいつの間にか静まっていたわ  
雅和は私を欲しいと・・抱きたいと思つた

「・・・・・」

「美香さんの」と考へてた

「美香さんは関係ない

俺はいま佐知のことだけ見ている

今夜の俺は佐知に心を奪われ別れ難くなつた

俺は男だから求める欲求は佐知以上だつた

だけど俺も同じ・・佐知が話してくれた気持ちが分る

手を絡め俺は佐知と枕を並べていた  
もうそれだけで俺は満足だつた

この手に抱きしめられなくとも肌を合わせられなくとも俺も充たされた

うまく表現できないけど昔より?がりは確かにものに変化している

「愛とかそんな感情とは別の・・人の根源に溯るというか・・  
ごめん、上手く説明できそうにない」

「雅和の言いたいこと分るわ 感じてることは一人とも一緒に  
男と女を超えた何か新たな感情が生まれているのかしら」

「俺と佐知 俺達は男女の愛を超越した」

「今夜私たちを引き合わせてくれたのは和由兄さん・きっとそう  
私たちが引きずっている気持ちを確認させるため」

「心は昔のままじゃないって気づかせてくれた?  
俺と佐知は昔には戻れないって教えてくれた」

「だから雅和を欲しがった私の体に心がセーブをかけた  
再燃した思いに体は疼いても心には伝わらなかつた  
昔のような愛には戻れない もう…」

佐知は握った雅和の手を解き背を向けた。

雅和は静かに体を抱き寄せていた。

伏し目がちの佐知の顎を指先でそっと持ち上げ唇を重ねた。

懐かしい唇の感触、ほんの数秒のキス(正真正銘の最後のキス

「昔のような愛はいらないよ 僕と佐知にはもう必要ない  
今夜、俺達の愛は本当の意味で終わった  
そしてその愛は一生切れない絆に変わったんだ」

見えない兄・和由が繋いだ新たな縁に結ばれた雅和と佐知。

一筋縄ではいかないその縁には男と女の機微が隠されていた。

佐知・雅和・妊娠した美香・この奇妙な関係にあらたな火種が燃り始めた。

結婚式から戻った雅和は後ろめたい気持ちを拭いきれずについた。佐知と一夜を過ごした事実が重く圧し掛かっていた。

ホテルで会つていた親父と佐知に怒りを爆発させた記憶が甦つた。抑えられぬ怒りとやり切れぬ感情に心痛めた遠い昔を思い出していた。

あの夜の一部始終を包み隠さず話せば美香はわかつてくれるだろう。

しかしあの一晩だけはどんなことがあっても隠し通したい雅和だつた。

上手くいっている関係に自ら水をさし波紋を投げることは避けたかった。

この選択が正しいか否かは一の次で美香との絆を守りつつ必死だつた。

美香の心に影を落しかねないあの一夜を雅和は封印しようとしていた。

帰りを待つ美香の苦しいつわりは治まり体調も戻つていた。

今夜こそ話そつ 雅和の子供ができることを  
雅和からの帰宅メールを見つめながら美香は決心していた。

マンションに向う雅和の足取りは重たかった。

秘密を隠し持つた雅和はドアの前で深呼吸を繰り返していた。

「美香さん、ただいま」

「おかえりなさい」

「はい、おみやげ 引き出物に入っていたんだ」

「まあ綺麗なペアグラスね

今夜はこのグラスで乾杯しましょうね  
ねぇ、結婚式はどうだった?」

「懐かしい顔ぶれがそろって最高に盛り上がったよ  
酔い潰れて電車に乗り損ねてしまったのは不覚だったけど

「親友のお祝いだつたんだもの仕方ないわ  
少しくらい破目を外してもいいんじゃない」

「不覚だつたよ、帰れなくなるなんて」

「お酒、強くないのに無理して飲んだんでしょ」

「そのとおりです 面目ない」

「それで肝心の佐知さんは会えた?」

「ああ、会つて話をしてきた  
美香さんに背中押されたから勇氣を出して話すことが出来たよ  
すべてが分つたよ」

「佐知さんと雅和は兄妹ではなかつた  
佐知さんはお父さんの子供じゃなかつたんでしょう」

「美香さんは超能力者みたいだな」

「雅和は嘘がつけない人よ すぐわかるわ  
佐知さんと兄妹だったら眉間にしわを寄せていたはずよ」

「確かに俺は馬鹿がつくほど正直者だからね  
なにもかもすべてが筒抜けか 怖いな」

「佐知との一夜だけは知られてはいけない  
そのことばかりが頭を巡り雅和の顔色が曇りだした。」

「雅和、雅和つたら、聞こえてる」

雅和の顔面に美香は手を振つて見せた。

「あつこめん、ほんやりしてた?  
まだ酔いが残つているのかな」

「じめんなさい 疲れているのに私が色々質問したからだわ  
話は又今度にして食事にしましょう」

「気を使わせてすまない」

「気にしないで  
引き出物のグラスでさつそくワインを頂きました」

「この匂い、もしかして今夜はすき焼き?」

「当つたり、今夜は雅和の大好物ばかりよ  
持つてくるから待つてて」

「今日は俺がやるから美香さんは座つて」

雅和の手ですき焼きと赤ワインがテーブルに用意された。口に含んだ雅和のワインは今日はなぜか無味無臭に思えた。

佐知の話題に話しが及ぶと正直つらかった。

勘のいい美香に気持ちを見透かされそうでハラハラしていた。限界に達しそうな時「話は今度・・」美香の言葉に救われた。

愛する人に隠し事をするのは並大抵でないことを悟った。

やはり言うべきだ 何も疚しいことがないのだから  
時機を見て話そう 嘘は突き通せない

佐知との一件を話せば互いに傷つく  
隠し通せたとして・・・いずれ大きな傷を残すことになる

今宵は美香の柔肌に包まれて心の闇を葬り去りたかった。

男と女には決して交わることの出来ない心のヒダがある  
そのヒダをどのように折りたたんでゆくかによって関係も変わる  
愛し合つ男と女の行き先を左右するヒダが立ち塞がっていた。

ホテルの一件を忘れようとしていた時メールが届いた。  
雅和はそのメールを食入るよつに見ていた。

/お元気ですか

私、あれから色々考えました。一番は美香さんのこと  
美香さんには何も話してませんよね 絶対、美香さんに話してはダメ

約束して、あの夜のことは胸にしまいこんで誰にも話さないって

あの夜、私はしてはいけない期待をしていた

男女の感情がまだ残っていたと一瞬だつたけど甘い夢を見た  
だけど私たちはもう男と女じゃないって気づかされた

共通の和由という兄弟の存在が私たちの関係を全く違う形に変えた

雅和、これから井川君つて言わせてね

雅和つて呼んでいいのは美香さんだけだから

私たちあの夜、兄妹になつたつて思えない、思つて欲しいの

あの日の出来事は私と井川君、一人の問題なの

だから美香さんに話す必要なんて何もないわ

お願いだから美香さんに余計な心配をかけないで

愛する人に何でも正直に話されたら嬉しいけど男女の事は別物よ  
結局、黙つてくれたほうが良かつたつて必ず思つわ

正直に話したところでいい結果にはならないつてことを言いたいの

秘密を嘘をついてでも隠し通すのも一つの愛の形

背負う苦しみは美香さんへの愛だと割り切つて絶対に話さないで

これは誰のためでもない、美香さんのためな  
このメール、読み終えたらすぐに削除して下さい 佐知／

削除ボタンを押した雅和は思った。

愛する人すべてを話すことが決して正しいことではない?  
ならば佐知を昔の恋人なんて話す必要もなかつた

友達で通すべきだつたというのか

いや佐知が恋人だつたことを話せたから今に繋がつてている  
雅和の頭の中は収集がつかなくなつていた。

美香と会う約束の前日に届いた佐知からのメール  
揺らぐ雅和の心は少しずつ確かにものへと近づけていた。

二人の問題を話す必要はない  
それは誰のためでもない、美香さんのため

メールに書かれた文字のすべてが答えに思えた。

翌日、雅和は佐知との再会を美香に話し聞かせていた。

「佐知と会つて俺たちは他人だとわかつたんだ  
そして、和由という子供の存在を知つた  
親父の子供は確かに存在していた  
過去形なのは・・もうこの世にはいないから  
その子供は生まれてすぐに亡くなつていた」

「その子供は佐知さんは父親違いの兄で  
雅和にとつても母親違いの兄  
どちらにも和由という兄がいたというわけね  
それで佐知さんの様子はどうだったの」

「佐知は実母の手紙で子供の存在を知っていたんだ  
でもその子供の父親が誰かまでは知らなかつたようだ  
でもあいつ笑顔で言つたんだ

母親が愛した人が俺の親父で良かつたって  
母親が愛した人が俺の親父で良かつたって」

「そつ・・よかつたって言つたの佐知さん」

「佐知は親父のことが大好きだつたんだ  
よほど気が合つたんだろうな  
俺が嫉妬するほど二人は仲が良かつた」

「佐知さんが由里子さんの子供とは知らないで  
恋人の面影を残す佐知さんにお父さんの心は揺れたのね  
お父さんには佐知さんが由里子さんに見えたのよ  
由里子さんが引き合わせたとしか思えないわね」

「佐知と出会つて不思議なことがいっぱい起きた  
これも美香さんが言う縁・・・」

「大事なのはその縁をこれからどうするかよ

「佐知とは・・・また会おうつて約束してきた」

「喜んだでしょ、佐知さん」

「昔には戻れないけど嬉しことて言つてくれた」

「とりあえず丸く納まつてよかつたわ」

無理して笑顔をつくる美香の心に雨雲が立ち込めていた。

雅和と佐知、二人は血の繋がりのない赤の他人  
愛の復活がゼロではなくなった今・・二人の接近はまずい  
一抹の不安が襲いかかっていた。

再会を頑強に薦めた美香はこの場に及んでうろたえていた。  
過敏なまで佐知に神経を研ぎ澄ましているようだった。

縁を切らないでと言つた私が揺らいでいる

佐知の名前が出るたび耳を塞いでしまいたい衝動に駆られていた。

美香は一人が過ごした地を訪ねてみたくなつていた。

「来月わたし出張で愛知県に行くの  
雅和が昔住んでいたところって愛知のどこだっけ」

「名古屋からならすぐだけど」

「佐知さんの勤務する病院も近くなの?  
いまもそこで仕事してるかしら」

「まだ受付の仕事をしてるはずだけど」

「病院の名前を覚えてる?..」

「そんなこと聞いてどうするんだ」

「私、東京出張のとき入院したでしょ  
あの時は本当に心細くて泣きたくなつた  
またあんなことがあつたらつて不安になつて  
でも雅和の知人がいる病院を聞いておけば安心でしょ」

「確か、西條クリニックだつたと思うけど」

「久々の出張だから万全を期して行きたいの  
これで安心して行けるわ、ありがとう  
東京で退院する時、同じような症状がまた起きたなら  
その時は大学病院でしつかり検査を受けるようにって言われたの  
そのことを思い出したから余計不安になつたんだわ」

「そんな大事なことなぜ今まで言わなかつたんだ  
大丈夫なのか、どこもなんともないのか」

「今は全然平氣、大丈夫」

「くれぐれも無理しないでくれよ  
体は一つしかないんだ  
大切な美香さんのスペアはないんだから」

雅和の言葉に最近のすぐれない体調を思い返していた。  
妊娠が判明してから悪阻を始めとした体の異変に気づいていた。

立ちくらみ、頭痛、吐き気、頻繁に起きるめまい  
すべては妊娠に伴う症状だろうと気に留めることもなかつた。

不安に襲われた美香は妊娠を告げることを忘れていた。  
神の悪戯がまた振り降ちて二人を苦しめようとしていた。

順風だつた雅和と美香の人生が大きく揺さぶられようとしていた。

### 43 ジジの趣ぐまか?

出張に出かけた美香の日程表には水～金まで愛知県直帰  
出社報告月曜と書かれていた。

出張を終えた美香はすぐさま名古屋に移動していた。  
コンビニでおにぎりを買って予約していたホテルに入った。  
コンビニ袋をテーブルに置くと美香はベッドに倒れこんでいた。

「体の感覚がおかしい 自分の体じゃないみたい  
ここ数日、食欲も湧かない  
妊娠のせいだけじゃない、体に何か起きているのかも」

何度も眠りから覚めた美香はベッドを離れ窓べに佇んだ。

「佐知さんに会えるかな」

夜明け前の暗闇に浮かび上がる明かりをぼんやり見つめていた。

昨夜から体調に一抹の不安はあつたが佐知が勤務する病院に向かつた。

診察時間には30分もあるのとここのにすでに賑わう待合室  
美香は隅のイスに隠れるように座り受付を見つめ続けた。

食い入るように見つめる先にお目当ての佐知の姿はなかった。  
診察が始まると人は益々溢れんばかりに膨れ上がった。

立つたまま診察を待つ人の多さに美香は席を立たざる得なかつた。

体格のいい男の子の大きな声が聞こえた。

「さつちゃん、はい僕の診察券」

「ゆうくん、喉はもう大丈夫みたいね」

「うん、もう痛くないよ」

受付で男の子と会話しているのは間違いない佐知だつた。

入院先のエレベーターでぶつかつたあの人だ、間違いない  
私、やっぱりあの人のこと嫌いじゃないわ  
佐知を見つめる美香の顔に笑顔がこぼれた。

頃合を見計らつてまた出直そと独楽鼠のように動き回る佐知を  
尻目に病院を出た。

時間を持て余しながら見知らぬ町並みを彷徨つていた。

どれくらい歩いたのだろう 遠方に神殿のような建造物が見えた。  
× × 觀音と書かれた寺院は日本二大觀音の一つだつた。  
信仰深いわけではないが何故か手を合わせたい気持ちになつた。  
不調の体と氣弱になつた心が救いを求めていた。

お参りを済ませた美香は参道に通じる商店街に迷い込んでいた。

そこは一度行つた東京の浅草寺の雰囲気と似ていた。

ふと見上げたアーケードの屋根に足を止め見入っていた。  
通りが変わると天井も様式ががらりと変わって訪れる人を楽しく  
させた。

美香は前方から歩いてくる女性に釘付けになっていた。  
ナイフを突き立てられたような衝撃で足を止めた。

大きな袋を抱え颯爽と闊歩するその女性は雅和の話した人と重な  
っていた。

立ち止まつた雑貨店で買い物客を装いながらその人が過ぎるのを  
待つた。

美香は自分の直感を信じ探偵のように後をつけた。

十字路を一つ越してすぐのところで姿が忽然と消えた。

付近を見渡したが見失つた姿を探す術もなく途方にくれていた。

カラカラ・・音のするほうに目をやると看板が揺れていた。

あの人はやつぱり雅和が話していた「SIGNPOST」のママ  
想像だけの人が現実の人と一致し美香は驚愕した。

雅和が佐知さんと愛を育んだであろうお店  
恋人だった二人が時間を共有したお店  
そして再び一人が語り合つたお店  
ここがSIGNPOST

美香は意を決してドアを開けた。

店内はステンドグラスのランプが方々に配され昭和の時代を思わせた。

椅子も母が愛用していた年代ものと似ていて懐かしかった。

辺りを見渡す美香ママが声をかけた。

「いらっしゃいま

はじめての方はみんなあなたと同じなのよ、果然と立ちすぐむのこのお店にはじめての人はこないから誰かの紹介かしら」

「はい、お店まだ開店前でした？」

「ここの時間はいつも閑古鳥・・・こんな状態な  
常連さんはもう少し後にやってくるのよ

あつ、ごめんなさい 座つて

誰もいないからカウンターでいいかしら」

「はい」

「ここのお店分かりにくいし入りづらいでしょ？」

でも長いことやつてるから常連さんだけで十分成り立つてゐる  
あなたは久しぶりの新客よ、なんだかさつきから落ちつかない様  
子ね

遠慮しないでね、いやなら出て行つてもいいのよ」

「大丈夫です 私このお店好きですから」

「そんな気遣いしないでリラックスして ご注文は？」

「じゃ、コーヒーをお願いします」

カウンターの壁一面の写真に気がついた美香はママに尋ねた。

「ママの後ろに張られた写真はみんなお姫さんですか」

「ああこれね、そうよ すごい枚数でしょ  
でも好きになれない客はカメラには収めないわ  
見境なく誰でもってわけじゃないのよ  
ここ張られるのは私に選ばれた人たち」

「・・・」

「ちよっと偏屈なママだつて思つてるでしょ」

「いいえ、そんなこと」

「『いやつへつしてね』

会話が途切れるといママは黙々と果物や野菜を切る作業をしていた。

手帳を捲る美香に仕込みを終えたママが声をかけた。

「さつき誰かにこのお店を聞いたって言つたけど  
その人はあなたの彼、そうでしょう」

「・・・・・」

「私のこと気味悪がつていいのよつね」

「いいえ、そんなこと・・・」

「私ね、これでも知る人ぞ知る靈能者、占い師なのよ  
常連さんしか知らない秘密だけね」

「靈能者?す」「こですね」

「怖がらないで聞いてね

私ね好きになつた客だと見えてしまつ  
いやでも色んなことが分かつてしまつ  
だからあなたのことも見えた 見えてしまつたの」

美香は身震いしてママの顔を凝視していた。

#### 44 ジジの想い出おもひで?

「あなたの彼はあなたを真剣に思ってくれてるわね  
だから心配無用よ いらぬ心配で神経使うのはおやめなさい  
あなたが心配しなければならないのは・・・  
ごめんなさい はつきり言わせてもらひうわね  
あなたは自分の体を大切にしないとダメ  
命がひとつ命・小さな命が見える  
あなた、もしかして妊娠してるんじゃない？」

「はい でも、どうしてそんなことを」

「自分でも恐ろしくなるくらい不思議な力なの  
でもこの力が人の役にたつたりすることもあるのよ」

「人を救えるなら、それはすてきな力ですね」

「そう言つてもらえて嬉しいわ

初めての客に胡散臭い店の変なママなんて思われるのいやだもの

「そんなこと思つていませんよ」

「やつと笑顔を見せたわね

ねえもうひとつだけいいかしら

言いにくいんだけど・・あなた病院に行きなさい早く  
何も聞かず病院で一度しつかり体を診て貰いなさい  
特に上半身・・首より上が気になるわ

「・・・・・」

「もうあなたを透視するの終わりにしましたよ  
気を悪くしたら」「めんなさいね」

「いいえ、ありがとうございました」

美香はママに自分の体のことをもって聞きたかった。

私の体は・・病氣に蝕まれているのですか  
喉元に出掛けた言葉をコップの水と一緒に飲み干していた。

「ママ～　おはよう」

常連りじき客が団体で入ってきた。

「ママ、これボヌールのママから渡された  
SIGN POSTに行くんだつたら届けてつて

「あつ、またロールケーキ取つに行くの忘れてたア」

「ロールケーキ一本の配達つてありえんつてボヌールのママお冠だつたわよ」

「ママのうつかりは昔からだけど」「んなにひどくなかったって溜め息ついてたわ」

「いや～な予感がしてきたわ

今日もランチはしきしきしてよねつて・来るつて事?」

「あり得るわね、彼女なら

「今頃彼女、大きな体揺らしてクシヤミしてるんじやない  
SIGNPOSTでまた私のこと言つてるつてね」

常連さんの笑いの渦と共に店は賑わいを見せはじめた。  
楽しげな会話を耳にして美香の心は和んでいた。

会計を済ませ外に出た美香をママが追いかけてきた。

「騒がしくなつちゃつて」めんなさいね

あなたの力になれると思うからいつでも電話してちょうだい  
これ私の携帯の番号よ

今日はありがとう　あなたに会えてよかつた  
ねえ携帯であなたを撮つてもいいかしら

「ええ」

ママは美香に頭を下げ走り戻つていった。

ママには私が見えた・・病が見えた  
妊娠のことも言い当てた

美香は名刺の隅に書かれた携帯番号を大切に手帳に挿んでいた。

時計を見ると病院の診察時間が終わる時刻だつた。  
徒歩では間に合わないとタクシーで病院へと急いだ。

朝とは打つて変わり静まり返つた待合室。

受付の終了のプレートがゆらゆら揺れていた。

喫茶店で話しこみでしまつたから・・肩を落とし長椅子に座り込んだ。

受付に人影が見え声が聞こえてきた。

カーテンが開いて顔を見せたのは私服に着替えた佐知だつた。

「佐知さんだわ」

イスから立とうした瞬間、美香の体は床に崩れ落ちていた。バッグから飛び出したコンパクトの金属音が静まり返った待合室に響いた。

カーテンを閉めた佐知は再びカーテンを開け放し辺りを見渡した。

「人が倒れている」

ナースコールをした佐知は倒れた人の傍に寄り添い先生を待つた。

「大丈夫ですか　聞こえますか・私の手を握れますか」

床にうつ伏せに臥した女性は微動だもしなかつた。

## 45 ジジの趣ぐまか?

治療室に運ばれていた患者の散らばった所持品を佐知は拾い集めていた。

倒れた患者の身元や家族の手がかりがわからず途方に暮れていた。患者の大きなバックに手を入れた佐知は分厚い手帳を見つけた。手帳を開くと挿んであつた一枚の名刺が蝶のように舞い上がった。

名刺を追いかけ床にしゃがみこんだ目の先に光る銀色の塊があった。

見覚えのあるペンダントのヘッドだけが落ちていた。四方を見渡すとちぎれた鎖も見つかった。

「まさか」

手にした口ケットペンダントの蓋を開けてみた。目に飛び込んできたのは微笑む雅和の写真だった。

「倒れて運ばれたのは・・まさか美香さん」

慌てて手帳のアドレスを捲り雅和の名前を探していた。しかしアドレス欄に雅和の名前は見当たらなかつた。

手帳を丁寧に捲りなおしていると水色のページが出てきた。そこに雅和の名前と電話番号が書いてあつた。

可愛らしい相合傘の下に書かれた美香と雅和・二人の名前。

「間違いない　あの患者は美香さんだわ」

雅和の会社と携帯にも電話をかけたが繋がらなかつた。  
佐知は気持ちを落ち着かせ伝言を残した。

「佐知です　美香さんが倒れました  
私の勤務する病院にいます  
ご家族と連絡がとれなくて困っています  
井川君からの電話待つてます」

診察が終わつた受付の同僚はみんな帰宅していた。  
倒れた患者が美香と分かつた以上放つては置けなかつた。

居た堪れず入院病棟に続く廊下を走り急ぐ佐知だった。

院長の姿が見えた。

診察を終えた土曜のこの時間に院長がいるのは珍しいことだった。

いやな予感を追い払つように院長に言葉をかけた。

「患者さんの知人と連絡が取れましたがご家族とはまだ  
院長先生、患者さんは大丈夫でしょうか？」

「脳神経の橘先生が立ち会つて検査している  
僕にまだお呼びがかからないということは心配ない証だろ?」

院長の言葉に佐知は胸を撫で下ろしていた。

「さつちゃん、事務所に電話が入つてるみたい  
ここで電話をとつてもいいわよ

ナース室で佐知は受話器をとつた。

「御待たせしました 私が皆井ですが」

「あつ俺、雅和です」

「井川君なの 連絡を待つてたの」

「美香さんが倒れたつて・・美香さんに何が・・

「診察が終わつた待合室に倒れていたの」

「…………」

「美香さんは大丈夫よ

優秀な先生が立ち会ってくれてるから  
井川君、美香さんの家族と連絡取れた?  
住所とか何でもいいの教えてくれる」

「それは無理、彼女に身寄りはいないんだ」

「…………」

「俺が唯一身寄りのようなもの

だから俺が家族なんだ 俺じゃダメ?」

「私、わからないから看護師さんに聞いておくわ」

「俺、今からそっちに向かおうと思つてるんだ

「そうしてもらえると助かります

入院手続きや書類に承諾サインも必要だし」

「俺が行くまで佐知、美香さんをよろしく頼む」

「分かりました 井川君も気をつけて来てね」

「ありがとうございました ジャ」

美香さんは身寄りがない

雅和が身寄りで家族・・二人はすでにそういう関係なんだ

美香さんは幸せ者ね

だめだめ・こんなときに不謹慎だわ

病に苦しんでいる美香さんを幸せなんて

佐知と築けなかつた絆を雅和は美香と育んでいた。

事務所に戻つた佐知は美香のカルテを作成していた。  
手帳に書かれた名前で美香の姓を知つた。

「木内美香さんか

綺麗な名前、美しく凛と輝くあの人にぴつたりの名前だわ」

佐知は自分の家族のつもりで美香をお世話をしようとしていた。  
他人とは思えぬ親近感を抱き続けた美香への偽らざる思いだった。

佐知の肩越しに婦長が手を伸ばした。

「皆井さん」苦労様

受付はみんな帰ったのに一人残業させねやつて悪いわね」

「いいえ大丈夫です

運ばれた患者さんのカルテいまお持ちしようと思つてたんですよ

「じゃ、私が届けるからあなたはもうお帰りなさい」

「患者さんの容態はどうですか?」

「集中治療室に入っているけど

明日明日どうの重篤じゃないから心配ないわ

皆井さん今日はお疲れ様でした 気をつけてお帰りなさい」

「はい、おつかれさまでした」

一人残された事務所で佐知は電話をかけていた。

「佐知です 仕事が終わつたので帰ります  
美香さんの容態は安定していますから心配しないで  
今日美香さんと会うのは無理よ

どんなに頼んでも会わせて貰えないわ  
そのことを伝えておこうと思ったの」

「そうか・・仕方ないな

俺、しばらく隆一のところに泊めてもらひことにしたよ  
新婚夫婦のお邪魔にはなりたくないって辞退したんだけど  
真砂子がホテルなんてもつたいたいってうるさいんだ」

「世話好きの真砂子なら良くなってくれるわ  
友達だもの甘えていいのよ  
こんな時のひとりぼっちはつら~いから」

「・・・・・」

「井川君、仲間は真砂子たちだけじゃないよ  
忘れないで・・私もいるわ  
協力するから遠慮は無しで何でも言つて」

「ありがと、佐知」

「月曜日、美香さんに会えるといいわね  
受付にいるから何かあつたら声をかけてね」

「じゃ・・・」

電話の向こうに囁み殺している雅和がいた。  
雅和の心中が痛いほど伝わってきた。

いまも昔と同じ何も変わってはいない  
悲しいけれど私は今も雅和のことが分かる

愛する美香を案じる雅和の気持が痛いほど伝わっていた。

いま雅和が思いを馳せるのは美香さん・・・もう私じゃない  
未練の火柱が再び立ちのぼっていた。

週明けの佐知はいつもより30分早く出勤していた。

真っ先に入院病棟に向かい看護士に美香の病状を聞いた。

美香は集中治療室から一般病棟に移されていた。

301号の個室を開けると穏やかな顔で横たわる美香が見えた。

微かに赤みをさした美香の頬を目を細め見つめていた。

「あの顔色なら、もう大丈夫」

朝ご飯もそこそこに家を出た胸のつかえが薄れていた。

ロッカー室にいつものリップではなく桜色の口紅をさす佐知の姿があつた。

「雅和とまた会える」

佐知は思わず顔をしかめた。

「おバカな私・・雅和は倒れた美香さんを心配してここに来るの佐知、あなたに会いに来るんじゃないのよ」

昔の男に思いが及ぶと女の一部分が色濃くぼり出されて堪らなかつた。

恋慕を断つかのように佐知は塗つたばかりの口紅を手の甲で拭い落とした。

受付の奥で新患のカルテを書いていた佐知の手が止まった。聞き覚えのある声に耳を澄ましていた。

「すみません 受付の皆井さんいますか」

「はいおつますが、どんなご用件でしょうか」

「井川と言つてもうえればわかります  
呼んでいただけないでしょうか」

「皆井さん 井川さんが受付にみえてますよ」

受付から身を乗り出した佐知に雅和が姿を見せた。

「忙しいのにごめん  
俺どうしても一人で行けなくて  
病室・・一緒に行つてもらえないかな」

「ええ、私でよければ」

「仕事中なのにわるいね」

「これも大事なお仕事よ、気にしないで

井川君、廊下で待つて

ハイミス部長に受付を離れる許可をもらひつと雅和とエレベーターを待つた。

今朝の美香の様子を告げると雅和の眉間の皺が解れていくのが分かつた。

「俺は美香さんの苦しむ姿なんか見たくない  
俺はいつだつて美香さんの笑顔だけを見ていいんだ」

「美香さん早く良くなつて、退院できるといいわね」

「もし神様に願いを叶えてやると言われたら佐知は何を願う?  
俺は迷わず美香さんを救つてほしいと土下座して懇願するよ  
美香さんの存在そのものが俺の生きる力の源だから・・・」

「・・・・・」

返す言葉を失くした佐知の口から零れたのは落胆の悲しき吐息だった。

病室のドアを開けた佐知はしり込みする雅和の背を押した。ベッドに歩み寄った雅和は美香の寝顔に手を翳していた。

無言の対面だったが佐知には一人が会話しているように思えた。

雅和は声なき会話をしている

二人の思いがキャッチボールしている

私が割つてはいる余地など・・もうないんだわ

あの日、雅和は兄と言い聞かせ終結させたはずの情愛が反逆の狼煙を上げ燃り始めた。

病室をノックする音がして雅和は看護士に呼ばれて出て行つた。眠り姫のような寝顔の傍らで佐知は祈り続けていた。

「早く元気になつて雅和に笑顔をみせて

美香さんは雅和の命・・大切な人

そして私にとつても雅和は・・今も忘れえぬ大切な人

だから私も雅和の笑顔を見たい

美香さん早く目を覚まして

雅和を喜ばせてあげて・・お願ひ」

担当医と向き合つ雅和の膝頭は小刻みに揺れていた。

「木内さんには身内がないとお聞きしましたが血縁の方はお一人  
も？」

「はい、彼女は正真正銘天涯孤独の身です  
僕以外、頼る人はいないんです  
僕は身内同然なんです  
だから彼女のことは包隠さず全部話してください」

「そういわれましても規則が・・・」

「彼女は婚約者で僕たち結婚の約束をしています  
だから身内と同じなんです 先生お願いします」

「わかりました  
木内さんの意識が回復したらその辺のことともお聞きしておきまし  
ょう  
それからこちらで判断させていただきます

それまで個人情報はお伝え出来ませんので」「了承ください」

「先生よろしくお願ひします」

雅和は美香との結婚を早く現実のものにしなければと思った。

病室に戻るとイスの上に佐知からのメモが残されていた。

／井川君、私仕事に戻ります

美香さんの容態は安定してるそうです

目を覚まして笑顔で話せる日が来ることを祈りましょう／

」の日雅和は美香の病室からひと時も離れなかつた。

仕事を終えた佐知は美香の病室に寄り道していた。

覗き見た病室に美香の枕元に頭を落とした雅和が見えた。

「安心して眠つてしまつたのね」

起じさないよに注意を払いドアを閉めた。

帰ろうとした佐知に看護士が声をかけた。

「さつちゃん勤務終わつたのね お疲れ様

あつそういうえば、さつちゃんは木内さんは知り合つよね

「ええ・・・」

「さつちゃんが井川君と言つてた人、木内さんの婚約者なんですか  
てね」

「・・・」

「木内さん妊娠したのに残念ね 楽しみにしていましたよ」と

「産めなってことですか」

「詳しいことは言えないけれど木内さんの場合は  
担当医なら墮胎して治療に専念するように薦めるでしょうね」

「彼女の病気は重いんですか

意識が戻ればすぐ良くなつて退院できますよね」

「いまは何とも言えないわ  
でも病気との本当の戦いは木内さんの意識が戻つてからなの  
本人の気持ちが萎えては苦しい戦いに勝てないわ  
戦いはこれからだからさつちゃん応援してあげてね」

「はー・・・」

「止めさせて」めんなさこね お疲れ様

「お先に失礼します」

美香の病気が容易でないことを知った佐知の足取りは重かつた。

「妊娠・・・産めない  
それだけでも身がつまされるのに  
つらい病気との戦いが美香さんを待っている」

佐知は身をよじり拳でエレベーターの壁をたたき続けた。  
病院を出ると佐知の携帯がポケットの中で震えだした。

「もしもし」

「あつ俺、何度もかけたけど通じなくて」

「井川君」

「仕事終わつた?」

「ええ今病院を出たばかりよ」

「じゃ今すぐ行くからまつてて、一緒に帰ろう」

「ええ・・」

佐知は急に逃げ帰りたい気持ちに駆られた。

美香さんの状況を知った今、雅和と平常心で向き合えるかしきつとわたし雅和の顔を静止できない  
やっぱり今日は一人で帰るべきだったんだわ

佐知の心情など汲みとれるはずもなく雅和は手を振り駆け寄ってきた。

「ごめん 待たせて

佐知にお礼を言わなきゃと思つてたんだ

「お礼なんて言わないで 私は自分の仕事をしているだけだもの」

いつもと違つて「か」が冷めたい口調に雅和は違和感を感じた。

「佐知、病院でなにがあった？」

「何もないけど、どうして」

「いや何もないなら、いいんだ

それにしても病院の仕事つて想像以上で驚いたよ  
多くの傷ついた人の心と身を支える大変な仕事なんだな  
いつも笑顔で患者と向き合う佐知の姿に感動したよ」

「どんな仕事にも大変はつきものよ

病院だけじゃないわ、井川君の仕事だって同じでしょ  
仕事が楽しいことばかりだったら苦労しないんでしょうね  
どんな仕事も生半可な気持ちじゃ勤まらないわ

病でやつてくる人と接する仕事は気が抜けないので  
だから正直疲れるわ

仕事が終わると能面みたいな顔でぼーとしてることもあるの

ごめんなさい おしゃべりが過ぎたみたいね

井川君、今日は疲れたでしょ

狭い病室で座つたままは疲れるからたまに外の空気を吸つたほうがいいわ

「俺は大丈夫、美香さんと付き添うのは苦じゃないから」

「田を覚ましたら美香さんもきっと喜ぶわね」

「俺、美香さんに話したい」とがこつぱにあるんだ  
次から次とあふれ出る自分の気持ちに驚いている

付き合ってることに甘んじて深く相手を考えることなかつたけど  
気づかなかつた感情が俺の中で今にも破裂しそうなんだ

万が一、美香さんに何か起きたら俺はきっと気がふれてしまつ  
美香さんが俺を残しどこかへ行つてしまつたがして怖い。  
怖くてたまらない

「万が一なんてそんなこと言つちやいけないわ」

「じめん 佐知に弱音吐くのは筋違いだな  
情けないな、俺は昔のままだ」

「弱音を吐くのはかまわないわ  
私はいつだって井川君の気持ちを受け止めてあげたいと思つてる

でも美香さんに何かあつたらなんて悲観的にならないで  
美香さん今、懸命に生きよつとしている、戦っているのよ

そんな尊い命に万が一なんて・絶対言つてはだめ  
美香さんを悲しませるようなことは言わないって約束して

「俺、もつと自分に強くならなきゃな  
気をつけるよ、『じめん』」

「昔、私に言つた言葉覚えてる?」

「・・・・・」

「井川君、私に君を守る強い男になれるといいなって言つてくれた  
だから今度こそ本物の強い男になつて美香さんを守つてあげて」

「・・・・・」

「責めているんじゃないのよ

私の素直な気持ちよ 井川君と美香さんを応援したいの」

「佐知、ありがと」

其のとき雅和のお腹が大きく鳴つた。

「井川君、お昼食べた？」

「そういえば口こしたのは缶コーヒーだけ」

「それじゃ早くなにお腹に入れてあげないと」

「一緒にどこかで食事して帰らないか?」

「「」みんなさい 今日は習い事があるから」

「そりゃ、それじゃ 一人で食べて帰るよ」

「だめよ 龍一君と真砂子が待ってるわ」

「新婚の一人を見ると身の置き所なくどうも落着かなくてや」

「でも今日は帰つて真砂子の料理を食べて  
お昼時間、真砂子から電話がきたの  
美香さんと井川君を心配してかけてきたのよ  
井川君のために腕によりかけて料理を作つて待つてるわ  
今日はスタミナ料理にするつて真砂子、張り切つてた

だから今日は寄り道しないでまっすぐ帰つて

「なら、急いで帰らないとまずいな

「じゃ又あした

「あつ・・佐知まつて」

「え、なに

「俺になにか隠してないか

と言ふか俺になにか言いたいことがあつたりする?」

「私が・・

「病院にいた佐知とは様子が少し違つてたから  
俺との会話中、佐知は俺から何度も目をそらした  
そんなこと今までなかつただろ」

「何もないわ 井川君の勘ぐりすぎよ

「ならいい・・でも俺に嘘はつかないでくれ  
たとえ俺が絶望に悲しもうとも佐知だけは真実を伝えてくれ  
約束してくれ、佐知」

「ええ、約束するわ  
でも今は余計なこと考えないで  
美香さんが良くなることだけを願いましょう」

「佐知が言つたよつに強い男になつて俺は美香さんを守つていいく  
「そうよ、それでこそ昔、私が惚れた井川君だわ」

「俺・・喜んでいいのかな?なんか複雑な気分だな」

「いやこいつ時はさうひと聞き流してくれればいいのよ

「わうか・・」

「今日はお疲れ様でした 真砂子にようしきね

「ああ、じゃまたあした」

佐知は安易に約束したこと悔いていた。

美香さんの病状が判明して、それが最悪のものであつたら  
真実をありのまま話すなんて無理だわ

佐知にとって雅和は今も大切な男

そして雅和の愛する美香も忘れられない女にならうとしていた。

#### 49 三角関係

雅和の携帯に病院から嬉しい電話が入っていた。

音楽を聴いていた佐知がメールに気づいたのは漆黒の闇の夜だった。

／美香さんの意識が戻った／

佐知は慌てふためきメールを打つた。

／井川君の祈りが届いたのによかつた 本当に良かつたね／

電話が入ったのはすぐだった。

「夜遅くごめん  
俺うれしくて・・誰かに話したくて  
真っ先に思い出したのが佐知、君だった」

「わかるわ、井川君の気持ち  
私が飛び上がるほどうれしいんだもの  
私より何十倍も嬉しい井川君の気持ちわかるよ」

「一緒に喜んでもらえてうれしいよ ありがとう佐知」

「井川君、わたし嬉しいの

美香さんの回復を私に一番に伝えてくれた  
一緒に喜びを分かち合おうと電話をくれた  
これからも井川君に協力するからなんでも言ってね」

「慣れない病院で俺はいつも佐知に助けてもらつた

美香さんも俺と同じように必ず君の助けが必要になると思つ  
男の俺に言えないことも君になら言えるかも知れない  
だから頼む、美香さんの力になつてくれ」

「美香さんが入院した日から何故だか心底支えてあげたいと思つたの  
だから私からもお願ひします

井川君と一緒に退院する日まで美香さんを見守らせて下さい  
お役に立てるかわからぬけど話し相手くらいならできるわ」

「佐知がいてくれたら俺も美香さんも心強いよ」

美香に差した光明に雅和と佐知は喜びで舞い上がっていた。

翌朝見上げた空は美香の回復を祝うかのように青く澄み切つてい  
た。

こつもより早めに病院に着いた雅和は担当看護士の姿を見つけ走り出した。

「おはようございます 木内さんはもう起きていますか」

「ええ、もうお皿覚めですよ」

「話しさ出来ますか」

「相手の話すことは分るようだけど  
木内さんからは頷くだけで言葉はまだ・・・  
でも大丈夫ですよ、話せるようになりますから  
ご心配でしょうけど焦らず待ちましょ」

「あらがとうございます」

会話は無理でも声は聞こえていい・・胸躍らせ雅和は病室に入つていった。

「美香さん、おはよう」

大きく見開いた目が美香の驚きを表していた。

「驚いただろ？　どうして俺がいるんだって」

美香は静かに頷いて見せた。

「美香さんが倒れてからずっと付き添つてたんだ  
心配しないでいいよ　仕事は大丈夫だから」

美香の手が口に物を運ぶ仕草を見せた。

「食事？　吃べることも心配ないよ  
龍一夫婦のお世話になってるんだ」

美香の顔が綻んで見えた。

「俺がついてるから安心していいよ」

震える美香の手は感謝の合掌を作りつとしていた。

「まだ思つように体が動かないんだね　無理しないでいいよ  
必ず会話が出来るようになる　いま出ない声も必ず戻る

「これ看護士さんの言葉だから間違いないよ」

背後に人の気配がした。

「おしゃべりはそのくらいにして下さいね  
患者さんが疲れますから」

「すみません 僕、嬉しくてつい夢中になつて」

「」の日を待つていたあなたの気持ちはわかるけど  
木内さんは今日検査の予定が入つてゐる  
患者さんにとって検査はとても疲れるものなのよ  
木内さん、出来るだけ安静にして体を休ませておいてね  
あなた付添い人でしょ 付添いが患者を疲れさせてどうするの

「すみません」

美香は看護士と筆談をしていた。

笑い声を上げていた看護士がメモを雅和に握らせ出て行つた。

「飲み物買って来るけど美香さんは？」

顔を横に振つた美香を見届け雅和は病室を出た。

メモを見ながら歩き出していた雅和の足が止まった。

「看護師さん、私の大切な人を叱らないで

確かに空気を読めない所あるけど純粋で子供のまま大人になった

人なの

私にはこの世で一番大切な人だからお手柔らかにお願いします！」

波打つ文字は読みづらかつたが気持ちが嬉しかった。  
雅和の顔はあかあかと火照りだしていった。

佐知の言葉を思い出した。

今度こそ本物の強い男になつて美香さんを守つてあげて

「籍を入れて夫として美香さんを支えてゆこう  
結婚式は美香さんが元気になつてからでいい」

美香が自分の子を宿している事実その命が消えようとしている現

実も知らず

雅和は幸せな未来の設計を思い巡らしていた。

## 50 三角関係？

検査のため車椅子に乗せられた美香は笑顔で手をふって見せた。直立不動で厳しい面持ちをした雅和に看護士が声をかけた。

「木内さんは大丈夫ですよ　あなたが緊張してどうするの疲れるから肩の力抜いて待つて」

看護師は美香に田配せすると豪快に笑い車椅子を押して出て行つた。

あの看護士のおばさん、すごいキャラだな  
明らかに俺をいじって楽しんでるって感じ

年配者の目には若輩の俺なんか子供で頼りなく映つて見えるんだ  
ううう

気を取り直した雅和は携帯電話を持って外にでた。  
毎日欠かさず事務所にかける電話は田課だった。

「てつちゃん、お疲れさまです　仕事は順調？」

「お前の仕事は俺が責任もつてやつてるから心配するな

ただ・・昨夕困ったことがおきた

佐伯さんから依頼された土地相続の件だが  
うちの担当者がとんでもないミスをしてかした  
俺にもチックの甘さがあつたが100パーセントじつちの落ち  
度だ

「それで事態は收拾できそうなの？」

「ああ、なんとかなりそうだ  
言いくらいんだが責任者であるがお前が顔を出さないわけには・。  
な」

「わかつた、事務所の代表としてきちんと謝罪すべきだな  
俺いまから事務所に戻るよ 話はそつちで詳しく聞くへ」

病室に戻らうとした雅和は偶然佐知と鉢合せした。

「あっ、井川君」

「いいタイミングで会えてよかつたよ  
俺いまから静岡に戻るんだ  
美香さんのこと君に頼んでもいいかな  
仕事が終わったら急いで帰ってくるから

「それまで美香さんのことを頼むよ」

「了解しました 心配しないでお仕事してきて」

「じゃ頼んだよ」

病室をあけると美香の姿はなかつた。

「検査はいつ終わるのだろう」

見上げた先の時計は電車の時刻に迫つていた。

いまは一刻も早く顧客に詫びをいれることが優先だつた。  
枕元にメモをおいた雅和は静岡に戻つていった。

／美香さんへ

急な仕事で静岡に戻る

仕事が済んだら急いで帰る

寂しいんだろうけど我慢して待つてくれ

美香さんのこととは佐知に頼んである  
彼女はきっと力になってくれる

じゃ俺は仕事モードに切り替えて男の戦場に行つて来ます

雅和／

昼休み佐知は売店で黄色の可愛い小花を見つけた。

陶芸教室ではじめて焼いた小ぶりな花瓶にその花を挿した。

仕事を終えた佐知は事務服のまま花瓶を抱え美香の病室に向かつていた。

## 5.1 三角関係？

トン・トン 開いたドアに美香が顔を向けた。

「すいし、いいですか？」

美香はベッドから白い腕を伸ばし手招きしてみせた。

「持つてきたお花、窓辺に置きますね」

腰を下ろした佐知に美香は顔の前で両手をあわせた。

「井川君が戻るまで私が美香さんのお世話をさせていただきます」といつても仕事があるから仕事前の朝と夕方しかこれないんだけどなんでもしますから遠慮しないで言つて下さいね」

美香は筆談のメモを差し出した。

「さちさん、よろしくね

お花、ありがとうございます 私、黄色い花が大好きだから嬉しいわ  
まだ声を出せないので私は筆談で返しますね」

「声が出ないのはつらいですね

でも自分から声を出せないとしことこつまでも声は出せませんよ  
少し声を出す練習してみませんか」

／病気が原因でこいつなったのよ

今私がいくら頑張っても声はでないわ／

「そんなことないわ 病気だからなんて言わないで  
声を出せうともしないで諦めてしまつなんて美香さんらしくないわ  
気持ちが負けたら病気は退散してくれませんよ」

／佐知さんの言つことは正論ね

でも今わたしは無気力でアパシーなの／

「無気力症候群のアパシー？

だつたら何かに向けて努力する気力を沸かせればいいわ

声が出せたら言葉も話せる  
そしたら井川君と会話が出来る  
楽しいおしゃべりがいつぱい出来る  
筆談なんかもう必要なくなる

どうですか？少しほと声を出す気持ちになつてくれました

／チャレンジしてみよつかな／

「じゃ、あーいー何でもいいですから  
大きな声を出すつもりになつて口を開けてみて」

「ふあー・・しー・

ぐるしい息づかいだけが繰り返された。

額にはうつすら汗がにじんでいた。

「美香さん、これくらいにしましょ  
美香さんの苦しそうな顔見て私、後悔します  
医者でもないのに余計なことを言つてしまつてごめんなさい」

佐知が頭を下げたとき美香は呻きに似た声をあげた

「ひいー・・おお・・お」

「いま美香さん、いいのつて?」

「クンと頷いた美香は佐知の手に手を重ねた。

「声が・・美香さんの声しつかり聞こえましたよ」

「うわ・うわ」

「うるつて言いました?」

美香は親指と人差し指で丸を作つて微笑んでいた。

「わたし今日はこれで失礼します  
明日仕事の前にまた顔を見に来ますね」

「ああ・あ・おおー」

「ありがとうつて言つてくれたのですね  
どういたしまして私の方こそ喜んでもらえて嬉しいです  
ありがとうございます」

さよならの震える手を片手で押さえながら美香は手を振り続けて  
いた。

佐知は重ねた美香の手のぬくもりを忘れられなかつた。

## 5.2 三角関係？

出勤してきた佐知をみつけ同僚が駆け寄ってきた。

「さつちゃん、井川さんと会わなかつた？」

今、この菓子折り置いていつたのよ

木内さんをお世話してもらつたお礼だつて」

「その紅茶シフォン、お昼みんなで食べましょ」

「みんな甘いものに目がないから喜ぶね」

佐知の好物を知る雅和からの心遣は嬉しかつたが  
ことのほか早く帰つてきた雅和に思ひは複雑だつた。

この日を境に病室へ向かう佐知の足はピタリ止まつた。  
一人の時間ときを邪魔したくない氣遣いからだつた。

美香との語らいが途絶え、お役ごめんになつた佐知はどうか寂しげだつた。

久しぶりの病室の前で雅和は懐かしさを感じていた。  
美香の声が出したことなど知らず声をかけた。

「美香さん、ただいま」

「おお・・ああ・いいい・いいー」

「大丈夫か・・苦しいのか」

血相を変えた雅和に美香は首を横に振りメモを差し出した。

／わたしの声、聞こえたでしょ  
わたし今、おかえりって言ったの／

「声が出せるんだね

よかつた・よかつたな美香さん」

／わちさんと声を出す練習をしたの  
そしたら瓶が出た、自分の声が聞こえた  
言葉は・・発音はまだうまくできないけど／

「そうか、佐知が 僕からもお礼をしないとな」

「うううー」

田を白黒させた雅和に顔を崩した美香がメモを渡した。

「うんって言つたつもりなんだけどなあ  
わざんがいたら通訳してもうえるのに残念ね／

「早く俺も分かるようになりたいな  
佐知に分かつて俺が分らないのはしゃくだからな」

美香が不機嫌そうにメモを出した。

「わちとこには良くしてもらったのよ  
肉親のように接してくれたからうれしかった  
だからしゃくだなんて言葉使わないで／

「そつだな 佐知は一生懸命美香わんの世話をしてくれた  
感謝しないと罰が当たるね」

「おお・・むうー」

「わづよ・・つてか?」

親指を立てて見せた美香とふたり声を上げ笑っていた。

呻り声にも似た言葉だったが久しぶりの筆談なしの会話が嬉しかった。

雅和は美香の容態の好転に安堵していた。

いつまでも事務所を空けるわけにもいかず検査結果を気にしながら雅和は戻つていった。

程なくして夕食がすんだ美香の病室に雅和がすゞいキャラといった看護士がやってきた。

「あら、彼はいないのね」

／静岡に戻りました／

「だから木内さん元気がないのかしら  
今日は検査結果が出たことを知らせに来たの  
あした橋先生から説明がありますよ」

／わたしの病気、明日わかるんですね／

曇り顔の美香に豪快な笑顔で看護士が答えた。

「憶測や無駄な神経は体に障るわよ  
気持ちは分かるけど今夜は何か楽しい」と考えましょ  
う  
今夜は木内さんの一一番大切な彼を思い出すといいわ  
そしてぐっすり休んで頂戴、おやすみなさい」

膝を抱えた美香はSINGAPOREのママを思い出していた。  
同時に不吉な思いに駆られ震えだしていた。

「怖い・・雅和、私こわい・・」

### 5.3 三角関係？

美香は担当医の部屋に呼ばれていた。  
橘医師はレントゲンを手にイスに座った。

「お待たせしました  
では検査結果をお知らせします  
木内さんの頭、脳に腫瘍が見つかりました」

レントゲンを指さし橘は話を続けた。

「腫瘍はここにあります  
手術で切り取つてしまえば普通なら問題ありません  
しかし木内さんの場合は難しい手術になります  
腫瘍が此処でなければ通常の手術が出来たのですが」

昨夜の不安が現実になつた・美香は目を閉じ身を硬直させていた。

「木内さん大丈夫ですか しつかりしてしてください」

美香は目を見開いて頷いた。

「話はそれますが手術の際、承諾書にサインが必要です  
身内の方がいないと井川さんからお聞きしています  
井川さんから身元引受人の申し出がありましたが宜しいですか」

美香は机のメモとペンに手を伸ばし思つよつに動かぬ手でペンを走らせた。

「彼にすべて託したいと思います  
でも一つだけ約束してください  
私の生命に係わることは彼には一切告げないと  
告知は私にしてください  
すべてを受け入れる覚悟は出来ていますから」

承諾した橘はカルテに目を逸らし言葉を続けた。

「木内さんは妊娠しています 勿論ご存知ですよね  
残念ですが今回は諦めてください  
治療に専念して手術を成功させましょう  
おつらいでしううけれど」

「わたし産みたいです 先生お願いです  
授かった命を消したくないんです お願いします」

「手術を成功させなければ命は保障されないのですよ  
あなたにもしもの事があればお腹の子も一緒です

妊娠したままの治療はリスクが大きすぎる

「先生、わたし死ぬんですか」

唐突過ぎる質問にも橘は動じなかつた。

「それを避けるために治療をし手術をするのです  
死なせない努力を私たち医者は全力で頑張ります  
ですから木内さんも死ぬことではなく  
生きる努力を希望を捨てないでください  
私が言おうとしていること分かりますね」

まさしく厳しい宣告だつた。

病室に戻つた美香は涙していた。

美香は自分の命と新たな命をどうすべきか真剣に考えていた。  
私の命に限りがあるならお腹の子を誕生させ命を繋げたい  
過酷な運命を告げられた今、美香は自分を産んでくれた母の気持ちが身に沁みた。

「雅和と私の新たな命は消したくない  
誰がなんと言おうと私が守つてみせる 命に代えても」

担当医の橘は度重なる説得にも首を振らない美香に頭を痛めていた。

美香は一番に伝えるはずの検査結果を雅和に知らせようとしなかつた。

頑として手術を拒み続ける美香だったが言葉も難なく話せるようになっていた。

治療の効果も現れ、体の硬直も神経系の異常も緩和されていた。

代休の佐知はショップのゆうちやんの誘いも断り家で寛いでいた。

「さちいー、病院の方がきてるわよ  
上にあがつてもらうわね」

病院の人？

自宅を訪ねあう同僚などいない佐知に思い当たる人物は浮かばなかつた。

トントン・・「佐知さん、こんなちは」

佐知の田に飛び込んできたのは病院にいるはずの美香だった。

「美香さん一人でここに、どうして家がわかったの？」

「ごめんなさい 私、病院を黙つて飛びだしてきたの  
ペンドントが入っていた封筒を見て住所は知っていたから

「こんな無理をして、体は大丈夫ですか  
とにかく病院に連絡しましょう  
みんな美香さんのこと探し回りますよ  
ここに来ることを伝えて安心させましょう  
心配しないでいいですよ 私が送つていきますから

「ありがとうございます、佐知さん  
佐知さん、私の検査結果がわかつたの  
雅和に話す前にどうしても佐知さん、あなたと話がしたかったの」

「話を聞いてから美香さんを病院に送ります それでいいですね」

階下に降り佐知は病院に電話をかけていた。

案の定、病院は大騒ぎで婦長自らが電話口にでた。

「皆井さん、お願いしますね

検査結果の後だから心配してたのよ  
木内さんが落ち着いたらでいいですから  
あなたが責任もつて連れ戻つてくださいね」

良くなかつた検査結果は察しがついた。

美香の気持ちがいかばかりか・佐知は言葉を失っていた。

立ちすくむ佐知の背後に母がやつてきた。

「一階に持つて行こうと思つてたの」

「わたし持つていいく ありがとう」

渡されたクッキーと紅茶を持って佐知は部屋に戻った。

美香はうなだれテーブルに伏していた。

「美香さん、疲れたでしよう

ベッドに横になつて体を休めたほうがいいわ

私のベッド、いやじやなれば使っていいのよ」

声もなく美香はベッドに体を横たえた。

「少し体がつらいから寝たままで」めんない

美香は思いつめた顔で話を始めた。

## 55 むりぐ心?

「母は妻子ある父と出会い私を産んだ  
母の父・祖父は祖母を道ずれにして自ら命を絶つた  
祖父は母の不倫に心を痛め悩んでいた  
それだけが心中の理由ではないけど  
それでも母は生涯その重い十字架を背負つて生きた

母は父と別れ女手一つで溢れる愛情で私を育ててくれた  
自分の幸せのすべてを私に注いでくれた

見せない苦労をいっぱいしてきた薄倖の母の人生  
これからは私が母を幸せにと思っていた矢先  
母はこの世を去つた

私はあの時の母と同じな  
愛する人の子をどうしても産みたかった母と同じ  
佐知さん、わたし妊娠しているの

医師は誕生していない命より生きている命を優先する  
でも命に限りがあると言うのなら私は命を懸けても産みたいの  
死ぬのは怖い・・本当はこわいのよ  
でも子供の誕生を見たい そしたら怖いけど・・  
悔いなく死んでゆける気がする」

「こんな大切な話は私じゃなく井川君に・・

井川君に一番に話せなきゃいけないわ

「雅和は妊娠のこと知らないの  
産んでもいいものか・・そういうふうに内に言いそびれてしま  
つた  
誰になんと言われようと産む決心をしたわ

命の保障がなくても残したい・私の生きた証を  
私を産んでくれた母と私の生きた道を生まれ来る子に繋げたいの」

「話はこれくらいにしましよう 美香さん苦しそうだわ

少し休んで病院に戻りましょうね 私、病院に付き添いますから

「佐知さん、わたし父に会いたい  
私、父の手に抱かれた記憶がまつたくないの

私が子を父に抱いてもらいたい

その姿を見て私もこうして父に抱かれたのだと父の愛を感じたい

佐知さん、お願い  
父が存命ならば会いたいの 父を探してほしいの」

「井川君、きっと悲しむと思います どうして俺に頼んでくれないのかって  
やっぱり順番が間違っています 井川君に話して下さい  
言えないなら井川君には私が話してあげます 絶対そうすべきで

す

「雅和には言えない

彼は母と同じ、自分を投げ打つても私を救う人  
これ以上彼の重荷になりたくない  
分かってくれるでしょ、佐知さんなら」

「今は重荷とか言つてる場合じゃないでしょ

愛を育んできた二人だからこそ心を通い合わせ助け合える  
井川君の力を借りるべきです」

「子供を産めたとしても私はその成長を見届けられない  
そんな気がする私にはわかるの  
だから生まれた子供を父に託したいの  
父ならきっといい養子先を見つけてくれるわ」

「子供の父親でもある井川君の気持ちはどうなんですか」

「彼は自分が育てるつて言つてしまふね

「なら、それでいいじゃないですか  
美香さんと井川君一人の子供なんですよ」

「でも男の人が一人で子供を育てるなんて無理だわ  
それにそんなこと私は望んでいない  
雅和には何にも邪魔されず自分の道を突き進んでほしい」

「それは美香さんの勝手な言い分です

井川君の気持ちも聞かず自分で決めようとしている

今は一人ではなく二人で乗り越えるときです  
二人の愛が試されているのですよ

井川君ときちんと向き合ってください

それから自分と向き合つても遅くはないでしょう  
後悔してほしくないんです」

それきり口を閉ざした美香の顔から疲れが見て取れた。  
佐知はタクシーに美香を乗せ病院へと急いでいた。

## 56 むらぐ心？

病院に着いたとき美香は朦朧としていた。

ストレッチャーの横には婦長と橘医師も待機して待っていた。

タクシーの支払いを済ませた佐知に婦長が頭を下げる。

「お休みのところ悪かつたわね、ご苦労様  
井川さんも心配して飛んできて病室でずっと待ってるの  
皆井さんと一緒にわかつて安心したみたいね  
さつき部屋を覗いたら椅子に座つたまま寝てたわ  
皆井さん悪いんだけど木内さんが戻つたと伝えて  
それから家に帰つてくれるかしら」

「はい、わかりました」

雅和は美香失踪の連絡を受け慌てて駆けつけていた。

トントン　トントン

ドアを開けると雅和は疲れきった顔で眠っていた。  
肩に手を置き雅和を揺り起こした。

「井川君、おきて」

「ハハハ・・・」

「佐知です 美香さん戻りましたよ」

「・・・」めん うとうとして

美香さん、美香さんが戻つたつて」

「大事をとつて橋先生が見てくれています

美香さんは大丈夫です 間もなく戻つてくるわ」

「検査結果が出たことも俺、知らなかつたんだ

一番に伝えると約束したのに・・

美香さんがいなくなつたのが検査結果の後と聞いて

俺、本当に心配で心配で・・佐知、美香さんは重病なのか

「私、病気の事は本当にわからないの」

「先生に問い合わせたけど答えてくれなかつた  
病院を逃げだすなんてただ事じやないよ  
逃げ出さなければならぬ余程の事が起きたんだ」

「井川君、今は黙つて寄りそつてあげて

無事に戻った 今日はそれだけでいいんじゃない  
井川君も辛いでしょうけど一番つらいのは美香さんだから

「俺に何か隠してるだろう

美香さんと話したことを教えてくれ

佐知、俺と約束してくれただろう 隠し事はしないって

「・・・・・」

「頼む・・嘘はつかないでくれ

昔の俺達みたいに壁を作るのはもう止めにしないか  
兄妹と思ってほしいと言つた張本人の君が  
今していること・・おかしいと思わないか

「何も言えないの、わかって  
でも隠さなければならぬことなんて一つもないわ  
だから私じゃなく美香さんに直接聞いて

美香さんは混乱した気持ちを整理したくて私に会いに来たの  
落ち着いたらすべてを話してくれるわ だから待つてあげて

「わかった でも俺は・・美香さんの気持ちが・・  
美香さんが思い悩んでいるならその気持ちを知りたい  
俺には知る権利がないのか・そうなのか佐知  
君が知っている美香さんの事を教えてくれ

頼む俺にも少しでいい 美香さんの気持ち分けてくれないか

佐知は雅和が不憫に思えた。

「美香さんは懐かしそうにじ両親、家族の話をしてくれたわ  
記憶にない父を恋しがつていた  
お父さんに会いたい探してほしいと頼まれたの」

「それで約束をしたのか」

「お父さんに会いたいと書いた美香さんの気持ちが痛いほど伝わっ  
たわ

私は本当の両親を知れて良かったと思つてゐ  
だから美香さんの気持ちが分る  
あの時は即答できなかつたけど探してあげたいの  
井川君の力でお父さんを探して・お願ひ  
お手伝いしますから美香さんとお父さんを会わせてあげましょう  
これは誰でもない美香さんの願いよ  
井川君が叶えてあげないで誰が叶えるの  
美香さんを愛するあなたになら出来るわ」

「・・・・・・」

雅和なら美香の希望をきっと叶えてくれると信じていた。

まだ見ぬ父との再会は実現に向け動き始めようとしていたが  
美香のもつ一つの願い、出産だけは命に関するだけに難しかった。  
雅和がそれを知る日は遠い先だった。

## 57 愛を紡いで

病室に戻ってきた美香は雅和と田を合わせようとした。気がまずい雰囲気を察した佐知が美香に声をかけた。

「井川君は病院からの電話で飛んで来てくれたの心配してずっと美香さんを待つてたのよ」

「わかつてるわ でも今日は一人にして  
佐知さん、雅和を連れて出て行つて・・お願い」

「俺がここに来たこと美香さんには迷惑だったのか  
そばにいるのが迷惑なのか」

「・・・」

黙りこむ美香とその背中をじっと見つめる雅和  
そんな二人を佐知は哀しい目で見つめていた。

「井川君、そんなことある訳ないじゃない  
美香さんは疲れているだけなのよ  
だから美香さんの言つ通り今日は帰りましょっ」

布団を頭から被つた美香は顔を見せようとした。佐知は渋る雅和の腕をつかみながら病室を出た。

「今日の美香さんは俺の知らない別人だった」

「井川君、もし・・もしもよ  
一生を振り返らなければならない状況におかれたら  
人はどうなるかしら」

「・・・」

長い長い沈黙だった。

「そんなこと考えたくもないよ 僕にはとても耐えられないからな  
それって・・・美香さんのこと言つてるのか  
彼女の人生、先はない そうなのか佐知」

「・・・」

「やっぱりなにか隠してるだろう

君は病気のことも本当は知っているんだ」

「私は看護士じゃない

だから入院患者のことは分からぬ  
美香さんの人生、いいえ人生先のことなど誰にも分からぬわ  
知つてることとはさつき話したでしょ」

「君は嘘をついている なにかまだ隠しているんだ  
どんなに」まかそうとしても俺にはわかる  
昔愛した君の心・・俺にはまだ見える」

田に映る井川は懐かしき恋人雅和と重なりだしていた。

「井川君はもう知つてるでしょつけど・・  
美香さんはお腹にいる赤ちゃんで悩んでいるの」

雅和の反応を見ていた。

「赤ちゃん?俺は聞いてない 妊娠している・・美香さんが」

「『めんなさい 井川君、知つていると思つたから  
美香さんが話してくれた事はこれでお終い もう隠し事はないわ

「そんな大事なことをなぜ隠したんだろ?」

「今、そんなこと言つてゐるときじゃないでしょ  
授かつた命が消されようとしているのよ  
命を削るから子供は諦めるよつて言われてそれで歎んでいるのよ

「あきらめるとか命を削るとか俺にはなにが何だか・・・

「美香さんはもう覚悟を決めているわ  
どんなことがあっても子供だけは守らうとしている」

「覚悟・・・」

「詳しことは知らないの  
だから私じゃなく直接美香さんに話しきを聞いて

支える側がしっかりしない甘えられないし本心だって話せないわ  
しつかりして、井川君は美香さんを守るんでしょう

「・・・」

「明日仕事前に美香さんと会つて全部話した事を伝えます  
あとは一人で・・・じゃ私はこれで」

「今日はありがとう  
佐知がいる病院で本当によかつたよ」

「井川君、元気出して  
病気との闘いはこれからなの  
井川君も一緒に美香さんの病気と戦うの  
だから井川君は暗い顔しちゃだめ  
美香さんの前では私が好きな笑顔でいて」

深いため息を吐いた雅和は少しだけ笑顔を見せた。

「じゃまたな」

さつき見せた笑顔は消え疲労困ぱいで手を振る姿に心が痛んだ。  
今日は雅和のそばに寄り添つてみたい佐知だった。

昔ならこんな時は・・きつと抱きあつて慰めあつていた  
だめ、もう昔のことを思い出してはだめ  
兄が苦しんでいたらこんなとき妹はどうするかでしょ

雅和を思い歩く佐知の背後に駆けてくる足音が聞こえた。

「井川君、どうしたの」

振り返った佐知を雅和はきつく抱きしめていた。



## 58 愛を紡いで？

「井川君・・・」

「少しでいいんだ」のままでいてくれ

波打つ胸元から雅和の苦悩が感じ取れた。

「佐知、ごめん」

突然の出来事は愛のぬくもりを思い出させた。  
佐知は無理して明るく振舞おつとしていた。

「遠慮しないでいつでもどうぞ

こんな体でよければこつでもお貸ししますよ」

無邪気な愛らしい佐知に雅和の顔も綻んでいた。

笑顔が戻った雅和に両手を広げハグをする仕草をしてみせた。  
「自然に抱き合つた二人は笑顔で見つめ合つていた。

「兄妹って今の私たちと似ているのかしら

私は一人っ子だから兄弟がいる人が羨ましかつたわ」

「俺も家ではいつも一人だつた  
それが当たりだと思つてたから兄妹なんてあんまり考えなかつたな  
だけど美香さんが入院してからの俺は誰かの救いを求めずいられ  
なかつた

こんなときの一人は本当に身にしみるよ  
重い荷物を一人で背負うのは辛いけど振り返ればいつも君に支え  
られていた  
支えてやれない俺なのにそれでも君は手を伸ばし助けてくれた  
・・ごめん、今の俺は君に何もしてあげられない  
それでも佐知は俺を支えてくれるのか

「井川君と私は兄妹みたいなもの、そうでしょ  
だから困ったときはお互い様よ  
今度は私が今日の井川君みたい襲いかかるかも」

「襲いかかるつて狼じゃあるまいし俺は襲つたりしてないぞ」

「井川君が狼なら私は赤ずきんちゃんね」

顔を見合させた二人には兄妹にも似た繋がりが生まれ始めていた。

その後、雅和と美香は長い時間をかけて話し合っていた。  
佐知には一人の会話を知る由もなかつたが雅和は美香の父の消息

を必死で探そうとしていた。

美香は相変わらず手術を拒んでいたが担当医の橘とは憎まれ口を言いつまでになっていた。

雅和は多忙になり日曜日限定の日帰りで美香を見舞っていた。  
そんな雅和からきたメールは平日の午後だった。

/SIGNPOSTで待つてある

美香さんの父親の件で話したいことがある／

## 59 愛を紡いで？

雅和はカウンター席に座っていた。

「今日はおひとつ？」

「彼女も来る」（うなぎだけ）ママ、コーナーお願ひします

「はい、こつものストロングコーヒーね」

雅和は[写]真が貼られたボードを物珍しそうに眺めていた。

「ママ、このボードもあつたつけ」

「ああこれね 貴方たちが来てた頃からあつたわ  
あの時は[写]真もまばらで気に留める人もいなかつたけどね  
もう貼る場所もなくてどうじみうかと想つてゐるのよ

「ほんとすいせいだな」

何気に見上げた目の前に見覚えある顔があった。

「ママ、左上に貼られた写真を見せてもらひますか  
その黒いジャケットを着た女性です」

「知ってる人？ちょっとまって・・はいどうぞ」

どこか寂しげに微笑む写真の女性は美香だった。  
田付から出張のときに撮つたものとわかつた。

「この女性はひとつで此處に

「ええ、でも誰かに聞いたとかでこの店を知つていたわ

「・・・」

それきり口を開いた雅和はカウンターに伏していた。

「いらっしゃいませ」

ママが伏した雅和の背を突いた。

「彼女来たから奥の席に移る?」

席を立つた雅和は握った写真をポケットに隠し入れた。二人はいつも席に腰をおろした。

「美香さんに会つてきた?」

「俺が来ること知らないから今日は会わないで帰るよ頼まれた父親の消息やつとわかつたよ」

「見つかったの こんなに早く見つかるなんてすげーわね」

「付き合いのある興信所に協力してもらつて見つけ出したんだ  
俺一人じゃ いつはいかないよ」

「ほんとうに」「苦労様でした それでお父さんは」

「美香さんの父親は生きている  
奥さんを数年前に亡くし最近、老人専用のケアマンションに移つ  
たんだ  
体の具合が良くならないらしく入退院の繰り返しらしい  
確認の電話をしたときも入院中だと言われた

退院したら電話もりづみょうお願ひしてある  
会う段取りまで漕きつけるのはまだ先になりそうだな

「入院しているの でも生きてらじしてよかつたわね  
これで美香さんの願いが叶えられるわ」

「ああ、何とか叶えてやれそつだ」

隣の席に「一ヒーを運んできたママが一人の前で足を止めた。

「話の途中」めんなさい  
わっしきの[写]真の人は「一人のお知り合」のよひね」

ママの話がいまひとつ読めない佐知は雅和に目を移した。

「あの[写]真の女性は俺の婚約者なんです」

「店に入ってきた彼女はとても思いつめた顔をしていたわ  
それで何かあつたら力になるからと名刺に携帯番号を書いて渡し  
たの」

「彼女のことがずっと気になっていたのよ どうしてこいつのかしら  
彼女」

「彼女は入院しています」

「そう、やつぱり・・  
人生にはどうにもならないことが一杯あるわ  
でも命がけで願えば人生さえも変えられる  
そう信じてけつして諦めないことね  
あなた達は力を合わせ彼女を未来永劫に背負い続ける運命なのよ  
だから」

カラーン・・コロン ドアの開く音が来客を知らせていた。

「お話の邪魔してごめんなさいね」

ママは話の途中でカウンター戻つていった。

「ママは美香さんの運命を知つて居るような口ぶりだったわね  
それに私たちのこともなにか含みを持たせて・・」

「なんだか薄気味悪いな 僕、鳥肌たつてるよ

雅和の手がポケットの写真を探していた。

「佐知、これがさつきママが言つてた[与真なんだ」

雅和は[与真を佐知の前に置いた。

「店のボードに貼つてあつたんだ」

「『I』で撮りられた『真なの？』

「玉張の時と同じ印があるから間違いないよ

「美香さんママと会話をしたんだわ  
だからママは美香さんのことを気にかけていたのよ

「どんな会話をしたのか気になるよね  
いや止めておこう。また鳥肌ものになるのはいやだからな  
『そんなこと言つてると出入り禁止にされるわよ

「店を出たあとも会話は途切れることなく続いていた。

「病院を出るとさき橋先生が言つてたわ  
木内さんを説得するのは手術より難しきつて

「医者は美香さんのような患者は迷惑なんだろうな  
でも手術を受けるのは患者だ  
いくら医者だって患者の意思を無視して従わせるわけにはいかない  
いだろ  
俺は美香さんの気持ちを尊重したい」

「美香さんは自分の命に換えても子供を産もうとしている  
一方で子供は諦めさせ母体を救おうとする医師がいる  
難しい選択だけど、どちらも正しいのかもしれない」

「あれから俺と美香さんは幾度も話し合った

俺は自分の気持ちを訴え続けた

美香さんが今することは身を削つて子供を産むことじゃない  
自分の病気と戦うことだ 命を永らえる事に懸けてほしいと  
でも美香さんの決意は固かつた

人の命は長短でない・自分らしく生きたなら命の長短など問題で  
ない

彼女はそう言こきつた そしていつも言つた

自分の意思を貫き全うしたい そうさせてほしい  
これが最後・・人生の締め括りだから協力してほしいと

納得なんて出来なかつたけど、美香さん泣いたんだ  
人前で涙を見せない彼女が流した涙はすべてを物語つているよう

な気がした

俺は納得せざる得なかつた

「美香さんの気持ちを汲んで井川君も同意したのね」

「賛成したわけじゃないけど同じ労力を使うなら泣かれるより喜んでもらうことを使いたいと思つたんだ」

「だつたら橘先生とのバトルも覚悟しないとね」

「戦闘開始か これからだな大変なのは」

「まだ始まつたばかりよ 負けないで」

「俺、最終に乗りたいから走つていいくよ 佐知またな」

走り行く雅和の背中は遙しく昔より大きく見えた。

## 6.1 見透かされた心

別れ際に雅和が言つた言葉を思い出していた。

「たまには病室に顔を出してやつてくれないか  
美香さん君に会いたがつてたよ」

就業後、佐知の足は入院病棟に向かつっていた。

「（）機嫌はいかがですか」

「佐知さん　ずっと待つてたのよ」

「（）めんなさい　お邪魔かなと思つて」

「遠慮なんかしないで

佐知さんと会つと不思議と元気をもらえるの  
だからこれからも顔を見せてね」

「そんなんふつに言つてもうれて光榮です」

「佐知さん、ですかますとか使うのやめにしない?」

私が年上だつて事は忘れて話してくれる嬉しいんだけどな

「はいそうします」

「ほり、また〜」

「随分」無沙汰の対面だったが一人は打ち解けていた。

「雅和がやつと産んでもいいと言つてくれたの

でも本心はドクター橋と同じ、彼は子供の誕生を望んでいない

「命を懸けて産むと言われたら愛する人の体を一番に考えるわ

「それって子供を諦めるつて事でしょ」

「命を救うためには何かを犠牲にしなければならない時もあるわ  
愛する人を守ろうとしている井川君と子供を守ろうとする美香さん  
どちらも間違つていないけど今は母体を優先せらるべきじゃない  
かしら」

「佐知さんも同じなのね」

「井川君は十分苦しんだわ

母子の保障がないから大切な美香さんを選んだの

井川君が子供の誕生を望んでないなんてそんなこと絶対ないわ」

「健康な人はみんな同じ事を言つたのね

人生舞台を降りる前にお腹の子だけは何としても誕生させる

愛する人の子を宿す次のチャンスはもう私には廻つてこないのよ

同じ女性だもの私の気持ち佐知さんにはわかるでしょ

私の言つ命がけにはお腹の子への気持ちが込められているの

お母さんは身を捧げあなたを守り

語りつくせない愛を持つて

あなたをこの世に誕生させる

だからあなたも頑張つてこの世に誕生しなければ駄目

そう、お腹の子についても言い聞かせてているの

そんな思いを受け止め、元気に生まれてくると私は信じているわ」

「美香さんはつよいですね」

「ねえ佐知さん 雅和から父のこと何か聞いている？」

「仕事が終わってから一生懸命探していくことは聞いています」

「心配だわ、体を壊さないといいんだけど」

「井川君なら大丈夫です  
体力だけは誰にも負けない頑強な男だもの  
必ずお父さんを連れて来てくれますよ」

「佐知さんにひとつだけ聞きたいの 気分を害しないで聞いてね  
あなたが今も雅和を愛しているなら正直に話して  
佐知さんは彼を、雅和をまだ愛しているんでしょう?」

突然投げられた直球に佐知はたじろいでいた。

## 62 見透かされた心？

「昔の」とは忘れました  
井川君がいま愛しているのは美香さんあなたなんですよ」

「私は佐知さんの気持ちを聞いているの 答えになつていないうわ」

「もう昔のことです 終わった愛を穿り回して何の意味があるの」

「本当におわったのかしら

私には何かが新たに始まつたよつて見えるんだけど

「そんな冗談、わたし笑えません」

「佐知さんの気持ちは私と同じなのよ

私にとって雅和は大切な人、ずっとずっと一緒に生きたかった  
でも私はいつか近い将来消えて雅和の前からいなくなるの」

「もうやめてください」

「雅和にはあなたが必要なの  
あなたも雅和のこと必要としているわ

私が言つてゐること間違つてゐるかしら

「男と女でなく必要な人というなら間違つていません  
やつぱり訂正します 美香さんは間違つています  
井川君が必要としているのは美香さんです  
それを一番知つてるのは美香さん、あなたでしょ  
井川君は誰のために苦しんでいるか知つていてるのでしょう  
美香さんを愛し支え頑張つてきた井川君はなんだつたの  
哀しそぎます 美香さんはもつと自分の愛を信じてください  
私と井川君の愛は終わつています もう昔には戻れないんです」

「綺麗」と言つてる時間なんて私にはないの  
好きか嫌いか、愛しているのかいなか  
それを聞いてるのよ、答えをまつてるの  
だから早く聞かせて、佐知さん

「・・・・」

佐知は親の仇を前にしたかよつに美香を見据えていた。

### 63 見透かされた心？

「答えられないのはなぜ？好きだからでしょ  
佐知さんのなかで雅和はまだ生き続けている  
終わつてなんかいない・昔のままなのよ」

「だつたら・だつたら何のですか

私の心を引っ搔き回してなにが面白いのですか  
こんな美香さんらしくない 今日の美香さん私、嫌いです」

「やつと本音を口にしてくれたわね ありがとう佐知さん  
いじめて困らせるつもりなかつたのよ  
佐知さんは腹を割つて話せる関係になりたい  
すべてをさらけ出してほしかつたの  
私ね、本音でぶつかってくれる友人がいないの  
建前の付き合いしかしてこなかつたんだもの当然よね  
佐知さんはそんな付き合いはしたくない  
そんな関係なんて今、私には必要ないから

つらいこと悲しいことなんでも隠さず話せる人が私には必要な  
窓の外が暗闇に覆われて景色が見えなくなると涙がこぼれて仕方  
ないの

明日も田を覚ませるのかな 無事に朝を迎えるのかな  
朝日の中でさえずる鳥たちの声を聞けるかなつて  
そんなことばかり考えておかしくなりそう

そんな時、思い切り泣ける相手がいてくれたらって  
雅和には見せられない涙も受け止めてくれる人がいたらって思った  
それが佐知さんだつたらいいなって、そう思つたの「

美香の言葉が心に沁みていた。

涙が流れ出るのを佐知は唇をかみこらえていた。

「これから本題に入るからよく聞いてね  
佐知さん私はあなたに雅和をお願いしたいの

彼はとっても打たれ弱い男だから誰か支える人がいないと頑張れ  
ない

子供みたいでおかしいでしょうけど私に何かあつたら彼は自暴自  
棄になつて

きつと仕事どいろでなくなるわ」

「井川君はそんな弱い男じゃないわ」

「いいえ、彼は弱いわ

私がいなくなつたら彼は弱い男に戻つてしまつ  
だから支えがあなたが必要なの」

「私なんかを井川君が受け入れるはずがありません」

「受け入れるとかそんなことはどうでもいいの  
雅和を支えられるのは私とあなただけよ  
彼の気持ちがどうあれ佐知さんは嘘のない心で雅和と向き合つて  
あげて」

「井川君のことなんか心配しないで下さご  
元気な赤ちゃんを産んで井川君と幸せになる事を願つてください」

「私は彼にたくさん愛をもらつたわ  
私達は愛を大切に温め今まで歩んできたの

「この世で彼と出会えたのが運命ならこの世で一番大切な彼との別  
れも運命  
命ある限りこれからも彼を愛しぬくわ  
笑つてさよならしたあとも私の愛は永遠よ  
赤ちゃんに流れる血となつて私は生き続けるわ」

佐知は背を向け溢れ出た大粒の涙をぬぐつていた。

## 64 見透かされた心？

気持ちを見透かされ佐知は動搖したが宿えが取れて身心とも軽くなっていた。

抑圧されてきた気持ちに口が当たり青空に吸い込まれ消えてゆく気がした。

「私が築けなかつた愛を美香さんは井川君と築いていたそれを知つた時、葬つたはずの思いが洪水のように溢れてきたの美香さんには出来て私に出来なかつたのは何故つて涙がこぼれた息が止まるかと思うくらい胸が苦しくなつたわ愛を独り占めしている美香さんが羨ましくて嫉ましくて仕方なかつた」

「私も同じだつたわ  
佐知さんの話をする雅和を見るたび、耳を塞ぎたくなつたわ  
思い出話を口にされるのがとてもいやだつた  
だつて私は貴方たちの思い出には入れないんだもの

二人の愛が復活したらどうしようなんて  
ひとり思いつめて眠れない日もあつたわ  
佐知さんに嫉妬していたなんて笑っちゃうわね」

「女同士だから美香さんの気持ちが分かります  
嫉妬していたのは私も一緒です  
私は無くした愛を忘れられずいつも懐かしんでいた

「一度と戻らない愛と分かつていながら一抹の願いに祈つていた  
私は未練の塊をずっと背負っていたんです  
今はもう遠い昔話・笑えますね」

「ふたりで笑つて水に流しましょう  
新・旧恋人の垣根を越えやつと女同士になれた  
これで何でも話せる仲になれるわね、私たち  
これからよろしくね佐知さん」

「その前に一つだけいいですか  
私が井川君を好きといったのはね  
好きにはピンからキリまであるでしょ  
今の好きは兄を慕う妹のような気持ちなの  
これは本当よ、信じて」

「今つて言つた?ことは前は違つていたのね」

「ええ、でもそれは一方通行の願望だった」

「気持ちが一方通行だつたなんて悲しいわ  
それはそれはさぞかし御つらかったでしょうね~」

「ものすごい皮肉に聞こえるんだけど  
それってわたしの気のせいかしら」

「『めんなさ』、『機嫌直して』  
さつき佐知さんが言つたように私と雅和は堅い絆で結ばれている  
のよ

だから分け入る余地などないつてことしつかり覚えておいてね」

「よくもぬけぬけと仰つてくれますね

美香さん本当はものすごく性格悪いでしょ

根性悪の美香さんに虐められたつて誰かさんに告げ口しちゃおう

「佐知さん、お願ひだからそれだけは許して〜」

一人の楽しげな笑い声が病棟にもれ聞こえていた。

これが最初で最後の笑い声になるとも知らず友情を誓い合つてい  
た。

美香の父をお世話をしている須藤と名乗る男性から雅和のもとに連絡が入った。

人居しているというケアマンションに雅和は佐知を伴つて出向いていた。

住所を手がかりにたどり着いた場所には老人施設とは思えない建物が建っていた。

空間の間を取りもつアプローチは縁に彩られ丹念に手をかけた花々が咲き誇つていた。

玄関に入るとカウンターに立つ制服姿の男女が深く頭を下げて出迎えてくれた。

豪華ホテルに酷似したマンションを前にふたりは目を丸くしていた。

受付横の扉が開いてスース姿の男性が近づいてきた。

「私が先日お電話した須藤です」

「一Jの度は」「尽力いただき有難うございました」

「お部屋に案内いたします、さあ、どうぞ」

二人は言われるがまま男性の後をついて行った。

青銅に彫られた佐々木悟朗の表札の前で足が止まった。

「佐々木様、お客様をお連れ致しました」

「佐々木様、お客様をお連れ致しました」

「鍵は開けてあるからお通しして」

開け放たれたりビングにガウン姿の男性が見えた。  
その人こそ美香が夢にまで見た父親だった。

「佐々木様、私はこれで・・

何か御用がありましたらお呼びください」

「須藤君ひとつ頼まれてくれないか

客人にコーヒーを持ってきてほしいんだが」

「承知いたしました

係りのものに急いで届けさせましよう では私はこれで

呆然と立ちすくむ雅和と佐知に声がかかった。

「一人とも遠慮しないで」おひらに掛けなさい

美香の父は痩せ細つて痛々しくみえた。

「初めてお会いする人にこんな姿で申し訳ない  
病み上がりなもので勘弁してもらいたい」

「」無理なお願いを受けていただき恐縮しています

「話の大筋は須藤君から聞いている  
君は娘と懇意にしているようだね」

「結婚の約束をしています」

「結婚・・そうか、美香はもうそんな年になつたのか

「お父さんを必死で探しました

彼女の願いを叶えるためにはお父さんのお力が必要なんです」

「私が美香と別れたのは彼女がまだ幼い2歳の時だった  
それきり消息がつかめず会えなくなつた  
そんな私に今更、何ができるのかね」

「実は彼女はいま妊娠しています」

「それはめでたい話だ

あの幼ななかつた娘が母親になるとは感慨深いな」

「子供が生まれたら是非ともお父さんにも抱いてほしいのです  
美香さんはそれを切に願っています」

「美香がそんなことを言つてくれているのか とても嬉しいよ  
だが美香の母の許しがなければ、なんとも返事のしようがない」

「美香さんの母親はもう」「くなっています

美香さんの拠り所は俺と隣に座つて いる彼女だけなんです」

昔愛した美香の母・早苗が脳裏をよぎり佐々木は宙を仰いでいた。

「お父様、大丈夫ですか」

佐知の呼びかけに佐々木は我に返り苦笑していた。

「あつ、申し訳ないつい昔を・・遠い昔のことだが  
愛した女性に愛想をつかされたあげく娘と引き離された私は抜け  
殻同然だった

生きることに意味をみいだせずこの長い年月を無意味にやり過ご  
してしまったようだ

愛のない結婚に終止符も打てず愛する女性と交わした約束も果た  
せず

妻さえ幸せにしてやれなかつた愚かな男それが私なんだ」

言葉をなくし互いを伺う一人の耳に女性の声が聞こえた。

「佐々木様、珈琲をお持ちしました」

リビングの何処から聞こえるその声に一人は不思議そうに辺り  
を見渡していた。

「いま鍵を開けますから中へどうぞ」

佐々木は手に持った器械を操作して会話をしていた。

女性が珈琲を置き会釈して帰ろうとしたときだつた。

「君、お手数かけるがベッドルームの『写真をここへ』

「はい、今お持ちいたします」

田の前に置かれた写真立ては稀少価値のアンティークでイギリス製だった。

大事そうにそれを手にした佐々木は目を細めた。

「この写真たては早苗に、早苗は美香の母親です  
彼女に買って渡せなかつた土産なんです

当時彼女は両親に先立たれ大層ショックを受けていました

そんな彼女のために指輪と一緒に買い求めたのですが・  
皮肉なもので渡そうとしたその日私は彼女に別れを告げられました

私はこの写真たてに命よりも大切にしてきた写真を飾っているの

です」

差し出された写真たてを手にした一人もまた佐々木同様、目を細め笑みを浮かべた。

写真には幼少のあどけない美香が映っていた。

「とても古い写真のようですが、美香さんですよね」

「娘、美香の面影はありますか?」

「はい、残っていますね、井川君」

「そういえば笑う彼女・・最近見ていないな  
でも美香さんは今もすてきな笑顔で  
笑いますよ」

「そうですか、成長した今も

娘は昔のままの笑顔で笑っているのですね

思えば別れの日、私は写真をポケットに忍ばせていました  
美香の母親は妻への気遣いから写真を持ち出すことを許してはく  
れなかつた

私がこの写真を部屋に飾ったのは妻が亡くなつてからです  
妻の存命中この写真を手にとることは一度もありませんでした

それが早苗との約束のような気がしてこの写真を封印したのです

妻は子供を産めない体でした  
妻が一番悲しむであろう子供の存在を何があつても隠し通してほしいと

早苗は頭を下げて私に言いました

その言葉がずっと頭から離れず妻には知られまいと骨を折ったものです

しかし妻はすべてを知っていました

妻の葬儀が終わり半月たつた頃、私は寂しさもあって写真を探しました

写真の下に手紙がありました・・妻の筆跡でした  
書斎に入ることなどない妻が何かの拍子に田にしてしまったので  
ショウ

こう記されました

この写真の子があなたの子なら隨ひず堂々と会うべきだ  
わが子の成長をその目で見ずして人生を終えてもいいのか  
私もあなたも、もう若くはない  
じつとしていても時はただ過ぎ去るだけ  
だから動き出さなければ駄目だと・・・

さらに追伸があった

あなたの子ならきっとといい子に違いないと

その文字に妻の悲しみを垣間見た気がして私は涙しました

妻の手紙に後押しされ娘を探そうとしていた矢先  
私はこんな体に・・無念でした

「美香さんを探そうとしていたことを知つたら彼女だつて喜びます  
お体の調子の良い時に一度美香さんを見舞つてくれませんか  
俺が病院にお連れしますから」

「これからも是非ともお願ひしたい 美香に会わせてくれ  
そのときは連絡を差し上げましよう  
私をよくぞ探してくれた君達に感謝するよ 本当にありがとうございました」

「では」連絡お待ちしています  
今日はお話を伺えて有難うございました

立ち上がった佐々木はガウンから細い腕を覗かせ手を伸ばしてき  
た。

佐々木の手には小さな箱が握られていた。

「井川君、君からこれを娘に渡してくれないか  
早苗に買い求めた誕生石の指輪が入っている

6月の誕生石は月長石でムーンストーンとも言われる  
無色で青い白い光を放つ神秘的な石だ

この石を身に付けると幸運を呼んで身を守ってくれるらしい  
美香も母親と同じ6月生まれだからきっと「利益があるだろう  
元気な子を抱ける日を楽しみにしていると伝えてこの指輪を頼ん  
だよ」

「分かりました 責任をもってお預かりします」

「美香と会うためには・・私は杖なしで  
一人で歩けるようにならないといけないな  
もうひと踏ん張り、頑張ってみるか  
生きる糧が見つかって少しだが力が漲つた様な気がするよ

別れ際の佐々木の顔には血色が戻り赤みが差していた。

「ねえ、井川君

見送つてくれたお父様の顔が変つていたの気がついた?」

「ああ、最初とは違つて健康そのものに見えたな」

「病は氣からつて言つたナジ本当ね」

「これで後は連絡を待つだけだな」

「でも美香さんの病氣、伝えないでよかつたの」

「あんな状態をみたらともじやないけど言えないよ  
どうみても自分の体のことで精一杯つて感じだつたら  
今は余計なこと言わないほうがいい  
美香さんが自分の口で話す・・その方がいいんだ」

「・・そつね」

「子供が生まれるまで十月十日かかるつていうけど  
お父さん、それまで元氣でいてくれるといいな  
高齢だし体もつらそうだったから心配だよ」

「心配していたらキリがないわ

そんなこと言つたら橘先生が言つようと  
母子ともに健康でいられるかどうかだって

「やめやめ、もう止めよう

ネガティブな話は今後いつかにタブーにしよう」

「私つたら縁起でもないことを言つてごめんなさい」

「もう止めようって言つたばかりだろ  
さあ、美香さんが待つてゐるから早く帰ろつ  
お父さんのこと話をしたら美香さん  
さつき見た昔の写真みたいに笑つてくれるかな」

「もちろんよ 今まで一番の笑顔で喜んでくれるわ」

美香の父の伝言を携えた一人は晴れやかな気持ちで東京を後にし  
ていた。

## 69 血は水より濃し

そのころ橘医師は手術を断念し出産を優先させるべくチーム橘を立ち上げていた。

しかしそれは限りなく死に近づく選択でもあり医師として橘の心境は複雑だった。

そんな折に父の所在を告げられた美香は天にも登る思いだった。

「雅和ありがとう、

お父さんが元氣でいてくれて、私うれしい」

「お父さんの体調はいまひとつだつたけど

美香さんの話になつたらみるみる元気になつて驚いたよ  
お父さんも美香さんを探していたから本当に嬉しかったんだね」

「私のこと忘れていたかったのね」

「お父さんは古い写真を大切に持つていたよ  
あどけない顔で笑つていてる美香さん、とても可愛かつたな

娘は今もこんな笑顔で笑つていてますか

そう言って写真の君を見つめるその田は父親そのものだった

美香さんの願いを伝えた俺にお父さんは

是非とも抱かせてほしいと反対に頭を下してくれた  
おだやかで紳士的だった君のお父さん、俺すきだな

「お母さんが愛した人なら私も好きになれる」と信じていたから  
紳士と聞いてホッとしたわ」

「俺もあの人子供を抱かせてやりたい

美香さん、俺たちの子供をお父さんに見せて喜んでもらおう

だから美香さんは元気な赤ちゃんを産むだけじゃ駄目なんだ  
産んだ後も君が元氣でいなければ意味がない

元気な子をお父さんに見てもらいつためにほつり治療も克服しな  
いと

大変だらうけど俺と一緒に頑張り、負けないで病気と闘つてい  
る」

「ええ、子供と一緒に元気な姿でお父さんに会わなければ  
それまで生きてこなれば・・・」

「弱気になつたら負けなんだ

俺のそばで美香さんはずっと生き続けるんだ

・・信じて、何も心配するな

俺と共に生きてゆく、君はそれだけを願えばいい

「私、お父さんに会つて子供を抱いてもらひ得るまではなんとしても生きたいと思っていた

でも今はあなたと生まれてくる子供・・お父さんと生きたい

母が実現できなかつた家庭を私はずつと夢見ていた

愛する家族がいて毎日笑つて暮らせる家庭そんな普通の生活を夢

見ていたの

だから、生きたい、死にたくないわ ねえ雅和、私は本当に死ぬの  
どうして私なの 誰が決めたの ねえ雅和、教えて」

泣かない美香の目に零れんばかりの涙がまた溢れだしていた。

## 70 血は水より濃し？

「俺の前で死ぬなんて絶対口にするな  
俺を愛しているのなら生きるんだ それが君の俺への愛の証しだ  
なる

強い気持ちが病を追い払ってくれる 希望を捨てず生きるんだ  
一人じゃない、俺がそしてお父さん、佐知もいる  
生きる望みを失わないで強い気持ちで生きると約束してくれ」

「はじめてなの、こんな気持ち

死は・・とうに受け入れたはずだったのに  
生きていいって願つことがこんなに苦しいなんて  
死を受け入れるよりつらいのはなぜ

子供を産みたい、お父さんと会いたい・・その願いがひとつ叶つ  
たら

またひとつ別の願いが湧き上がつてくるなんて私、欲張りね」

「欲張つたつていいじゃないか

希望があるから夢があつたからこれまで頑張れたんだろう

人は誰もがつらい人生を乗り越え生きているんだ  
目の前の山を越えるとそこには希望や夢がある  
だから頑張れる、俺はそうして生きてきた  
美香さんも・・同じだろ」

雅和はベッドに腰をかけ美香を強く抱きしめた。

「あっかいわ、雅和の胸  
このぬくもり、何もかも忘れさせてくれる

この広い宇宙で雅和と出会えた導きに感謝している  
私はなんて幸せ者なのって心から思えるわ

もうなにも恐れない、死に神とだって闘う覚悟よ  
雅和の前で死ぬなんて一度と言わないわ  
私はもう大丈夫 ごめんなさいね、心配させて」

覚悟を決めた美香の笑顔は女神のようにまぶしかった。

「お父さんから預かってきたものがあるんだ  
美香さん、両手をだして」

## 7.1 血は水より濃し？

雅和は鞄から小箱を取り出し美香の手に乗せた。

「開けて中を見てもいい」

小箱を開けると「バルト色のケースが現れた。

「中にお父さんの思いがいっぱい詰まつた指輪が入っている

両親を亡くしたお母さんを元気付けたいと出張先で買い求めた指輪だと言っていた

美香さんは6月の誕生石ムーンストーンが幸せを呼び身を守ってくれる石だつて知つてた

美香さんとお母さんは誕生日が同じだよね

お母さんに渡せなかつた指輪を君に渡してほしいと言つたお父さんの気持ち

美香さんにはわかるだろ」

「母のために買つた指輪が私の手元にあるなんてとても不思議だわ」

「誕生日が一緒じゃなければ手にする」とはなかつたかもしけない  
指輪だ」

「Jの指輪大切に私のお守りにするわ  
指輪と一緒にお父さんが私を守ってくれるそんな気がする」

「お父さんは誰よりも美香さんを思つてゐるよ  
美香さんをどんなに愛していてもお父さんだけには絶対に敵わないよ

それほど肉親の愛は絶大なんだ

君のお父さんと会つたあと俺は自分の親父を思いだして  
あんなに憎しみ、嫌つていた親父でも俺の中で親父は今も鮮明に  
生き続けていた

他人だつたらこうはいかないんだろうけどこれが濃くて深い肉親  
の情つてやつなんだろうな」

「血は水よりも濃しつて諺があるから血の?がりはそういうものなの  
よ、きっと」

不思議な出来事はこれだけではなかつた。

美香と彼女に関わる人達が織りなす人間模様に新たな真実があつた。

## 72 眠れぬ夜

美香は会社から送られてきた書類に目を通していた。  
長期病気休暇について書かれた書類だった。

忘れないように手帳に挿もうとしたそのとき一枚の名刺が何気に  
目に入った。

SIGN POSTのその名刺を手にした美香はママを懐かしく思  
い出していた。  
名刺に書かれた携帯の番号が気になつて何度も手にして見つめて  
いた。

「ママ・・私を覚えているかな」

美香は会いたい気持ちを抑えられなくなっていた。

土曜の夜、美香の病室に雅和の姿があつた。

「頼みたいことがあるの  
明日、行つてきてほしい場所があるんだけど雅和にお願いしても  
いいかな」

「いいかなって、もう決まりなんだろ俺がいくつて

「それじゃ、話が早いわね

明日、SIGNPOSTに行つてもらいたいの」

「・・・」

「雅和、聞いてるの？」

「美香さんの口からSIGNPOSTの名前が出てくるとびっくりだ  
な」

「私、出張のときあの店に立ち寄ったの  
そのときママが何かあつたら力になるからって声をかけてくれて  
この名刺をくれたの  
あの時は感じなかつたけど今になつてママのことが気になつて仕  
方ないの」

「ママはママが面倒見がよくてみんなに慕わっていたからな

「雅和はママがあの界隈でちよつとした有名人だつて知つていた？」

「名人…俺はそんな話一度も聞いたことないよ」

「ママは占い師で超能力者なのよ」

「やめてくれよ そんなことありえないだろ」

「見えるって言ったの 私のことが見えたって」

「見えるって…何が?」

「人の人生が見えるらしいの」

「…」

美香の話がまったく嘘でないことは雅和にも少しだが理解でき  
た。

「私が倒れたあの日、ママには私が見えていたのよ  
初めて会った私を見て早急に病院にいきなさい  
頭に注意しなさいって言ったわ」

「なんだかゾクッとしてきたよ」

「店を出た私を追つてきてくれたママが忘れられない  
おかしいでしょうけど恋しいの  
力になるからと優しく言つてくれたあのとき  
ママには私の何が見えたのかしら・・  
私・・力をもらいたい  
だからママに会いたいの」

「美香さんがそうしたいのなら俺がなんとしてでも連れてくるよ」

「雅和は手紙を届けてくれるだけでいいわ  
後はこれを読んだママが決めてくれればいいの」

「わかった

明日、病院に来る前にママに会けるよ

「こつも頼み」とばかりで、「あんなさー

「気にするな

俺、夜のお願いはちょっと苦手、自信ないけど  
ひつひつとなら得意だから心配しないでいいよ」

「もお、雅和つたら私が超肉食女みたいな言い方してん」

「美香さんはジキルとハイドだからね」

「ほんとに失礼しちゃうわね」

「頼み事がなければやり込めたいところだけど今夜はやめておくわ」

「俺、怒った美香さんも大好きなのに残念だなあ」

「もお、口がうまくてお手上げだわ」

「上手くてお手上げなのは口じゃなく俺のキスだろ  
忘れたなら・・試してみる?」

「雅和のキスはいつだって最高よ」

熱い抱擁で唇を重ね雅和が去った後

久しぶりの濃厚なキスに美香の体は熱く反応していた。

「いまの私は・・雅和と愛し合つことは出来ない  
この胸に雅和の鼓動が伝わっていたあの頃に戻りたい」

暗がりの病室に深い溜め息が漏れていた。

それは今宵もまた・・・

一人ぼっちで眠れぬ夜を明かす嘆きの声のよつだった。

## 73 眠れぬ夜？

雅和はSIGN POSTに向っていた。

まだ看板の出でていない店に手を伸ばすとドアが開いた。

カラ・カラ

「あら誰かと思えば今日はめずらしく早くお出ましね

「開店前だけじいかな」

「ええ、構わないわよ

いつものお友達夫婦のところに泊まったの？」

「うん、週末二日三日は新婚家庭に居候

「お腹が空いてたまらず飛び出してきたつてことでしょう

「その通り、腹がへって倒れそう

ママ、モーニングとストロング珈琲ビッグサイズを超高速で

「急いで作るから待ってね」

モーニングを食べ終えた雅和にグレープフルーツを差し出したママが声をかけた。

「今日はなんだかうかない顔しているわね」

雅和は胸ポケットから取り出した手紙を突き出した。

「なあに、まさかラブレターじゃないでしょ」つね

「美香さんから頼まれたんだ」

「彼女が私に?」

「ママの事が恋しいって言っていたからラブレターだよ、きっと」

「まあうれしい  
帰つてからゆっくり読ませていただくな」

「俺は手紙一つもじつに何だかしゃべなんだよなー」

「ひょっとして今日の浮かない顔はやきもち妬いてたからなの?  
やだ〜かわいいわね」

雅和は火照った顔を隠すようにグレープフルーツを口に運んでいた。

「ねえ、さつきから刺すような視線が気になるんだけど  
気のせいかしら 私の顔に何かついている?」

「えっ別に」

「私のこと何者って怖がっているみたいね  
そうでしょ」

「彼女言つてたんだ  
ママは占いが出来て・・  
何でも見える不思議なすごい力をもつているって  
此処で俺と佐知に言つたママの言葉を思い出しても  
そしたらあの時と同じ鳥肌がたつてきて・・」

「そうね、普通の人なら氣味が悪いでしょうね

解つてもらえるかわからないけど聞いて

人生は誰のものでもない自分のものだから  
他人が口を挟むことじゃないけれど  
身近に不幸に向う生き方をしている人がいたらどうする  
行動に移すかは別としてそれを正してあげたいと思わない

占いつて怖がらせるものじゃなくて

人生の困難を上手く乗り越えられるように導くもの  
私が話すことがすべての人に伝わるわけじゃないわ  
伝わらないほうが多いかも・・残念だけど  
でもね、何年も後になって感謝されたりすることあるのよ  
そんな時だけよ、自分の特殊な力を素直に喜べるのは」

「占いとか透視とか正直俺は信じないからちょっと引いてしまうなあ  
あっ、すみません」

「いいの、大抵の人は引いてしまうでしょうね  
人の気持ちまで変えようとは思っていないわ  
こればかりは仕方ないけど嫌われちゃったかな?」

「俺にとってママは学生の時と同じ  
誰にでも平等で親身になってくれる姉御的存在なんだ  
何も変わっていないよ」

「ありがとう

今までにこうこうことがあったから透視は封印していたのよ  
でも彼女、美香さんっていつたかしら  
彼女にはあの時どうしても話さずに入れなかつた  
どうしてかしらね、今から思えば不思議だわ

「美香さんも同じ」と言つてたな  
どうしてだか分らないけどママのことが気になるつて

「出会いって宝物探しみたいで面白いなつて  
お店をしていて思うのよ  
彼女と私が遠い昔どこかで繋がっていたとしたら  
その魂が呼び合つたのかもしれないわね」

「彼女も何故かそういう人の縁や繋がりを  
物凄くというか・・異常なほど大切にするんだよね」

「母親の血を濃く受け継いだ彼女には母親の思いが強く宿っているの  
彼女が命と同様に大切にしているのは繋がり、絆よ」

「・・・」

「彼女はあなたを心配している  
あなたに心配させまいと無理しているわ  
もう少し彼女の気持ちに寄り添つてあげて」

「・・・ママー 手紙読んでトナーわ

「ええ、喜んで読ませていただきまーす」

「じゅ俺、帰ります ママ、駆走様」

「あつ、待つて

迷惑でなかつたら連絡先を教えてもらひえないかしら  
又あなたはひいてしまつだらうけど私、胸騒ぎがして仕方ないの  
あなたと連絡しなければならぬことが必ず起きるわ

雅和は差し出されたメモに携帯番号と名前を書いて店を出た。

「何が起かる・・・ヒ言つんだ

「やばい、また鳥肌が立つてきた

次に起る事態に不安を抱き雅和は硬直した体を身震いさせた。

## 74 眠れぬ夜？

明かりを消しINGENPOSTの看板を外すママの目に映る商店街は

田中とは全く別の顔を見せつら悲しいものだった。

「町から人と触れ合つ商店がどんどん追いやられていいくのお店もいつか無くなってしまうのかしら」

徒歩で5分もかかるない血圧マンションに帰ると真っ先に向つのは浴室。

シャワーを浴び部屋着に着替えるとチーズとワインで一日の疲れを癒すのが日課だった。

今夜はワインもセレクションベランダに果然と佇んでいた。

「珍なことつてありえないけど本当ない」

美香の手紙を手に尋常でない脈打つ鼓動を沈めよつとしていた。

ママの名前は沢村田鶴子。

幼少の頃、両親の離婚で田鶴子は母と家を出た。

養育費は父がきちんと振り込んでくれたおかげで贅沢さえ望まなければ人並みの生活が送れた。

長戯いの母の看護で婚期を逃しこの歳まで独身を通してきた。

母を看取つてからといつもの暗くて長い一人の夜が苦手になつた。寂しさからなのか遠い記憶の兄を思い出し切なくなつた。

兄の手がかりはなく丹口はあつとこづまに過ぎたがもしどこかで  
すれ違つていたとしても  
お互い見知らぬものとして通り過ぎていただひつ

父の姓は確か佐々木、兄の名前は悟朗

成長した兄は後に役人になりトップにまで登りつめたと聞いた  
亡くなる前に母から聞いた話しが偶然にも美香の手紙に書かれた  
事柄と符合していた。

田鶴子は意を決し雅和に電話をかけた。

「SIGN POSTの沢村田鶴子です

遅くにごめんなさいね もうおやすみだつたかしら」

「もしかしてその声はママ  
どうかしたんですか？もしかして手紙の件で

「手紙、読ませていただいたわ  
それでね、一つだけ教えてほしいことがあつて」

「俺が知つてこぬ」となりお签えしますよ」

「ありがと、実は美香さんの父親の事なんだけど今、どうにこむのかしら」

「奥さんを」くしへから東京都内にある豪華なケアマンションに住んでいますよ」

「やう・・」

「手紙にお父さんのこと書いてあつたのですかそれでなにか気がかりなことが・・・  
俺でよかつたら聞きますから話してください」

「知り合こと同じ名前だつたから聞きたくなつただけただそれだけだから心配しないで

夜分ごめんなさいね・・おやすみなさい」

もしも・・美香さんの父親が兄ならば  
私とお母さんを覚えているかしら  
お兄さんにひと皿会いたい・・

田鶴子の思いは美香が涙した父への思いと同じだった。

今宵、眠れぬ田鶴子は美香の手紙を繰り返し読み返していた。

## 75 眠れぬ夜？

週末病院に向う雅和はSIGNPOSTに方向を変え歩いていた。深夜にかかるてきたママからの電話が気になっていた。

「いらっしゃ・・あつ井川君、この間は夜分に『めんなさい』突然で迷惑だつたでしょ、本當に『めんなさいね』

「俺は迷惑じゃないけど・・

そんなに申し訳ないって思つなら何か」馳走してもらひつかな

「いいわよ、お安い御用だわ

何でもこいからどんどん注文して」

「いやだなママ、冗談だよ、冗談

こつもの珈琲お願ひします」

「遠慮しないでよ お腹は空いてないの  
メニューにあるものなら作つてあげられるから

「今日はじつかり食べてきたから本當にこいよ  
お氣持ちだけ頂きます」

「じゃ、この珈琲は私からのお礼ね

「お言葉に甘えて、」と馳走になります」

「ねえ、ところで井川君は美香さんのお父さんと面識は？」

「はい一度だけ  
美香さんからお父さんを探してほしいと頼まれて  
それで探し出して俺と佐知で会いに行きました」

「それでその人・・どんな印象の人だったのかしら」

「今日は質問攻めだな

ママは透視できるんだからなにも俺に聞かなくたって・・

「茶化さないの

勿体つけずに質問に答えなさい

「はいはい、わかりました

答えにならないかもしないけど俺、あの人好きだな  
あの人話す言葉すべてがすうーと心に入ってきた

俺の美香さんへの思いは誰にも負けないと自負している  
だけど、この人にだけは敵わないなって思ったよ

病身のやせ細つたあの人セピア色になつた美香さんの写真を  
濡れた目で見つめていた姿がいまも焼きついている

あの人、別れ際に言つたんだ  
生きる糧が見つかったからもう少し頑張つてみるかつて・  
その顔は晴れやかだつた

美香さんの話をしたあの人見違えるほど元気になつた  
孤独なあの人希望と生きる糧を齎したのは美香さんだつた

「孤独な人か・・私と一緒にね  
人は皆、一人で生まれ一人死に逝くものだから誰もが孤独といえ  
るでしょうね  
でも身寄りがいるといないとでは雲泥の差・・

美香さんのお父さんはやつと疲れぬ夜と決別できた  
体も徐々に持ち直して元気になれるといいわね」

「俺も眠れない夜のつらさは沢山経験している  
なんたつて次の日の仕事が超しんどくてつらいんだよね~」

「そうじゃなくて身につまされるつらさの事を言つてるの  
それが分らないようじやまだまだね  
井川君つて天然なの 面白いのね」

「やつぱり俺は、まだですか

風向きが悪くなつたところでなんとか歸れつかな  
ママ、美香さん元氣える」とある。

「手紙のお礼と返事はもう少し待つてね  
それだけ伝えておいて頂戴」

「了解

ママは何か探り出さうとしている気がする  
・・俺の思ひ過ぎしなのかな

雅和は電車に乗らず駆け足で病院へと向った。

扉を開けると病室の美香は静かな寝息を立てていた。

椅子に腰掛けた足もとにレポート用紙が落ちていた。  
雅和は拾い上げ書き込まれた文字を田で追つた。  
それはSIGNPOSTのママに渡した手紙の下書きだった。

## 76 眠れぬ夜？

レポート用紙を元の場所に置いた雅和の顔から血の気が引いていつた。

「俺は美香さんを支えるどころか苦しめていたのか・・・」

美香の手を握りながらママが言つた言葉を思い出していた。

「美香さんは無理している」

雅和は堪らず病室を飛び出していた。

雅和が隆一の家に戻ったのは辺りがオレンジ色に染まる頃だった。町を彷徨い身も心もぼろぼろで帰宅した雅和は夕食を食べると人々にテーブルを離れた。

「雅和、頂き物のメロンがあるので食べてから部屋に行つてよ」

「疲れたから横になりたいんだ

「真砂子！」めん、俺はこいよ

「それじゃ、明日の朝みんなで食べよつね

うたた寝から田覚めた雅和の耳に隣の部屋から龍一と真砂子の楽しげな声と笑い声が聞こえた。

「あいつら本当に幸せなんだな」

ちよつといの時、机の上の携帯がブルブル踊りだした。

「もしもし、井川君今どこにいるの」

「エリヒつて、こつもの龍一の家だよ」

「美香さん、心配していたわよ

絶対来るって言っていたのに顔を見せなつて

「病院には行つたけど

美香さんの寝顔見て・・帰つてきた」

「顔も見せないで帰ったの、どうして?」

「・・・」

「話したくないなら聞かないわ  
明日はちゃんと顔を見せてあげてね  
美香さんに余計な心配させないで  
じゃ、おやすみなさい」

「佐知、電話を切らないでくれ  
ひとりで居たくないんだ 賴む・・佐知」

「井川君、ひとりな  
真砂子たち・・出かけているの」

「龍一と真砂子なら一人の世界の真つ只中だ  
俺の割り入る余地など皆無・・わかるだろ」

「今日の井川君なんだか苛立つている  
なにか聞いてほしいことあるのね  
誰でもいいから話し相手がほしかったんでしょ  
私、相手になるから話して・・」

「佐知にはわかるんだな俺の気持ちが…  
なら甘えて佐知に気持ちぶつけてもいいかな」

「ええ、聞かせて」

「俺は入院した美香さんの気持ちなどお構いなしで  
自分の気持ちばかり押し付けたような気がする  
よかれと口にした言葉が美香さんには苦痛だった  
そう思つと情けなくて全身の力が抜けていくよ」

「美香さんはいつだつて井川君に感謝しているわ」

「やうかな、無理していろんじゃないのかな」

「無理つて・・じつこつ」と

「美香さんは俺が苦しむのを見るのが嫌だから  
自分の気持ちを押し殺して吐き出せずにいるんだ」

「井川君が苦しむ?」

「だいぶ前だけど美香さんが涙を流して驚くほど取り乱したことが

あつて

冷静な美香さんしか見たことがない俺は只、うつむいたえるばかりで彼女を支えるどころか呆然として固まってしまった

そんな俺の姿を見たから美香さんは本音を言えなくなつたんだ

「そんなことないわよ

美香さんが・・やつぱつたの」

「今日、SIGNPOSTのマムに書いた手紙の下書きを見てしまつたんだ」

「それに美香さんの気持ちが」

「俺に心配させまいとして本心を隠し続けた彼女の気持ちが手紙に書いてあつた

／心を偽つてこる自分はピヒロのよつだ／

そんなことを美香さんに書かせてこる自分が悲しくて情けなくなつたんだ」

「それで美香さんと顔も合わさず病院を飛び出した  
・・・やりきれないわね」

「・・佐知に会いたい  
今すぐにでも飛んで会いに行きたい」

「井川君、しつかりしてよ

逃げないで美香さんと向き合わなきゃダメ」

「ママにも言われたよ

寄り添つてあげなさいつて」

「そうよ、それが一番よ

女は好きな人にすべてを話しているかつていったら  
ほとんどの人が話せないでいると思う

だから美香さんに限つてのことじゃないわ

女はね、つらい時、好きな人に黙つて抱きしめてもいいだけでもうそれだけで癒され、充たされるのよ

だから井川君は黙つて美香さんを抱きしめてあげればいいの」

「そういえば最後に美香さんを抱きしめたのはいつだったかな  
帰り際キスした先週か」

「はいはい、うちもつままです

「あっ、『めさん』

「とにかく余計なことは追求しないで

手紙の件も知らないふりして何もなかつたことにするの  
美香さんが物思いにふけつたり落ち込んで元気がなかつたら  
しつかり抱きしめてあげてね  
頑張るうつて気持ちにきつとなれる、間違いないから

「佐知、ありがとう  
また備りを作ってしまったな」

「そうね、いっぱい貯まつたわね  
なにかお返しのおねだりしようつかしく」

「佐知の要望ならなんでも聞くよ」

「何でもうつて言つのは  
訂正しておいた方がいいんじやない？」

「どうじで」

「だつて・・私がもしもよ  
昔のように私の所に戻つて来てその大きな胸で  
抱きしめてつておねだりしたら聞いてくれるの」

「・・・」

「井川君マジに受け止めちゃった?  
いやだ～冗談よ、冗談」

「そんな冗談・・心臓に悪いよ  
おねだりは色恋なしでお受けします」

「わかりました

じゃ、私のために時間を作つて美味しいもの食べに連れて行つて

「それならOKです」

「楽しみにしているわ  
眠くなってきたからもう電話切るわね  
井川君、お休みなさい」

「サンキュー 佐知」

電話を切つた佐知はカーテンを開き空を見上げた。  
雅和と出合つた日と同じ夜空が目の前に広がつていた。

「さつきのおねだりは冗談なんかじゃない

・・会いたいなんて言つから

あの夏の日と回じ心音がドクドクと高鳴り遠い昔が甦つていた。  
佐知は自分の体を思わず両手で抱きしめた。

「愛する美香さんでいっぱいせして飛んで会いに行きたいなんて  
心惑わす言葉なんて聞きたくない、心無い言葉なんか紙ぐずと一緒に  
今夜、眠れないの雅和のせい、雅和のバカ」

## 77 再会

SIGNPOSTのママ・田鶴子は、美香の父に会つため準備を進めていた。

佐々木の娘・美香の使いの者と名乗り面会を申し込んでいた。

「突然で申し訳ございませんが

本日より2日間休業させていただきます」

数日後SIGNPOSTには臨時休業の張り紙が貼つてあった。

東京駅に降り立った田鶴子は

不慣れな電車には乗らずタクシー乗り場へと向った。

メモした住所を無言で運転手に差し出すとタクシーは田鶴子を目的地までなんなく運んでくれた。

約束の時間にはまだ時間があつたが  
ホテルと見間違つような建物にしづしづ入つていった。

受付で佐々木悟朗の娘の使いと伝えると  
受付嬢はすんなり部屋まで案内してくれた。

「佐々木様、お約束のお客様をお連れ致しました

お通じじともゆきじこじょつか

力チャ・・と鍵の開錠された音がした。

受付嬢は田鶴子を部屋に入るよう促しその場を離れた。

リビングにガウン姿の男性が見えた。

田鶴子の自宅がすっぽり収まるリビングに驚きを隠せなかつた。

男性に少年だった兄の面影はなく田鶴子は恐る恐る歩み寄つた。

「はじめてお目にかかります沢村と申します。  
突然なにお時間をとつて頂きありがとうございます」

「失礼ですが娘とあなたは歳が親子ほど離れている  
美香とはどんな関係で」

「美香さんと井川君は私のお客様で  
あつ、申し遅れましたが私は小さな喫茶店を営んでいます

それで親しくさせて頂いています

「さよひですか

それでは本題に入りましょう

あなたが言付かった娘の伝言を聞きましょうか

「実は私は美香さんの使いの者ではありません  
そう言わなければ会つては頂けないと思いましたので  
嘘をつきました すみません」

「何ゆえ・・嘘までついて

「佐々木様に私の話を聞いていただいて  
どうしても確認したいことがあります  
お願ひします どうか私の話を聞いてください」

「偶然の出会いなどこの世にはないと誰かが言つていたな  
あなたと出合つた事も必然と受け止め話しを伺いましょう」

「ありがとうございます

私がこれから話すことが間違っていたりお許しください

佐々木様のお父様は佐々木剛とこう呼んでいたが以前では・・・  
母の名は静子、違いますか？」

「君は私の素性を調べたのか」

「あなたには妹がいたはずです  
覚えていらっしゃいますか」

「ああ、たしかに妹はいる  
いや、いたと言つたほうが正しいだろう」

「佐々木様のお母様はまだ幼い妹を連れて家を出た  
あなたは妹と離れ離れになつた」

「・・・君はいったい 何か魂胆でも」

「魂胆なんて・・なにもありません

私の話をもう少しだけ聞いてください お願ひします

物心ついた私はずっと母と一人の生活でした

母は父と別れ、私は父を知らず育ちました

私が中学生になつた頃でした

年の離れた悟朗という兄の存在を知つたのは・・

母から兄の自慢話ばかり聞かされました

どこから聞いてくるのか不思議でしたが

悟朗兄さんはお役所に勤める立派な大人に成長したと

それは嬉しそうに話していました」

「待つてくれ・・

君はもしかして・・田鶴子なのか

「はい、佐々木田鶴子です

現在は母の姓、沢村田鶴子です」

「君が田鶴子・・

母が家を出て行つた時のことは今も覚えている  
涙をためた母は最後の日、妹をこの手に抱かせてくれた

悟朗、お母さんと田鶴子ちゃんを忘れないで  
お母さんも田鶴子も悟朗を忘れないからね

そう言い残して母は去つていった

あの時の母に背負われていた妹が・・君

「間違いなかつた　あなたが悟朗兄さんなんですね

まさかお兄さんの子供が美香さんだつたなんて

私は美香さんと出会えてなかつたら

お兄さんとの切れた絆を結べぬまま人生を終えていたわ

「美香がまたひとつ私に贈り物を運んでくれた

再会など諦めていた妹・田鶴子、君に会わせてくれた

「今、お兄さんはおひとりと聞きましたが

母が亡くなつてから私もずっとひとりで生きてきました

母の介護、お店の切り盛りをしていくつたり

婚期も逃してしまつて・・

「随分、苦労したようだな  
困ったことがあつたらこからは私が助けるから  
遠慮しないで甘えてほしい」

「お兄さん、心配しないでください  
母がマンションとお店を残してくれましたし  
田玉が飛出するような贅沢を望まなければ  
一人で食べてゆくには十分過ぎる生活をしていますから」

「そうか、なら安心した

ところで入院している美香の様子だが  
何か聞いているなら教えてくれないか」

「お聞きになつていて思いますが  
美香さんは懸命に病氣と戦っていますよ」

「美香は病氣なのか・・わかるようだて説明してくれ

「お兄さんは何も聞いていないのですか？」

「井川君からは美香の体の事は聞いていない妊娠のことは聞いたがそれ以外は…」

「美香さんは脳に腫瘍が見つかって…  
その腫瘍のある場所が問題で、難しい病症です」

「美香が脳腫瘍…」

「お兄さん、これ美香さんが私に書いてくれた手紙です  
どうぞ手に取ってください」

「私が読んでもいいのか?」

「ええ、読んでもらいたくて持つてきました  
ですから、どうぞ」

差し出された手紙を受け取った悟朗は胸に下げた眼鏡を手にした。

娘・美香の手紙を読んでいた悟朗が突然、眼鏡をはずした。

「お兄さん、どうかしましたか」

「いや、何だか今日は疲れているようだ  
文字が歪んで見える・・  
悪いが田鶴子、声を出して読んでくれないか」

「わかりました 読みますね」

突然のお手紙に驚いているでしょうね。

私は一度お店に伺った木内美香と申します。

ママに病院に行きなさいと忠告して頂いた者といえば  
思い出してもられるでしょうか。

あの日、私は偶然にも病院勤務の知人を訪ねようとしていました。  
そして訪ねていった病院で倒れ入院、今も療養中です。

先日、手帳を見ていたらママから頂いた名刺を見つけ

初めて会った私の体を心配してくれたママへ  
お礼を伝えなければと思ったのです。

ママの言つたとおり、私の体は病魔に蝕まれていました。  
忠告、ありがとうございました。

私はいま病氣よりも心の葛藤に苦しんでいます。

ママならきっとわかつてくれる・・

そう思つたら急に懐かしくなつてママが恋しくなりました。

私は母子家庭で育ちました。

母は亡くなり1人で暮らしています。

でも幸いなことに愛する人にめぐり合ひ私は幸せです。

最近、ふたつの嬉しいことが起つりました。

一つは諦めるように言われたお腹の子を産んでもいいと  
ドクターからお許しが出たこと

もう一つはその赤ちゃんをまだ見ぬ父に抱いてほしいといつ願いが  
叶いそうだということです。

私は不倫の子で父の顔を知らず育ちました。

母に聞かされた話しへは父は省庁に勤める佐々木悟朗という人。

子供を宿した私の父への思いは膨らむばかりでした。

そんな私のために彼が必死で父を探し出してくれたのです。

彼が見た父の印象はとても好印象だったようです。

私は元気な赤ちゃんを早く父に抱かせてあげたいと胸躍らせまし

た。

奥さんを「くした父は病身の身で1人ケアマンションに住んでいました。

出来れば父と愛する人と生まれ来る子供と共に暮らしたい・・・

でも残念ながら私は子供の成長を見届けられないでしじう。長くは生きられないと思つています。

命よりも子供を産むことに賭けた私に彼は断固反対し続けました。命を賭けて産む私の気持ちは彼に伝わりませんでした。

私が助かることは＝お腹の子供の死を意味するのです。

私の死を受け入れられない彼が  
子供の死をどのように受け入れられるのか

私の命をおもんばかる様に

子供の命を同じように考えてくれたのだろうか

彼と私の間にはお腹の子の思いに大きな隔たりがありました。

子供を産むことに理解出来ないと書いていた彼が同意したのは私が取り乱して泣きじやくる姿をもう見たくないから・・・  
彼は私たちの赤ちゃんの誕生を心から喜んではいないのです。

死を口にすると彼の顔は見る見る悲しみ色に染まります。

本当は子供より私の命を優先させたい彼のジレンマが伝わってきます。

そんな彼を見るのが嫌で・・・つらくて

いつのまにか私は口を噤んで感情を隠し続けてしまったのです。

死を現実のものとして受け止め、その死と向き合つ恐れ、不安、絶望、苦しみ

その悲しみのたけを私はどこにぶつければいいのでしょうか

手で口を覆い泣きむせんでくる私を知っているのは闇夜の星だけ。

「田鶴子・・・少し休憩しよう」

「手紙はもう少しで終わりますから読んでしまいましょう」

「いや、美香の気持ちが胸を突き刺し・・・たまらんのだ  
落ち着いてからまた読んで聞かせてくれ」

「わかりました

ちょうど持ってきた美味しい紅茶がありますから  
お土産に買つてきた焼き菓子でティータイムにしましゃうか」

オーディオのつモコンを押した悟朗は眼を閉じた。

ジャズのピアノの音色が時計の秒針と相まって切なく耳に響いていた。

## 79 再会？

閉じた瞼を開けた佐々木はテーブルの手紙を手にすると田鶴子に手渡した。

「続きを読むね」

一番信頼し愛する彼の前で心を偽るのがつらくてもつ限界・・体よりも心が先に負けてしまいそう

弱気じや病気に勝てないと勇気付ける彼の気持ちがわからないわけじやない、十分理解し感謝しています。

でも強い人はみんな弱音を吐かないの  
弱音を吐くのは、私が弱いからですか

泣きわめき感情を爆発させたくても我慢すれば強くなれるのですか

私は強くない、だから弱音だつて吐くし感情も抑えられない

それを否定されたら私は頑張れない  
もうこれ以上頑張れない・・・

怒つたり、泣いたり、困らせたり

そんな自分を擁護できるのは心許せる彼じゃなければ嘘

彼であつてほしいと思つてゐるの」・・

彼の前で私は精一杯の笑顔をつくつてしまつ

まるで道化師ピエロのよつて悲しみさえも笑顔に変え

笑つてゐる・・

ママ、めんない

一度会つただけなのにこんな手紙を送るなんておかしいですね

でも今、一番の理解者はママのよつな気がして  
だかうにあつのままを曝け出せた・・

なんだかすっかり心が軽くなつて

嫌いだつた病室の空氣さえ美味しく感じられます。

お父さんにも会いたかつたよつてママにも会いたい。  
どうしてなのか自分でも不思議です。

「迷惑でなければまたお便りをさせて下せ。」

木内美香

「これで全部、おしまいです」

「ありがと、美香がこまびらあれ  
美香のことがわかつてよかつた」

「そう書いて頂くと手紙をお持ちしたかいが  
でも・・かえって心労をおかけしてしまったのでは」

「そんな心配はしないでもいい  
美香に会うのは体力をつけてからと思つていたが  
そんな流暢に構えてはいられない」

「お兄ちゃんやえよければ、近いうちに会って行きませんか  
私が付き添います　お店を休んでお迎えにきます」

「そうだな、一刻も早く会いに行こうつ  
悪いが迎えに来てもらえるか、田鶴子」

「ええ、任せてくれやー」

「田鶴子にとつて美香は姪にあたるのか  
あれほど美香が君に親近感をもつのも頷けるな」

「私も初めて会った時、美香さんには  
何か・・えにしのようないものを感じました」

「人生は生まれ死にゆく繰り返しだ

人類が皆・・きつとどこかで繋がっていたのだろう  
と考えれば・・

人と人とのがいがみ合い、憎み合い、戦うなどあつてはならない」

「そうですね

唯一、人は慈悲の心を持つ生き物ですもの

争いのない愛に満ちた世界にしないと  
子供たちに健全な未来はつなげないわ

戦争の語り部はもうみんな高齢で今は戦争を知らない人が大半です

でも私たちはけつして悲惨な戦争を忘れてはいけない

戦争そしてその時代を生きた先人達を忘れてはいけないのよ

生涯伝えていくことが平和に繋がると信じているわ

戦争で奪われた多くの命の代償が現在の平和なら

この幸せを未来永劫にしなければ尊い命が報われないでしょ

「先人のはるか想像をこえた日本は豊かになつた  
しかし豊かさは人の心を蝕んでも来た  
ここにきて人々は本当の豊かさ・大切なものに気づき始めている  
気づきこそが大切な一步・・そこからまた始まればいい」

「話しが・・ずい分反れてしましましたね

私とお兄さんも今日から始めの一歩を踏み出すのですね」

「やつ踏み出しちゃるよ」

「これからはお兄さんと姪の美香ちゃんと一緒  
私は独りじゃない・・なんだか夢を見ているみたい」

「頑張ってきた」褒美、天からの贈り物だらう  
人生まつすぐ生きてさえいれば報われる時が必ずくる  
遅ればせながらやつてきた感謝してもしきくせない贈り物だ」

「今まで流してきた涙は無駄ではなかつたのですね」

「無駄なものなどこの世にはひとつもないんだよ  
今はわからなくてもいつかその意味に気づかされる  
長く生きているとそれが分かつてくる」

「離れ離れだつた長い歳月にも意味があつた  
その意味に気づく日がくる・・必ず  
そうですよね、お兄さん」

切れた絆を取り戻し孤独から開放された安堵感が  
二人の穏やかな顔に浮かび上がって見えた。

手紙を見てしまった雅和とそれを知らない美香二人はいつもどなにも変わらぬ週末を過ごしていた。

いや、変わったことが一つあった。

佐知と会話した翌日、病室を訪れた雅和は顔を見るやいなや、胸に美香を抱きしめた。

突然のことに硬直させた美香だったが身も心も蕩けてゆく思いだつた。

孤独・恐れ・嘆き・

今までの不穏な思いが徐々に葬られていくようだつた。

心の曇は去り一瞬にして美香の心に青空が戻ってきた。

月初めの週末、雅和はイタリアンの店を予約していた。

予約席に案内され雅和は待ち合わせの相手を待っていた。

この店はSIGN POST同様、一人で利用した懐かしい場所だった。

土壁の店内はほんのりとした温かみのある明かりでライトアップされ

大小のさまざまな部屋が点在していた。

テーブル席だけの昔を思い出し店内を見渡していた。

「井川君、待たせて」「めんなさいね」

店員に案内され遅つて来たワンピース姿の佐知は昔を彷彿させた。

「井川君、いがわくん」

昔を思わせる佐知の容貌に雅和は目を離せなかつた。  
まるで過去から舞い戻つた恋人を見ているようだつた。

「あっ、ごめん  
佐知のワンピース姿、久しぶりだから見とれちやつて  
似合つよ、ものす」「く似合つてる」

「そんなに見つめないで、  
恥ずかしくて井川君の顔が見られない」

「そういう佐知が俺は可愛くてたまらなかつたんだよな」

佐知は揺れ動く気持ちをぐつと抑えていた。

「久しぶりのご招待だからおめかししてきたの  
井川君に警めていただけて光栄だわ」

「今夜は遠慮しないで食べてくれ」

「値段を気にしながら食べたあの頃が懐かしいわ  
初めてこのお店に来た時のこと覚えている?  
俺がご馳走すると言つてメニュー表を見た途端  
今日は割り勘してくれ、頼むつて」

「勘弁してよ、今の俺はあの時とは違つよ

割り勘なんていわないから今日は俺に任せてくれ」

「ではお言葉に甘えて

トロサーモンごくら添え、生ハムとアスパラガスのマリネ  
牛ヒレ肉のきのこ添え、ピィツアマルゲリータ、飲み物は杏露酒で  
デザートにバニラアイスのワッフル添えでお願いします」

「メニューも見ないでそんなによく並べたてられるな？」

「覚えていないの・・ぜんぶ昔一人で食べたメニューよ」

「この店で食べたものまで覚えているのか  
女って重箱の隅を突くように何でも思い出にするんだな」

「女は食べるの大好きだから覚えているのよ  
井川君、早く注文しましょ」

「よし、俺はまずはビールだな

それから佐知の食べたいものをメニューから探して・・・

部屋に備え付けのインターホンでオーダーを済ますと  
二人の話は美香の話題になつた。

「あれから美香さんの様子は?」

「佐知に美香さんをただ黙つて抱きしめろつて言われて  
俺、美香さんをしつかりこの胸に抱いたよ  
そしたら美香さん、何か吹っ切れたように入が変わった  
俺を見る目が優しくなつた気がする」

「なら、もう大丈夫だわ」

「佐知にはいつも心配かけてばかりで悪いな」

「どういたしまして、

「いつもして」駆走してもらえるなら私は大歓迎よ

「いつも君は・・俺に優しいんだな

「井川君にじやなくて誰にでも、の間違いでしょ

「佐知はみんなに優しい、これでいいのかな

「それなら花まるつけてあげる」

「佐知との食事は楽しいな 昔と同じだ

店を出た二人は街路灯に照らされ肩を並べ歩いていた。

「今日は」駆走様でした

久しぶりのイタリアン、美味しかった

美味しいもの食べたあとで幸せな気分になるから不思議  
御伽噺のお姫様になつたみたい

「なら今日の君は白雪姫、シンデレラ

夢見る獣ナガの復活だな

「いやだわ、夢見る獣ナガんは  
初めて会つたとき私が言つた言葉ね」

「……」

「井川君、どうかした」

「あの日もいろんな夜だつたよね  
俺と君が出会つたあの夜と同じ今夜もきれいな星空だな」

「……」

「君は別れになお俺を支えてくれる

俺はそんな佐知が好きだよ、今も俺は・・・」

「やめて、あゝ、あのね井川君、  
深い意味はないのはわかっているのよ  
でも軽々しく好きなんて口にしてはいけないと黙つの

「なにか気にやわった」

「電話で話したあの時も井川君、言つたわ  
好きだ・会いたいって」

「ああ言つた でもそれが?」

「友達同士でも口にする言葉だけど私は井川君の昔の彼女  
一度は愛し合つた仲なのよ だからわかるでしょ」

「・・・」

「私はもう井川君の恋人じゃない  
井川君がいま愛しているのは美香さん  
だから簡単に好きとか会いたいなんて言つてほしくないの」

「深く考えないで・・・ごめん」

「井川君と別れてから誰ともお付き合いしてないから  
私、まだ昔を引きずつているのかもしね  
だから好きとか会いたいなんて子供でも口にする言葉に  
過敏に反応して切なくなつてしまふんだわ」

「俺は君の気持ちに答えられないと言こながら・・・すまない」

「井川君に素顔を見せたのはきっと今夜のお酒のせいね  
私の方こそ」「めんなさい  
さつきの言葉は聞かなかつた事にして、お願ひ  
そうでないと私、井川君とは顔を合わせられない」

「こんなことで氣まずくなるのは止めよう  
これまでのようになに俺と美香さんの側にいてくれ」

「邪魔だつて言われても離れたりはしないから心配しないで」

「安心した だつたらまた食事に誘つてもいいんだね」

「次回は遠慮しないで」駆走になります」

「今日は遠慮したつていつのか  
結構の量飲んで食べただるつ

「まだまだお腹に入るわよ  
締めにラーメン食べて帰るつか

「止めてくれよ 急に胸がムカついてきた・気持ち悪い」

「大丈夫、本当に気持ちが悪いの？」

急いで帰りましょう 食べすぎなら一晩寝れば治まるわ

思わず雅和の手を取り佐知は走り出した。

乱れた呼吸が眠った心を振り起こしていた。

男と女の感情など胸の奥底に封じ込め消し去つたはずなのにまだ愛は残っていた。

そして佐知はその愛の火種を必死に守りしおえていた。

まだ愛してる・・ア・イ・シ・テ・ル・・あ・い・し・て・る  
今もつてまだ燻ぶり続ける思いに佐知は胸を焦がしていた。

## 8.1 素顔をみせて？

SIGN POSTのママ・田鶴子は  
いくらまでも連絡のない兄・悟朗を案じていた。

今朝の田鶴子は早朝から妙な胸騒ぎを覚えていた。

兄の世話係り・須藤からお店に電話が入ったのはその日の夕刻だ  
った。

須藤からの電話は兄の急変を知らせるものだった。

「私、須藤と申します

沢村田鶴子さんですね」

「須藤さん、いつも兄がお世話になつております

先だつては失礼致しました」

「・・今朝、佐々木様が倒れられて病院に搬送されました」

「兄が、それで兄の様態は」

「主治医の見立てでは心筋梗塞ではと・・  
でもご心配いりません 今は落ち着いていらっしゃいます  
取り急ぎお伝えしなければと思いお電話致しました」

「ありがとうございます 私、明朝の電車でそちら伺います  
入院先をこの番号のファックスに流していただけますか」

「田鶴子さんに来ていただけたら佐々木様も心強いでしょう  
電話を切りましたら地図と住所をお送りします  
では失礼致します」

お客が途切れると田鶴子は慌しく店を閉め自宅に走り戻った。

時計を見上げた田鶴子は肩を落とした。

「最終はだめか・・やつぱり今日は無理ね」

子機をとり田鶴子は雅和の番号に指をかけた。

「井川君、沢村田鶴子です」

「ママ、お久しぶり~」

「井川君、あにが、アツ、ちがう・・  
あの・実はね・・  
あついめんなさいね、ちょっと喉の具合がおかしくて」

「ママ、大丈夫」

「ええ、ありがとう もう平気よ  
今日電話したのはね、美香さんのお父さんのことなの  
井川君、美香さんのお父さんが入院したこと耳にしてる?」

「お父さんが入院したって、それ本当なんですか  
元気に笑っていたお父さんがまさか」

「その様子じや、知らなかつたのね」

「でも入院の事どうしてママが?いつたいじいで誰かひ

「・・・」「めんなさい  
誰か来たみたいなの、電話切るわね」

来客なんて嘘だ・・雅和は一方的に電話を切ったママの嘘を見破  
つていた。

今夜のママ、明らかにおかしい  
あに・・つて言いかけてママは言葉で詰まつた  
あ・に・・つて何なんだ?

確かにママは口に仕掛けた言葉を打ち消した

翌朝、解せぬまま眠りについた雅和の手にはボストンバッグが握られていた。

事務所の手塚に休暇届けの許可をもらい雅和は電車に飛び乗っていた。

ケアマンショノロビーの一角に上京した雅和の姿があった。  
背筋を伸ばしソファーに腰をかけた須藤は今日も変わらずダンディだつた。

「佐々木様が倒れたのは昨日の早朝でした  
緊急ブザーが鳴り急いで部屋に駆けつけると  
佐々木様はベッドに伏して苦しんでいました  
それで慌てて救急車を呼び  
主治医の大学病院に運んでもらった次第です」

「それでいまは？」

「今朝、お顔を見てきましたがいいお顔をされていました  
看護士も落ちついているので心配ないと言ってくれましたから  
安心ぐだわ」

「ところで須藤さんは今回のことを誰かに話しましたか？」

「はい、親族の方に伝えましたががなにか」

「親族・・確かに身内はもう誰もいないと聞いていますが」

「佐々木様に親族がおいでになるのを知ったのは『ごく最近です  
いつだつたか美香さんの使いの者と名乗る女性から再三の電話が  
あつて

佐々木様はその方とお会いになりました

その女性が帰られるとき佐々木様は珍しく車椅子でロビーに  
降りてこられその時に紹介されたのが妹の沢村田鶴子さん  
私が入院の連絡をさし上げた人です」

「・・・・・」

SIGN POSTのママ・沢村田鶴子が妹・  
雅和に意識が遠のく驚きが走った。

「井川さんは佐々木様の入院を誰からお聞きになつたのですか」

「昨日、沢村さんから電話をもらいました」

「やはりそうでしたか

佐々木様の妹さんなら叔母さんでもあるわけですから  
お嬢さん、美香さんに『云わると困つて』いました」

「須藤さん、病院を教えてください」

美香さんのお父さんとSHIGENPOSTのママが兄妹  
ママは美香さんの伯母で美香さんはママの姪  
一人は伯母と姪の関係・・混乱した頭を搔き鳴りながら雅和は走  
り出していた。

## 82 素顔をみせて？

「足先に上京した田鶴子は眠る兄の傍らで回復を祈り続けていた。

トン、トン・・・トントン・・

途切れないノック音に田鶴子は力なくドアに歩み寄つて行つた。

「井川君」

「ママも・・

「・・・・・・

「病院に来る前に須藤さんに会つてきました  
美香さんのお父さんとママは

「待つて、場所を変えましょう

談話室に腰をかけた二人はしばらく無言のままだった。

「須藤さんから聞いて知つてゐるでしょうけど

私と佐々木は兄と妹・・隠すつもりはなかったのよ

兄と再会した日、私と兄は美香さんを見舞う約束を交わしたわ  
美香さんはそのときには話そつと思つていた矢先の知らせでしょ  
気がつけば一睡もせず始発に飛び乗つっていた」

「美香さんにはお父さんの入院を知らせていません  
伝えるのはまずお父さんに会つてからそう思つて  
俺も居ても立つてもいられず電車に飛び乗つっていました」

「井川君ありがとう、兄に成り代わりお礼を言わせて」

「それで、お父さんは」

「告げられた病名は心筋梗塞だったわ  
手術をしなければいけないみたいなの  
手術といつても今は切らずに腕から管を入れて治療するから  
術後の回復は早いらしいわ

でも主治医には他に気になる箇所があるみたいで  
手術の前に詳しい検査をしましようつて  
何だか私にはそっちの方が気になつて落ち着かないの

「結果が出るまで心配ですね

お父さんが入院したこと俺、やつぱり

美香さんには黙つていよいよと思ひます

俺、どこまで隠し続けられるかわからないけど  
嘘や隠し事はいやだけどその方がいいと・・・

「決めたのなら最後まで通さないとね、井川君」

「そう言われると・・・気が重いなあ」

「それだから井川君は美香さんを不安がらせるのね  
確かに嘘や偽りはいけない悪いことだと教えられたわ  
でも世の中にはその嘘や偽りが善に形を変え許される時があると  
思いたいの」

「つそ偽りと善を結びつけるのはどうかな」

「世の中のすべての人にそれを当てはめてはいけないわ  
嘘、偽りが善となり許されるのは生死の狭間で懸命に命と向き合  
つている人  
そして側で共に戦っている人だけに与えられるもの

それなら許されるような気がするでしょ

美香さんにつけ井川君の嘘・偽りは『えられてしかるべき許され  
ること

愛する人を守りたいなら口を噤んで・・・突き通しなさい、それも

みの變

井川君は美齋さから田を逸げようとなく  
いつなごどきも堂々と胸を張つてひらしね  
「

「・・はー」

泊まる覚悟での上京だったが雅和はママに帰宅を強く促され病院  
を後にしてた。

### 83 素顔をみせて?

何も知らない美香は大きく膨らんだお腹を撫で母親の顔を見せていた。

すでに定期に入っていたが爆弾を抱える美香の体は常に危険と隣り合わせで  
予断の許さない状態は変わらなかつた。

「最近はベットから移動するのも一苦労なのよね」

「ゆっくりでいいから無理するな  
つらかったら俺が抱っこして移動してやるから」

「それじゃ私が赤ちゃんだわ」

「美香さんの唯一の欠点は甘えなので我慢しそう」と

「看護士さんにも言われたわ  
病院にいるときはありがとうなんて頭下げなくていい  
大きな顔して私たちに甘えなさいって」

「 もういいえ・・ありがとうは美香さんの口癖だよね

「えつ、 もう?

なら亡くなつた母親と一緒にだわ 親子だから似てきりやうのかな  
最近、鏡の中の自分が母と重なつて見えるときがあるもの

「お母さんを俺は知らないけど美香さんに似ているな  
気丈で凛とした美人だつたんだるうな」

「あらがとう

誉めてもうりつてお母さんもきつと喜んでいるわ  
ねえ雅和、最近何か心境の変化でもあつた?」

「俺、 变つた?」

「大人びたつていうか、 とても頼もしくなつたような・・私が変な  
のかしら」

「私が变つて、 それはないだろつ

頼もしくなつたような・じゃなく、 なつたつて言つてほしいな

「 そうね、 ごめんなさい

頼もしくなつてますます惚れ直したわ

雅和はどんどん私を追い越して成長している

「なんだよそれ 以前の俺ってそんなに頼りなかつた?」

「昔の事は聞かないの  
大切なのは今、過去は振り返らない  
そうじやないと前には進めないのよ」

「過ぎたことに囚われちゃいけないな  
俺と美香さんに大切なのは現在と未来なんだから」

雅和は気づいていた。

揺らぎない気持ちで素顔のまま美香と接する自分に。

愛する美香を守ろうとする嘘・偽りはすでに善と化していた。

ママと同じことを言つた佐知の言葉を思い出した。

「美香ちゃんのためにつべ嘘は愛・苦しきもそれを隠し続けるのも  
愛」

雅和は美香への愛を自答していた。

絆を深める和やかな二人とは対照的に橘チームは何やら深刻な顔を突き合わせていた。

「 早期に子供を取り上げましょ、」

「 手の施しようがないなら、子供だけでも」

美香の腫瘍の中に出血が見つかり事態は緊急を要していた。

## 84 わなならの予感

同期で勤務に就いた看護師から美香の病状を耳にした佐知は元気をなくし青白い顔で受付に立っていた。

「そこのお嬢さん、顔色悪いけど大丈夫ですか」

「やだわ、驚かさないでよ  
誰かと思つたら井川君じゃないの」

「そんなに驚くか〜」

「だつて今日は金曜日よ  
居るはずのない人が立つてゐんだもの驚くわ

「岐阜に出張だつたんだ  
仕事が予定より早く終わつたから事務所には戻らず  
週末までこいつに居ることにしたんだ」

「美香さんも驚くわよ  
早く病室に行つて顔を見せてあげて」

「ああ、そうするよ

あつ、忘れるところだつた これ又みんなで食べてくれ  
岐阜名物の栗きんとん、美味しいらしいよ」

「ありがとう 喜んで頂くわ」

笑顔で手を振り病室に向う雅和に佐知の思いは複雑だった。

「雅和が美香さんの危険な病状を知つたら」

眉間に皺を作る険しい顔の雅和を想像するだけで寒気が走つた。

佐知の顔から笑顔は消え引きつるその顔は今にも泣き出しそうだ  
つた。

患者を呼ぶ声も氣のせいか今日は震えて聞こえた。

仕事を終えた佐知はあのホットケーキを食べれば気持ちが晴れる  
そんな気がしてSIGNPOSTに寄り道を決めていた。

SIGNPOSTに張られた休業の文字に肩を落とした佐知は  
おもむろに電話をかけはじめた。

「井川君、いま話せる?」

「平気だよ 仕事、終わったのか?」

「うん・・・」

「どうした何かあつたのか、  
顔色悪かつたから心配してたんだ」

「体は何ともないんだけど

いま私ね、SIGN POSTの前にいるの

「佐知が一人でSIGN POSTに行くなんて  
やつぱり病院でなんかあつたんだろう」

「なんにもないってば・・

そんなことよりお店が閉まつているの  
しばらく休業いたしますって張り紙がしてあって・・  
ママは月一の定休日以外今まで休んだ事なかつたでしょ  
だから気になつて」

「まだ閉まつたままなのか」

「井川君は知つていたの」

「ああ・・それより今からどこかで会わないか  
憂さ晴らしの相手なら俺はもつてこいだろ」

「ご免なさい 今日は疲れたからここのまま帰るわ  
井川君のその気持ちだけで十分癒されたわ」

「暗くなってきたから気をつける、遠回りでも大通りを歩くんだ  
いつもの近道は今日は絶対にするんじゃないぞ、ひとつは危険だ」

「ありがとう、大通りを帰るから心配しないで」

電話を切った雅和は一人帰る佐知を心配しながら  
「容態は落ちついているから2・3日したら一旦戻るつもりよ  
そう言っていたママが未だ帰らない事に不安を募らせていた。

## 85 れなんなりの予感？

あれから田鶴子は兄の傍に付き添い続けていた。

毎日顔を見せる須藤の強い勧めもあって田鶴子はホテルを出て兄のケアマンションから病院に通う日々を送っていた。

その後の検査結果に異状は見つからず

佐々木は起きて会話が出来るまでになっていた。

「田鶴子、もう心配いらぬから帰りなさい」

「今週いっぱい、居わせてください  
しっかりお兄さんと過ごせる時間をもらいたんですね  
もう少しだけ、いいでしょお兄さん」

「いい歳をしてまるで子供のようだな」

田鶴子を見つめる佐々木のその顔は兄の顔だった。

「なあ田鶴子、頼みがある」

「なんですか」

「田鶴子、君にすべてを託そうと思つてゐる  
万が一、僕に何が起きても須藤君に聞けば困らないようにしてあ  
る」

「止めてください、こんな時に不謹慎だわ」

「君が帰つてからではいつ又話せるかわからない  
美香のことも・・  
美香を悲しませることだけは避けたいが  
今となつては美香との再会を果たせるかどうか」

「お兄さんがそんなことを言つてどうするの  
美香ちゃんにとっては最初で最後のお願いなのよ  
父親なら子供の願いをなんとしても叶えるべきでしょ」

「美香の願いを叶えようと、どんなにもがいた所で  
私に残された時間が・・せめて少しだけでも若かつたらな  
何れにしろ、美香の希望の火を消してはならないのはわかつて  
だから田鶴子、君に・・  
私の妹だからこそ信じてすべてを託す」の気持ちをくんでくれ

黙りこむ田鶴子の手を握り、佐々木は頭を下げ続けた。  
そしてこれが元気な兄・悟朗と交わした最後の会話をだつた。

再び発作を起こした佐々木はそのまま帰らぬ人となつた。

思い起こせばあの日の兄は珍しく饒舌だつた。

昔話を嫌いあまり口にしなかつた兄だつたがあの日は遠い昔を懐かしんで笑つていた。

黄泉の国に召される人には走馬灯のように昔が甦るというが佐々木にもそれが見えていたのだろうか

故人の希望通りマンションの小ホールで葬儀は執り行われ荼毘に付された。

佐々木が心許したスタッフと住人数名の寂しい葬儀だつたが涙する参列者の誰もが遺影の前では涙をこらえ微笑を返していた。

佐々木の人柄を知るものだけのそれは温かい葬儀だつた。

田鶴子は思い悩んだ末、とうとう佐々木の死を雅和に告げなかつた。

入院ならまだしも、死となれば・・

まして愛する人の父親の死・・それを冷静に受け止められるわけがない

まだ若すぎる・・彼には重すぎる  
兄の死は私が美香さんに会つて告げなければ

田鶴子を見送る須藤の胸に佐々木のお骨が抱かれていた。

「田鶴子さんにはすべて承諾いただきありがとうございました  
これで佐々木様も御安心なされたでしょう」

佐々木の預金の半分に近い金額はさまざまな団体に寄付された。

「須藤さん、お世話になりました  
失礼かと思いますがこれをマンションの維持にお役立てください  
そして一部を兄のために使って頂けないでしょうか」

「佐々木様のためとは」

「この敷地のどこかに桜の木を植えてほしいのです  
兄はここが大好きでした  
そしてここにいる人が大好きでした  
須藤さんもその大好きなひとりでした

兄にとつて此処は最後の楽園だつたに違いありません

だから此処に兄が存在した証になにか残せないかと・  
ごめんなさい、無理を承知でお話しています

極寒の冬を忍ぶ人は春の訪れを今か今かと待ち焦がれ  
桜の開花に凍えた身も心は嘘のように溶かされてゆく  
兄は私にとつてそんな桜の木でした

人は悲しい過去を削除しないとうまく生きてゆけません  
だから悲しみはいつしか薄れ忘れ去られてゆく

ここに植える桜の木は兄のいた証  
春が来て桜花を目にしたとき凍りついた人々の心にもきっと春が  
訪れる  
そんな思いをこめて桜の木を植樹してほしいのです

「ありがとうございます」

「希望に沿うよう、尽力させていただきます」

丁重に断る田鶴子を半ば強引に車に乗せた須藤は駅のホームまで  
見送ってくれた。

お骨は須藤が責任を持って檀家の寺に納める手筈になっていた。  
深く頭を下げたまま顔を上げなかつた須藤の姿が悲しみを誘つた。

自宅の戻つた田鶴子は窓を開け放し母の写真の隣に兄の写真を並  
べた。

付き添つていた時に看護士にお願いして撮つてもらつた写真だつ  
た。

兄と妹が肩を寄せ仲良く微笑んでいた。

涙に暮れながらも田鶴子にはやらなければならないことがあった。今は「お母の言葉を思い出していた。

「田鶴子、私たち親子はお店とお客様に支えられて生きてこられただから密におかけする迷惑は最小限にしないとダメ

私の介護は一の次でいいからお店をしつかり守つて頂戴

私が死んだ後は、葬儀がすんだらすぐお店を開けなさいね  
そしていつもどおり笑うのよ、あなたの笑顔は不思議と心を和ませてくれる

お母さんはあなたのその笑顔にどれほど助けられたことか

だから田鶴子、どんなに悲しかるのもお店に立ちなさい  
独りになつても笑つてお店に出るつて約束してくれわね」

田鶴子は明朝からお店を再会することに決めた。

それとは別にやらなければならぬことがもう一つあった。

兄の死を病床の美香にどう告げたらよいのか田鶴子は思案していた。

翌日カウンターに立ち笑顔を振りまく田鶴子の姿があつた。

「ママ、すいぶん長じ」無沙汰だつたなあ

「」迷惑お掛けしましたが、又よろしくお願ひします

「こんなに休んだのつて、はじめてじゃない?  
ママにはいい骨休めになつたかもしれないけど  
私たちは止まり木を無くした鳥みたいだつたわ」

「本当にごめんなさいね

お詫びに今日の珈琲一杯田舎無料させていただくわ

「おお～太つ腹だね」

「そのかわりみんな最低一杯は飲んでから帰つてよ」

「相変わらずママは商売上手だねえ」

「ねえママ、さつきから氣になつてるんだけど  
後ろの棚に飾つてある写真の人だ~れ?  
おやがママのいい人じゃないでしょうね」

「」さんなおばさんに、いい人なんていやだわ

「だつて[写]眞のママと男性、ものすゞへ幸せそつなんだもの」

「一緒に男性は私の兄 亡くなつたお兄さんとよ

「ママが着ている服に見覚えあるから最近撮つた[写]眞ね  
もしかしてママが休んでいたのは」

「詮索は止めこましょ

「ここで人の陰口や噂話には」法度よ  
私がそれを一番に嫌うことを忘れたのかしら」

「そうでした・・」の話は終わり～」

「危なかつたな、下手したらお前も出入り禁止になつてたぞ  
だからいつも言つっているだろ、人の話に首突つ込むなつて

「それとあなたの話は別でしょ

「あなたを詮索するのは妻の役田なんだから許されるのよ」

「ハイハイ、夫婦喧嘩の続きは家に帰つたからにして  
さあ、珈琲のおかわりをどうぞ

一杯目はただにはならないってみんな覚えてる?  
しっかりお代を頂戴しますから忘れないでよ

「ママにはかなわないわ~」

久しぶりに湧き上がる常連客の笑い声と笑顔にて田鶴子は癒された。  
久しづつにいた。

談笑に花咲かせるお客様をして写真の兄を見つめていた。  
写真の兄もお客様と一緒に楽しんでいるようにみえた。

お兄さん、私は幸せ者ね

今日来ている人たちはみんな開店当時からのお客様よ  
みんなに愛されて私と母は生き延びてこられた  
お兄さん、安心して、私ならもう大丈夫  
私はもうひとりじゃないってわかったから

「ママ～、パラフ作つてそれと珈琲もつ一杯

「俺にも珈琲のおかわりを

「久美ちゃん、ゲンちゃん、珈琲、一杯目  
ありがとうございまーす」

振りかえった田鶴子の笑顔に隠した悲しみはもうなかつた。

数日たつたある日の午後、お店に雅和から電話が入つた。

「俺、しばらくそっちに行けそうになくて・・・  
それで美香さんのことお願ひしたくて電話しました  
ママ、俺の代わりに美香わんを宜しくお願ひします」

「かまわないけど、理由をきかせて頂戴」

忍び寄るただならぬ気配を田鶴子はすでに察していた。

兄の死もこれから降りかかる火の粉も序曲にしか過ぎないと  
田鶴子にはわかっていた。

## 87 わかならぬ予感？

「明日、母が入院するんです  
検診で腫瘍が見つかって」

「それは一大事じゃないの  
色々と心配でしょうね今はお母さんの事が一番よ」

「早期のがんだから切除すれば問題ないそうです  
俺は美香さんのこと一番に思っているけど  
母さんは俺しか・・頼れるのは俺しかいないだから俺

「わかった それ以上なにも言わないで  
美香さんのことなら心配しなくていいわ  
井川君はお母さんの力になつてあげなさい」

「こんな時いつも佐知に頼んでいたけど  
今回はママにお願いするのが筋のよつた気がして」

「私が美香さんの伯母だから、 そうなのね、 ありがとう  
といひで私が戻ったこと誰から？」

「佐知から聞きました

しばらく病院に行けないって伝えた時に  
同僚がお店の明かりが付いていたって教えてくれたそいつです

「そう佐知さんから、よかつ・・・」

雅和が須藤に連絡を取ることを恐れていた田鶴子は  
思わず「よかつた」といいかけ口を押さえた。

「美香さんのお父さんはまだ入院中ですか」

「ええ、大事をとつてしばらくは病院の生活になりそうなのよ」

田鶴子は佐々木の死を知られまいと淀むことなく嘘をついた。

「早く退院でいいのにですね」

「美香さんは私が責任もつてお世話しますから  
井川君はしっかりとお母さんに付き添つてあげて」

「はい、じゃママ宜しくお願ひします  
あつそれから、美香さんには長期出張でしばらく会えない事に  
してもらつていですか」

「ええ、上手く云えておへから任せ  
お母さん、お大事にね」

田鶴子は早めの店じまいをしていた。

身支度をすませ商店街を歩き出した田鶴子は花屋の前で足を止めた。

店先の小さな花か」を手にしていた。  
その黄色と白紫の小花は思わず頬擦りしたくなるほどだった。

トントン・・ノックしたドアから顔を覗かせた田鶴子に美香は声をあげた。

「ママ今こられてくれたの うれしい」

「入院しているつ聞いて心配していたけど  
とっても元気そうで安心したわ」

「田の前にママがいるなんて夢見たい、うれしいわ」

「美香さん喜んでもらえて私も嬉しいわ」

「どうぞ椅子に御掛けになつてください」

「これね、気に入つてもらえると嬉しいんだけど  
とても可愛かったから美香さんにと思つて」

「まあ、可愛い花が」

「私、黄色い花が大好きなんです ママ、ありがとう」

「偶然ね、私の母親も黄色い花が好きだったのよ」

田鶴子は自分の言葉に驚いていた。

そういえば母は籠に入った花を買つてきてはお店に飾つていた  
それも買つてくるのはいつも決まって黄色い花ばかりだった

母の好きだつた花、黄色い花を好きだと言つた美香

美香と母は祖母と孫・・・

同じものが好きだとしても不思議はない」と田鶴子は思った。

「美香さん、井川君から言付かってきたんだけど  
急な出張でしばらくこっちに来られないらしいの  
代わりにといつては何だけど美香さんのお世話をさせてほしいの  
だめかしら・・・」

「だめだなんてどんでもあります  
ママがまた会いに来てくれるなら大歓迎です」

「よかつたあ、なら時間の許す限り美香さんにてこに来られるわ」

「そうしてほしいけど、無理しないでトセ  
ママには大切なお店があるのでですから」

「無理なんかしないから心配しないで  
私、手紙の返事もまだだつたでしょ  
だから会つてお礼をとずっとと思っていたのよ」

「私、手紙を出したら不思議と気持ちが落ちつきました  
どうしようもなくなつたらまた手紙を書こうつて思つていました」

「美香さんはじめ気持ち穩やかに過ぐじしているみたいね  
一通目の手紙が来ないことを祈つてゐるわ」

「そんなこといわないでトセ」

「今度は楽しい手紙にします、だから又読んでください」

「それなら楽しみにして待ちましょう」

「ねえママ、見てください。このお腹す」「こでじょ」

「まあ大きくならんで・・

ちょっとだけ触らせてもらひつともこにかしら

「ええ、じつぞ触つてください」

田鶴子は兄が待ちわびていた孫がこのお腹にいるのだと田頭を熱くしていた。

「ママ、じつかしましたか

「ううん、私は今もって独身でしょ

本当なら美香さんのような子供がいて孫がいてもおかしくないんだなって

そんな人生もあったのかもって・・思つてしまつたの

「後悔しているのですか

「後悔・・・

「いいえ、これまでの自分の人生ひとつも後悔なんかしていないわ  
選択した人生を生きてきたら独身だった・だけのことよ  
どの道を選ぼうと自分で決めた人生に悔いなんかあつてはいけな  
いわ

「選んだ道ならば後悔のない生き方をしなければ嘘でしょう」

「『みんなさい、失礼なこと聞いてしまって』

「いいのよ、美香さんとは垣根を取つ払つて話しがしたいわ

「ママはやつぱり私が思つていた通りの人ね」

「美香さんにとって私はどんな人なのかしら」

「それは次回まで取つて置きます  
そしたらまた会いに来てくれるでしょ  
ママ、来てくれるわよね、約束して」

「我が子を見る眼差しにも似た瞳に映る美香は蠟人形のように美しかった。

## ❀❀ わななりの予感？

「ママは雅和から父の事・・何か聞いていませんか？」

「井川君からは何も聞いていないわ」

「最近、父のことがとても気になつて仕方ないんです」

「気になるつて・なにかあつたの」

「夢を見ました　会つたこともない父の夢でした

枕元に立つた父は私の側にひざまずいて私の顔を撫でてくれました  
父の手は柔らかくて温かでした

私は嬉しくて聞いてほしかつたことを夢中で話し続けていました  
「体にさわるからそのくらいにして少し休みなさい、側についていてあげるから」

そういうつて父は眠りに付くまで手を握ってくれました

田を開けたとき父はもう居ませんでした

私にはあれが夢だつたなんてどうしても思えないのです

お父さんの顔、声を鮮明に覚えています

面長でアーモンドの形をした黒い瞳、鼻筋の伸びた顔立ち

かぼそかつたけれどホールにも似た声も忘れられません  
今も耳と耳に焼き付いてこの辺が痛くてたまらないんですね

胸元を押えた美香は今にも泣き出しそうだった。

「お父さんと夢で会えたところに悲しそうに見えるのは氣のせい  
かしら」

「あの日、私は父を呼び続けました  
田を覚ますまで側にいるつて約束してくれた父を  
お父さん、ビリーバリのつて必死に捜していました

もう父はない・消えたんだと思い知らされた私は  
子供みたいにわんわん泣きました  
泣いて泣いて・・涙のタンクが底をつくまで泣きました  
どこかに行つてしまつた父はもうこの世にいない・そんな気がする  
」

田鶴子は心の中で語りかけていた。

お兄さん、美香ちゃんのお迎えはもう少し待つて  
せめて、井川君のお母様の手術が無事に終わるまで

「美香さん、私はね、生き別れた父親とは一度も会えなかつた  
悲しいことに私の父は夢にさえ出ではくれなかつたわ  
でも美香さんはお父さんに会えたのよ

夢だとしても私はお父さんと会えた美香さんが羨ましいわ  
お父様に感謝しないといけないわ」

「そうですね・・私、今夜お父さんの居る東京に向って手を合わせ  
ます」

「やうなさい、どんなに離れてこようともここは近づかぬものよ」

伯母であることを打明けられずに帰ってきた田鶴子は  
兄の死はこのまま胸に封じ込めておこうとしていた。

美香から生命の息吹を感じとれなかつた田鶴子は口の邊の口の近  
いことを感じ取つていた。  
それは遠い将来でなくもう田の前に迫つきていた。

「美香ちゃんの死を回避することなど誰にも出来ないけれど  
このまま黙つて指をくわえて待つてなどござれないわ  
いつたい私に、いまこの私になにが出来るのだろう・・」

母と兄の眞理の前に立ち田鶴子は手を合わせ続けていた。

## 89 君をわすれない

「橋先生に至急病棟まで戻るよう伝えてくれた  
さつきから何度も連絡してドクターを待っているのよ  
いないのならいないと言って貰わないと困るわ  
入院病棟からの連絡は時間との戦いなの  
もういいわ、こちらで捜しますから」

静寂なナースステーションはいつぺんしていた。  
緊急を要する内線のやり取りはけんか腰にも聞こえ緊張が走った。

今日の橋は外来担当で患者を診ていたが又悪い癖がでて  
気になる病症患者のMRに同行して席を外していた。

同期の看護士が受付に走ってきた。

「さつちゃん、橋先生見なかつた」

「そんなんに息を切つて、緊急なの」

「さつちゃん、驚かないで聞いて

木内さん、意識が混濁して危険な状態よ  
もし先生を見かけたらお願ひね

佐知は蒼白な顔で自分の持ち場を離れ病棟に走り出していた。

わずかな隙間から見えたベッドに美香の姿はなく佐知は力なくドアを開けた。

病室には先客のSIGNPOSTのママ・田鶴子がいた。

「ママがどうして？」

「病院から連絡をもらつて飛んできたの  
方が一自分になにかあつたら井川君でなく私に連絡してほしいと  
美香さんが看護士に頼んでいたらしいのよ」

「美香さんに会えましたか

「私が着いたとき、美香さんは運ばれた後だったわ  
看護士にここで待つように言われて」

「井川君は知っているのですか

「まだ云えていないわ

「じゃ私、急いで連絡してきます

「佐知さん知りせるのは待つて、もう少し待つて」

「こんな重篤な状態を黙っているなんて私には出来ません」

「佐知さん、井川君のお母様いま入院しているの  
今日はそのお母様の手術の日なのよ  
昨晩は井川君眠れなかつたみたいで私の電話を切ろうとしたしなかつ  
たわ」

「・・・・・」

「佐知さんの気持ちわかるわ 私だつて同じよ  
でも美香さんの気持ちを汲んであげましよう  
美香さんには井川君は出張ということにしているの  
だから美香さんは連絡先を私にしたのよ」

「出張は嘘だつたのですか  
美香さんを心配させないための嘘・・」

「美香さんには、もう・・すべてが見えているのかもしれないわね」

「なにが・・見えるのですか」

「神に召される人はすべてを承知で騙されたふりをしているのかも  
しれない  
嘘も偽りも愛の形と受け止め「ありがとう」と騙されたふりをする」

「美香さんもそうだと・・すべて承知の上だつたと」

「私が見舞つた時、別れ際に美香さんが『いつ言つたのよ  
／神様は平等に幸せを下さるつて本当なのかしら  
振り返ると私は沢山その幸せをもらつた  
貰い過ぎじやないかなと思つほど心は豊かに充たされ幸せだつた  
だから私の命が戻せるのも平等に値する神の思ひ合ひと今は思え  
る／」

私、美香さんの手を握ることしか出来ず病室を出たわ

あの時、この胸に美香さんをきつく抱きしめていたら・・  
なぜ抱きしめてあげなかつたのかと自分を責めたわ  
・・湿っぽくなつて、『めんなさい

今は美香さんの意識が戻ることを信じて祈りましょうね

佐知は険しい顔で天を仰いでいた。

目を開けて・・美香さん

美香さんの笑顔は雅和の生きる源なのよ

このまま雅和と会わずに・そんなこと私、絶対ゆるさないからね  
それでも私たちを置いて逝くなら笑顔でお別れしてからにして  
美香さんまだ逝かないで お願い、私たちのところに早く戻つて  
きて

## 90 君をわすれない？

佐知は美香と交わした先週の会話を思い出していった。

「佐知さん、私の生い立ちは人から見れば幸せには思えないのですがね

母は世間の荒波に胸を張つて立ち向かう人になれと全靈で愛を注いでくれた

大人になつて私は母の愛をありがたいと心から思えた

人は愛に包まれて強くなるのだと知った

母の愛は優しい愛ばかりじゃなかつた 時には痛みを伴う愛も飛んできた

そのお蔭で世間の冷酷さにも卑屈にならずに生きてこられた  
私が幸せを感じるのは・・佐知さんにわかる？」

「美香さんが幸せを感じるのは雅和といふとき、それで決まりでしょ」

「勿論そうだけど・・

人の優しさにふれた時、その優しさに私は喜びと幸せを感じた  
私は他のどんな人より人の優しさが嬉しくて心に染みる

佐知さんの優しさにふれて私はまた幸せを感じることができた  
ありがとうなんてありきたりの言葉じゃ足りないと思っている  
この溢れ出る感謝をありがとうじやない言葉で伝えたいわ

ねえ佐知さん

人の優しさに気づかない人は目の前にある幸せも感じられないしどんな幸せも幸せの形を成さないから見えないと思うのよ

雅和はあなたの優しさを本当の意味での優しさをまだ知らない  
佐知さん、思えば思われる・・必ず報われるときが来る  
雅和のこと・・あの時の私との約束を忘れないで

私ね、最近やたら母のことが思い出すの

大過なく過ごす人生が一番ね。で母はしみじみ言っていたわ  
何もなくても心豊かに天の恵みをありがたいと思える人生が一番  
だと

生まれ変われるならそんな人生もいいかな」「私今世で少し欲張りすぎたから」

あの時の言葉がいま遺言のように聞こえ悲しかった。美香のどこか憂いに満ちた寂しげな笑顔を思い出し佐知は頬を濡していた。

手術室に運ばれた美香の意識はまだ混濁していた。

「木内さん、わかりますか

これからお腹の子を取り出す手術をしますからね  
木内さんが待ち望んだ赤ちゃんと、もうすぐ会えますよ」

橘医師は美香に優しく語りかけ産科担当の医師を待っていた。

「先生、破裂した腫瘍の出血は止まつたようですね」

「帝王切開が済み次第、頭を・・・」

「オペですか？先生それは」

「たとえ成功率1%でも患者の命を救うのが俺達の使命だ  
木内さんのような患者は初めてだつた 子供に会わせてやりたい」

まもなく手術室が開き一台の保育器が運び出されていった。

赤いランプの付いた手術室で美香の開頭手術が始まっていた。  
不可能といわれる手術に橘は挑んでいた。  
打つ手のすべもなく手術を終えることもある覚悟の手術だった。

病室から佐知は姿を消し残された田鶴子は体を震わせ祈り続けていた。

手術の承諾書にサインをした田鶴子の胸中は穏やかではなかつた。この手術が美香の命を救うための手術でないことはわかっていた。

燃える命の残り火が絶えることのないようになると願わずにいられない  
かつた。

## 9.1 君をわすれない？

受付の事務所前でハイミス部長が手ぐすね引いて佐知を待っていた。

「しまつたあ・・・」

佐知は頭を下げ部長に擦り寄った。

「本当に申し訳ないません」

「あなたを見ていると仕事を舐めているとしか思えないわ  
受付の仕事を甘く見ていいんじゃないの」

「いいえ、そんなことありません」

「断りもなく長時間受け付けを離れるなんて非常識でしょ  
立場上、前代未聞の出来事に田をつぶるわけにはいかないわ」

叱責中も美香を案じる佐知の目には涙があふれ出していた。

「皆井さん、理由を聞かせ・・なにも泣かなくたって  
・・もつこいわ、早く持ち場に戻つて仕事をしなさい」

「すみませんでした 失礼します」

「最近の子はこれだから・・・」

捨て台詞を残し部長は怪訝そうな顔で去つて行った。

「さつちゃん、大丈夫？」

部長今日は朝から「機嫌斜めな 気にしない、気にならない」

「さつよ、仕事で挽回しよう」

「さつちゃん、こんど抜け出す時は協力するから言つてね」

「私、もう抜け出したりしませんよ〜」

「やつと笑つたね さあ仕事、仕事」

同僚、先輩の気遣いがうれしかつた。

人の優しさが心に染みるといった美香の気持ちに触れた気がした。

術後の美香は集中治療室で眠り続けていた。  
自宅に戻った佐知の気持ちは晴れなかつた。

疲れぬ佐知は時計ばかり見つめていた。針は11時をさしていた。携帯が鳴っていた。起き上がる気力はなかつた。

止まつた携帯はまた鳴り出し、その繰り返しに佐知は根負けした。

「はい」

「佐々木さんが美香さんのお父さんが・・俺、信じられないよ

「井川君、落ち着いて話して」

「佐々木さんが亡くなつたんだ」

「そんな・・うそでしょ」

「須藤さんに聞いたから間違いない

佐々木さんの入院はSIGN POSTのママから聞いて知つていた  
それでどうしているか心配でさつき電話をかけたら

「ママが佐々木さんの入院を知つていたってどうこう」と

「ママは美香さんの叔母さんだ

美香さんのお父さんは兄と妹、兄妹なんだ

「そんなことって・・そんな偶然が・・」

「ママに佐々木さんの入院を美香さんは知らせるなって言われて  
だから俺、美香さんにずっと隠してきた  
でもそれは正しかったのか、俺にはわからなくなつた」

「ママは良かれと思つて隠すことを選んでくれたのみ、あつと」

「ああ、隠すことそれも愛だつて言われた  
でも人の気持ちなんか簡単にわかるわけないよ  
ママがどんな力を持つていようと美香さんはしかわからない気持  
ちはある  
俺はそれを考えず無視したんだ」

「・・・・・」

「俺、東京に行って須藤さんと会つて来る

「ダメ・・ダメよ 東京なんか行っちゃダメ  
今すぐ美香さんに会いに来て、お願ひ・・お願いだから・・

「どうした、佐知、泣いているのか  
美香さんの身に・・なにかあった・そうなのか佐知」

## 92 君をわすれない？

「井川君に連絡しようとしたらいちごのマムから止められたの

お母さんが入院しているからもう少し待つてほしこうて  
私、出張が口実だつたことを知つて電話を躊躇して・・

井川君、「ごめんなさい」

「それで佐知、美香さんは

「・・・ 美香さんは今日、頭の手術を

「手術、美香さんが拒み続けた手術をなぜ」

「突然だつたの、美香さんの容態が急変して」

「・・・」

「緊急手術のあとも、危険な状態は続いているの  
赤ちゃんも保育器の中で懸命に生きようとしている  
美香さんが命をかけて守つてきた井川君の子供よ」

「生まれたのか、そうかよかつた  
佐知、話してくれてありがとう 僕、今からそっちに行く」

「入院しているお母さんは？手術を終えたばかりで心配でしょう？」

「ああ・・・でも手術は成功した

母さんの世話は事務所の泉さんに頼むつもりだ

泉さんは父が事務所を立ち上げた時からのスタッフなんだ  
二人はお互い歳が近いし気も合つたりして仲良しなんだ」「

「それなら安心ね

私、井川君に黙っているのが苦しくて、今日も眠れなくて悶々としていた

だから電話をもらひて、いひじて話せて本当に良かつたと思つて  
いる

ママとの約束は守れなかつたけど・・私、井川君との約束は守り  
たかった

どんな時でも真実を話す・・あの時の約束だけは破りたくなかつ  
た

「ありがとう佐知・・  
じゃ、これから車飛ばしてこへよ」

「夜道の運転、気をつけてね」

佐知は眠れなかつたのが嘘のように深い眠りについた。これでもかと襲い来る悲しみの訪れも知らずいつときの眠りに落ちていた。

濃紺の中にうつすらと赤い光が見えた朝、佐知は机に向つていた。

出勤前、早めに家を出た佐知はSIGNAL POSTに寄つていた。開店前の郵便受けに手紙を落とし病院へと急いだ。

店を開けた田鶴子は新聞を取ろうと郵便受けを覗いていた。正方形の白い封書を田鶴子は不思議そうに手にとった。

なにかしら・・カウンターに腰をかけ封を開いた。

### 9.3 君をわすれない？

それは佐知からの手紙だった。

「ママお早びであります

差出人のない手紙に驚かれたでしょ？『ごめんなさい  
昨夕、美香さんのお父さんが亡くなつたことを知りました  
井川君も私も、まさかと信じられませんでした  
私は須藤さんに会つて話を聞いてくると言つ出した井川君に  
美香さんのこと話をしてしまいました』『ごめんなさい

美香さんとママの関係も聞きました。叔母と姪・  
身内だとわかつたママにお願いがあります  
すべてを美香さんに話してほしいのです  
ママが言つよつに美香さんにすべてが見えているとしても  
眞実をこのまま隠し続けてもいいのでしょうか  
それを美香さんが望んでいるとはどりしても思えないのです

最期のとき私は眞実のなかで命をとじたい  
人はそう願うのではないでしょ？

偽りや嘘も愛になる・・ママ言つましたね

今私にはそれが生きている側の身勝手で傲慢な言い分にも聞こえ・

理解できず苦しんでいます

尽きよつとしている命火と向き合つ人がそれを望むでしょうか  
私には胸張り生きてきた美香さんが喜んでくれるとは思えないの  
です

奥底にある計り知れない気持ちはその人が語らなければ誰にもわからない

それを勝手な解釈や間違った思い入れで片付けてしまつていいのでしょうか

嘘や偽りのなかに愛などあるはずがない

どんな理由をこじつけようとあつてはならない

真実のなかにこそ愛は生まれるのだと私は思いたい

嘘、偽りで固められ、悲しみも苦痛もない人生と  
傷つき涙しても愛に満ちた真実の人生、  
美香さんがどちらの人生を望み選ぶか・・ママにわかりますか  
私にはわかります

何を伝えようとしているのか、分からなくなつてきました  
自分で理解不能な手紙を送る失礼をお許しください  
ママ、約束をやぶつてごめんなさい 今日井川君、病院にきます  
佐知／

接客中も田鶴子は手紙の内容が頭から離れなかつた。

「久美子さん、お店お願いしてもいいかな

「今日もお見舞いに」

「ええ・・」

「昨日は万里子で今日は久美ちゃんか  
ママ、久美ちゃんで大丈夫なのかい」

「失礼ねえ、わたし昔はフレンチのショフだったのよ  
見くびらないでよね」

「おー、それならランチが楽しみだな  
スペシャルメニューでも作つてもらつとするか」

「丸く収まつたようね それじゃ、久美ちゃんヨロシクね」

田鶴子はボードから美香の写真を外すと急いで自宅に戻つていつた。

## 94 習をわすれない？

白井にて居つた田鶴子は兄と母の[写]真をバッグに入れるとすぐそれも家を飛び出していた。

向つた先は商店街にある昭和の匂いを残した馴染みの[写]真店。

「ここにちは、おちやんいないの おちやへん、お嬢様ですか？」

「おお誰かと思つた、ママか」

「ママか・せ、なこでじょ 今日正午お歸り」

「ママがくるときねこつも今すぐまべつてくれだ、今日も・・だら

「えひさん、今日は緊急よ、だからこつも以上に早く仕上げて  
お願ひします、この通りです」

「仕方ないなー長い付き合いだもんな、やつとへよ  
2時間位したらまた来てくれ」

「宜しくお願ひします」

「ママ、今回の仕事も珈琲の無料券付きかい？」

「勿論よ、玄ちゃんがお店に来た時にお渡します」

「それじゃ、2時間といわず1時間で仕上げてやるよ

「それでこそ玄ちゃんだわ、宜しくお願ひしますね」

駅前の書店や雑貨店を廻りながら時間をつぶした田鶴子は出来上がった写真を手に病院に向った。

美香は個室に移されていたが意識はまだなかつた。

田鶴子は美香に許しを請つつもりだった。

意識のない美香に伝わらないのはわかつていたが語りはずして呪られなかつた。

美香ちゃん、陰のない光だけの人生を送る人なんて居ないわよね  
わたし自分の人生に又一つその陰を落してしまつたわ  
私は井川君に真実を隠し通すのも愛だと・・嘘をつかせた  
井川君の心を苦しめ同時に美香ちゃんを悲しませるとも知らず・・  
嘘や偽りをお許しなられるのは神のみなのに私は神を冒涜した  
も同じ

美香ちゃん、「めんなさい」井川君は悪くないわ  
真実を伝えなかつたのは私のせい、許して美香ちゃん

あなたが夢で見たお父さんはもうこの世にはいないわ  
もういらない気がすると、いつた美香ちゃんの予感は当たつていた

私は美香ちゃんの叔母さん、お父さんの妹よ  
あなたを見舞つたあの時に話すべきだつたわね、後悔しているわ  
美香ちゃん、許してね、叔母さんをやるして・・

田鶴子が手を合わせ許しを請つたそのとき

「うへ、うへ・・・」

「美香ちゃん、わかる　SHIZUROUのママよ  
あなたの叔母さんよ、わかる」

ガラツ・・乱れた呼吸で入ってきたのは雅和だつた。

「井川君、あなたを待つていたのよ」

「美香ちゃんの意識は」

「いいえ、まだ　でも今、美香さんの声が・・  
つめきのよくな声だつたけど確かに聞こえたの」

「ひ、ひ、・・・」

「ほひ・・聞こえたでしょ」

「美香さん、俺だ、俺がわかるか  
しつかりしり、田を覚ましてくれ」

「あ・あ・あ・」

「そりだ、まさかず・・俺がわかるのか  
俺が側についているから大丈夫だ  
いま美香さんと俺の赤ちゃんを遠くからだけじ見てきたよ  
元気に生まれててくれてよかつた 美香さんありがと」

「井川君、美香ちゃんの目から涙が・・」

## 95 君をわすれない？

美香の目から一筋の涙が零れおちていた。

「美香ちゃん、井川君の言葉がわかるの、聞こえているの」

「君は命がけで赤ちゃんを守った よく頑張ったな、美香さん  
今度は俺が命に変えても君達をする、だから目を覚ましてくれ」

美香の顔が少しだけ綻んだように見えた。

「井川君、わたし今日、真実を話すために来たのよ  
どうしても伝えなければならぬと思つたわ  
それは佐知さんの願いでもあるの」

「佐知の・・・」

「今朝、ポストに手紙が入っていた 佐知さんからだつたわ  
叔母である私の口から真実を美香ちゃんに告げてほしいと書いて  
あつた」

「・・・」

「美香ちゃんに話しかけていたとき、あなたが此処にきた  
だから話の続きをやせて・・

私は幼い頃に兄・あなたのお父さんと離れ離れになつた  
音信がないまま月日だけが流れもう会えないと諦めていたわ

あなたがお店に来てくれなかつたら私は兄と再会できなかつた  
幻だつた兄と再会し姪のあなたと出会えた偶然に私は震えた

兄は美香ちゃんに会えるのをそれは楽しみにしていた  
乳飲み子のあなたを満足に抱くことも見ることもできなかつた兄  
兄はあなたの赤ちゃんをこの手に抱ける喜びを嬉しそうに語つて  
いた

その兄・・美香ちゃんのお父さんはもうこの世にいない

夢でお父さんに会えたといつたあの時、兄はすでに死去していた  
兄は美香ちゃんと会う約束を守ろうとして夢に出たのだと思つたわ  
許してね、元気なお父さんに会わせてあげられなくてご免なさい

美香ちゃん、「写真を持ってきたのよ

枕元に置いておくから目を覚ましたら見てちょうだい

美香ちゃんとお父さん、おばあちゃん、おばの私、家族の写真・・

」

田鶴子は首をむけ言葉に詰まらせた。

雅和は枕もとの写真を思わず手にしていた。

血のつながった家族が笑顔で美香を囲んでいた。みんな幸せそう

に見えた。

「ママ、これをこつ・・  
いいよ、すゞくいい『』真だ・・美香さん、見て、『』  
お父さんがいる、お母さん、おばあちゃんも・皆、美香さんの家  
族だ」

「ハハハ・・・

「美香さん、聞こえたのか」

「ハ、ハハ・・・

「うそ・うそ言った・・ママの話も美香さんいつわっているよ

「ううだと、うれしいわ

美香さん、お母さんよ、わかる

「ハハハ・・・

「ほり、返事をしてくる

美香さん頑張れ、赤ちゃんと会いたいだらう

会つて自分の手で抱くまで負けるな、生きるんだ

美香の目からまた涙が流れ出した。それは先程とは違う悲しい涙に見えた。

「・・その涙の意味を教えてくれ  
生きると約束してくれ、返事を返してくれ」

美香の声はぴたりと止んでしまった。

「返事を・頷いてくれるだけでもいい  
俺は君ともっと話がしたいんだ・・美香さん、聞こえているんだ  
る」

「井川君、少し休ませてあげましょ  
う十分伝わっている・そう信じ無事を祈りましょ

生きてほしいこと言つた雅和の言葉に美香は返答しなかつた。  
頷くことも声を発することもなかつた。

雅和は病室を飛び出し受付の佐知を遠くから眺めていた。

「せつちゃん見て、あれ井川さんじゃない

柱にもたれて立っている雅和はどこか悲しげに見えた。  
また受付を飛び出しそうになつた佐知に同僚が助け舟をだした。

「さつちゃん、少しだけなら上手くやるから行って来ていいよ」

「あらがとう、じゃちょっとだけ」

佐知と雅和は屋上のベンチに並んで座つていた。

## 96 君をわすれない？

黙りこんだ雅和の横で佐知は俯いたまま寄り添っていた。

「佐知、 美香さんはもう自分の定めを知っているのだろうか」

「・・・・・」

「美香さんがもし・・子供は・・俺はこれから不安で・・佐知、俺・・不安でたまらないよ」

「井川君は美香さんと一人で子供を育てたいんでしょうたら、そのことだけを考えて

先の事を今は考えないで、余計な事を考えるから不安になるんだわ現実から目を逸らしちゃだめ、つらくても今をしつかり見つめないとダメ

美香さんの死を回避できるのなら私だつて何だつてするわ

でもそんなこと出来つこないでしょ

私に出来る」とは美香さんの命と向き合ひ、悲しいけれどそれしか

美香さんが生きている今を見つめる」としか出来ないの

「親父の時と同じ、俺は病室を飛び出してきた

「美香さんから逃げるなんて俺は本当に大馬鹿野郎だ  
佐知、ありがとう俺、病室の戻るよ」

「井川君がいなくなつて心配しているよ  
早く行つて、美香さんが待つてゐるわ」

病棟に戻つた雅和の目に慌しい看護士の姿が見えた。  
もしやと病室に入ると橘医師の姿があつた。  
橘は懸命に美香の蘇生処置を施してゐた。

「ママ・・・」  
「ママ・・・」

「看護師が血相変えて入つてきて・・・  
ナース室に繋がつてゐる美香さんの心音が止まつたって・・・」

「しつかりしろ 僕の声が聞こえるか」

モニターが微かな揺れを映し出し美香の心臓は動きを見せた。  
しかし橘医師の口から出た言葉に雅和は絶句した。

「残念ですが明朝まで持ち堪えることは出来ません」

田鶴子は橋の田に光るものを見逃さなかつた。  
立ち去る橘医師の背に田鶴子は深々と頭を下げていた。

「美香さん、頑張るつて俺と約束しただらう  
静岡に帰つて、親子三人で美香さんが望んでいた家庭をつくるんだ  
美香さん、死ぬんじやない 戻つて来い」

「これ以上、美香ちゃんを苦しめないで  
安らかにお父さんのところに逝かせてあげて  
井川君がしつかりしないと安心して旅立てないわよ  
美香ちゃんの死を受け入れ・・送つてあげましょう」

「俺、そんな気持ちになれないよ  
ママの言つていることはわかる、でも・・納得できないんだ  
美香さんの死を受け入れるなんて俺には・・無理・・」

「・・・・・あつ・井川君、美香ちゃんの田からまた・・

井川君の気持ちが伝わつているんだわ」

「ママ、俺は間違つてゐるのか・・

「井川君は美香ちゃんときちんとお別れしなさい  
ありがとうつてこれまでの想いを伝えてあげなさい

田鶴子は静かに病室を出ていった。

一人だけの病室で雅和は美香の手を握りしめ話しかけた。

「美香さんはこんな俺が心配でたまらないよね、ごめん  
でも俺は君の死を受け入れられない・・したくないんだ  
だけど、これが避けられない現実で君が天に君が召されるのなら  
俺は君に感謝を伝えなければならない  
これが夢であつたらと悔しいけれどつらいのは君のほうなんだよね  
だから君を引き止めて苦しめるのはもう止めよう

美香さんありがとう 生涯、君をわすれないよ  
俺は君をわすれない、けつして忘れはしない  
俺は誓う、俺達の愛は永遠に続く、これからもずっと

子供は俺が守り育てる だから安心してくれ  
美香さんはお父さんとお母さんの側でゆっくり休んでくれ  
俺もいつかそっちにゆく、そのとき俺は必ず君を捜してまた会う  
それまでのお別れだ 又えるよな、美香さん」

苦しげな表情の美香の顔が嘘のように解れ和らいでいた。

「聞こえたのか・・そつなんだね」

戻ってきた田鶴子は美香の顔の変化に気づいた。

雅和が美香と最後のお別れが出来たのだと確信していた。

「これから起ることは現実なのよ しつかりなさいね  
もうお迎えは来ている・・美香さんはまもなく召されるわ」

「ママ・・・もう見えて・・・」

「ええ、だから美香ちゃんの側に、そして手を握つてあげて  
井川君、最後のお別れのキスをしてあげなさい  
美香ちゃんがそれを望んでいるわ」

美香の唇に口を重ねた雅和の目から大粒の涙が溢れていた。

橘医師と看護士がやってきたのはそれから間もなくだった。

「い」臨終です

時計を見て時間を告げた橘は目を閉じていた。それは必死に涙を  
隠しているようにも見えた。

美香は父を追つよつて息を引き取り天に召されていった。  
命に換えても産むといった最愛の子供を残し美香は旅立つていった。

## 96 君をわすれない？（後書き）

美香の命が尽き、雅和と美香の子供は・・最愛の人を亡くした雅和の悲しみは癒えず佐知は女同士の美香との約束に悩む日々。美香亡き後、佐知に訪れる新たな出会いと葛藤、雅和への思いは・・二人の愛は・・

いよいよ最終章ですが、しばしの時間を。

## 97 摺るきない愛

美香が亡くなつて早いもので一年の月日が流れていった。  
今なお死を受け入れられない雅和だったが時だけは何も変わらず  
過ぎ去つていた。

忘れ形見の愛娘は生前の美香の希望で明日香と名づけられた。

明日香はある事情で雅和と離れ田鶴子のもとで暮らしていた。

田鶴子が明日香を引き取り育てている理由はこうだ。

美香を亡くした雅和はすぐ明日香を抱き静岡に戻つていった。  
明日香の誕生を喜んだ雅和の母は快く明日香への育児を引き受けた。

退院後まだ万全でない体の母だったが明日香への可愛がりは尋常でなかつた。

その愛情は旗からすれば異常と映つて見えただろう。  
しかしその濃密な愛情の陰には母の命が深く関係していた。

完治したと聞いていた母のがんはすでに方々に転移していた。

母は雅和にだけは知られまいと明るく振舞つていた。

母は事務所の手塚と泉には余命告知して葬儀の手配まで済ませていた。

再発したがんは口増しに母の体を蝕み体力を奪つていった。

明日香を抱くことも出来なくなつた母はとうとう入院となつた。

母は最後の力を振り絞り息絶え絶えに言葉を残した。

「明日香と一緒に育ててあげられなくてごめんなさい

お母さんはあなたにずっと守られ助けられてきた今まで本当に

ありがとう

もしお父さんに会えたら明日香の誕生を話して聞かせるわ

そして美香さんに会えたら感謝を伝えなければ・・

明日香を産んでくれてありがとうって

雅和、大変でしようけれど明日香を・・雅和、あなたなら大丈夫」

何かを言い続けていた母の言葉はもう聞き取れなかつた。

安らかな顔で母は父と美香のいる天へ召されていった。

次々と襲い来る人生の荒波に雅和は溺れそうになつていて。

「俺がなにをしたつていうんだ・・なぜだ、俺だけがなぜこんな目にあうんだ

大切なものを俺から根っこそぎ奪い去つていいくつもりなのか」

明日香を抱き雅和は途方にくれる日々を送つていた。

雅和からの電話で近況を聞かされた佐知は田鶴子の店に出向いていた。

「知らなかつたわ、井川君のお母様が亡くなつたなんて  
美香さんの悲しみも癒えないのにお母様まで・・つらいでしょ  
うね」

「お母さんがいなくなつて明日香ちゃんを育てるのは大変でしょ

て聞いたら

一人でも頑張つて育ててみせるよなんて強がつてたけど・・・心配だわ

「頑張つて育てるといつても乳飲み子を男一人で育てるには限界があるわ」

「いま井川君は毎朝、明日香ちゃんを連れて事務所に行っています  
明日香ちゃんの世話は事務所の泉さんにお願いしているそうですが  
でも自宅に帰つたら誰もいないから大変なんだって言つてました  
このままじやだめだから保育園のこと教えてほいつて頻繁に電  
話がくるんです

昨日の井川君はとても疲れていました

「明日香が火がついたように泣きじゃくると俺も泣きたくなる  
正直、明日香の夜鳴きがひどくて眠れなくて仕事どころじゃない  
んだ」

そういうときり黙り込んで・・・私心配なんです、井川君と明日香  
ちゃんが

「明日香ちゃんを預ければ安心して仕事が出来るでしょうけれど  
自宅で明日香ちゃんの世話をする井川君の負担は変わらないわ  
保育園は熱がある子供は預かってもらえないと聞くし・・・色々と  
大変ね」

「それで・・・ママに提案があるんですけど、聞いてくれますか？」

「ええ何かしら」

「ママが明日香ちゃんのお世話をしてくれたら  
井川君は安心して仕事が出来ます  
ね・っこ考えでしょ、ママ」

「佐知さんは簡単にいうけど子供を育てるって大変なのよ  
それに私は・・子育ての経験もないのよ」

「私の母は施設から私を引き取り育ててくれました  
母は血のつながらない私に愛情を一杯くれた  
だから貰われっ子の私は不幸だなんて一度も思わないで育つたわ  
ママは美香さんの伯母さんだもの母と同じように明日香ちゃんを  
育てられます

お願いします、少しの間でいいですから明日香ちゃんを育てて下さい

井川君と明日香ちゃんを助けてください」

「そうね、でも佐知さん、すこし考えてちょうだい

即答を避けた田鶴子だったがすでに心中では提案を承諾していた。

明日香の世話を買つてた田鶴子からの申し入れに雅和はためらいを見せた。

田鶴子に明日香を託すことは美香との約束に反する気がしていた。俺は子供を守ると美香に誓つた・・明日香を人の手に委ねるなんて出来ない。

「ママ、お気遣いありがとうございます 僕、ものすごくうれしいです でも少し時間をください いま明日香ひとつでなにが一番なのが俺にとつても・・それをしつかり考えて返事します」

「わかつたわ いい返事を待つているわね」

週が変わり数日たつても雅和からの返答はなかつた。

「もしもし、井川君  
明日香ちゃんはもう寝ているのかしら、今時間大丈夫」

「はい」

「井川君、あなたはよくやつてこるわ でも限界にきてこる

会社の人にも仕事にもこれ以上支障が及ぶことにあなたは頭を抱えている

本音はそうでしょ、ねえ考えてみて・・

美香さんは仕事と子育てに苦しんでいるあなたをどう見ていろのかしら

喜んでいると思つ? そう思つているなら間違つていいわ  
額に汗して仕事に励むあなたの姿が一番好きだと美香ちゃんが話してくれた

お父さんの仕事を継いだあなたの希望に輝き仕事をする姿が好き  
だと・・

私にとつても兄が見ることが出来なかつた明日香ちゃんは孫と同じよ

いまの明日香ちゃんを男手で育てるのは大変すぎるわ  
せめて離乳時が過ぎるまで兄にかわり私は明日香ちゃんの世話をさせて

お願い、一緒に明日香ちゃんを育てさせて

その日をさかいに雅和はまた静岡と名古屋の往復生活が始まつた。  
生前の美香を思い出す週末の移動にいまだ涙することもあつた。

薄れるどころかますます募る美香への慕情を断ち切れなかつた。  
母も明日香もいない自宅に戻り雅和はベッドに横たわつた。

「お母さんを亡くした君はずつと一人でいつもこんな思いをしていたのか

美香さん、やつぱり君は強かつたんだな 僕はだめだ  
一人はつらい俺にはつらすぎるよ」

明日香を手放してからいつそう孤独が身に沁みていた。

悲しみに暮れる日々は変わらなかつたが仕事をしているときだけは昔と変わらぬ本来の自分でいられた。

明日香を手離した後悔の念が払拭される唯一の時間だった。

病院から持ち帰つた美香のボストンバッグをクロゼットから取り出していた。

美香の匂いが染み付いた手帳を手にするのが習慣になつていた。

手帳を開くのは今日が初めてだつた。

ビニールポケットに入つた雅和と書かれた白い紙が田にとまつた。

中には四角に折られた用紙が2枚入つていた。

薄い一枚目は雅和が記名捺印して渡した婚姻届の用紙だつた。

「元気に退院したら雅和の前で記名捺印するから待つていてね」

そう言つて笑つていた美香を思い出し思わず用紙を握りつぶした。

「強引にでも記入をさせてこの用紙をもらつておけば・・

今じろくを言おうが悔やんでも美香さんはもう戻つてはこない」

もう一枚の雅和と書かれた紙を開くと懐かしい美香の書体が並んでいた。

目に映る文字がどんどん霞んで見えなくなつっていた。

## 99 搖るきない愛？

雅和は美香の声が聞こえてきそうな気がした。

雅和、お元気ですか

この手紙をいつか手にしてくれることを祈り手帳に挿みます

私は自分の人生を十分楽しんで生きたつもりよ

だから私の死を悲しんでいつまでも引きずるのだけは止めてね

人生は移りゆく四季、季節に似ていると思わない

凍てつく季節の後にうららかな季節がくるように

暗闇を耐え忍んだのち必ず報われる日が訪れ光さすように

人生のさまざまな光陰に一喜一憂しながら人は生かされている

いつだつたか横たわる私の耳元でそつと囁く声が聞こえたの

「そうね、この世の光陰は人生の糧になつていて

始まりが光なら終わりは陰、でも人の終わりは光

だから恐がらないでいいのよ」

あの声は母の声だつたのだと最近わかつたわ

母はお迎えが近いことを私に伝えに來ていたのね

死を待つのつて幸せの後に思わず落とし穴に嵌つたような複雑な心境なのよ

でもね、それが私の人生と開き直つたら体も心も軽くなつたの  
人生は生きることが・・それが何より一番大切なんだと思つたわ  
負けないで生き抜くことに意味があるんだって

私は授かったこの尊い命を最後の最後まで生き抜くわ  
だから悲しまないで、よく頑張った・偉かつたなつて私を送つて

雅和と明日香には人の命に限りがあることを忘れないでほしい  
そしてその命を最後まで大切に生きてほしい

私はどんなにつらく悲しくても、世間に打たれ倒れようとも  
歯を食いしばり起き上がりれば必ず光がさすと信じて生きてきた  
そしてその光の世界に私は旅立とうとしている 間のない光だけ  
の世界へ

だから私のことはもう何も心配しないで

今まで本当にありがとづ

子供の事は大丈夫、お腹に居る時に沢山言い聞かせてあるから  
お腹の子は多くの人に守られ助けられながら成長していくわ  
周りの人みんなが雅和と私たちの子供の力になってくれる

雅和、何度も言つけど佐知さんとの縁は大切にしてね  
あなたは気づいていない本当の心が見えてないけど必ずわかる時  
が来る

その時は佐知さんの愛をしつかり繋ぎとめて一度と離さないで

雅和には未来だけを見つめて生きていくてほしいの  
だからそんな願いをこめて子供の名前を明日香に決めた  
雅和には相談もしないで一人で決めてしまったから怒つてる?  
でも私の最後のわがまだから許してくれたのよね ありがとう

私の愛を残したかつたから美香の香の字をつけたの  
明日に向つて私が応援していることを忘れずに生きてほしい  
明日香にも気に入つてもらえたうれしいな

明日香は私たちの愛の宝です 雅和パパに明日香をお願いしましたよ

雅和と明日香を天空から愛し続けます 笑顔の父娘を見守っています

頑張れパパ 頑張れ明日香

私は雅和に出会えて本当に幸せだった 沢山の愛をありがとうございます

田鶴子への手紙に嫉妬した時の子供ねと言つて苦笑した美香の顔が浮かんだ。

最初で最後の美香からの手紙を顔にあて雅和は号泣した。

雅和への思いは以前変わらぬ佐知だが自分からかける電話は控えていた。

かかるくる電話で聞かされる雅和の美香への思いは聞くに忍びなかつた。

ここ1年、そんな佐知にある人物との再会があつた。

「さつちゃん、院長夫人がすぐ来るようになって」

「夫人の呼び出しつついつも院長出張の同行よね」

「あの院長夫人に気に入られても喜べないよねえ」

「うん・・・」

「佐知さん、院長夫人が待つてらっしゃるのよ  
仕事は私が引き継ぐから早く行つてきなさい」

「はい、行つてきます

先輩、このカルテ計算もお願ひしていいですか」

「みんなで手分けしてすませておくから心配しないで」

「では皆井佐知、心置きなく恐怖の呼び出しに行つてしまへす」

「もお佐知さんたら・・・部長に聞こえたら大変よ

「院長も恐れる婦人の呼び出しか~ セツナさんに同情しちゃうな  
あ」

いつのまに入ってきたのがハイミス部長が立っていた。

「仕事もしないで何の騒ぎなの それに同情つてなにかしら」

「部長、院長夫人に呼ばれているので失礼します」

佐知が場を離れるとそれに続くように部長の側からみんな散らばつていった。

残された部長はいつものように眉をしかめ無言で出て行った。みんなで親指をたて口うるさい部長の退席を喜んでいた。

佐知は急いで駆けていた。

病院の庭を抜けると芝生の敷地に三階建ての建物が見えた。

1階、2階は従業員の住まいになつていて3階が院長の住まい。自宅は別にあるのだが従業員住宅建設の時に自分の住まいも作つてしまつた。

従業員の住宅で寝泊りする姿に誰もが患者第一の院長らしいことを細めていた。

帰宅しない院長を心配して追つてきた夫人もいつしか住人となつて久しかつた。

住む人を失つたお屋敷は古くからの住み込みの夫婦が管理していく。

「ここにちはま、皆井です」

「はい、待っていたのよ 早く入つてちょうだい」

リビングのバルコニーに面したソファーに若い男性の後姿が見えた。

人の気配にその男性は立ち上がり佐知に笑顔を見せた。

「秀行さん・・」

「二人とも立つてないでお掛けなさい  
さあ、佐知さんもここに座つてちょうだい」

院長夫人の貴子が上機嫌で珈琲を運んできた。

「さつき秀行を見た佐知さんの驚きよつは普通じゃなかつたわ  
秀行も久しぶりだから驚いたでしょつ」

「そうだね、佐知さんはすっかり大人の女性つて雰囲氣で驚いたよ」

「大人の女性だなんて言われたのは初めてです

恥ずかしいけど私はいまも部長に叱られてばかりなの」

「あ～あ、あの部長のことなら気にしないほつがいいよ  
あの人は人を誉めることが出来ない可哀相な人だから」

「秀行さんおやめなさい

職員の批評はあなたが口にするこじやないわ」

母にに窘められた秀行は頭を搔きながら笑つて見せた。

「あのお・・それで私を呼ばれたのは」

「あつそりよね、『めんなさい』

実はね、秀行がこの病院に帰つてくることになつたのよ  
向こうの病院の意向もあるから勤務は早くても来月以降になると  
思うわ

それで秀行のお世話をあなたにお願いしたくて来てもらつたの」

「お世話ですか」

「おかしいだる、大の大人がまして自分の病院に帰つてくるのに  
佐知さんいま母が言つたことは聞き流してくれていいよ」

「あなたは少し黙つていて

ねえ佐知さん、しばらく受付の仕事はいつたんお休みして  
秀行をサポートしてほしいの

これは院長からのお願いと思つて快く受け入れると嬉しいわ

「母さんと違つて父さんはそんな無理強いを頼む人じやないよ  
あんまり病院の事や僕のことには口を出さないでほしいな  
父さんは優しい人だから何も言わないけどこれからは僕が言わせ  
て貰う」

「まあ頼もしいこと、随分お偉くなつたのね  
でもこの病院に戻つたらあなたは新人と同じなの  
今回はあなたがなんと言おうが従つてもらいます  
秀行専用の部屋に佐知さんの机も用意させますからね  
佐知さん、秀行の事をお願いしますね」

「母は世の中、自分の意のままになると勘違いしている節がある  
此処までくるともう性格は直らないだらうしお手上げだ  
すまないけど佐知さん、僕のサポートを宜しくたのみます」

「はい、承知しました

奥様、私はこの事を部長にどう報告したらいいのでしょうか

「佐知さんは心配しないで、部長には私からもう伝えてあるの

「ねつ、僕が言つたとおりだろ

母は思つたことは何が何でもやつてしまつ怖い人、そつだろ

「はい、あつ・すみません

「佐知さんも秀行と一緒にになって随分だわね～

「私はそんな、本当にそんなつもりは

顔を赤らめた佐知を見つめる秀行の目が優しかった。

「佐知さんは今も昔のままだね  
大人びて綺麗になつたけど可愛い」ところは昔のままで嬉しいよ」

「ところで・・

佐知さんはだれかお付き合いしている人がいるのかしら」

「母さん、もう佐知さんを開放してあげようよ  
佐知さん仕事中に母が呼び出して悪かつたね  
来月から僕のサポートをお願いします」

「いらっしゃいそ、宜しくお願ひします」

院長宅を出た佐知は秀行との再会に昔を懐かしく思い出していた。

佐知が勤務についた時、医大をでた秀行は院長の弟の病院に勤務  
していた。

年に数回しか帰らない秀行が帰宅すると佐知は夫人に呼ばれ顔を  
合わせた。

佐知は一年にたつた数回の秀行との対面をいつも心待ちにしてい

た。

年上の秀行は物知りでそれでいて偉ぶつたところがなく好青年だつた。

しかしあの頃の佐知にはBFがいて秀行に特別な感情は沸かなかつた。

今あらたな愛が佐知の頭上に羽を羽ばたかせ舞い降りてきた。

その愛は凄まじい鉄砲水になり過去の愛を追いやろうとしていた。

切なく苦しい愛のいばら道が佐知を待ちうけていた。

愛する男と女が織り成す更なる苦悩の扉が静かに開きはじめた。

この時までの佐知は雅和への揺らぎない愛を信じて疑わなかつた。

「佐知さん私はあなたに雅和をお願いしたいの

雅和を支えられるのは私とあなただけよ

彼はとっても打たれ弱い男だから誰か支える人がないと頑張れない

彼の気持ちがどうあれ佐知さんは嘘のない心で雅和と向き合つてあげて

雅和にはあなたが必要なの　あなたも雅和のこと必要としているわ

佐知は美香の言葉を思い出しては叶わぬ思いに心揺らしてた。

## 101 握るやない愛？

佐知が受付事務所に戻るとなにやら空気が違っていた。  
秀行が戻つてくる事が病院中に知れ渡つていた。

「先輩、有難うございました

騒がしいようですが何かあつたのですか」

「部長の報告を聞いてからみんなこの調子なのよ」

「サツちゃんの呼び出しつて秀行さんのことだつたんだね  
秀行さんの側で仕事が出来るなんて羨ましいな  
サツちゃんはいいなあ～」

「私が羨ましいって、どうして？」

「知つてのとおり、秀行さんは女子職員みんなの憧れの君よ  
その秀行さんが来るとなればみんな色めきたつても不思議じやない  
わ」

「おかしいわ、色めき立つなんて言いかた」

「おかしくないよ～、サツちゃんだって本当は嬉しいでしょ」

「秀行さんは院長の息子よ

私が秀行さんと仕事をするのは頼まれたから仕方なく受けただけ  
本心は秘書なんてしたくない、みんなと仕事をしてみたいのよ  
院長夫人じきじきに頼まれたら断れないわ・・わかるでしょ」

「うん、わかる 院長夫人は私も苦手だもの  
どこかカリスマ的な迫力があつてあの人には言えないよね」

「でしょ・・もう私の前で羨ましいなんて言わないでね  
それに私は忘れられない人をずっと今も思い続けている  
だから今は誰にもときめかないの」

「それじゃ、ライバルが減つたってことだね なんだか燃えてきた  
よ」

・・なんかみんなして私のこと馬鹿にしてる?先輩笑いすぎですよ」

「そうね、ごめんなさい サあ雑談は止めて仕事を続けましょう  
佐知さんは新しい仕事に慣れるまで大変でしょうけれど  
みんなで応援しますから頑張つてね」

「ありがとうございます」

みんなと仕事できないのは寂しいけど頑張ります

皆さんも私のこと忘れないで待っていてくださいね

佐知はみんなの拍手と頑張れの声がうれしかった。

視線の先に歩いてくる部長が見えた。

佐知に気づいた部長のぎらぎら光る目が怖かった。

去つてゆく部長の後姿を追つていた。

「部長待つてください 少しいですか」

「急いでいるんだけど、なにかひり」

「もうお聞きとりますがしばらく受付の仕事を離れます

来月から秀行さんの仕事に就くことになりました

部長、復帰した時はまたご指導くださいね」

「・・・何故かしらね、みんな貴方の味方、貴方には敵がない  
貴方は本当に幸せな人・・・

悔しいけれど貴方は私にないものすべてを持っているわ

皆井さん、秀行先生のサポート頑張りなさい  
もつ受付にあなたの場所はないと思ってしつかりやりなさい」

「はい、頑張ります」

部長の柔軟なまなざしを見るのは初めてだった。

一瞬みせた微笑はどこか悲しげで憂いに満ちていた。

まじかで見た部長のあまりの美しさに思わず息を呑んだ。

眉間にしわを寄せた仕事モードの部長は此処にいなかつた。  
あまりに別人のような部長に驚きを隠せなかつた。

いつも恐れていた部長との距離が縮まり親近感を覚えた。  
佐知は今日の部長に美香と同じ匂いを感じていた。

週末の今日は雅和が明日香に会いに来る日だった。  
佐知は雅和の帰りが待ち遠しくてならなかつた。  
遠距離恋愛の彼を待つ恋人のように胸を躍らせていた。

「いつか私のこの思いが届きますように」

雅和と会える日はいつも嬉しさと切なさが一緒に押し寄せてきた。

## 102 韶るやかない愛？

商店街にシャッターの開く音が響きわたった。

明日香を胸に括り付け店に向かひ田鶴子にハ正のおかみが声をかけた。

「ママ、今日は遅いんじゃない？」

「明日香が泣き止まなくて大変だったの」

「こつもは機嫌がいいのにびついたのかね　雨でも降りなきゃいいけど」

「ほんとね、こつまで泣きたくなっちゃつわ」

「娘たちの子育てを思い出すと私も同じだつたわ  
泣く」としか出来ない子供と一緒に親も成長せつもつた  
今思えば子育ては一番充実したい時だつたわ

「やつ思ひぬ日がいつか訪れるのかしら

「ママは愛情かけて明日香ひやんを育ててゐる　たいしたもんよ

もつと自信を持つて頑張りなさい」

「おかみさん、ありがとう、じゃまた  
あつ又忘れるといだつたわ いつもグレープフルーツとバナナ  
下さる」

八百正の袋を下げた田鶴子を見つけ魚勝のおかみが飛び出しつけた。

「おはよつ びひしたんだい、田の木に大きなクマ作つて  
それじや、せつかくの美人が丘溝しだよ」

「夜鳴きで眠れないのに朝からすうと懸図つてもうお手上げ」

「ママに子育ては無理だつて呟いてた子供がやつてるわ  
今じゃみんながママを応援してこる  
仕事しながらの子育ては半端じゃ出来ないけど無理しちゃダメだよ  
あなたはもう若くないんだから無理は禁物、体が一番なんだから  
ね」

「「」もつともです 気をつけます

でも明日香が来てから規則正しい生活になつて体調が良くなつた

気がするの

今日はクマがあるけど私、少し若返つたと思わない?」

魚勝の田那が話に割り込んできた。

「ど～れ、う～ん・・何も変わっちゃいないなあ

「あ

「魚勝の親父さんは正直者で有名だけども、少し口が上手いと  
商売もつなぎ上りなのにおしゃいわね」

「ママもさう思ひでしょ

「本当にこの亭主は馬鹿がつくほどの正直で困っちゃうのよ  
もつといじ要領よくやつてくれないとねえ」

「親父さん、逃げちゃったわね」

「うちの人はあの通りのんきで、てんで話にならないの  
不景氣で売り上げは下がる一方なのに」

「安くても今は買い控える人が多いからど～も大変よね  
仕事帰りにまた夫婦でお店に来てちょうだい  
魚勝さん、珈琲の無料券置いていくからね～」

「ママ、こつもわるいね～

「あんた、どこに隠れしていたんだい  
こんな時だけは調子がよくて・・少しは男氣を見せてよね」

「ママの前でそんなに俺をいじめるなよ  
俺の男氣は小出しひはしないんだ  
こぞとこぞときお前のためだけに取つてあるんだ」

「あんたは私の前だとうまく舌が転がるんだねえ  
お客の前でもこづだといいのに、ねえママ」

女房の尻に敷かれた親父さんはそれを楽しんでいるかのよつて見えた。  
「実のところ親父さんが女房をつまく操縦しているのかもしれない」  
そう田鶴子は思った。

「一人は息があつていいコンビね」

「ママの好物マグロの赤みのいいのが入つたら女房に持つていかせるよ」

「嬉しいわ、楽しみにしているわ」

田鶴子の店の前に数人の常連の客が立っていた。

「まあどうしたの・・早くわね」

「こつもなら開いてるのに閉まっているから休みかと思つたよ」

「今日は明日香に手を焼いて遅くなってしまったの、『あんなとこ  
ね』

「それだけじゃないだろ？、八百正の袋を提げていのつてことは  
またそいつ中で話しつぶんでいたんだろ？？」

「よまれましたか・・すみません」

店は改装されてキッチンの後に明日香の部屋ができていた。  
食品の倉庫室とロッカーの壁をはらい和室を新たに作った。  
キティちゃんの布団で眠る明日香は一日の大半をこの部屋で過ご  
した。

「ママ、明日香ちゃんを見ててやるよ」

「こつも悪いわね それじゃまだ見てお願いします」

愚団の明日香を常連の客に預け田鶴子は急いで仕込みをはじめた。  
注文の珈琲を差し出すと客の腕の中で明日香は静かな寝息を立て  
ていた。

「あらがとう、本当に助かったわ」

明日香を部屋に寝かせてカウンターに戻ると電話が鳴った。

「井川です。今日あらひに行きますのでよろしくお願ひします  
明日香はまだ寝ていますか」

「ええ今寝たといりますよ

明日香ちゃん今日はご機嫌斜めで大変なの  
パパに会つてご機嫌が直るといいんだけど

「すみません・・ママには感謝しています

週末は俺が明日香を見ますからママはずつと体を休めてください

い

「私のことは大丈夫だけど・・・

正直いつて明日香ちゃんの世話は本当に大変でお母さんを「く  
一人で明日香ちゃんを育てていた井川君はすごい」と思ったわ  
今だつて休日に疲れた体をおして会いに来るのはきついでしょう

体がつらい時は無理しなくていいのよ

健康が一番大切なことは井川君が一番わかっているはずよ

「ママ、心配しないで下さい

無理して体を壊することは絶対しませんから」

「それじゃ気をつけて来てね

あつ・さういえば佐知さんも夕方お店に来るって言っていたわ

「なら俺が行くまで待つてもうつよつ、伝えてくれますか

「ええ、わかったわ

佐知さんと会うなら私のマンションがいいんじゃない  
明日香ちゃん連れ帰つてマンションでお話しなさいよ  
そのほうがお店より落ち着いて話せるわ

「有難うござります」

週末は住居のマンションを雅和と明日香のために開放した。  
店の和室にはまだ真新しい布団が置かれてあつた。

雅和がくる週末田鶴子は明日香の匂いのするこの部屋で夜を明かした。

雅和と明日香を一人きりにするのは酷だったが

田鶴子が側にいて手をかける」とは父と子の弊害になると想つた。

苦労し手をかけ愛を注ぐからこそ絆は結ばれる

その愛に包まれ育つてきた感謝を知っているから絆が生まれる

毎日会えない親子の絆を少しずつ紡いでいくてほしいと田鶴子は願つていた。

SIGN POST」にやがてきた佐知はあまりの客の多さに驚いていた。

田鶴子は佐知には気づかず狭いカウンターの中を右往左往していた。

カウンターの前で佐知は大きな声で話しかけた。

「何かお手伝いしましょ、うか」

「あ～佐知さん、いいとこりに来ててくれた  
明日香の様子を見てきてくれる助かるわ  
さつきまで大泣きしていたんだけどご覧の通りてんてこ舞いでしょ  
今は泣き止んでるけど心配で」

「はい、私に任せてくれ」

「本当に助かるわ 宜しくね」

田鶴子が明日香を取りお店に連れてきた当初から  
仕事帰りの佐知は毎日SIGN POSTに顔を出した。

店に来るなり真っ先に明日香の部屋に駆け込んで明日香を可愛がつ  
た。

そんな佐知の姿に田鶴子は目を細めた。

明日香の世話をして帰つて行く佐知にいつも手を合わせ感謝した。  
佐知はいつしか田鶴子の強い助つ人になつていた。

つい今しがた団体で入つてきた学生らはお腹を空かしていたらしく  
次から次へとオーダーがはいり田鶴子は息をつく間もなかつた。  
久しぶりに満席のお店に嬉しい悲鳴を上げていた。

もくもくと注文をこなし最後のエビチャーハンセットを運び終えた

田鶴子は

額の汗を拭ぐと今度はお冷を持つて席を回つて歩いた。

一息ついた田鶴子は厨房に立ちまた料理を作り始めた。  
その料理を漆の重箱に詰めこむと絞りの風呂敷で包んだ。  
そちらにもう手のある紙袋に入れて運びやすいようにしていた。

食後の珈琲を学生に隈なく運び、空になつた器を洗いおえた田鶴子は  
和室の戸に手をかけた。

明日香の笑い声が聞こえてきた。

昨晩から今朝にかけての明日香が嘘のようだつた。

田鶴子は嬉しくなつた。

「佐知お姉さんと一緒にいると机嫌が戻つてお利口にしていましたよ

「オムツを替えたらいじ機嫌が戻つてお利口にしていましたよ

「佐知さんにはいつも助けられて、本当にありがとうございましたよ

「お店のまづは大丈夫ですか」

「ええ、なんとか急場を凌げたわ  
食事はすんだけど誰も腰をあげようとしないの  
もしかすると閉店までこの状態かもね

そうだ、忘れるところだったわ 朝、井川君から電話がきてね  
佐知さんに店で待つていてほしいって言付かったの  
でもお店はこの通りで話だつてままならないわ・・・ そうだ  
佐知さん、マンションで明日香と一緒に井川君を待つてくれる

「私、ママのマンションで・・・いいんですか」

「井川君にもマンションの方がいいんじゃないのって言つてあるの

「わかりました 明日香ちゃんと井川君を待ちます」

「そうしてちょうだい 井川君が着たらそつちに行かせるか

明日香を連れ、帰る支度をしていた佐知に田鶴子が紙袋を差し出した。

「夕飯にと思つてお弁当作つたから井川君と食べて」

「すみません 喜んでいただきます」

「それから冷蔵庫に煮物とか色々作つて入れてあるの  
『はんは冷凍をチンして一人で食べてちょうだい』

「ありがとうございます」

「ねえ佐知さん・・・

井川君はいつまで過去にしがみ付いているつもりなのかしらねえ  
彼の閉ざした心をほぐしてあげられるのは佐知さんあなた  
あなたなら彼を新たな希望に導き未来に進ませることが出来る  
井川君はあなたにだけは本心を語るみたいだし」

「私と井川君は兄妹みたいなもので・・・  
お互に隠し事はしない約束なんです」

「男と女の友情・・・？ それも素敵な関係ね  
でも佐知さんは本当にそれでいいの」

「・・・」

「もう」の辺で正直になつてもいいんじゃない  
偽らざる自分の気持ちから目を背け逃げちゃいけないわ  
死んだ美香ちゃんだつてそれを望んでいるはずだわ」

「・・・・・」

「美香ちゃんはあなたとある約束をしたと私に話してくれた  
内容までは知らないけど一人の男を愛する一人の女が交わした約束  
でしょ  
そんな約束を忘れるわけはないわよね それとも忘れてしまいたい  
のかな」

「すみません ママー、珈琲のおかわりをお願いします」

「は～い 今行きますからお待ちください  
ごめんなさい、話の続きを又今度にしましょう  
佐知さん、明日香をお願いしますね」

マンションに向って歩きだした佐知の足取りは重かった。  
雅和に会えると高揚した気持ちは一気に冷めていた。  
胸に抱いた明日香のぬくもりがそんな佐知を優しく包んでくれた。

「いつに日本で開くことを忘れていた。

「私と雅和は同じ・・

美香さんを忘れられず苦しんでいる雅和は私の姿そのもの  
雅和に美香さんを忘れてほしいと願うことは  
私から雅和を消してしまつ事と同じ、そんなこと私には絶対無理  
雅和の愛を取り戻したいと願つことは私の身勝手なのかも・・」

佐知は愛の矛盾を感じとつていた。

## 104 握るやない愛？

マンションに着いた佐知は和室に置かれたベビー・ベッドに明日香を降ろした。

明日香はベッドに吊るされたおもちゃに手を伸ばして遊んでいた。

「明日香ちゃん、お利口にしていてね」

佐知はママから渡されたお弁当の重箱をテーブルに置いた。

「ふたを開けたいけど・・雅和が来るまで我慢・がまん」

テーブルに並べた一人分の取り皿とお箸をみつめていた。

「なんだか今日は夫を待つ妻の気分ね」

夢に見た生活が今ここにあると思わず顔を赤らめた。佐知は熱くなつた顔を全開した冷蔵庫に突っ込んだ。

「あ～冷たくて気持ちいい～」

冷蔵庫の中にはタッパーが山のように入っていた。

中身がわかるように紙が貼つてあった。きんぴら、ホウレン草の

胡麻和え

迷つた末、里芋といかの煮物とわかめと胡瓜の酢の物を小鉢に盛りつけた。

「これで今晚の料理は完成～」

料理を少しつまみ食いしながら雅和の帰りを待っていた。

## ピンポーン・ピンポーン

佐知は玄関に駆け出していった。

ドアを開けると大きなバッグを持った雅和が立っていた。

「お帰りなさい」

「ママから佐知がマンションにいるって聞いて驚いたよ  
明日香の世話いつも悪いな、感謝しているよ」

「私は好きでお節介やっているの だから気にしないで  
早く明日香ちゃんの顔を見てあげて」

「やうだな、明日香は？」

「ベッドでおとなしく遊んでいるわ」

「明日香、パパが帰ってきたぞ～」

雅和はベッドの明日香を天高く抱き上げた。

キヤア・キヤアと声をあげた明日香を抱く雅和は父親の顔を見せた。

何度も頬ずりして明日香をベッドに寝かせた。

台所に立つ佐知に雅和が声をかけた。

「夕飯の支度までさせてほんと申し訳ないな」

「残念だけど、私は並べただけ

井川君、疲れたでしょ お疲れ様でした」

佐知はグラスにビールを注いだ。

「ありがとう 佐知も一緒に飲もう」

「うん」

「じゃ、一緒に乾杯だ

俺の大切な明日香そして佐知に乾杯」

喉を鳴らし美味しそうに飲み干した雅和の顔に見惚れていた。

「俺の顔なんか・・・へん?」

「なんでもない、ねえママが作ってくれたお弁当開けてもいい？」  
待ちくたびれておなかペコペコなの

重箱のふたを開けると厚焼き玉子、アスパラのベーコン巻き、鳥  
肉ガーリック焼き

ポテトサラダ、揚げシューマイが彩りよく詰められていた。

「わあ、おこしあつ

「おおー、ほんとやつだな

「俺にとつても美香さんが残してくれた大切な宝だ」

「・・・ねえ明日香ちゃんの泣き声聞こえない  
ほら、やっぱり明日香ちゃんが泣いてるわ」

「オムツかミルクのどっちかだな」

「さっきオムツは交換したしミルクも飲んだから違うと思つ  
私が心配だから見てくるわ」

「オムツを替えてミルクも飲んだなら行かなくていいよ

俺も最初の頃は明日香の泣き声に過敏になつておろおろしていた

そんな時ママが言つたんだ

ご機嫌な時にたっぷりの愛情を注いであげていれば  
少しくらい泣かせておいて構わない 子供だからと甘く見ちゃダメだつて

泣くと抱いてあやしてくれることを学んだ子供は泣くことを良しとする

泣こうが叫ぼうが誰もきてくれない事を学べば要求以外の無駄泣きはしないって

だからすこし放つて置いていいよ それに泣き声でわかるんだ  
あの泣き声は人恋しくて泣いている声だからすぐ泣き止むよ

「お店の和室に張つてあった言葉の意味がわかつたわ」

「泣いている明日香に断りなく手出し無用の張り紙の事?  
あれは常連さんとママのルールなんだ」

「やうだつたんだ あれ明日香ちゃんも泣きやんみたい  
井川君の言つとおりね、すゞこわ」

「すゞくなんかないよ 佐知も結婚して親になれば同じか」

「私ね、明日香ちゃんといふと優しい気持ちになれるの  
嫌なことがあつたときも明日香ちゃんに会つと元気をもらひえる  
明日香ちゃんはSINGAPOREの女神なの」

「佐知、俺はこの生活をこのまま続けてもいいのか迷つてゐるんだ  
母のいない明日香をママの側に置いておくことに異論はないけど  
父親である俺がいつまでもこのまま甘えていてはだめだらうって  
最近そればかり考へていて でも最良の策なんて見つからない

事務所のてつちゃんが言つんだ  
いい人を見つけて結婚しろそれが一番の解決策だつて  
冗談にもほどがあるつて・・切れかかつたよ

俺は生涯ひとつで生きてゆくと誓つたんだ

美香さん一人を生涯愛し続けて生きてゆくと

明日香が母親の愛を知らずに成長するのはかわいそうだけど  
いつかこの俺の気持ちが明日香にも届くと信じたい

俺はこれから明日香を手元において育てようと思つて  
生まれてまだ1年の明日香はまだまだ手がかかる  
でも一番大変な子育ての時期に俺は明日香を手放しママに助けて  
もらつた

今度は俺が頑張って育てていく、それが父親である俺の務めなんだ

「父親の井川君が決めしたことなら誰にも何もいえないわ  
でも寂しがるでしょうねママ それに私も」

「ママと佐知には感謝している  
どうしようもない時はまた力を貸さるかもしね  
明日香がここを去つても一度と会えないわけじゃない  
受けた恩を忘れず明日香を連れていつかまた会いに来るよ

「悲しくなるからいつか又なんていわないで

今までのよつこまた来るつて約束して、必ず会いに来るつて

「大げさだな恋人同士ならともかく、一度と会えないわけじゃない  
んだからさ」

「いやよ、私は絶対にいや

「いやって何がいやなんだ?」

「明日香ちゃんがいなくなることも井川君と会えないことも全部  
急にそんなこと言われても私は納得できない  
そんなこと考えもしなかつたし思つてもいなかつたから  
だから・・私はいや」

「まつたく女は子供より扱いにくいんだな  
佐知聞いてくれ、今の話はすぐどうこういじやない  
ママにもきちんと相談して決めようと思つてこる  
笑顔で送り出してもらいたいから何度も君を説得する  
時間がある限り話そつ、それでいいだらう」

「いくつ話はやめて食事に行かう

「おつ話はやめて食事に行かう

「雅和は美香さんを愛した

「私を愛した愛より深い愛で美香さんを愛した

美香さんがいない今も美香さんへの愛を貫こうとしている

そんな雅和は私と同じなの

私は今も別れた人を忘れられずその人への愛を胸に生きている

苦しかつた・・今だつて苦しい

この思い今の貴方にならわかつてもうえると思つた

雅和は亡くなつた美香さんを思つときどんな気持ちになつた?  
一人で泣いた夜も数え切れなかつたはず

私は別れてからずつとそつだつた いまの貴方のよう

「・・やめてくれないか

過去の愛を語つてそこから何が始まる」

「雅和は昔の愛の日々を私を一度も思い出さなかつたの  
私と雅和の愛の記憶は消し去られてしまつたの  
愛の欠片さえもう残つてはいないの」

「俺は君と昔の愛を語るつもりはない

佐知、君は再会した俺達が築いた新たな関係を台無しにしたいのか  
俺は君と築いたこの関係を絆をだめにしたくないんだ  
わかつてくれ佐知、 気持ちはわかる

君が言つようにいま君の気持ちが痛いほどわかる  
でも今の俺は前にも言つたように君の思いに答えてやれない

溢れ出る涙を隠そうともせず佐知は雅和を見つめ続けた。  
そのとき佐知の気持ちを察したかのように明日香が泣き出した。  
その声に我に帰った佐知は涙をぬぐい頭を下げる。

「…めんなさい、私…」

## 105 握るがない愛？

明日香の泣き声がやんでもた静寂な時間が戻った。

「私はまた貴方を困らせた・・・」めんなさい

帰ろうとした佐知の腕を雅和は掴んでいた。

「ちょっと待てよ、俺は君を帰さない

このまま帰るなんて俺は許さないからな

「腕が痛いわ

「俺達、昔もこんなことあつたよな

「・・・・・」

「あの時と同じだな、俺がこの手を放したらすべてがここで終わる  
いまある絆が切れたら俺達はもう会うことはないだろ？  
それでもいいなら手を放すから好きにすればいい」

雅和の手は放れたが佐知はその場から動けなかつた。

「わかつてくれたんだね」

「『めんなさい 貴方の答えは以前と同じでわかつていたのよ  
それでも今日は自分の気持ちを伝えずに入れなかつた  
雅和の気持ちは変わらないってわかつているのに抑えられなかつ  
たの』」

「俺の気持ちが変わらないなんて誰が言い切れる  
おれ自身、今はこうでもこの先どうなるかなんてわからないんだ  
今もなお美香さんを忘れられないでいる俺に愛を語る資格はない  
んだ

誰だつて愛する人を幸せにしたいと思うんだ  
それが出来ないとわかつていながら愛を受け入れたらそれは親父  
と同じだ

母親の涙をみて育つた俺は親父の一の舞にはなりたくない  
愛する人を母さんのようにしたくないんだ・・わかるだろ

俺たちの絆がこれからどうなるかはわからない  
でも絆がある限り俺は佐知と繋がつていられる、繋がつてみたい  
んだ

時が経てば人の気持ちだつていつか変わっていく  
いやでも変わらなければならぬそんな時がきつと来る、悲しい  
けど」

「そんな日が本当に来るの、いつ

生涯美香さんを愛すると誓った貴方にそんな口が来るとは思えな  
いわ

「何度も言つけど先のことなんか誰にもわからないんだ  
俺の気持ちがこれからも変わらないと君は云い切れるのか  
また向き合える口がくるかもしね

佐知、おれは君が必要なんだ

昔恋人だった俺達は別れた今もこうして繋がっている  
こんなこと普通じゃ考えられないことだろ

俺は美香さんと約束したんだ 佐知との絆を大切にするつて

世の中には色んな愛が散らばっている 俺と佐知の絆も愛なんだ  
愛がどんな形に姿を変えようが愛に変わりはない、そう思わない  
か

「その愛って何なの」

「それは俺にもまだわからない  
龍一と真砂子の結婚式で再会した夜のこと覚えてる?  
一人でホテルのベッドで話したこと」

「あの日ベッドの上で私達は朝まで語り合つたのよね  
洋服を着たままで・・思い出すとおかしいわね」

「握り合つた手だけは朝まで離さなかつたな

あのとき俺達の愛は男と女を超越した愛に変わつたんだ」

「亡くなつた和由兄さんが導いてくれた再会  
私の兄で雅和の兄でもある和由兄さんが私たちを繋いでくれた  
あの夜私達に何も起こらなかつた、それも和由兄さんの仕業  
愛が終わつてゐることを再確認させるためホテルで会わせたのね」

「佐知、俺達は今も愛で繋がつてゐるよ

その愛は残念ながら佐知が願つ愛とはちがつけどね」

「なら私は・・愛されているの」

「ああ姿を変えた新たな愛が俺と君をしつかり繋いでいる」

「雅和、わたし今度こそ自分の気持ちにけりをつけられられそうな気がする

口で言つほど簡単にはいかないかもしけないけれどそれでも  
今ここにある絆を大切にしたいならそうすべきなのよね  
いまがそのときなのかもしれないわ」

「二人でいつか笑いながら昔の愛を語れたらいいな」

「もしこの先、もしものことなんだけど笑わないで聞いてね  
好きな人ができるたらお互い隠しあは無しにしましょうね」

「俺は構わないけどそれって本心で言つてる? 大丈夫なのか  
俺に恋人が出来たからって今日みたいに泣かないでくれよ」

「・・・ううへん、やつぱり撤回させて  
しばらくはお互ひのまま一人でいましょう」

「げんきんなやつだな、まつたく」

「なんだか急におなか空いちゃった  
お弁当、食べてから帰つてもいい?」

「ああ一緒に食べよう 遅いから帰りは車で送るよ」

「ダメよ、雅和さつきビール飲んだでしょ  
今日はタクシーで帰るから心配しないで  
早くママの作つたお弁当たべましょ、いただきま~す」

「今日の佐知、俺のこと昔のように雅和つて呼んでくれたね  
これからは井川君なんて言つな、雅和でいいよ」

「雅和・まさかず・雅和、やつぱり言い慣れた雅和の方が呼びやすいわ

雅和、雅和、まさかず、雅和って呼んでもいいのね うれしい」

「俺の名前意味なく何度も連呼するなよ」

「あ～雅和赤くなつて怒つてる～」

「おれは赤鬼か」

「はやく食べないと私が全部たべちゃいますよ」

「さつき泣いてた同じ人間とは思えないな」

美味しそうに箸を運ぶ佐知を見つめながら内心雅和は複雑だった。美香を生涯愛し続けると誓った自分が口にした言葉を思い出していた。

その言葉が近い未来現実のものになろうとしていた。

「時が経てば人の気持ちだつていつか変わっていくいやでも変わらなければならぬそんな時がきっと来る」

楽しいタグを過りし食器の片づけをすませた佐知は明日香の寝顔をみていた。

「明日香ちゃん、今日は明日香ちゃんのパパを独り占めして」「めんねあつ笑った・・どんな夢見てるのかな明日香ちゃん雅和今日は本当に」「めんなさい両親が心配するからもう帰るね」

「氣をつけて帰るんだぞ 僕も一緒にタクシーを拾つてやろうか」

「本当にひとりで大丈夫、雅和は明日香ちゃんのせばこって」

「これ俺からの気持ちだと思って受け取つてタクシー代の足しくらいしか入つてないけど

「だめよ、お金は受け取れない」

「受け取れよ、早く・・・強情なやつだな

受けとらないなら明日香の世話を今後無用だ、それでもいいんだな

「人の弱みにつけてむなんてほんと意地悪ね」

「『』免『』めん これは俺からの感謝だから受けとつてくれよ」

「うん、ありがとう」

泣いたり笑つたり悲喜こじらるもの一皿だつた。  
佐知の胸のうちについた苦しい愛は涙と一緒に流れていった。

「今も愛で繋がっていると雅和は言つてくれた  
同じ時間を共有して歩んでいけるなら過去愛に執着するのはよそ  
ここから始めればいいんだわ  
いつか一人の気持ちが一つになつて愛を語れる日が来るきっど來  
る」

気持ちのけりをつけると言つたものの佐知の思いは変らなかつた。  
しかし雅和と過ごした愛の日々を思い返すことはなくなつていた。  
重いコートを剥いで草花が芽吹く草原に舞い降りた気分だつた。  
穏やかな心に佐知は何かが変つてゆくような気がしていた。

病院は朝からテンションの高い女性スタッフの熱氣で盛り上がりつ  
ていた。

開業前のスピーカーから院長の声が流れてきた。

「おはようござります もう皆さんご存知でしょうが  
本日より息子・秀行がこの病院のスタッフの仲間入りをします  
本人より一言あいさつがあるそうですので聞いてやってください」

「みなさん、おはようございます

今日から皆さんと働かせていただこうとなりました  
命と真摯に向き合ひ医師の使命に燃えています  
皆さん今日からどうか宜しくお願ひします

気持ばかりですがケーキの差し入れを用意しました  
休憩のときに食べてください」

スピーカーを見上げる女性陣の目は潤んできらめいて見えた。

「せつちやんはいいなあ～

「せつちやんはいえばサツちやんの顔まだ見てないね」

「せつちやんならせつちやんの部屋に入つていふの見たけど」

「今日から秀行さんの秘書だもん、いらっしゃいな」

「サツちゃんがいない受付つてなんだかへんじやない」

「うそ、まあしこよ～」

「さあ皆さん仕事、仕事、佐知さんの分も頑張つてちょうだいね  
ほり口を閉じて体を動かして 待合室は患者さんでいっぱいよ」

「はーい、先輩」

佐知は机に座り流れてくる秀和の挨拶を聞いていた。  
初めての秘書の仕事に寝付けなかつた佐知は朝からあぐびが止ま  
らなかつた。

「おはよう佐知さん、朝から豪快なあぐびで迎えてくれるなんて嬉しいな」

「おはようございます、すみません」

「ジョークだから別に謝らなくていいよ 佐知さん今日から宜しく

差し出された秀行の手に佐知も手を伸ばした。

「いらっしゃい、宜しくお願ひします」

「僕は今から診察だから佐知さんには机にある資料の整理と

書棚の横に積んである本の付箋が張つてあるページを「ページ」して閉じてもらいたいんだ

緊急の用件は脳神経科のほうにまわしてくれたらい  
時間があまつたら本を読んだり自由時間とこいつ事でお願いします

「ドクターが今言われた仕事、今日一日では終わらなことと思こます

「そうだね、僕も一日じゃ無理だ

今週中に終わらせてくればいいよ それなら出来る?」

「はい、頑張ります

「それから僕をドクターと呼ぶのはどうかなあ 名前で呼んでくれ  
ていいよ

「はい、わかりました」

「佐知さん、昨日はよく眠れなかつたようだね

「初日からあぐびなんて・・本当にめんなさい」

「佐知さんの可愛いあぐび顔をみられて僕は嬉しかつたよ

「またジョークですか」

「いいや、これは僕の本心だ 本当に可愛いと思った」

「からかわないで下さい もう秀行さんは診察にいってください  
患者さん待っていますよ この病院は時間厳守なんですから早く  
行ってください」

「はいはい、わかりました では後はよろしく

秀行は恥ずかしさに顔を伏せた初々しい佐知を思わず抱きしめた  
いと思つた。

「佐知さんは僕を変えられる、彼女となら変われそうな気がする」

愛の苦い過去を持つ秀行に新たな愛が顔を見せた。

それは大きなうねりとなつて秀行の封印してきた愛の扉を打ち破  
つた。

秀行は白衣を手に投げキッスを送りながら部屋を飛び出していった。

「秀行さんってあんなに軽い男だったかしら」

それでも可愛いといわれれば悪い気はしなかつた。  
初恋の時のような淡い感情が沸きあがっていた。

毎日顔を合わせて仕事をする一人には信頼関係が生まれていた。  
当初のどこかぎこちないやり取りも今では兄と妹のように話が弾み  
一人の時間を楽しんでいたように見えた。

「ああまた～それ私のですよ」

「あつまたやつちやつたみたいだね」

「よく見てください、ボトルに名前が書いてあるでしょ」

「皆井、確かにこれは君の私物だ」

「冷蔵庫は共有でも中身は別々なんです  
勝手に飲むのは止めてくださいいつもお願ひしているの  
その悪い癖はやく何とかしてくださいね」

「ドリンク一本でそんなに怒るかなあ」

「ドリンク一つじゃありませんよ  
冷蔵庫に置いてあつたチョコも食べましたよね  
楽しみに待ておいたチョコなのに蓋を開けたら空っぽ・・・」

「ああ～あれね、あのチョコもこしいね  
普段は甘いものは苦手なのに術後はつまみたくなるから不思議だ  
な」

「おいしいねって・・あれは私の大好きなゴーティバのチョコよ  
高級品だから給料日にしか買えない大切なチョコだったのに」

「」免、今後冷蔵庫の飲食は君にお伺い立ててからにするよ  
給料が入つたら同じチョコをプレゼントする・それで許してくれ  
よ」

「秀行さんが買ってくれるの

まだ口にしたことないチョコが一杯あるの それも？」

「君がほし」チョコはみんな買えばいい

佐知さんが僕をその店に連れて行ってくれればの話だけど」

「インターネットでも注文が出来るの時間があつたら一緒に開きましょう」

「オンラインのお取り寄せか・・・

病院外での時間を作りたいと思っていた秀行は肩をおとした。

秀行が勤務してまもなく4ヶ月が過ぎようとしていた。

「お疲れ様でした」

「お疲れ、佐知さん今日はなにか用事ある?」

「いじえ、今日は」のまま家にかえります」

「それなら君の時間を僕に少しきれないか

「・・・・・」

「簡潔にいうと君にお礼がしたい

佐知さんのお蔭でスムーズに仕事ができた  
今日はそのお礼としては何だけど食事を<sup>レ</sup>駆走したい  
僕の気持ち受けてもらえないだろうか

「お礼なんてとんでもありません

秀行さんをサポートするのは私の仕事です  
それでお給料もちやんと頂いています」

「それならお礼の食事じゃなくて僕と<sup>レ</sup>トーク<sup>レ</sup>ビデオ<sup>レ</sup>ハ.

「秀行さんはटークなんてもつと困ります

病院中の女性みんなを敵にまわしてしまいます」

「どういひとかな・・

「秀行さんはみんなの憧れなんです  
病院の女性スタッフはみんな貴方のファンなの  
だから私が今の仕事に決まってときも大変だった

「女の園は恐いらしいからね

佐知さんが虐められているのなら問題だな

「私のことなら心配いりません

あからさまに虚めたりする人はこの病院にはいませんから」

「それを聞いて安心したよ

僕のせいでも君に何かあつては申し訳ないからね  
一緒に仕事をさせてもらつているのも何かの縁  
佐知さんになにかあつたら僕は盾になつて君を守るよ

「心強いお言葉ありがとうござります 本心なら感謝申し上げます

「またジョークだと思つてるんだね

今日僕は真面目に話したつもりだけどな

「心に響かない言葉は信じるわけにはいきません」

「嫌われてしまつたかな、まいつたなあ

「嫌うなんて、その逆です

秀行さんは昔から優しくて頭が良くて背が高くて美男子で  
偉ぶつたところがなくて手の届かない遠い人だと思つていました  
一緒に仕事をするようになつて秀行さんの側面を見つけるたび  
親近感を覚えて嬉しくなりました

「それじゃ今日のパーティー受けてくれるね

「お願いします」

「僕は車を出して病院の正門で佐知さんを待っているよ

病院の前には2台の車が停まっていた。

秀行は医学書を読みながら佐知を待っていた。

病院から少し離れた場所のもつ一台の車は雅和の車とよく似ていた。

一台の車は同じ女性を乗せるために停まっていた。  
一人の男はその女性が現われるのを待っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5706o/>

---

WAKARE

2011年10月10日03時23分発行